第３章　調査の記録

第１節　調査地点と層序

１．調査地点

本調査地点は岡山大学鹿田地区の中央部に位置しており、鹿田地区構内座標ではBR～BX・20～25およびBX～CD・13～26区に位置する（図５）。発掘調査以前には、旧病棟と関連建物が存在していた。

本調査地点の周囲には、北側に岡大病院中央診療棟、南側に病棟が建つ。後者の建設時に第９・11・14次調査（調査年度（以下同）：1998年度～2003年度）を実施している。さらに本地点の北東部に隣接して、第18次調査（2008年度）および第20次調査Ｃ地点（2009年度）、さらに西側では第20次調査Ａ地点（2009年度）および第25次調査（2013年度）を実施している。

以上のように本調査地点は、東・南・西側の三方を既調査地点に囲まれており、このうち南・西側の発掘調査成果は既に刊行されている。それらの成果も併せて検討すべき位置を占めており、本報告後に残る第18次調査地点も含めると、鹿田遺跡の中央部の広範囲について、状況をより明確にすることが期待できる。

参考文献　第９・11次調査：山本悦世編2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
第14次調査：岩崎志保編2014『鹿田遺跡８』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
第20・25次調査：山口雄治編2018『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊

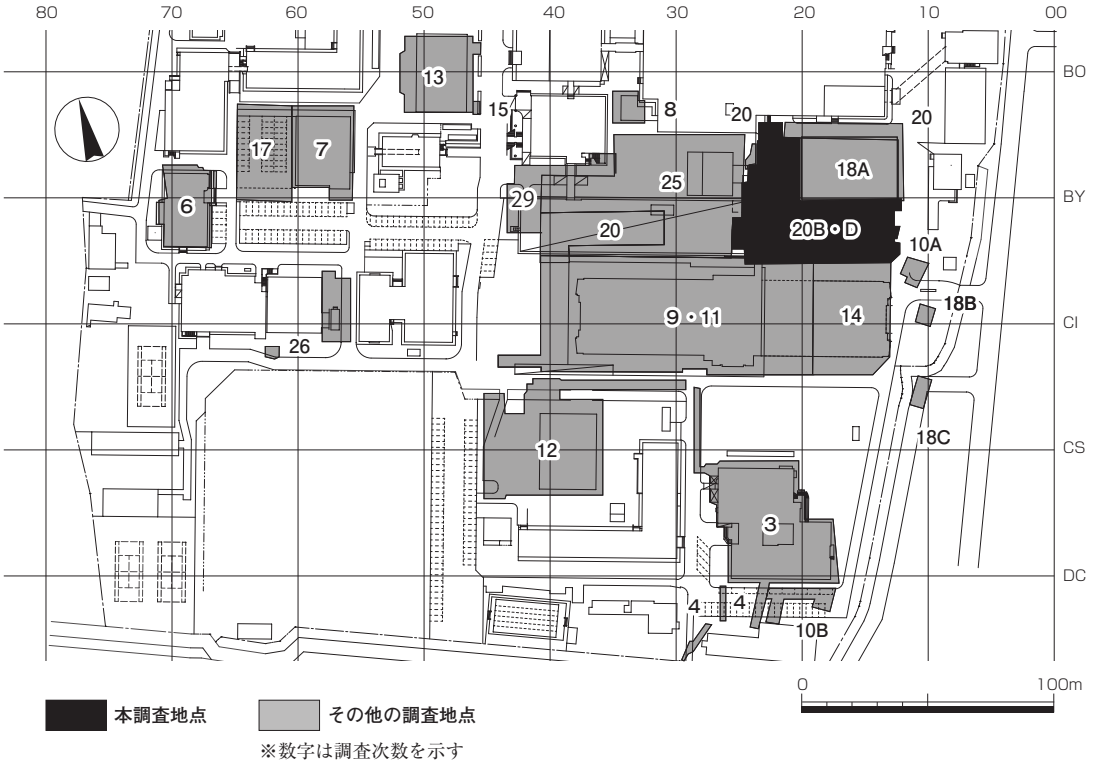


図５　調査地点位置図（縮尺1/3000）

2．層序

本調査地点の南側大部分は旧病棟の基礎工事により大きく破壊を受けており、さらなる破壊を最小限に留めるために大形のコンクリート基礎を残したまま、調査を実施した。そのため、特に南半では南壁のみでしか、連続した土層観察は難しい状況にあった。基本土層については、調査区の北壁・東壁・南壁の観察および、周囲の既調査地点の様相も援用して記述する。記述の際には、図６に示したように、BXライン以北を「北区」、BXライン以南を17ラインを境に東西に分け、「東区」・「西区」とする。

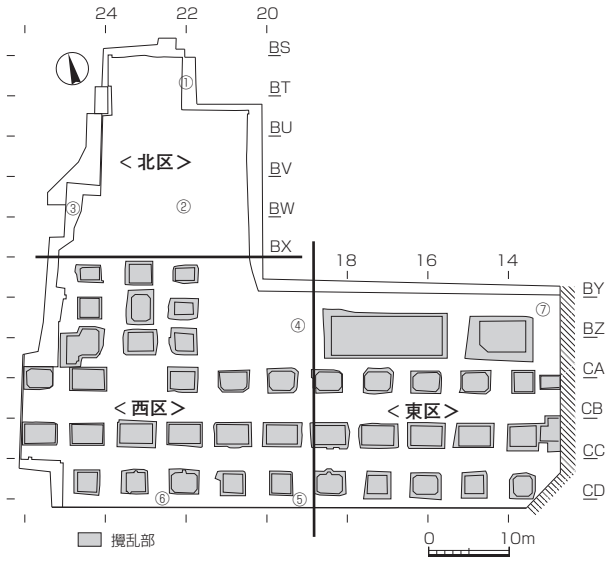


図６　土層断面の位置と調査区の呼称

＜１層＞1922（大正11）年に現在の岡山大学キャンパスに移転した岡山医科大学の建設工事に伴う造成土～現代に至る堆積土である。真砂土を基調に大小の礫を含む。上面は標高2.4m前後を測る。

＜２層＞砂を多く含む灰色土層である。調査区北壁・南壁の一部で確認されるのみである。上面の標高は北区で1.9m、東区で1.7m程度である。既往の調査成果から近代の耕作土と考えられる。残存部が限られており、出土遺物はごくわずかである。

＜３層＞明灰白色を基調とする砂質土である。上面は北壁で標高1.8～1.88m、西区北東部で標高1.7m、南壁で1.6～1.65mを測り、南に向けて低くなる様子が認められる。特に北区中央部の上面レベルが高いこと、また中世後半～近世の集落遺構が北区に集中することから、本層は中世末以降近世にかけての集落造成土と考えられる。北から南への傾斜は、近代以降の耕作面の段差によるものの可能性があるが、大規模な撹乱により、連続した土層で確認することはできなかった。

出土遺物はコンテナ１箱程度が認められ、中世～近世の土器・陶磁器・瓦が見られる。中世の遺物が大半を占め、小片～細片がほとんどである。

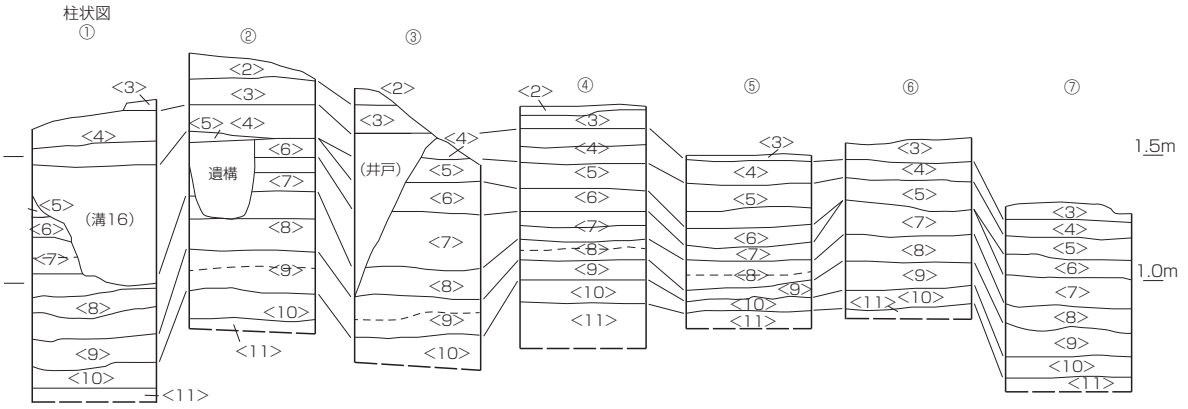
＜４層＞青緑色を帯びた暗灰色土あるいは砂質土である。上面は北壁で標高1.7～1.75m、北区中央部では標高1.6m、南壁で標高1.5m前後を測る。本層は検出遺構の時期等から中世後半までに堆積した土層と考えられ、＜３層＞同様、集落造成の際の堆積土であろう。一方、西区南壁および東区北壁では上面の標高1.4～1.5mと低い。＜３＞・＜４＞層段階には北区が高く、周囲が低い地形を成していたことが予想される。

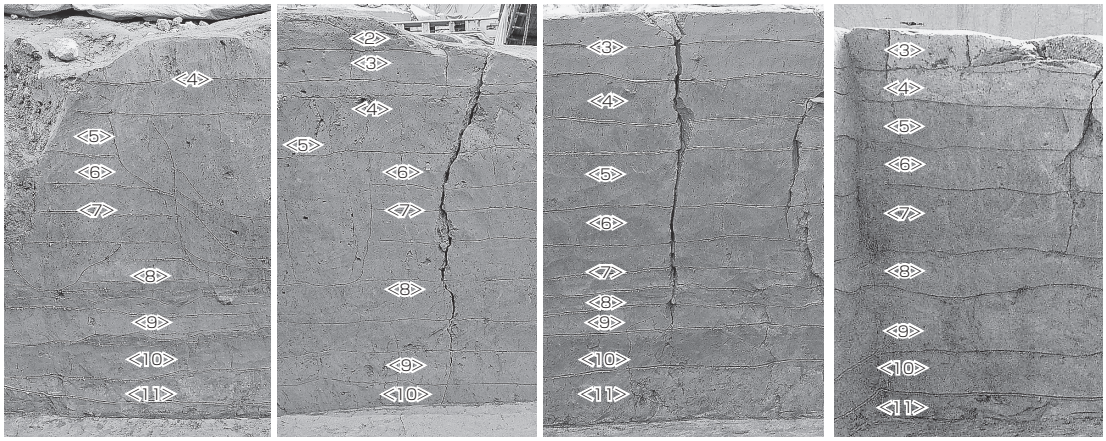
出土遺物はコンテナ２箱と多く、上述の＜３層＞と比して大きめの破片が多く含まれる。中世前半～後半の土器・備前焼等が認められる。鍋、竈片が目立つほか、土師質土器椀には14世紀中頃のものが認められる。

＜５層＞淡灰褐色粘質土あるいは砂質土で、南端では砂質が強まる。北区北西角から南東にかけての一帯が最も上面標高が高く、1.55～1.6mを測る高まりを成している。ここから西側、南側に向けて、地形は緩やかに傾斜し、北区西壁では標高1.5m、西区南壁では標高1.4mの広がりが認められる。一方、北区北東部では標高1.25mおよび東区北東端で標高1.2mまで下がっている。

出土遺物はコンテナ１箱程度で、13世紀末～14世紀代の遺物が多く含まれ、大半は小片である。＜４層＞段階にも認められる集落整備に伴う造成土と考えられる。＜４層＞・＜５層＞の状況から中世前半および後半に度重なる造成が行われたことが窺える。

＜６層＞暗黄褐色～暗茶褐色砂質土で調査区南端では砂質を帯びる。鉄分の沈着が顕著に認められる。＜５層＞





柱状図① 北区東壁北端　柱状図② 北区中央部付近　柱状図④ 西区北東部付近　柱状図⑦ 東区北東角

図7　土層柱状図（縮尺1/30）

と同様に北区中央付近の一帯の上面レベルが高く、標高1.55mを測る。この一帯を頂点に南・西方向に緩やかに傾斜しており、西区・東区の大半は標高1.3～1.4mの数値を示し、南端では標高1.2～1.3mと下がる。一方、北区北東角では標高1.18m前後、東区北東端では標高1.1mを測る。＜6層＞は11世紀以前に形成されたと考えられ、11世紀代からこの地に集落が営まれた際の生活面と判断される。

出土遺物はコンテナ1／2箱程度である。古墳時代以前の遺物は見られず、11世紀代の土師器・須恵器が主体である。

＜7層＞黄灰褐色～暗灰褐色砂質土である。北区中央部付近が標高1.45～1.5mを測る高まりを呈している。この高まりの西側および西区南壁では上面の標高1.3m前後を測り、緩やかな傾斜面が広がる。一方、北部北東端では標高1.2m、東区北東端では1.0mと低く、この地形の状況は＜6層＞と共通する。

出土遺物はコンテナ1箱程度で、古墳時代初頭が主体でまれに11・12世紀代の土器が認められる。

＜8層＞暗茶灰褐色砂質土で、一部で粘性が強い部分も見られる。北区中央部付近が北西－南東方向の帯状に高まりをなし、上面の標高は1.3～1.35mを測る。その周囲には標高1.1～1.2mを測る広がりが認められる。一方、北部北東端においては、北東へ下がる落ちが確認され、最深部で標高0.9mを測る。＜8層＞は砂質が主体であるが、暗褐色粘質土層と互層状に細分できる箇所もあり、低い地形において特に幾度も堆積と植物の繁茂が繰り返された様相が窺える。出土遺物はコンテナ1／2箱程度が認められ、弥生時代後期の遺物が主体である。

＜９層＞淡黄灰色を呈する砂質土で鉄分が沈着する。北区～西区では標高0.95～1.1m前後と高く、北区北東端と東区北東部で0.8m前後である。＜８層＞と同じく北部北東に落ちが確認される。出土遺物は少なく、ポリ袋２袋程が認められる。

＜10層＞黒灰色を呈する粘質土である。この段階にも＜８層＞と同様に北区北東部に落ちが確認される。地形状況は＜８層＞と共通しており、北区中央部付近～西区では標高0.95～1.0m前後、北区西壁で標高0.8mを測る。北区北東端と東区北東部では低く0.7mである。出土遺物はコンテナ１／２箱が認められた。弥生時代後期前葉～中葉の土器を含み、本層の形成時期を示しているものと考えられる。

＜11層＞黄灰色粘質土で、弥生時代の基盤層にあたる。遺物は出土していない。上面の標高は0.6～0.9mを測る。

第２節　弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物

本時期に属する遺構には井戸１基、土坑１基、溝９条が挙げられる（図８、図版１）。検出面では＜10層＞上面で土坑１基、溝２条、＜８層＞上面で井戸１基、溝８条を確認している。＜10層＞～＜８層＞の段階には、調査地点北区の北西～南東にかけて帯状に高まり、そこから西側、南側へ緩やかに下がっていく地形をなしている。また、この高まりの北東側は北東に向けて下がる斜面を呈しており、ここを「落ち」として報告する。「落ち」の東側にあたる、第18次調査地点内では調査区北辺中央から半円形に伸びる微高地から南方向および南西方向へと緩やかに傾斜する地形が確認されている(1)。本調査地点の「落ち」と併せると、微高地を巡るように落ちが形成されていると考えられる。

遺構のうち、井戸１基は北区南端に、土坑１基は西区北東部に位置する。溝は北東－南西方向のもの（溝１・３）と、北西－南東方向のもの（溝２・４－９）とが認められる。本調査地点で確認された溝群は、上述のような地形の傾斜に沿って走行している。また北側で確認された溝９は「落ち」の肩部にあたる。

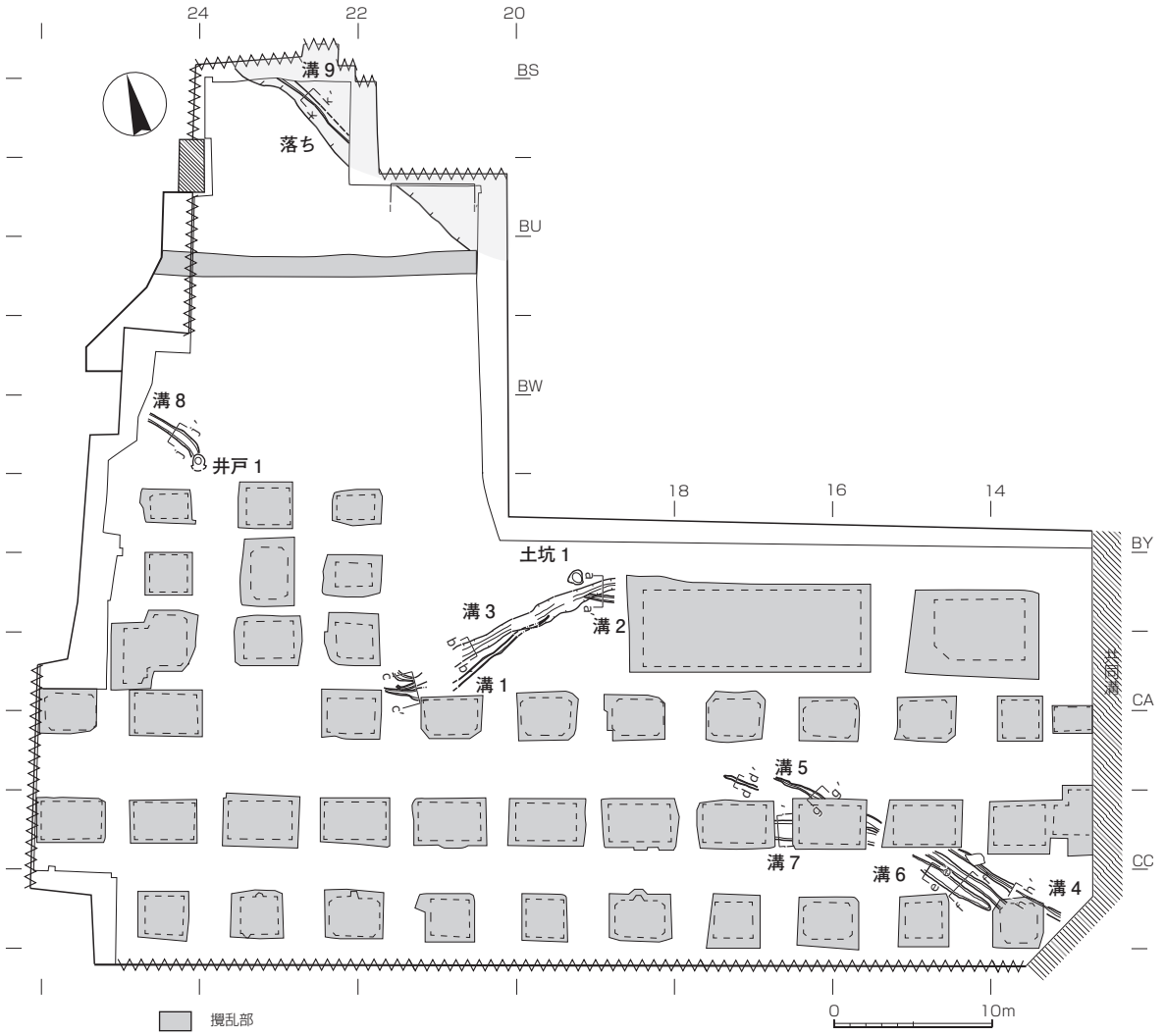


図８　弥生～古墳時代の遺構全体図（縮尺1/500）

落ちには＜10層＞～＜８層＞段階に土器が流れ込んでおり、これらをまとめて報告する（図15）。

本節で述べる遺構が、既報告地点と同一遺構である場合はその旨を明記することとする。

註

(1) 山本悦世　2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　紀要2007』

１．井戸

井戸１（図９、図版１）

調査区北区、BW21区に位置する。検出面は1.15mで＜８層＞に対応する。上面で南北0.96m×東西0.9m、底面で径0.35mの円形を呈する。底面の標高は0.2mを測り、検出面からの深さ0.95mが残る。

埋土は11層を確認した。さらに土質等から１群（１層）、２群（２～４層）、３群（５～９層）、４群（10・11層）の４群にまとめた。１群は淡橙灰褐色砂質土層１層である。２群は灰色を基調とする粘質土で埋め戻し土と考えられる。３群のうち５～７層は炭を多く含み、５～９層を通して暗灰～黒灰色を呈する。４群は灰色粘土を基調とする、使用時の堆積土と考えられる。こうした堆積状況から、３群の段階に火の使用が窺われ、廃絶時の祭祀が想定される。

出土遺物はごくわずかに弥生土器片２点が確認された。本遺構の時期は、検出面から古墳時代初頭に比定される。本時期の生活域は、本調査地点より北100mの第１次調査地点一帯に広がる。また本調査地点南半以南の既調査地点においては水田域の広がりが確認されている。本遺構は生活圏とは離れた地点に位置しており、祭祀あるいは耕作用の機能が想定される。

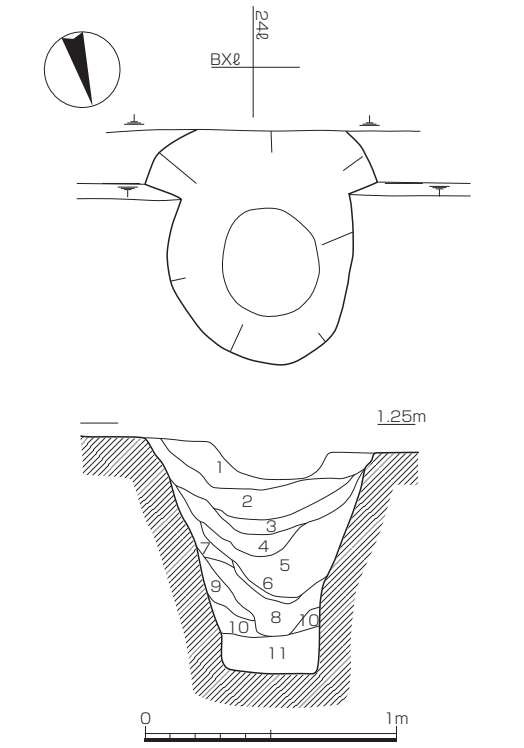


図９　井戸１（縮尺1/30）

２．土坑

土坑１（図10、図版１）

西区北東、BZ19区に位置する。検出面は標高1.0mで＜10層＞に対応する。上面では1.0×0.9m、底面では0.55×0.6mの楕円形を呈する。底面の標高は0.7m、検出面からの深さは0.3mを測る。

埋土は３層に分けた。暗灰～灰色の粘質土である。出土遺物は見られなかった。本遺構の時期は検出面から弥生時代後期と考えられる。

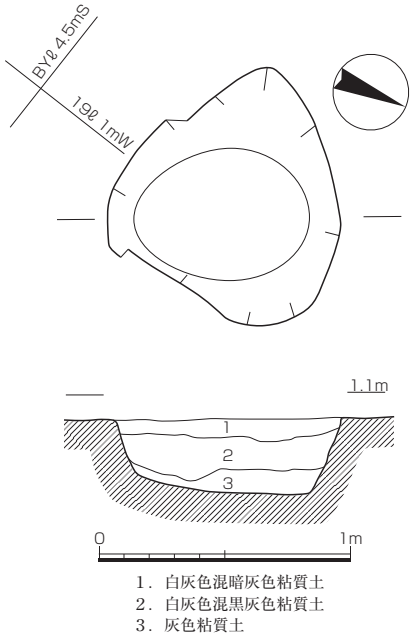


図10　土坑１（縮尺1/30）

3．溝

溝１～３（図11、図版１）

西区北東、BY・BZ18～19区で３条の溝を確認した。北東～南西方向に走行する溝群である。溝１・２は＜10層＞で、溝３は＜８層＞上面で検出した。いずれの溝も出土遺物は無置物あるいは極めて希薄である。時期は、検出面から古墳時代初頭頃の可能性が考えられる。

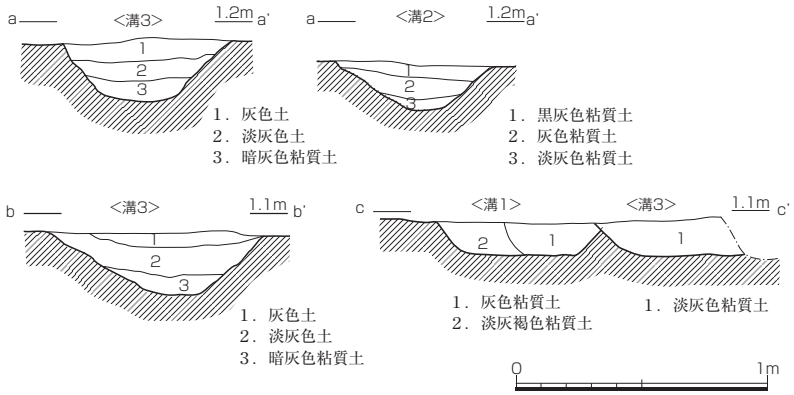


図11　溝１～３断面（縮尺1/30）

溝１：BZライン～CAライン間で長さ６ｍを確認した。北東側は溝３が重複しているため、確認できない。検出できたのは幅0.5～0.8m、深さ0.2ｍである。検出面は＜８層＞で、標高1.05～1.1m、底面のレベルは北東で0.83m、南西で0.87ｍを測る。

埋土は灰色～暗褐色を呈する粘質土である。出土遺物はみられなかった。

溝２：BY19区で、南東－北西方向に約２ｍを確認した。幅0.8m、深さ0.18ｍを測る。西端は溝３に切られ、以西では確認できなかった。検出面の標高は1.05m、底面は0.85ｍを測る。埋土は灰色土～暗灰色粘質土の３層を確認した。遺物は出土していない。

溝３：19ライン～22ライン間で北東－南西方向に約６ｍを確認した。溝１の北側に沿っている。幅0.6～0.9m、深さ0.1～0.3ｍを測る。検出面の標高は1.05～1.1m、底面の標高は0.9ｍを測る。埋土は灰色土～暗灰色粘質土の３層に分けた。遺物は古墳時代初頭の土師器鍋等が出土した。

溝４～７（図12、図版４）

東区で検出した４条の溝である。南東－北西方向を主軸とする。いずれも遺物は出土していない。＜８層＞上面で検出したことから古墳時代初頭と考えられる。

溝４：13～15ライン間で、南東－北西方向に長さ10ｍを確認した。幅0.6m、深さ0.2～0.3ｍが残る。検出面の標高は0.6m、底面の標高は南東端で0.3ｍを測る。埋土は淡黄灰色粘土～暗灰色粘土の３層に分けた。

溝５：溝４の南に沿うように走行する。13～17ライン間で、南東－北西方向に長さ18ｍを検出した。また西区でわずかに同方向の溝を検出しており、同一遺構の可能性がある。幅0.1～1.0m、深さ0.18ｍを測る。北西に向かうにつれ浅くなる。検出面の標高は0.7m、底面の標高は0.55～0.7ｍである。

溝６：溝５の南に沿うように、14～18ライン間で長さ７ｍを検出した。残りの良い南東端

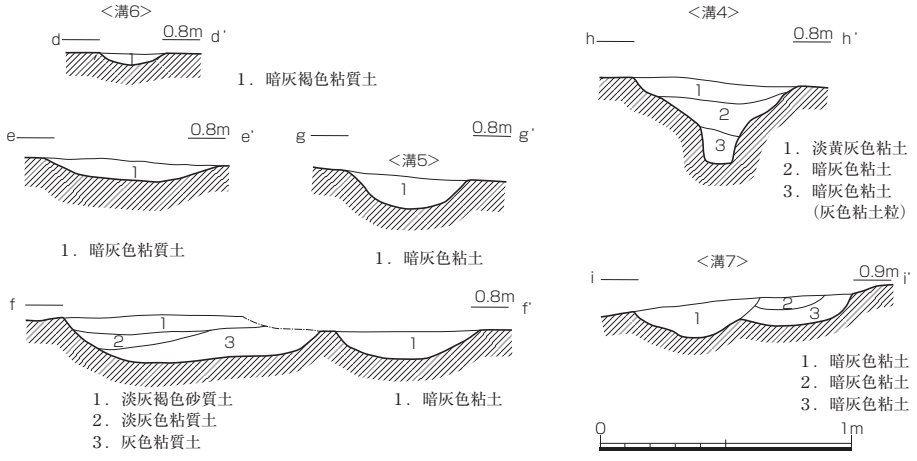


図12　溝４～７断面（縮尺1/30）

で幅0.55m、深さ0.1mを測る。検出面の標高0.7m、底面の標高0.55～0.6mを測る。

溝７：16～17ライン間で東西方向に、長さ１mを検出した。上述の溝４～６とは走行方向が異なるが、埋土の特徴は一致しており、同時期の遺構として報告する。検出面の標高0.78～0.85m、底面の標高0.7mを測る。幅0.9m、深さ0.15mを検出した。埋土は暗灰色粘土を主体に３層に分けた。埋土の状況から１層と２・３層とで流路が変わった可能性があり、前述の溝４～6のいずれかにあたることも考えられるが、検出部分が一部であるため断定は難しい。

溝８（図13、図版４）

調査区北部、BW24区で検出した。南東－北西方向に、長さ４mを確認した。

幅1.0m、深さ0.11mを測る。＜８層＞で検出した。検出面の標高0.95～1.0m、底面の標高0.92mである。埋土は暗灰色粘質土１層を確認した。遺物は出土していない。

本溝は、走行方向から、前述の溝４～６に合致する可能性が考えられる。また西に隣接する第25次調査地点で「溝６ａ」として報告された遺構と同一であろう。既往の成果も併せて、溝８は円形高まりの周囲を巡る溝であり、機能としては耕作域の排水が考えられる。

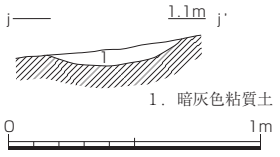


図13　溝８断面
（縮尺1/30）

溝９（図14）

調査区北部北東、BS22区で検出した。同地点には、後述する落ちが形成されており、本溝は落ちが概ね埋まった後に、その肩部を走行するように形成されている。南東－北西方向を主軸とし、長さ３m程を検出した。幅0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。検出面の標高1.05m、底面の標高0.9mである。遺物は出土していない。古墳時代初頭以降と考えられる。

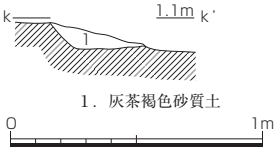


図14　溝９断面
（縮尺1/30）

４．落ち

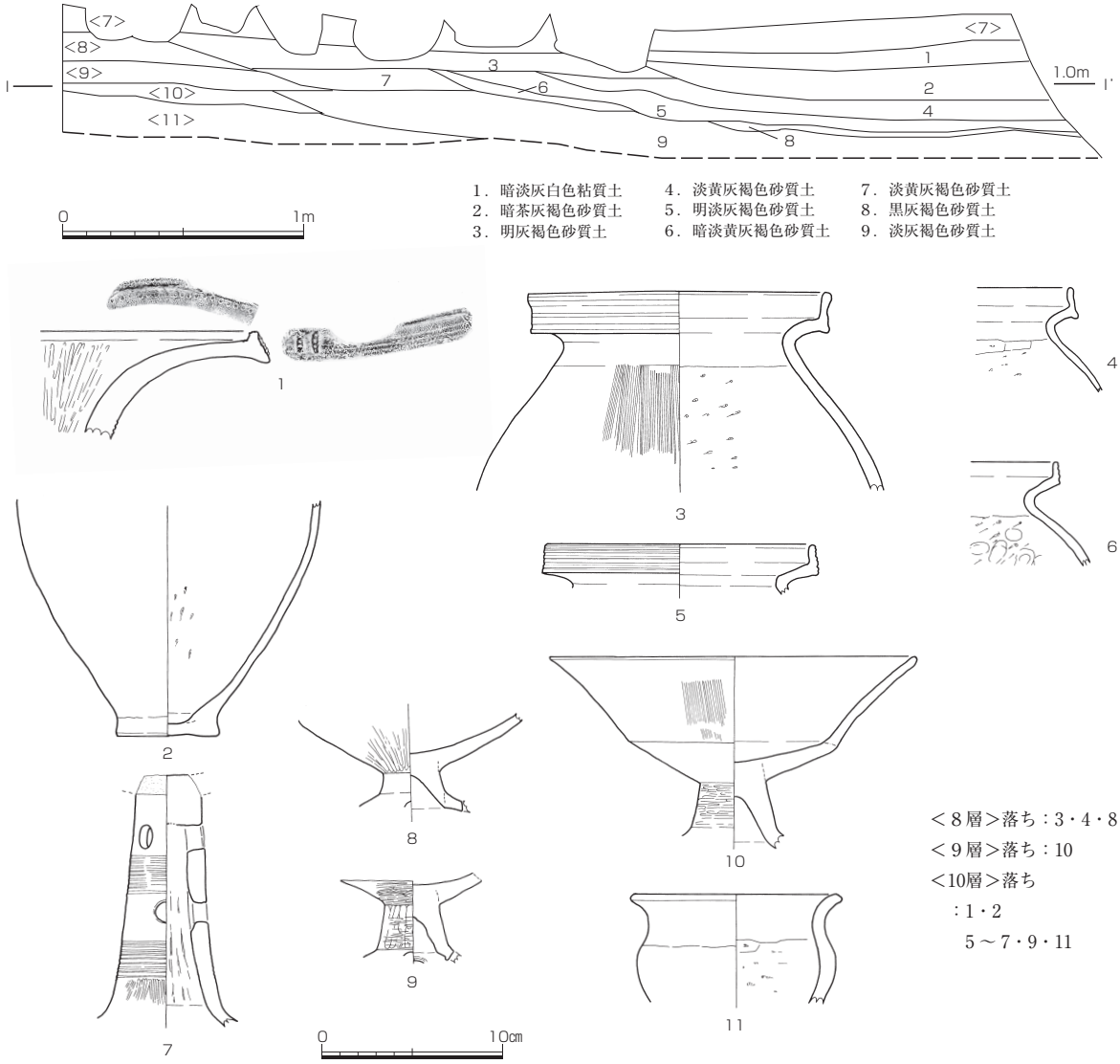
調査区北区の北東部に、北東角に向けて緩やかに傾斜する落ちが形成されている。図15に示したように、＜10層＞～＜８層＞の堆積時に対応する時期の落ち斜面を、次々に砂質土層が覆っており、＜７層＞段階までに平坦化していった状況と考えられる。後述するように出土遺物には時期幅があり、また先後関係を層位的に明確にはできない。

落ち（図15、図版４）

落ち肩部の標高は0.99～1.03mを測り、北東に向かって傾斜する。本調査地点内の最深部の底面標高は0.7～0.8mである。この落ちの埋土は９層に分けたが、暗灰色砂質土､(８・９層)、黄灰色砂質土（６・７層)、灰褐色砂質土（２～５層）というように砂の堆積が続き、土器が比較的多く出土している。低地へと砂が繰り返し堆積するような環境下であったことが窺われる。

出土遺物には弥生時代中期末から弥生時代後期末、さらに古墳時代初頭のものが若干含まれている。土層観察から８・９層は＜10層＞段階の斜面堆積、１－７層が＜８層＞段階の斜面堆積と判断される。調査時には＜８層＞・＜９層＞・＜10層＞の落ちを分けて取り上げを行い、遺物総量はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）２箱、内訳は＜10層＞落ち１箱、＜８層＞落ち１箱、＜９層＞はポリ袋２袋であった。

＜10層＞では弥生時代中期末～後期末頃の土器（図15－１・２・５～７・９・11)、＜９層＞では弥生時代後期末～古墳時代初頭（同－10)、＜８層＞では弥生時代後期中葉～後葉（同図－３・４～８）の土器があげられる。



番号	器　種	口径 cm	底径：cm	器高 cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　壺	－	－	－	－	内：放射状篦ミガキ、外：ハケメ後篦ミガキ(縦位)、口：上端面と内面下端に円形竹管文(径3㎜)が密に巡り、外面には4条の沈線上に2つの棒状浮文(長さ1.4cm・幅4㎜で小さな押圧が縦に4か所)が幅1.8cm間隔で貼り付く。2つの浮文位置を外して、鋸歯文(幅1.8cm、内部を各5条の沈線が格子状に埋める)が巡る。	浅黄 2.5Y7/4	0.5～1㎜砂
2	弥生土器　甕	－	5.65	－	底1/1	磨滅顕著、内：篦ケズリ、内外被熱痕(内面黒色化･外面橙色化)、黒斑	(内)灰(外)浅黄橙 N6/ 、10YR8/3	0.5～1㎜砂多
3	弥生土器　甕	16.8	－	－	口1/5	体部内：篦ケズリ、体部外：縦ハケメ、口：幅広の凹線2条、磨滅顕著、口縁歪み	橙～明赤褐 5YR6～5/6	1～2㎜砂礫多 赤色粒
4	弥生土器　甕	－	－	－	－	体部内：篦ケズリ、口：凹線状篦描沈線2条、磨滅顕著	橙～鈍黄橙 7.5YR6/6、10YR7/3	0.5～1㎜砂多 赤色粒
5	弥生土器　甕	15	－	－	口1/4	口：篦描沈線6条(深浅あり)、磨滅顕著、全面被熱(煤･変色)	鈍褐 7.5YR5/3	0.5～1㎜砂
6	弥生土器　甕	－	－	－	－	体部内：篦ケズリ後押圧、体部外：縦ハケメ、口：篦描沈線4条、外：煤付着	鈍黄橙 10YR6/3	1㎜前後砂
7	弥生土器　高杯	－	－	－	－	磨滅顕著、外：裾部周辺はハケメ残存、内：絞り目、円孔(径約1.4cm)2段で各3か所、沈線文帯(幅約2cmに約9条の沈線)２段が予想される。	灰白～淡黄 2.5Y8/2～3	1㎜前後砂多
8	弥生土器　高杯	－	－	－	－	磨滅顕著、杯外：篦ミガキ(放射状)、脚内：ナデ、円孔4か所	浅黄橙～鈍黄橙 10YR8～7/4	0.5～1㎜砂
9	弥生土器　高杯	－	－	－	－	磨滅、外：篦ミガキ(横位)、円孔4か所	橙(断面)灰白 5YR6/6、10YR8/2	きめ細かい 均一
10	弥生土器　高杯	20×20.5	－	－	口1/1	磨滅顕著、脚柱外：篦ミガキ(横位)、杯部に黒斑、杯内：一部剥離(2次被熱痕？)	橙　5YR7/6･8	きめ細かい
11	弥生土器　鉢	10.7	―	―	口1/4	磨滅、口：強い横ナデ、内：篦ケズリ	灰白～黄灰 2.5YR8/1、2.5YR6～5/1	1㎜前後砂

図15　落ち断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

第３節　中世前半の遺構・遺物

本時期に属する遺構は井戸13基、土坑４基、溝10条、ピット群である（図16）。＜６層＞が検出面となる。ピット群については、＜５層＞・＜４層＞検出のものと分離が難しく、本節で一括して掲載する。

11世紀代～12世紀初頭に井戸２・３、11世紀後葉～前葉に井戸４・５、12世紀初頭～前葉に井戸６・７が認められる。これらの井戸に対応する時期の溝は、溝10～13である。溝10・11は鹿田条里に沿わない、正方位の南北方向に主軸をとる溝で12世紀前半に埋没している。この溝の掘削時期は確定できないものの周辺の遺構の状況から11世紀中頃あたりに求められる。次いで12世紀中葉～後葉の井戸８・９が認められる。対応する溝は溝14・14ａで12世紀後半～末に埋まっている。溝14・14ａは鹿田条里に沿う南北方向の区画溝である。

13世紀代には、13世紀初頭～前葉の井戸10、同前葉～中葉の井戸11が認められ、対応する溝は溝15・16である。溝15は13世紀前半、溝16は13世紀前葉に埋まる。溝15は12世紀の溝10・11に並行する正方位の南北方向の溝である。並行する形態の特徴から、道の存在が窺われる。一方、溝16は東西方向の溝で、溝15と同時期であり、組み合わさって屋敷地を区画するものと考えられる。次いで13世紀後半の井戸12、同後半～後葉の井戸13、同後葉の井戸14の３基が認められる。対応する溝は溝17・18・20である。いずれも埋没時期は13世紀末～14世紀初頭に求められる。このうち溝18は南北方向の大型溝であり、主要な区画溝の一つである。

ピット群は北部中央付近と、西部北東部に集中している（図17）。ピットの時期の確定は難しく、掘立柱建物は１棟を抽出できたのみである（図18）。

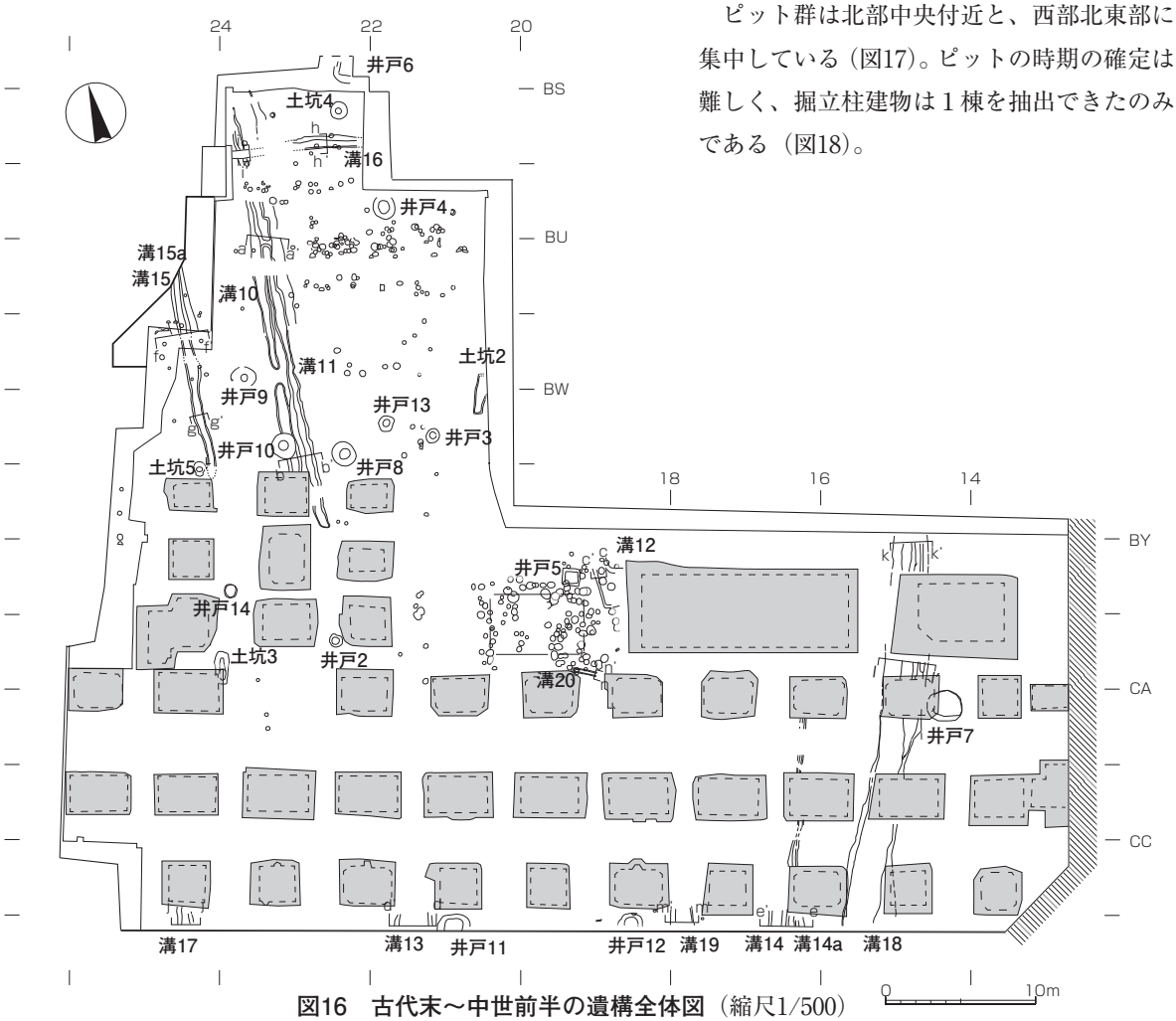


図16　古代末～中世前半の遺構全体図（縮尺1/500）

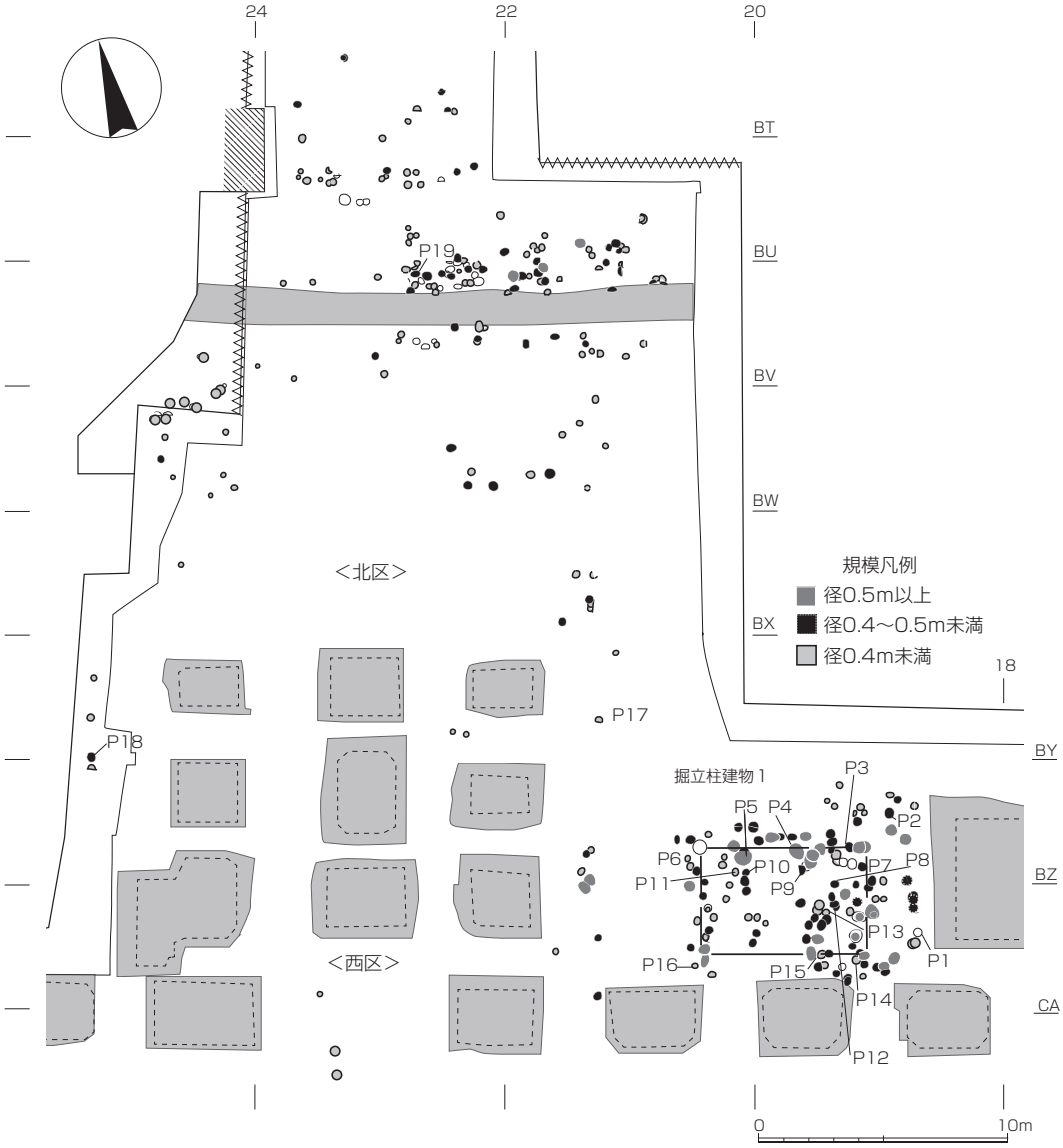


図17　ピット群検出状況（縮尺1/300）

１．建物・ピット群

ピットの検出状況を図17に示した。ピットは北区BVライン以北と、西区のなかでも北東のBY・BZ18・19区の２か所に集中する。この状況は攪乱の度合いが影響してはいるが、検出されたピットの規模を概観すると西区に径0.5m以上の大形柱穴が多く認められ、遺物の状況では西区に中世前半期のものが多い傾向を捉えることができる。また、北区のピット群には遺物が出土するピットは少なく、時期の判断は難しいが、中世後半～近世のものが含まれることを指摘できる。また＜10層＞で検出したピットで、かつ弥生時代の遺物のみを出土するものが３基（図17－Ｐ２）認められ、これらについては弥生時代後期頃に比定される。西区では後述する掘立柱建物１を抽出した。

掘立柱建物１（図18、表１）

西区、BY・BZ19・20区で確認した。Ｐ１～Ｐ８により構成される。検出レベルは標高1.1～1.3mで＜６層＞に対応する。他遺構との関係は、本建物のＰ１の北西に井戸５、Ｐ４～Ｐ６の南側に井戸20が位置する。本建物は

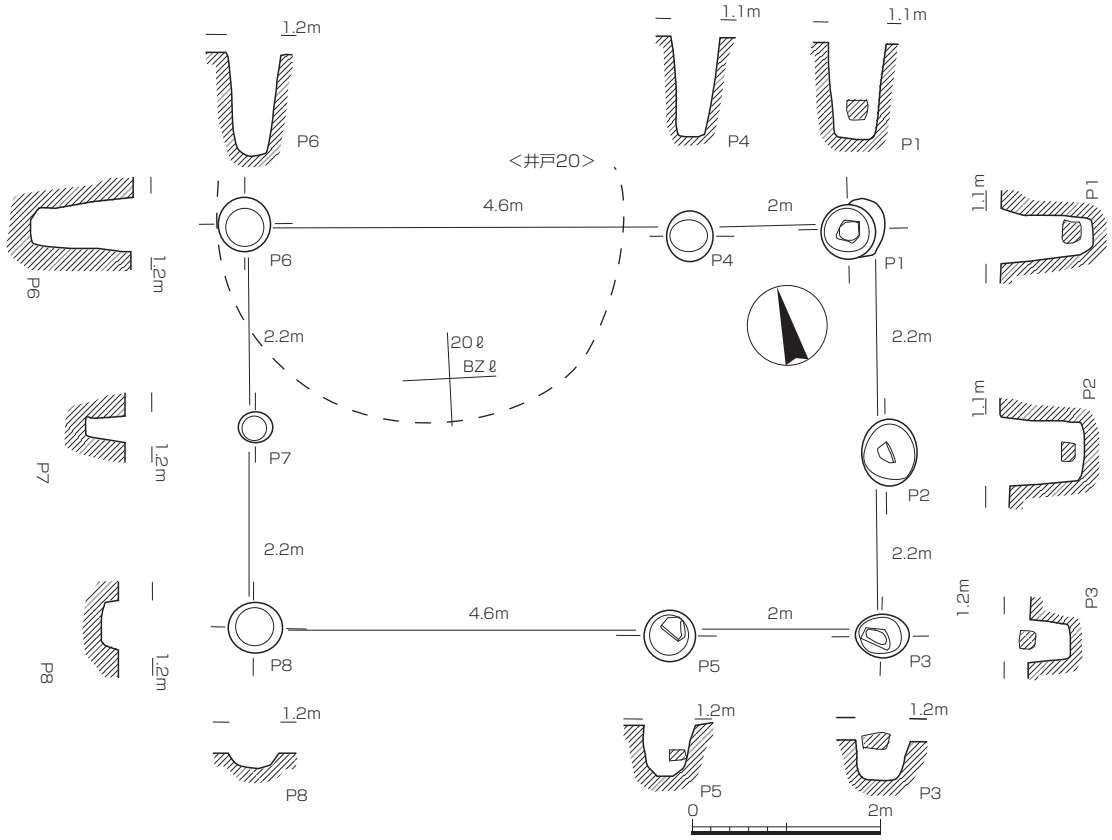
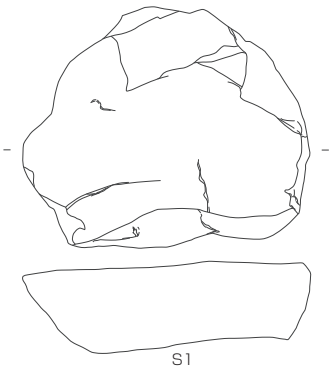


図18　掘立柱建物１（縮尺1/80・1/6）

表１　掘立柱建物１構成柱穴一覧

番号	上面高（m）	下面高（m）	径（m）	深さ（m）	礎石
P1	1.31	0.83	0.52×0.5	0.48	○
P2	1.32	0.89	0.62×0.64	0.43	○
P3	1.16	0.95	0.58×0.36	0.2	○
P4	1.32	0.79	0.54×0.4	0.53	
P5	1.28	0.99	0.44×0.62	0.29	S1
P6	1.2	0.68	0.56×0.54	0.52	
P7	1.26	0.95	0.32	0.31	
P8	1.11	1.05	0.5×0.44	0.06	

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S1	礎石	19.2	22.5	8.5	4880	完存	砂岩ホルンフェルス	上下面平坦



東西方向に長軸を有し、Ｅ－20°－Ｓを示す。

柱穴の規模は直径0.32～0.6m、深さは0.06～0.53mを測る（表１）。本建物の構造はＰ１・４・６が建物北辺を、それに直交するＰ１・２・３が東辺、Ｐ６・７・８が西辺を構成する。東辺から約２m西にＰ４・５が位置し、北辺ではＰ１・４間が２m、Ｐ４・６間が4.6mを測る。東辺ではＰ１・２間、Ｐ２・３間がそれぞれ2.2mを測る。以上の状況から、本建物は東西6.6～6.8m、南北4.4mの規模を有する３間×２間の建物と理解される。柱穴間の距離は2.0～2.2mの数値を示し、近似した値である。北辺・南辺ともに、東から4.6mあたりの柱穴は確認されていない。井戸20ほかによる破壊も想定されるため、本来の有無は判然としない。

遺物はＰ６を除きいずれも少量の土器小片が出土した。中世前半の土師器椀・皿等の小片である。８基の柱穴中４基で礎石が認められた。うちＰ５出土の１点を図示した（図18－Ｓ１）。

本建物の時期は、遺構の位置関係から、井戸５の埋没以後で井戸20以前であり、出土遺物も併せて、中世前半の12世紀後半～13世紀代と考えられる。

ピット群（図17・19、表２）

ピットの分布状況は前述したように、中世前半のピット群が西区北東部に、中世後半以降のピット群は北区に分布がまとまると考えられる。遺物を掲載したピットの規模を表２にまとめた。11世紀後半～14世紀前半、および16世紀代の遺物が見られる。建物として抽出できたのは前述の一棟に留まったが、井戸と併せて屋敷地の配置を検討する一助となろう。

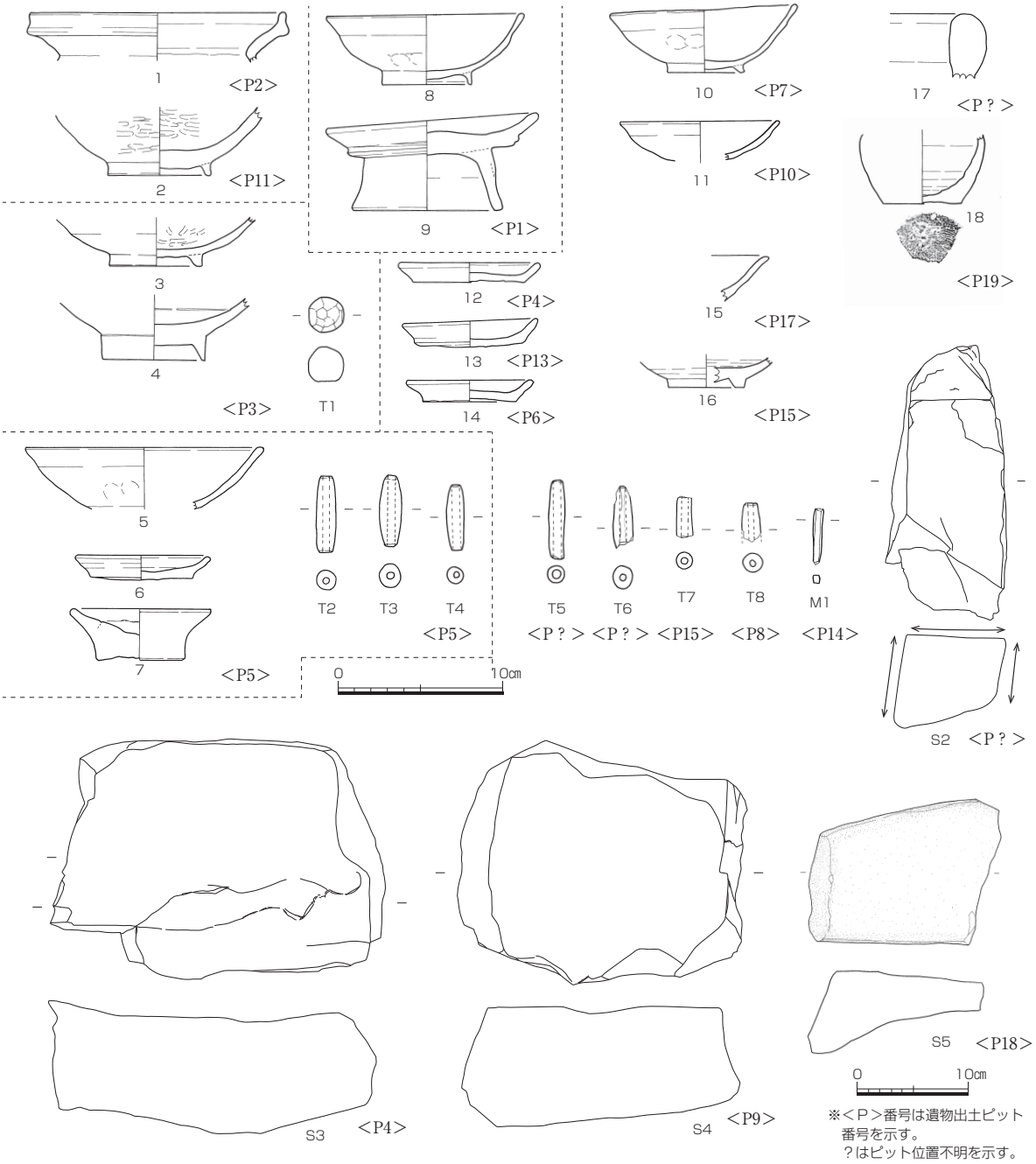


図19　ピット出土遺物（縮尺1/4・1/6）

図19観察表

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　甕	15.3	－	－	口1/4	横ナデ、内：胴部篦ケズリ、口縁部付近の胎土中に5～7㎜大のサヌカイト剥片	灰白　10YR8/2	1㎜前後砂 サヌカイト剥片
2	土師器　椀	－	6.2	－	高台1/2弱	内外：篦ミガキ少量残存、底外：ナデ、厚手、被熱変色（暗色･橙色化）	灰白　10YR8～7/1	0.5㎜以下砂
3	土師器　椀	－	5.6	－	高台1/1	内：篦ミガキの可能性高い、外：ナデ･押圧、重焼痕	灰白　2.5Y8/1～2	1～4㎜砂礫
4	白磁　碗	－	6.1	－	高台1/1	削り出し高台､内：施釉･沈線（一箇所途切れる）	（胎）白（釉）灰白 9/　、7.5Y8/1	精緻
5	土師器　椀	14.4	－	－	口1/4	内：丁寧なナデ、外：ナデ	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
6	土師器　器台	8.55	5.4	3.1	口1/4欠のみ	内：押圧･粘土つなぎ目明瞭で凹凸残存､外：強い回転ナデ、底外：篦キリ	橙　5YR7/6	0.5㎜以下砂 赤色粒多
7	土師器　皿	8.2	6.1×6.5	1.55	口1/2 底3/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ･板目痕	鈍橙～橙 7.5YR7/4･6	1㎜以下砂 赤色粒
8	土師器　椀	11.45	4.65	3.6～4.1	完存	ナデ･押圧、口縁歪み少し	灰白　2.5Y8/1	0.5～1㎜砂
9	土師器　椀	12	5.5	4.25	口1/1 高台1/2	内：丁寧なナデ、外：押圧･ナデ	灰白　2.5Y8/1	1㎜以下砂
10	土師器　脚付皿	12.9	9.2	5～5.9	ほぼ完存	磨滅、ナデ・押圧	鈍橙（皿内）浅黄橙 7.5YR7/4、10YR8/4	0.5㎜以下砂 赤色粒
11	土師器　椀	9.6	－	－	口1/5	内：ナデ、外：押圧･ナデ	灰白　2.5Y8/1	1㎜以下砂
12	土師器　皿	8.6	6.8	1.2	1/3強	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）	灰白　2.5Y8/1～2	0.5㎜以下砂 赤色粒
13	土師器　皿	8.2	6.55	1.4～1.7	口1/2弱 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ･板目痕	橙～鈍橙 5YR7/6、7.5YR7/4	0.5㎜以下砂 赤色粒
14	土師器　皿	7.6	5.75	1.35	完存	回転ナデ、口：端部の一部面取り、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）	浅黄橙（底）灰白 10YR8/3、N8～7/	1～2㎜砂礫
15	白磁　皿	－	－	－	－	内～外部上半：施釉	（胎）灰白（釉）灰白 8/　、10Y8/1	精緻
16	白磁　碗	－	4.6	－	高台1/2弱	削り出し高台、内～体部外面：施釉、底内：釉の掻きとり	（胎）白～灰白（釉）灰白 9～8/　、10Y8/1	精緻
17	備前焼　大甕	－	－	－	－	回転ナデ	（内）鈍赤褐（外）褐灰 5YR5/3、10YR5/1	1～3㎜砂礫
18	備前焼　小壺	－	4.8	－	底1/4	回転ナデ、底外：糸キリ	鈍赤褐　5YR5/3	1㎜以下砂少

番号	器種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T1	土師器　土錘	4.6	1.2	1.2	6.2	完存	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm、T5に類似	淡赤橙、一部灰赤 2.5YR7/4、2.5YR6/2	0.3㎜以下砂
T2	土師器　土錘	4.2	1.3	1.4	6.6	完存	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm、被熱で変色（橙色化）	鈍橙　2.5YR6/3～4	0.5㎜以下砂
T3	土師器　土錘	7	1	1	4.5	完存	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙～灰白 5YR6/6、10YR8/1	きめ細かい
T4	土師器　土玉	2.1	2.1	2.1	10.4	完存	磨滅、ナデ、面を有す、底外：明瞭な面を呈する。	鈍黄橙～灰黄橙 10YR7/2～6/2	きめ細かい
T5	土師器　土錘	5.8	1	1	3.8	完存	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.5cm、T1に類似	淡赤橙、一部灰赤 2.5YR7/4、2.5YR6/2	きめ細かい
T6	土師器　土錘	3.8	1.2	1.4	5.1	一部欠	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm	灰赤～純赤橙 10Y5/2　10R6/3	きめ細かい
T7	土師器　土錘	（2.5）	1	1	2.5	－	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm	灰赤　2.5YR5～4/2	0.5㎜以下砂
T8	土師器　土錘	（2.35）	1.1	1.1	2.5	－	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4cm、被熱で暗色化	鈍褐　（断）灰白 7.5YR5/3、7.5YR8/1	0.3㎜以下砂

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M1	鉄釘	3.4	0.5	0.5	29.7	断面形矩形

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S2	砥石	23.5	8.7	8.5	2961.7	一部	砂岩ホルンフェルス	砥面3面
S3	礎石	22.0	30.4	12.0	1314	完存	花崗岩	上下面平坦
S4	礎石	13.2	17.5	7.3	1889.1	完存	安山岩	上面平坦
S5	礎石	72.2	26.5	10.8	9580	完存	花崗岩	上下面平坦

表２　遺物掲載ピット一覧

番号	上面高（m）	下面高（m）	径（m）	深さ（m）
P1	－	－	－	－
P2	1.11	0.81	0.4×0.46	0.3
P3	1.5	1.33	（0.3）×0.42	0.2
P4	1.38	0.85	0.72×0.6	0.53
P5	1.35	0.88	0.72×（0.44）	0.46
P6	1.11	1.04	0.22×0.24	0.6
P7	1.52	1.47	0.3×0.34	0.55
P8	1.57	1.28	0.4×0.32	0.3
P9	1.33	0.97	（0.3）×（0.44）	0.36
P10	1.23	1.03	0.32×（0.28）	0.2

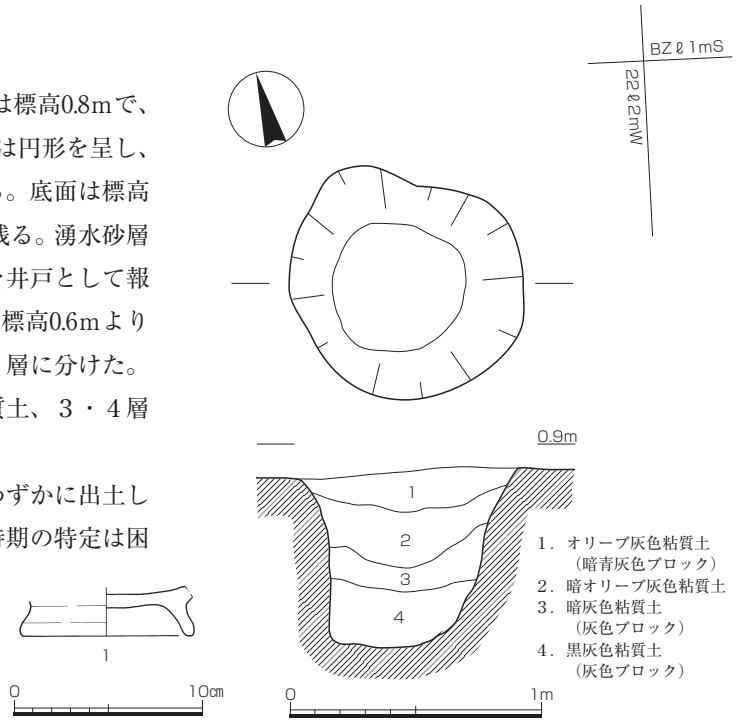
番号	上面高（m）	下面高（m）	径（m）	深さ（m）
P11	1.34	1.14	0.24×0.3	0.2
P12	1.37	1.05	0.4×0.3	0.3
P13	1.45	1.11	0.3×0.22	0.34
P14	1.47	1.2	（0.26）×0.3	0.27
P15	1.48	1.13	（0.3）×0.3	0.34
P16	1.06	－	（0.36）×（0.54）	－
P17	1.23	1.12	0.3×（0.2）	0.1
P18	1.21	1	0.36×0.3	0.21
P19	1.61	1.19	0.42×0.28	0.32

2．井戸

井戸２（図20、図版５）

西区中央、BZ22区に位置する。検出面は標高0.8mで、＜８層＞上面まで破壊されている。平面形は円形を呈し、上面では径0.9m、底面では径0.55mを測る。底面は標高0.1mに位置し、検出面からに深さ0.7mが残る。湧水砂層には達していないが、形状から、本遺構を井戸として報告する。残存部分の断面形は筒状をなし、標高0.6mより上位はやや広がりが認められる。埋土は４層に分けた。１・２層はオリーブ灰色を主体とする粘質土、３・４層は暗灰色の粘質土である。

出土遺物は土師器椀片、須恵器小片がわずかに出土した。遺物はわずかで摩滅も顕著である。時期の特定は困難であるが吉備系土師器椀が含まれていない点から11世紀前半の可能性がある。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	―	9.2	―	高台1/2	磨滅	鈍(赤)橙　5YR6/3～4	0.5～1㎜砂多

図20　井戸２・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

井戸３（図21、図版５）

北区南東、BW21区に位置する。検出面の標高1.58mを測り＜６層＞に対応する。上面で1.05×0.9mの東西に長い楕円形を呈する。底面の標高は－0.1mで、検出面からの深さ1.7mを測る。底面から0.6m程上位、標高0.45～0.5m地点で、断面形状に抉れがみとめられる。使用時における水面ラインがこのあたりにあったことを示す。

埋土は24層に分けた。上層（１～11層）、中層（12～20層）、下層（21～24層）に大別した。下層は灰褐色系の粘質土で、ブロックは含まない。中層・上層は廃絶時の埋土と考えられる。上層のうち６層は炭化物を比較的多く含むが炭層をなすようなものではない。

遺物はポリ袋（12号）３袋、50片程が出土した。土師器椀・皿・鍋・竈片、

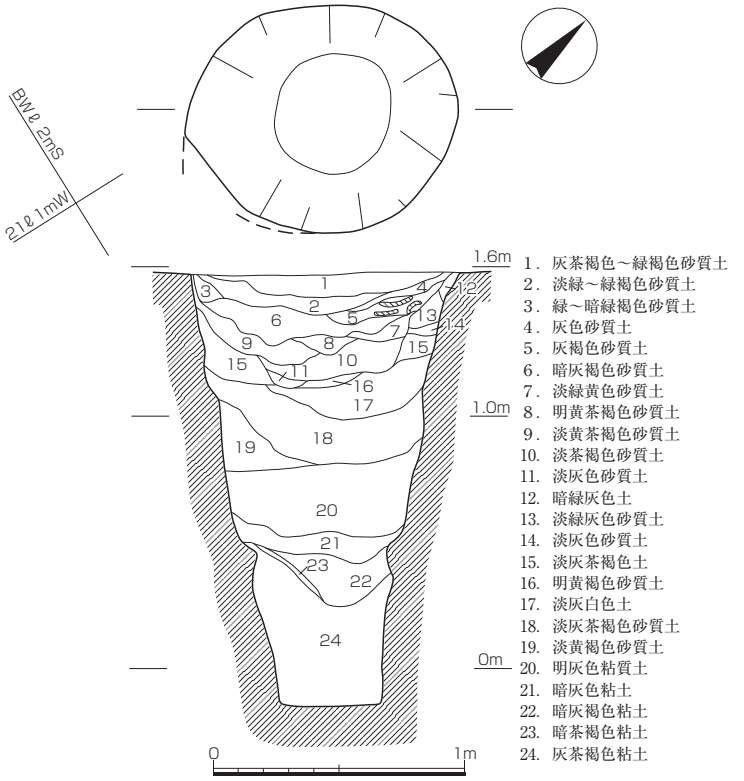
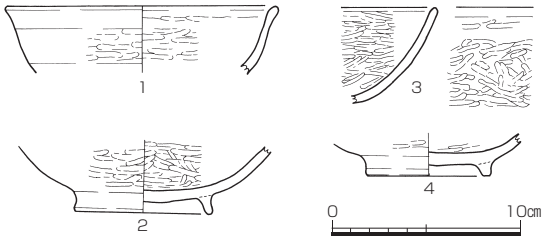


図21　井戸３（縮尺1/30）

瓦器椀口縁片が含まれる。図22－３は和泉型瓦器椀である。

本遺構の時期は出土遺物から11世紀後半～12世紀初頭と考えられる。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	14.4？	－	－	－	1と2は同一個体の可能性が高い。内外：篦ミガキ密、平滑な仕上がり、底外：丁寧なナデ・押圧、煤付着内面に多、残存率低いため口径値は不安定(口径15～16cm、器高6cmの値もあり)	(内)黄灰～黒褐(外)灰白 2.5Y6/1、2.5Y3/2 2.5Y8/1～2	1mm砂僅少
2		－	7.2×7.5	－	高台1/1			
3	瓦器　椀	－	－	－	－	内外：篦ミガキ密、和泉型	灰白～灰　5Y7/1、N4/	1mm砂僅少
4	黒色土器？ 椀	－	6.75	－	高台3/4	内外：篦ミガキ僅少、内面全体に煤がタール状に付着(「内黒」の可能性有)	(内)黒(外)灰白 N2/　、2.5Y8/1	1mm砂少

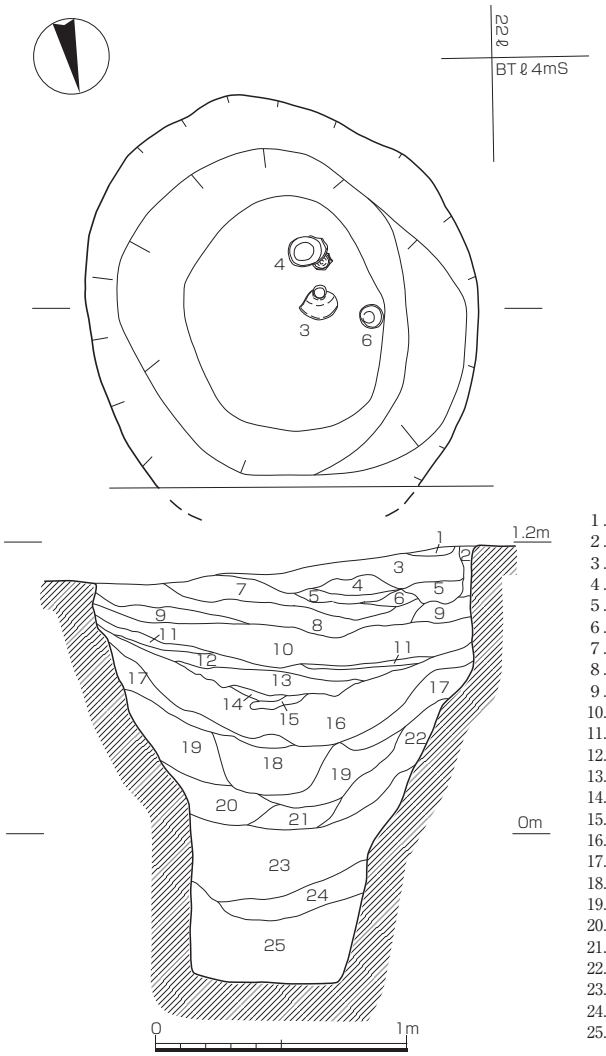
図22　井戸３出土遺物（縮尺1/4）

井戸４（図23・24、図版５）

北区北部、BT21区に位置する。溝10の東７ｍの地点である。検出面の標高1.02～1.05ｍで＜６層＞に対応する。上面で径1.55ｍの円形、下面では0.6×0.9ｍの南北に長い楕円形を呈する。底面のレベルは標高－0.5ｍ、検出面からの深さ1.65ｍを測る。

断面形は底面から0.6～0.7ｍの高さまでは筒状に立ち上がり、標高0.5ｍより上位は広がるＹ字形をなしている。

埋土は25層に分けた。１群（１～６層）、２群（７～15層）、３群（16～22層）、４群（23～25層）の４群に大別して記す。４群は暗褐色を呈する粘土である。３群は17～22層が廃絶時の埋め戻し土を示し、標高0.7ｍ程度まで埋めた段階で、多量の炭化物や



遺物（図24-4）出土状況（西から）

1．緑黄褐色砂質土
2．暗緑橙色砂質土
3．暗褐色炭化物層（焼土魂）
4．暗灰褐色炭化物層（焼土魂）
5．明緑灰色砂質土
6．灰色砂質土
7．明緑灰色砂質土
8．明緑灰色粘質土
9．灰茶褐色土
10．灰色土
11．暗灰褐色炭化物層
12．灰褐色粘質土（炭化物）
13．灰色粘質土
14．灰褐色粘質土
15．暗灰褐色粘質土
16．暗褐色炭化物層（焼土魂２～３㎝大）
17．暗灰色粘質土（Fe）
18．灰茶褐色～暗灰色粘土
19．暗灰褐色粘土
20．暗褐色粘土
21．灰茶褐色粘質土
22．灰褐色粘質土
23．暗褐色粘土
24．暗灰褐色粘土（植物遺体）
25．暗褐色強粘土

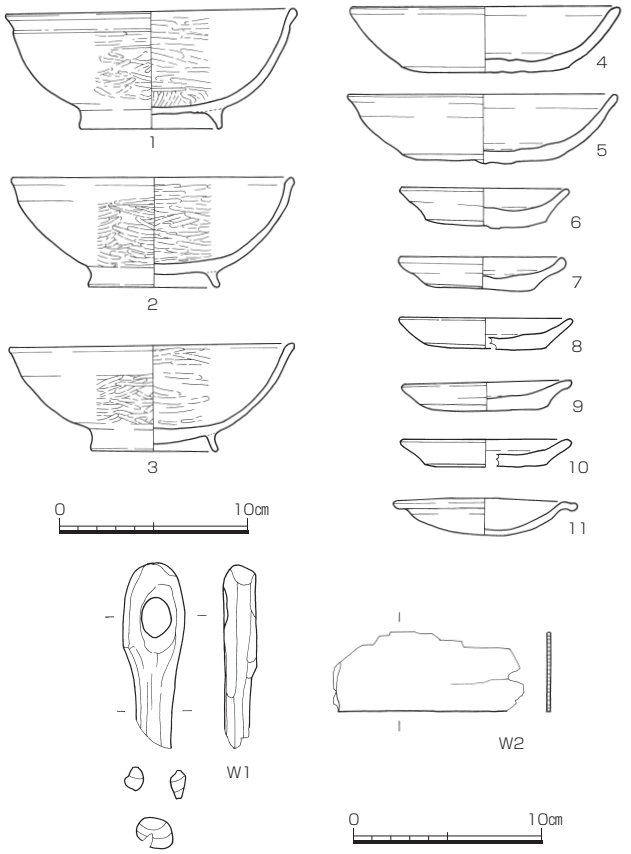
図23　井戸４（縮尺1/30）

焼土塊を含む16層の堆積が認められる。この段階で火の使用を伴う祭祀行為が想定される。さらに２群も埋め土層と考えられ、灰色系の粘土層（13～15層、８～10層）と、炭化物混入層（11・12層）が互層状に堆積する。１群は焼土・炭化物を多く含み、この段階にも火の使用が窺われる。

出土遺物はコンテナ（28リットル/箱）で１／２箱分が出土した。土師器杯（図24－４）は、１群３層中、同図３・６は３群16層中でそれぞれ炭化物層からの出土である。そのほか中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋片、白磁碗小片、木器等が確認された。

本遺構では16層の土壌を持ち帰り種子の抽出・同定を行った（第４章第２節参照）。本遺構では16科27種の種子が確認されている。栽培植物や畑地雑草が主体であり、イネ・コムギ・ナルコビエ等のイネ科、スゲ・ホタルイ等のカヤツリグサ科のほかツルマメ等が含まれる。

本遺構の時期は、出土遺物から11世紀後葉～12世紀前葉に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	15.4	7.45	6.1～6.4	口～体部1/3 高台1/1	内外：篦ミガキ密・暗色化、底外：押圧、高台：幅広粘土帯・横ナデ・被熱(表面劣化)、口：強い横ナデ	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
2	土師器　椀	15	6.6×７	5.85	口1/2 高台1/1	内外：篦ミガキ密(外面は6分割の可能性)・煤(重焼の影響？)、底外：ナデ・丸み、3に類似	灰白　2.5Y8/2	1～3㎜砂礫多
3	土師器　椀	15.3	6.65	5.5～5.7	口2/3 高台1/1	内外：篦ミガキ密、口：煤付着・端部は被熱(表面劣化+暗色化・重焼の影響？)、底外：ナデ・丸み、2に類似	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫多
4	土師器　杯	14.4	8.5	3.6	完存	回転ナデ、体部内：工具使用のナデ、底外：篦キリ+板目痕	淡赤橙～灰褐 2.5YR7/4、5YR6/2	1㎜砂多 赤色粒・雲母多
5	土師器　杯	14.3	7.8	3.3～3.5	口1/4 底1/3	回転ナデ、底外：板目痕、底内：仕上げナデ・押圧、煤付着、被熱で橙色化	鈍黄橙(底)灰黄褐 10YR7/3、10YR6/2	1㎜以下砂
6	土師器　皿	8.95	6.5	2.1	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+板目痕、厚手、シャープな仕上げ、硬質感	橙　5YR7/6	きめ細かい
7	土師器　皿	8.95	5.7	1.6～1.8	口5/6 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ、磨滅	灰白、一部橙 2.5Y8/2、5YR7/6	1～2㎜砂礫多 赤色粒少
8	土師器　皿	9.1	6.7	1.6	2/3	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+板目痕不明瞭、口内：一部煤付着	明橙灰～鈍橙 7.5YR7/2～3	きめ細かい 赤色粒少
9	土師器　皿	9	6.4×6.8	1.4～1.7	口1/2 底3/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+・板目痕、磨滅	灰白～鈍黄橙 10YR7/1～3	1㎜砂少、赤色粒 きめ細かい
10	土師器　皿	9	6.6	1.4	1/3	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ、シャープで硬質感、6にやや類似	鈍橙　7.5YR6/4	きめ細かい
11	土師器　皿	9.7	―	2	ほぼ完存	ナデ、底部：押圧・丸底、全体磨滅・歪み、手の字口縁、京都系	灰白　10YR8/2	きめ細かい 赤色粒少

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W1	柄？	9.8	3.2	1.7	－	－	下側欠損
W2	曲物　側板	10.1	4.2	0.2	コナラ属クヌギ節	柾目	両端欠損

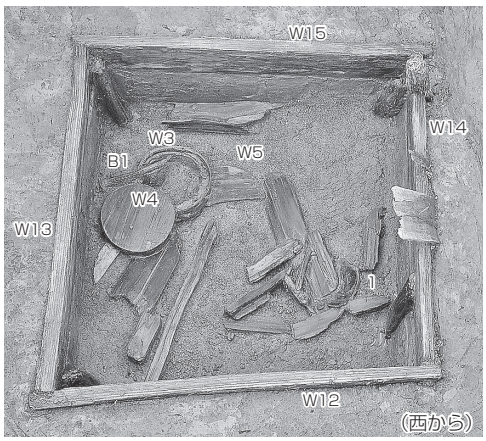
図24　井戸４出土遺物

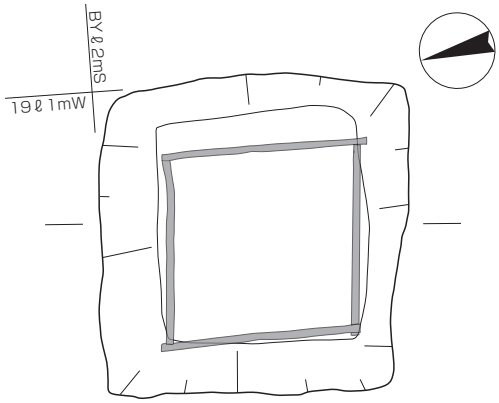
井戸５（図25～27、図版６）

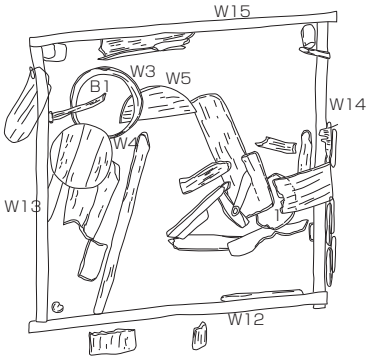
西区北東、BY19区に位置する。検出面の標高は1.4mを測り＜６層＞に対応する。上面で一辺1.2mの方形を呈し、底面では0.95m角の方形をなす。底部に0.8m角の方形枠を設置する方形縦板組の井戸である。底面の標高は－0.05m、検出面からの深さ1.45mを測る。

埋土は21層に分けた。１層は枠材の痕跡と考えられる灰色粘質土である。本井戸の南辺以外では確認されていないため、他辺の枠材は抜き取られたと考えられる。２・３層は青灰色を基調とし、灰色土ブロックを混入する。埋め土と考えられる。６層の炭層を主体とする４～６層では火の使用が窺われる。これらの層は40㎝を超える厚みをもって堆積している。７・８層の灰色粘質土を挟み、下層の９～12層および16～18層は、方形井戸枠内の埋め土である。13～15層は枠外の埋め土にあたる。

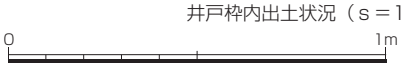
井戸の断面で確認される21層は掘り方の裏込め土にあたる。13～15層、および７・８層もその可能性がある。井戸枠内の20層は砂を含み、使用時の堆積土と考えられ、廃絶に際し19層上面に土器・木製品などを置き、その後12・16～17層が堆積する。少なくとも、９

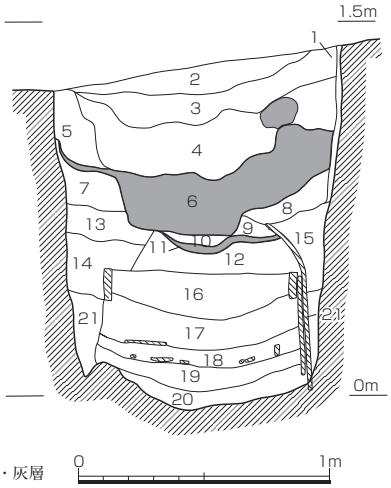


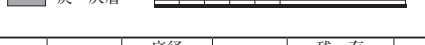




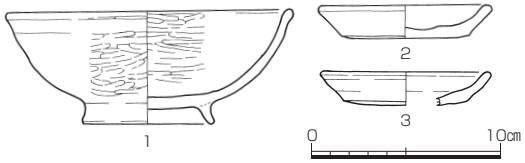
井戸枠内出土状況（s＝1/20）







1．灰色土（枠の痕跡か）
2．青灰色土（暗灰色粘土ブロック）
3．明青灰色土（灰色粘土ブロック）
4．黒色混淡灰色土（炭・灰・焼土）
5．淡褐色土（明灰色砂）
6．淡黒色砂質土（炭・灰・焼土）
7．淡オリーブ灰色土
8．淡オリーブ灰色土（焼土）
9．黒色混淡灰色土（炭・灰・焼土）
10．淡灰色土（焼土）
11．淡黒色砂質土（炭・灰・焼土）
13．灰色粘質土
14．青灰色混灰色粘質土
15．灰色粘質土
16．暗オリーブ灰色粘質土
17．暗灰色粘質土
18．黒灰色粘質土（植物遺体）
19．灰色砂
20．砂混じり紫灰色粘質土（植物遺体）
21．紫灰色粘質土



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	15.2	7	5.8～6.1	口3/4 高台1/1	内外：篦ミガキ密、底外：ナデ・平坦、高台端部は被熱で細かく破損、厚手、器厚は均一で端正な形状、内外煤付着(特に外面に厚くて調整不鮮明)	黄灰　2.5Y6/1	1㎜砂
2	土師器　皿	9.2	6.8	1.8	口－ 底1/4	回転ナデ、底内：押圧、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、厚手	鈍橙　7.5YR7/4	0.5～1㎜砂多
3	土師器　皿	9	6.5	1.8	1/4	回転ナデ、底外：篦キリ	(淡)灰黄　2.5Y7/2	きめ細かい 赤色粒少

図25　井戸５・出土遺物(1)（縮尺1/30・1/4）

～11層および６層の段階に火を使用する行為が窺われる。

井戸枠材としては桟木の４本と側板７枚が原位置で検出された。桟木の上面レベルは標高0.5mを測る。桟木の内側の北東角と北西角には角材を打ち込み固定している。側板は南辺西半に内に４枚、外側に３枚が残っていた。側板の幅は0.13～0.15m、高さは最大0.7mが残る。桟木より上位は、埋土の重みにより内側に傾いて検出された。側板にはいずれもスギを用いている。

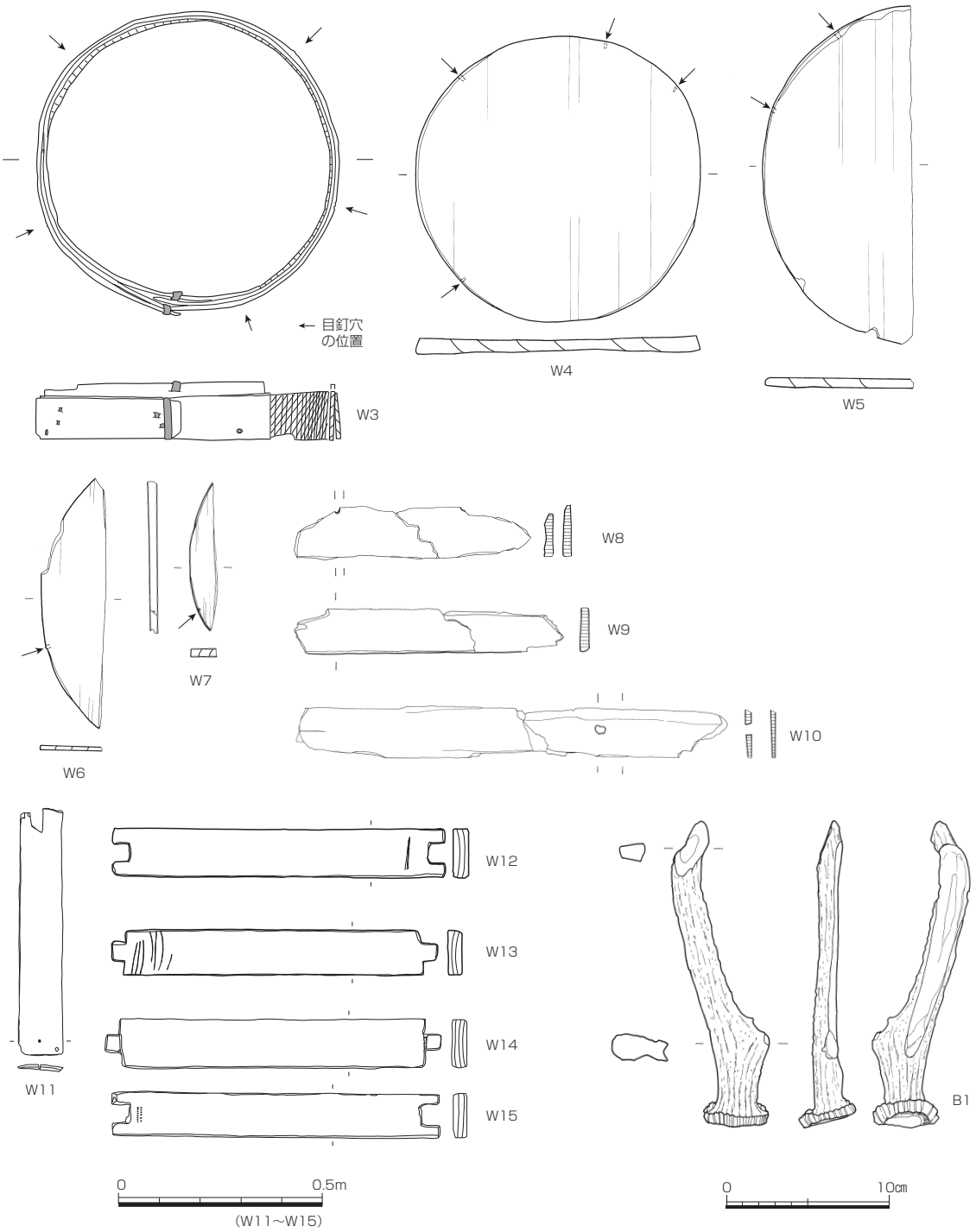


図26　井戸５出土遺物(2)（縮尺1/4・1/6）

図26観察表

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W3	曲物　籠	18.5	18.5	0.6~1.5	－	柾目	側板は2枚、内側を1重に綴じ、最大3枚重なる部分あり、内外の側板をそれぞれ皮綴、皮綴じは3か所、下側に目釘穴5か所、縦・斜め方向のケビキ
W4	曲物　蓋	17.5	17.14	1	－	柾目	目釘穴側縁に4か所、表裏面平滑
W5	曲物　底板	20.7	9.1	0.7	－	柾目	目釘穴側縁に3か所、そのうち釘1か所残存
W6	曲物　底板	15.4	3.8	0.3	－	柾目	目釘側縁に1か所
W7	曲物　底板	9.2	1.6	0.5	－	柾目	目釘側縁に1か所
W8	曲物　側板	3.2	14.4	0.5	スギ	柾目	表裏面平滑、目釘穴2か所
W9	曲物　側板	2.7	16.4	0.6	モミ属	柾目	表裏面平滑
W10	曲物　側板	3.2	26.4	0.4	モミ属	柾目	目釘穴1か所残存
W11	板材	60.7	10.9	1.6	スギ	－	下端中央に目釘穴1か所
W12	井戸枠・桟木(平ほぞ凹形)	83.8	12	3.8	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、東側に位置
W13	井戸枠・桟木(平ほぞ凸形)	80.1	11	3.5	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置
W14	井戸枠・桟木(平ほぞ凸形)	82.5	11.8	3.7	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W15	井戸枠・桟木(平ほぞ凹形)	80.7	10.8	3.2	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	特徴
B1	鹿角	18.7	3.5	3.5	刃物で表面を人為的に剥離・切離（3か所）

出土遺物は19層上面（18層中）から多く検出した。図25－１の土師器椀、図26－W3・W４・W５等から複数の曲物がこの面に置かれたものと考えられる。W３は曲物の蓋であり、その上に鹿角製品（同－Ｂ１）が置かれる。Ｂ１は二ホンジカの角を加工した製品であるが、どのように使用されたものか特定はできていない。W４～W７は曲物底板、W10～12は曲物側板である。このほかにも側板の破片が出土した。この面出土の木材樹種にはスギ・モミ属・スダジイ等複数の種類が見られる。

本井戸の埋土のうち井戸枠内の16～18層及び炭層である６層の土壌を持ち帰り、種子の抽出・選別を実施した（第４章第２節参照）。本遺構からは215個体の種子を抽出し、38科103種を同定した。イネ・オオムギ・コムギ等のイネ科、ナズナ・スカシタゴボウ等のアブラナ科、ヒョウタン・雑草メロン等ウリ科などの食用植物、栽培植物のほか、田畑雑草などが多く確認されている。

本遺構の時期は出土遺物から11世紀後葉～12世紀前葉に比定される。前述の掘立柱建物１が上位に重複している。井戸枠を据えた井戸は後述する井戸６・７とあわせて３基認められた。井戸６は本井戸から北に35m、井戸７は本井戸から東へ30mにある。

井戸６（図27・28、図版７）

調査区北区北端、BR22区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高－0.8mを測る。検出面からの深さ1.8mを測る。本遺構の北側・東側は調査区外となり確認できていない。また本遺構の上部に溝23が東西方向に走行している。

本遺構の上面は隅丸方形の北辺・東辺が失われ、東西1.3m、南北1.4mのいびつな方形を呈している。また本遺構には井戸枠が設置されており、本来は保存状況が良かったものと考えられるが、本調査のための矢板の打ち込みに伴い、井戸枠の東辺を中心に大きく破損している。桟木についてはかろうじて原位置に近いところで記録を行い、側板については南辺・西辺の枠材を取り上げることができた。下面の規模は、残る井戸枠の形状から一辺0.7～0.8mの方形をなすものと考えられる。断面形は底面から標高0.7mまでは筒状をなし、それより上位が開く形状をなしている。

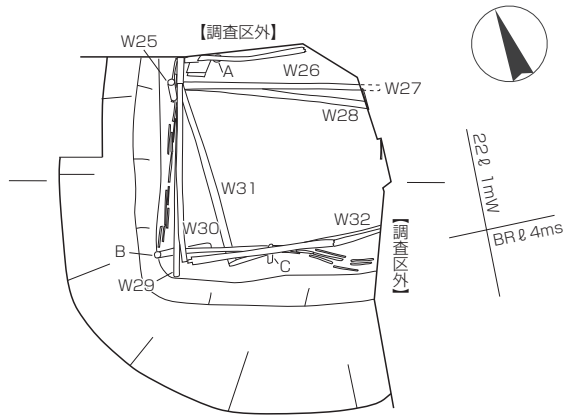
埋土は13層に分けた。１～９層は井戸枠内の堆積土、10・11層は掘り方埋土、12・13層は木材痕跡と考えられる。枠内埋土中、９層は暗青灰色粗砂層で湧水層に達している。６～８層は灰色～暗灰色粘質土、１～５層はブロックを多く含む埋め土と考えられる。

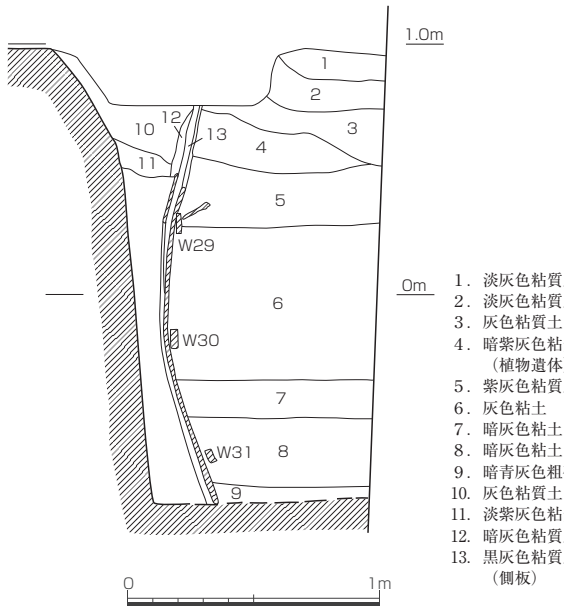
出土遺物はコンテナ（28リットル/箱）１箱である。本遺構は、前述の弥生時代～古墳時代初頭の落ちを切っており、本遺構の調査中に落ちの遺物を多数取り上げた。ここでは明らかに落ち由来の遺物は除外し、報告する。中世前半の土師器椀・杯・皿類はポリ袋（12号）４袋が出土した。図27－１の土師質土器椀、４の皿は５層上面付近に

正位置で、同図２・３の皿は６層中から出土した。

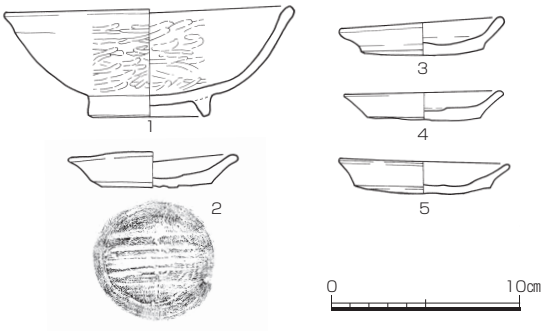
井戸枠の構造は、方形縦板組であり、上・中・下三段の桟木により側板を固定するものである。桟木は８点を掲載した（図28－W26～33）。そのうち７本は位置がわかり、上段の北桟木（W26）は凸木、西桟木（W29）は凹木、中段の北桟木（W27）は凸木、西桟木（W30）は凹木、下段の北桟木（W28）・南桟木（W32）は凹木、西桟木（W31）は凸木である。以上の７本は長さ0.88～0.91ｍと揃うが、W33とした凹桟木は長さ1.11ｍを測り、組み合わない。他の遺構からの転用の可能性が考えられる。側板は幅９～11㎝で長さ1.12～1.5ｍが残る。検出時には中段・下段の桟木は位置がずれており、桟木と側板の固定がされていたかの確認はできなかった。西辺・南辺の側板は２重あるいは３重に設置されており、樹種同定できたものは大半がスギで、モミ属が少量用いられている。枠の南西角には桟木の外側に沿って丸木杭（図27－Ｂ）が打ち込まれている。同様に同－W25は北西角の丸木杭である。シキミを枝打ちし、先端に加工を施す。同様の丸木杭は角だけでなく、北辺西寄りに１本（同図－Ａ）、南辺中央に１本（同図－Ｃ）が認められ、そのほかに位置不明の１本の計５本が出土した。枠を設置する際の位置の目途および側板の固定等の機能が考えられる。

本遺構の時期は、出土遺物から12世紀初頭～前葉に比定される。同じく方形縦板組の井戸枠を有する井戸５は本遺構から南東方向に35ｍの地点に位置する。





1．淡灰色粘質土
2．淡灰色粘質土
3．灰色粘質土
4．暗紫灰色粘質土（植物遺体）
5．紫灰色粘質土
6．灰色粘土
7．暗灰色粘土
8．暗灰色粘土
9．暗青灰色粗砂
10．灰色粘質土
11．淡紫灰色粘質土
12．暗灰色粘質土
13．黒灰色粘質土（側板）



番号	器　種	口径：㎝	底径 高台径：㎝	器高：㎝	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	15.3	6.5	5.5～5.9	完存	内外：篦ミガキ(やや幅広)、底外：ナデ･丸み、高台端部平坦、内面上部被熱(表面劣化)、厚手	(内)灰白～浅黄(外)灰白 2.5Y8/1～2、2.5Y7/3	1～3㎜砂礫
2	土師器　皿	9	6.4	1.7	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、口縁一部に煤、重ね焼きの影響で内外色調が異なる。	(内)鈍黄橙(外)鈍橙 10YR7/4、7.5YR6/4	きめ細かい 赤色粒少
3	土師器　皿	8.8	6.6	1.4～2	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	鈍橙　7.5YR7/3～4	0.5㎜以下砂多 4㎜礫
4	土師器　皿	8.2×8.5	6	1.55	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	浅黄　2.5Y7/3～4	0.5㎜以下砂多 4㎜礫
5	土師器　皿	9.1	7.3	1.6～1.9	1/2	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+板目痕、薄手でやや深い形状	灰白　2.5Y8/2	1㎜砂多､3㎜礫

図27　井戸６・出土遺物(1)（縮尺1/30・1/4）

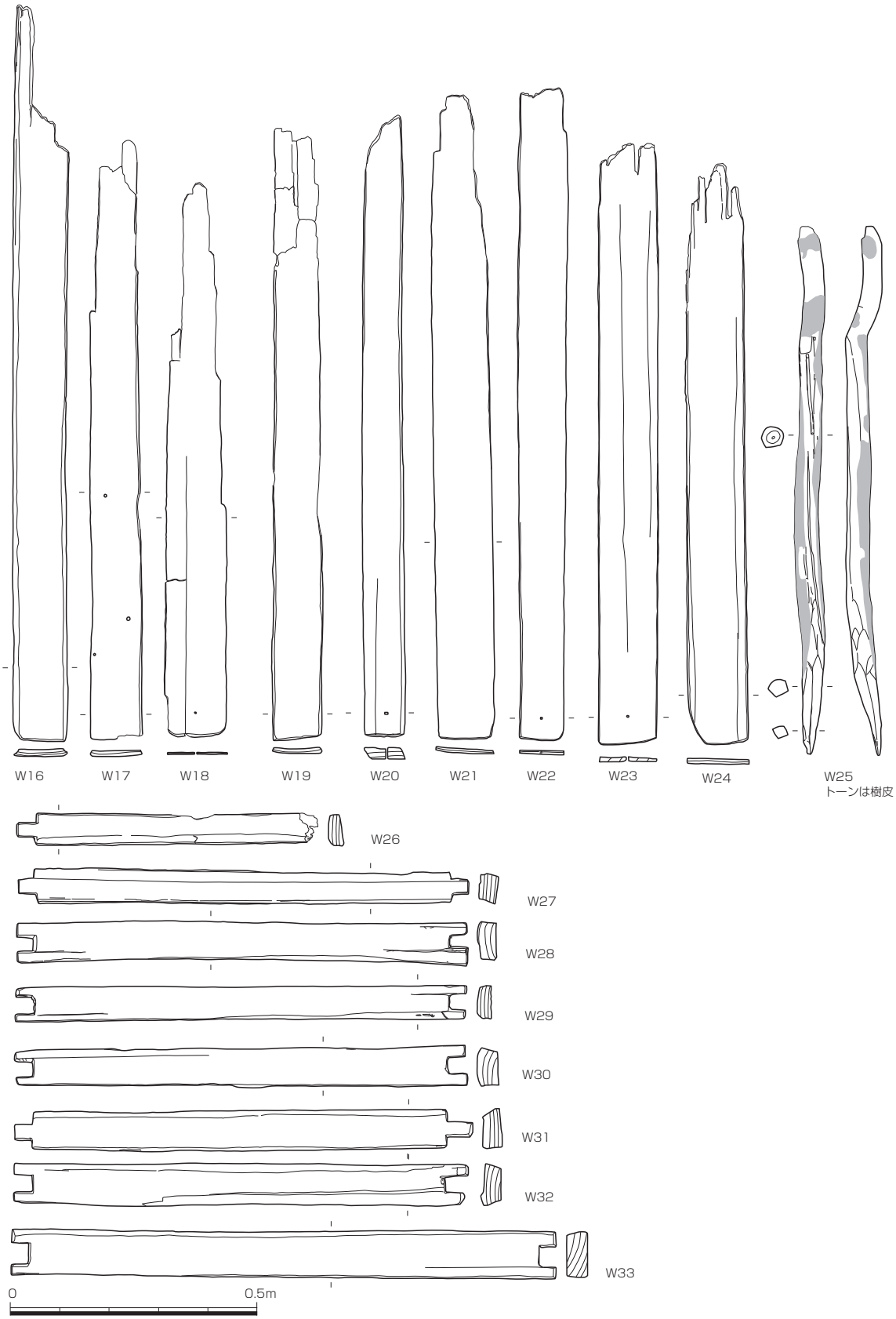


図28　井戸６出土遺物(2)（縮尺1/12）

図28観察表

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W16	板材	149.5	11.2	1.5	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、南側に位置
W17	板材	121.3	10.5	1.2	モミ属	板目	割り割き製材、上端欠損、南側に位置
W18	板材	112.5	12.6	0.5	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、南側に位置
W19	板材	124.2	10	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W20	板材	127.2	8.7	2.3	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W21	板材	130.6	11.6	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W22	板材	132.3	8.9	0.8	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W23	板材	121.8	9.5	1	スギ	板目	割り割き製材、下端に目釘穴1カ所、上端欠損、西側に位置
W24	板材	117.8	12.5	1	スギ	板目	割り割き製材、上端欠損、西側に位置
W25	杭	107	4.5	4	シキミ	－	先端を手斧で加工
W26	井戸枠・桟木（平ほぞ凸形）	56.2	6.2	3.1	スギ	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W27	井戸枠・桟木（平ほぞ凸形）	91.5	7.1	4	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W28	井戸枠・桟木（平ほぞ凹形）	91.5	7.7	3.8	スギ	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、北側に位置
W29	井戸枠・桟木（平ほぞ凹形）	91.8	6.8	2.9	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W30	井戸枠・桟木（平ほぞ凹形）	91.9	7.7	4.1	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W31	井戸枠・桟木（平ほぞ凹凸形）	88	8.1	4	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、西側に位置
W32	井戸枠・桟木（平ほぞ凹形）	92.3	8.4	4	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置
W33	井戸枠・桟木（平ほぞ凹形）	110.4	9.2	4.2	－	板目	両木口に平ほぞ造り出し、一部のこぎり痕、南側に位置

井戸７（図28・29、図版８・９、オルソ図１～５）

東区東部、CA14区に位置する。本遺構の北西角はコンクリート基礎により破壊されており、上面も標高0.65mまで破壊されている。検出面の標高0.65m、底面の標高－0.6m、検出面からの深さ1.15mを測る。掘り方は東西2.4m、南北2.25mの八角形に近い不整な方形を呈する。掘り方内に方形縦板組の井戸枠を設置する。その規模は一辺1.1mで高さ1.1～1.2mが残る。

枠内の埋土は10層、掘り方の埋土を９層に分けた。枠内埋土のうち10層は使用時の堆積層である。６・７層中にあたるレベルである－0.1～0m付近で、0.4×0.6mに木の皮状のものが認められ、その上下に土師質土器椀（図30－１・２）、皿（同図－５）、曲物（図31－W34・35）、被熱礫等の遺物がまとまって出土した。１～５層は暗緑灰色～暗灰褐色を呈する粘質土層で、埋め土と考えられる。掘り方埋土は、１～５層を１群、６～９層を２群と分けた。掘り方はその形状と埋土の特徴を併せ、少なくとも１度の改修が行われていると考えられる。１群の埋土が改修時の埋土であり、平面的には本遺構西半に堆積が認められる。

遺物は比較的少なく、ポリ袋（12号）で４袋が出土した。井戸枠内で土師器椀（図30－１・２）・杯（同－３）・皿・脚台皿（同－５）が出土した。掘り方からは土師器皿１点のほか、土器小片がわずかに数点出土した。

井戸枠の構造をみてみよう。本遺構は標高0.65～0.7mまで後世の破壊が及んでいるが、それ以下に高さ1.2mの井戸枠が比較的良好に残っていた。井戸枠の側面は、一辺に15～37枚の板材を二重・三重に並べて構成されている（巻末オルソ図版１～５、表５参照）。調査時に取り上げ、樹種の同定ができた側板材は87枚、うち76枚がスギ、残り11枚がコウヤマキである。この樹種の状況から本来スギを用いて設置し、補修にコウヤマキを使用したことが窺われる。南側面は四重に側板を重ねており（オルソ図版１）、内側から１列目に８枚（１～８）、２列目７枚（９～17）、３列目10枚（18～27）、４列目に５枚（28～32）を確認した。南側面の側板は幅7.7～20cmの板材を用い、平均幅は10.6cm、長さは0.72～1.36mを測る。東側面は二重の側板で構成され、内側から１列目に５枚（36～40）、２列目に７枚（41～47）、２列目の隙間を埋めるように３列目に３枚（48～50）が確認される。東側面の側板幅は8.6～25cm、平均値は20.7cm、長さは0.7～1.36mを測る。北側面は二重で構成される。１列目は７枚（51～57）、２列目は８枚（59～64）を連ねる。板材幅は9.5～24.5cm、平均幅は19.8cm、長さは0.67～1.19mを測る。西側面は１列目４枚（67～70）と２列目３枚（71～73）は内側にずれ落ちた状況で確認された。３列目の３枚（75～77）は原位置で確認した。西側面の側板幅は7.8～25.8cmと、幅広のものが多く、平均値は19cm、長さは0.7～1.25mを測る。使用された板材のサイズでは南側面が10cm前後の狭い材であるのに対し、他の三面では幅20cm前後の材である点が異なる。コウヤマキの補充が多く見られるのも南側面であり、掘り方での改修の痕跡が南西側で確認されることと対応するものと考える。以上のように並べた側板を内側から二段の桟木で固定している。桟木は

標高０m付近に下段、標高0.4m付近に上段を組み、上下の桟木の間を支える材（以下、支木と称する）を渡している。支木は桟木の両端に組み合わせて嵌め込むものと考えられる。４つの角に上下２本、計８本が設置されるのが本来の姿であろう。上段と下段の桟木の間にはめる支木（83～85）の上端・下端とも、桟木と側板の隙間に差し込むように薄く加工される。下段の桟木と底面との間にはめる支木の下端は先端を尖らせる加工を施したもの（83・85）と平坦なもの（84）の両方が見られる。後述するように、西側面の崩落により他の側面にもその影響が及んでいる。北側面の桟木上段は西側が下がるが４本の支木はほぼ原位置で確認できた。南側面の桟木は上段・下段とも、西側が下がって検出され、支木は東側は現位置で上下２本、西側は上段の１本のみが確認できた。下段の支木は西側面の崩落とともに失われた可能性が高い。また東側面では角とは別個に上段の支木が１本確認された。

桟木の組み合わせ部分はほぞ穴により固定し、支木に嵌め込むにも釘等は用いない工法である。側板の材のいずれにも釘穴は認められない。検出時には、西側面の桟木が上下ともなく、側板が前列４枚・後列４枚とも大きく内側にずれ込んでいた。西側面の南西角、北西角の数枚の側板はそれぞれ原位置を保っていると判断した。西

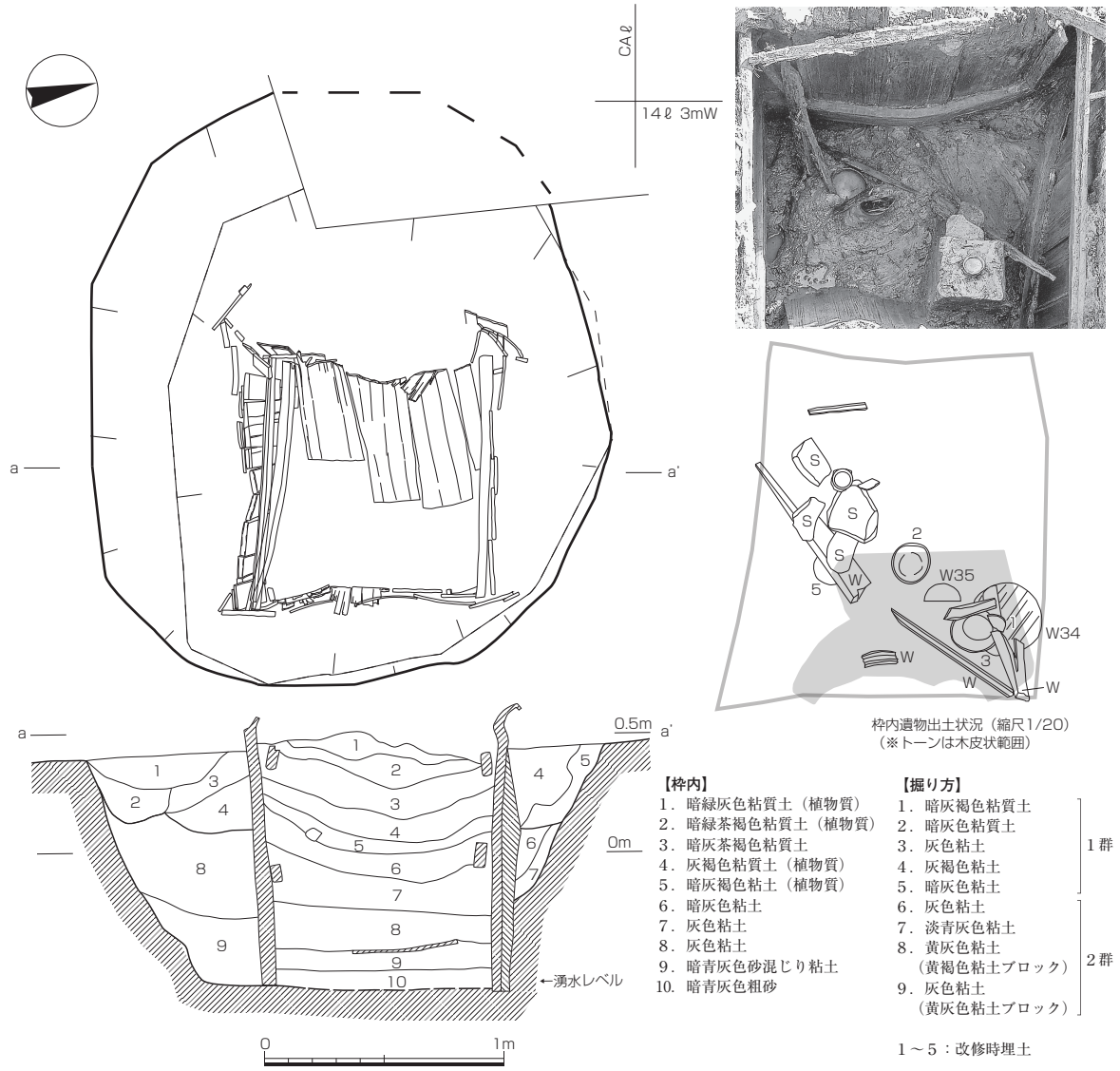
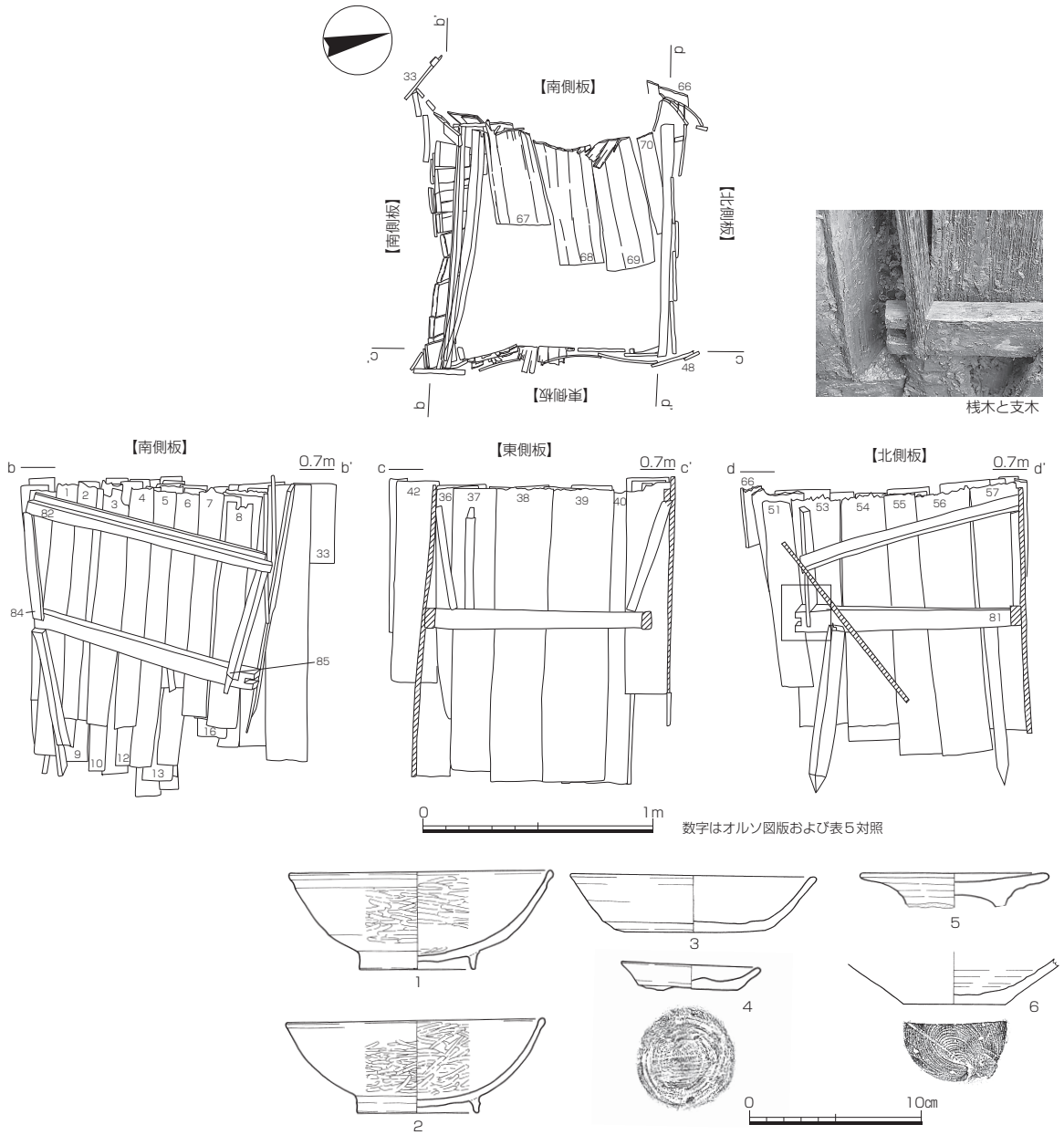


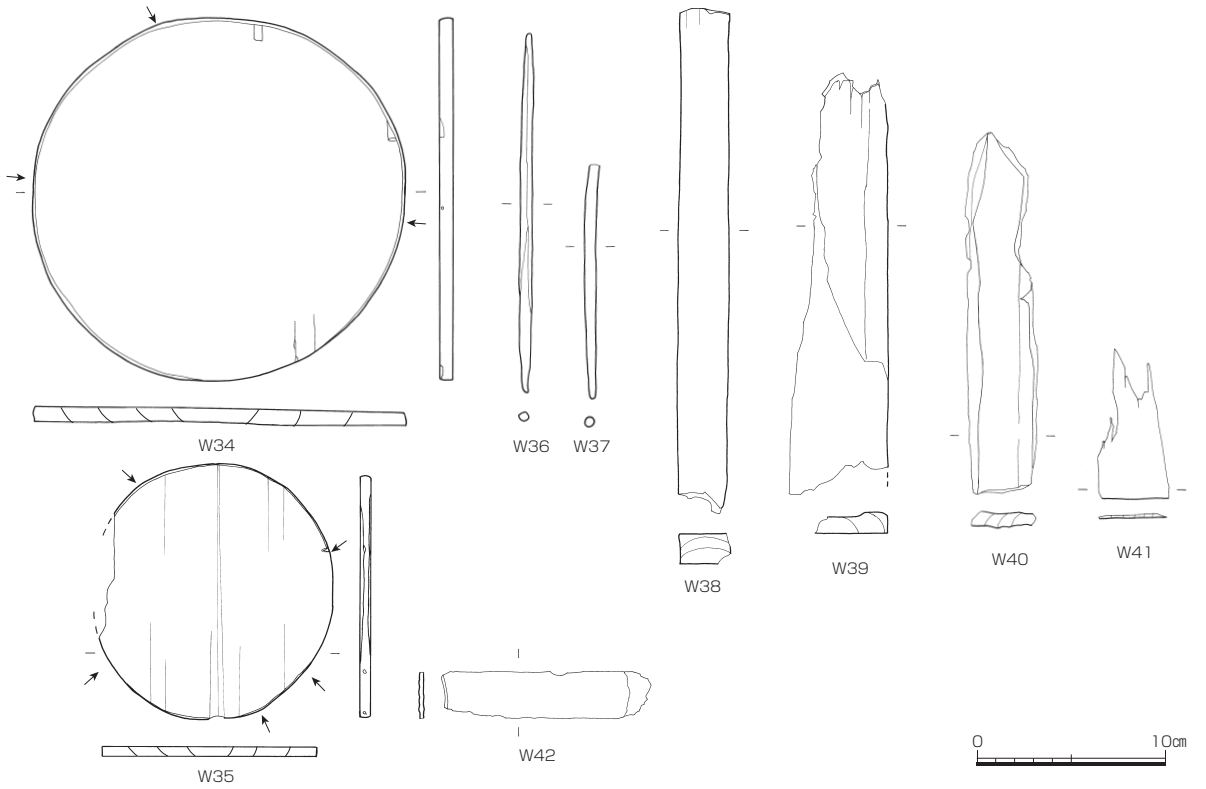
図29　井戸７・遺物出土状況（縮尺1/30・1/20）



桟木と支木

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	15.1×15.4	6.9	5.6～5.8	口3/4 底1/1	内外：ミガキ密(幅広)、内面下半ミガキ消失(使用痕？)、口：強い横ナデ、底外：押圧、高台：貼付けの横ナデ(幅広)、口内：被熱(煤+表面劣化)、外：油煙痕、角ばった体部形態、厚手、器厚不均一、やや雑な仕上がり	灰白～灰黄 2.5Y8/1、2.5Y7/2	1㎜礫
2	土師器　椀	14.6×15.1	7.1	5.3～5.5	完存	内外：ミガキ密、体～底外：押圧、高台：貼り付けの横ナデ(幅広)、底内：重焼痕、外：煤、器厚均一、端正な仕上がり、丸みを帯びる形状、口縁部横ナデは弱い。	灰白，一部鈍黄橙 5Y8/1～2、10YR7/4	1～2㎜砂礫
3	土師器　杯	14.9	9.1	3.2	口1/4、底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕	鈍黄橙　10YR7/3	1㎜砂、赤色粒少
4	土師器　皿	8.1	5.7	1.3～1.7	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)＋板目痕	(灰)白，一部橙 5Y8/1、7.5YR7/6	1㎜砂
5	土師器 脚台付皿	11	－	－	1/4	回転ナデ、脚部破断面部は2次加工か？、断面被熱(橙色化)、全体の1/4は黒斑状(暗灰色N3/　)	灰白　2.5Y8/1～2	1㎜以下砂少 きめ細かい
6	須恵器　椀	－	5.9	－	1/2	回転ナデ、脚部破断面部は2次加工か？、断面被熱(橙色化)、全体の1/5は黒斑状(黒色)	(灰)白(一部)灰 N8/　、N4/	0.5～1㎜砂僅少 きめ細かい

図30　井戸７井戸枠・出土遺物(1)（縮尺1/30・1/4）



番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W34	曲物　底板	14	14.5	0.7	−	板目	目釘穴3カ所残存、表裏面平滑
W35	曲物　底板	13.5	12.5	0.3	−	−	目釘穴5カ所残存、表裏面平滑
W36	箸	19	0.7	0.5	−	−	両端を加工
W37	箸	22.4	0.6	0.5	−	−	先端を加工、上端欠損
W38	くさび	26.7	2.7	1.6	−	−	表裏面平滑、下端欠損
W39	板材	19.2	3.9	0.9	−	−	表裏面平滑、井戸枠片？
W40	板材	8	3.7	0.2	−	−	表裏面平滑、井戸枠片？
W41	板材	22.3	5.2	1.1	スギ	−	表裏面平滑、井戸枠片？
W42	曲物　側板	11	1.4	0.2	−	柾目	表裏面平滑

図31　井戸７出土遺物(2)（縮尺1/4）

側面の西側はコンクリート基礎が構築されており、その際の影響も考えたが、検出時の状況からは、井戸が開口している段階に西側面が崩落したことが想定される。井戸枠の角の外側には、側板とは異なる形状の板が打ち込まれる（オルソ図－33・65・66・79・80）。設置時の目印あるいは何らかの祭祀的な行為を示す可能性がある。

井戸枠内の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を行った（第４章第２節参照）。本遺構では38個体を抽出し、18科25種の植物種子を確認した。雑草メロン（ウリ科）・オオバコ（オオバコ科）のほか、アゼナルコスゲ・コゴメガヤツリ（カヤツリグサ科）等の田畑雑草が含まれる。

本遺構の時期は12世紀前半に比定される。方形縦板組の井戸は井戸５～７の３基が11世紀後半～12世紀前半に確認された。本遺構は井戸５の東30mほどに位置する。

井戸８（図32・33、図版10）

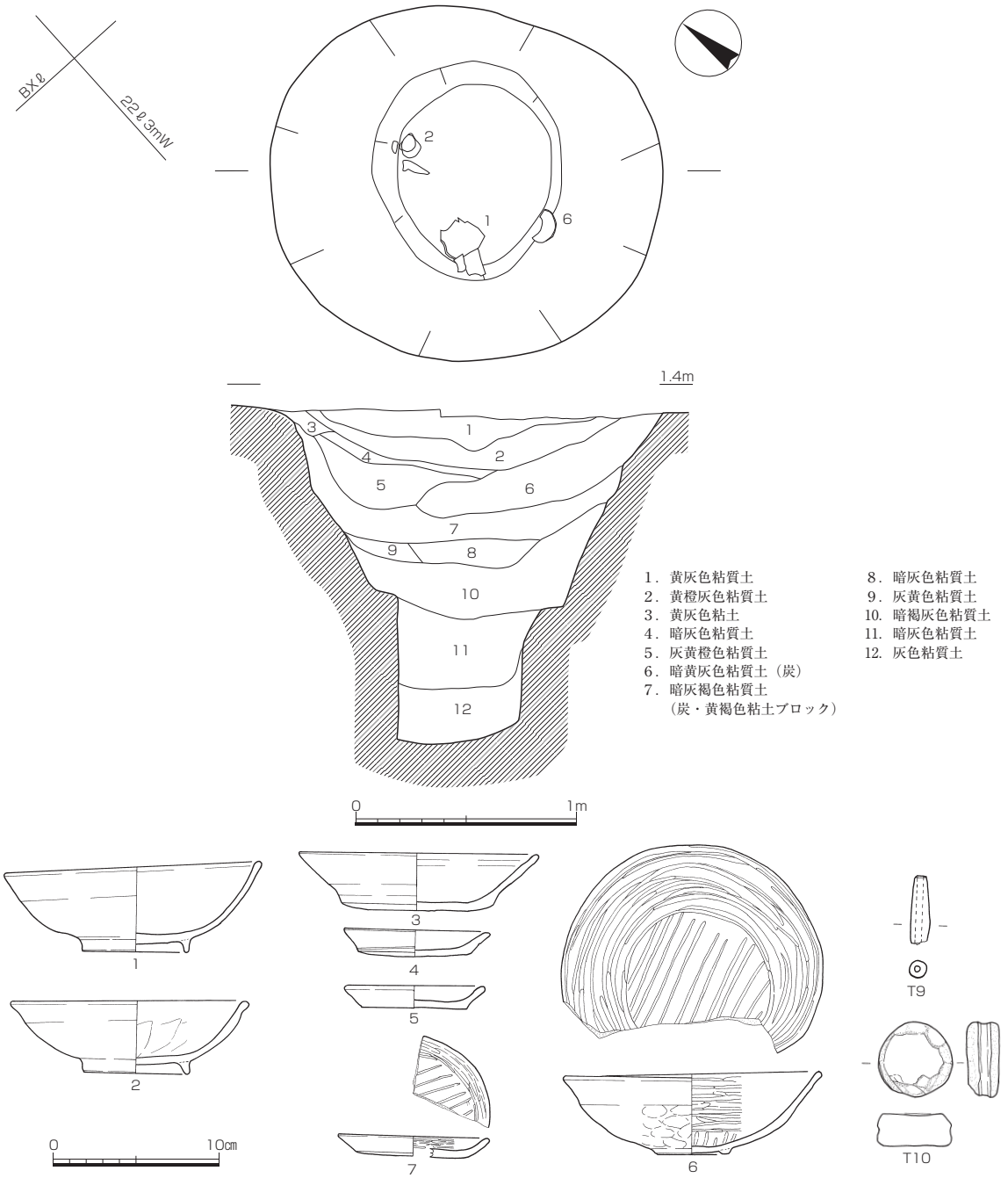
北区南端、BW22区に位置する。検出面の標高1.25m、底面の標高－0.25mを測り、検出面からの深さは1.5mに及ぶ。上面で1.75×1.6mの楕円形、下面では径0.6mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.4m付近まで、筒状に立ち上がり、ここで段を設けて、上位に向かって広がるＹ字状をなしている。

埋土は12層に分層した。下層の10～12層は暗灰色系の粘質土、９層以上には灰色粘土や黄褐色粘土のブロックを混入する粘質土が連続的に堆積する。このうち６・７層には炭化物が多く含まれる。

遺物は中世前半の土器を中心にコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１／２箱が出土した。土師器椀（図32－１）・瓦器椀（同

－６）は最下層12層で出土した。また同図－２の土師器椀は10層下面で出土した。いずれも正位置に置かれたものであろう。

本遺構の時期は12世紀中葉～後葉に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	15.7	6.4	4.6～5.5	口2/3 高台3/4	丁寧なナデ仕上げ、底外：亀裂	灰白　2.5Y8/1～2	1～2㎜砂礫
2	土師器　椀	14.4	6.2×6.6	4.1～4.5	口1/2 高台1/1	丁寧なナデ仕上げ、内：ナデ･工具痕、全体に歪み	灰白～淡黄　2.5Y8/1～4	1㎜砂
3	土師器　杯	14.5	9.1	3.45	口5/6 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+板目痕	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/3、10YR7/2～3	0.5～1㎜砂多 赤色粒

図32　井戸８・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

図32観察表続き

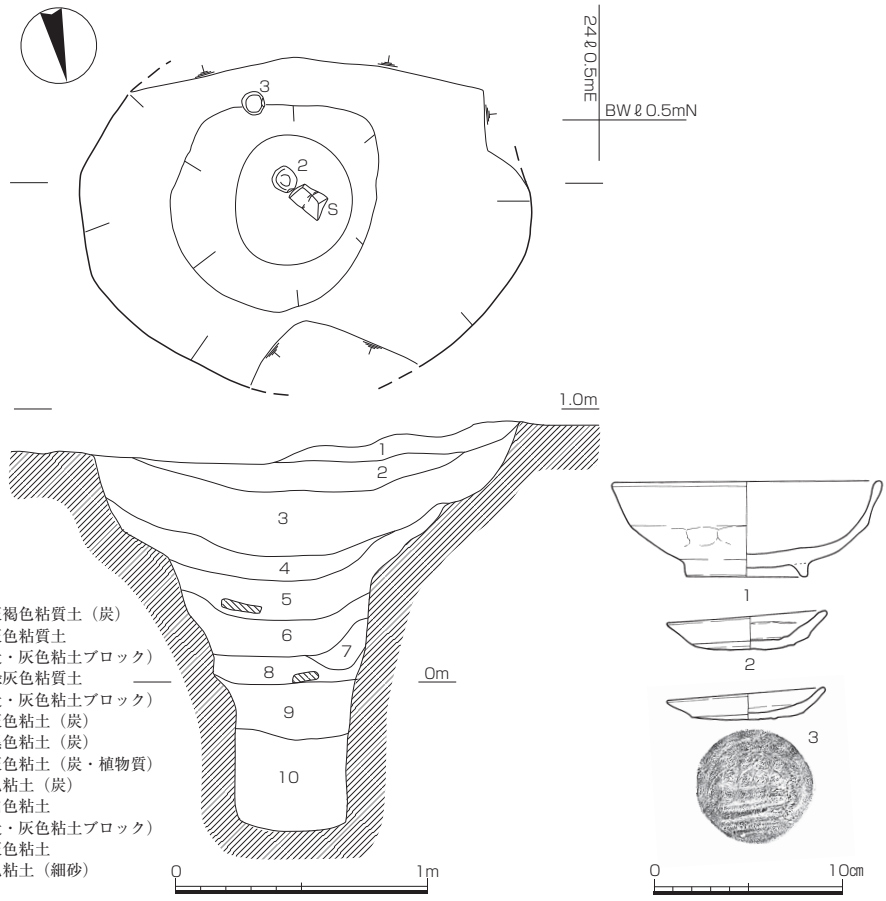
番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
4	土師器　皿	8.8	6.8	1.4～1.6	2/3	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、全体磨滅	鈍橙　7.5YR7/3	0.5㎜砂、赤色粒
5	土師器　皿	8.4	6.3	1.35	口1/2 高台3/4	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左) +板目痕	鈍黄橙　10YR7/2	1㎜砂少、赤色粒
6	瓦器　椀	15.6	4.5	4.4～5.0	口1/2 高台1/1	体部内：篦ミガキ密･底部に暗文(平行)、体部外：押圧、底外：ナデ、高台端部未調整(置き台痕跡)	(内)灰(外)暗灰 4/　、3/	1㎜砂少
7	瓦器　皿	9.2	7	1.2	1/4	内：篦ミガキ密･底面に暗文(平行)、外：ナデ	黒　N5～4/	0.5㎜砂

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T9	土師器　土錘	3.1	1.1	1.1	5.8	一部欠	磨滅、ナデ、穿孔：直径0.4×0.3cm	灰白　10YR8/2	きめ細かい
T10	土師器　土錘	4.5	4.5	2	40.3	ほぼ完存	ナデ、側面に0.5～0.6cmの溝が巡る。	鈍橙　5YR･7.5YR7/4	きめ細かい 赤色粒

井戸９（図33、図版11）

北区南部、BV23区に位置する。南端を井戸17、北端を井戸25に切られる。検出面の標高1.0m、底面の標高－0.6mで、検出面からの深さ1.6mを測る。上面は東西1.8m×南北1.5m程の楕円形を、底面では径0.5mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.4m付近までは筒状に立ち上がり、それより上位は大きく広がるＹ字形をなしている。標高０m付近で壁面に抉りが観察される。使用時の水位を示す。埋土は10層に分けた。４～７層には炭化物・植物遺体が混入する。１～３層は灰色粘土ブロックを多く含む。遺物はポリ袋（12号）で10袋が出土した。中世前半の土師器椀・皿のほか鍋・竈片が含まれる。また礫12点が出土している。角礫１点が底面付近から、その他は３層より上位で出土し、最後に上部を埋めたものである。土師器皿（図33－２）は９層中、同図－３は５層中で出土した。

本遺構の時期は中世前半、12世紀中葉～後葉に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	14.3×14.7	6.55	4.9～5.1	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ・工具痕(底部に放射状)、外：押圧、底外：ナデ・亀裂、器厚不均一	灰白　2.5Y8/1	1～4㎜砂礫多
2	土師器　皿	8.5×8.9	6.1×6.8	1.4～2.1	口2/3 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ＋板目痕、磨滅、器高最低箇所の口縁～底部内外に煤付着(全体の1/5程度)	鈍橙～橙 7.5YR6/4～6	0.5㎜砂多 赤色粒多
3	土師器　皿	8.6	6	1～1.8	口4/5 底1/1	回転ナデ、底内：強いナデ、底外：篦キリ＋板目痕、底内外に補修痕残存、口外：一部に煤、シャープな仕上がり	鈍黄橙　10YR6/3	1㎜砂少 赤色粒少

図33　井戸９・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

井戸10（図34、図版12）

北区南端、BW23区に位置する。検出面の標高1.1m、底面の標高－0.45mを測る。上面は径1.7mの円形、底面は径0.7mの円形を呈する。断面形は底面から標高0.3mまで筒状をなし、それより上位が緩やかに開くＹ字形をなす。

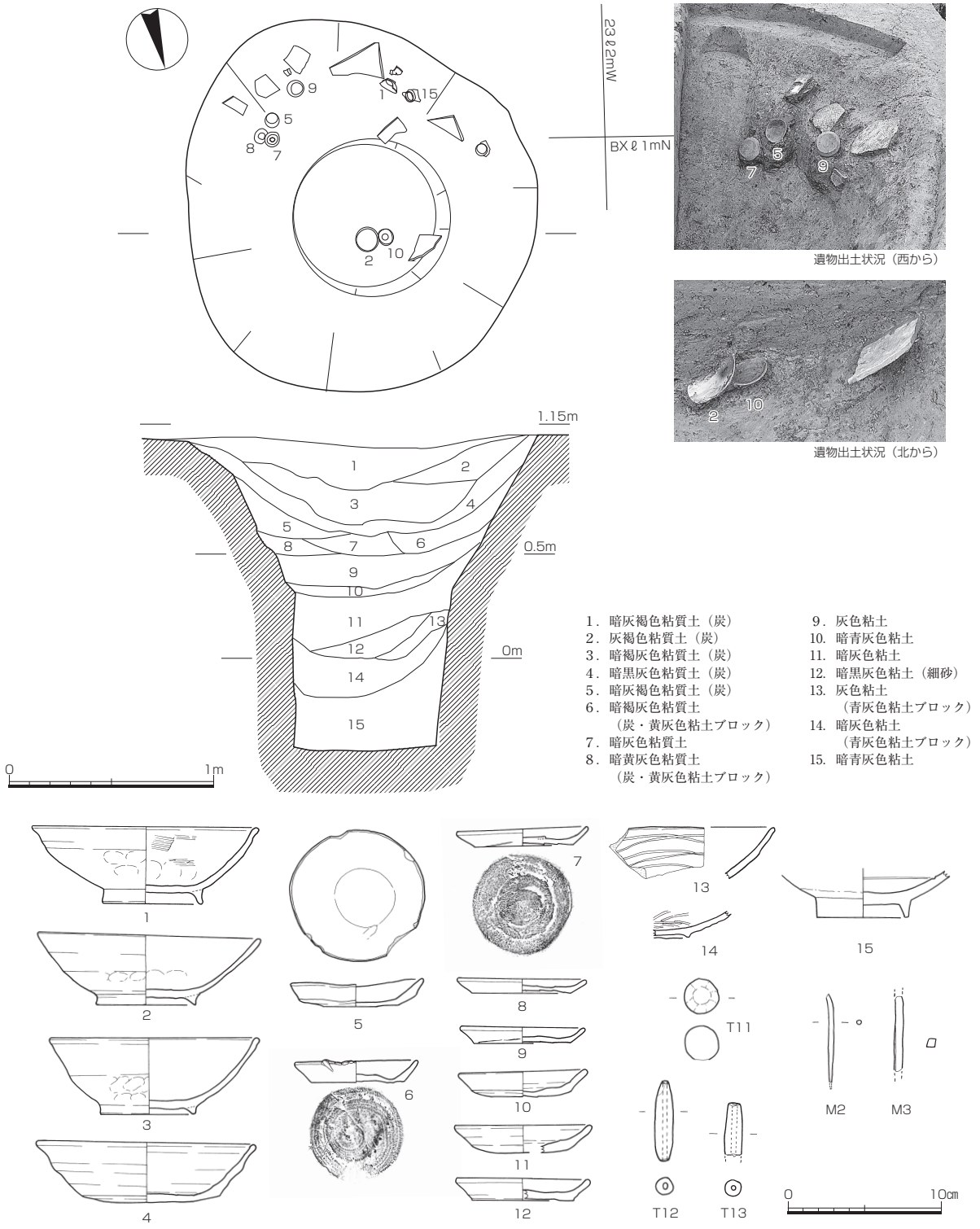


図34　井戸10・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

図34観察表

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	14.3～14.7	6.6	4.6～5	ほぼ完存	口：幅広の横ナデ、体部内：押圧・ナデ(工具痕顕著)、外：押圧	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
2	土師器　椀	14.6	6.4	4.3～4.8	ほぼ完存	口：幅広の横ナデ、体部内外：押圧、底外：ナデ+軽い押圧、高台：断面三角形	(明)灰白　2.5Y8/1	1㎜砂
3	土師器　椀	13.6	6.2～6.5	5	口2/3 高台1/1	口：幅広の横ナデ、体部外：押圧顕著、底外：軽い押圧、高台：断面三角形	(明)灰白　2.5Y8/1	1㎜砂
4	土師器　杯	14.3	9	3.8～4.1	口1/4 底1/2	回転ナデ、底内：仕上げナデ(粘土押圧)、底外：篦キリ後ナデ、9と類似	鈍黄橙　10YR7/2	きめ細かい
5	土師器　皿	8.5	7.6	1.3～1.8	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ(円弧状)・一部に窪み・煤付着少、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、口縁に対角線上に小窪み3か所残存(幅0.4～1cm)	鈍黄橙　10YR6/3	0.3㎜以下砂多 赤色粒
6	土師器　皿	8.1	6.1	1.3～1.5	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ・一部に窪み、窪み付近の口縁に油煙？の広がり＋刻み目数か所、底外：篦キリ(粗いハケメ状痕・ロクロ回転左)、薄手	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/3、10YR7/3	1㎜砂
7	土師器　皿	8.6	6.5	1 ～1.3	完存	回転ナデ、底内：中央に粘土の押しつけ(仕上げナデ状)、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕(細かいハケメ状)、薄手で低平な器形、8・9と類似	灰黄褐　10YR6/2	きめ細かい 赤色粒
8	土師器　皿	8.4	6.4	0.95	完存	回転ナデ、底内：中央に仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、薄手で低平な器形、7・9と類似	褐灰　10YR6/1	きめ細かい 赤色粒
9	土師器　皿	8.25	6.5	1.05	完存	回転ナデ、底内：中央に焼成時の亀裂、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、口縁部周辺に油煙痕跡顕著、薄手で低平な器形、4・7・8と類似	鈍黄橙～褐灰 10YR7/3、10YR6/1	きめ細かい 赤色粒少
10	土師器　皿	8.4	6.5	1.4～1.8	ほぼ完存	回転ナデ、底外：篦キリ+ナデ・丸み、小粘土塊(幅約1㎝)が口縁部付近に付着、磨滅顕著、11と類似	灰白　10YR7/1～2	きめ細かい 赤色粒多
11	土師器　皿	9	6.3	1.8	1/3	回転ナデ、底外：篦キリ痕・丸み、磨滅顕著、10と類似	鈍橙　7.5YR7/3	きめ細かい 赤色粒多
12	土師器　皿	8.8	6.6	1.45	1/2	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、在地的形状	明褐灰～鈍黄橙 7.5YR7/2、10YR7/2	砂礫僅少
13	瓦器　椀	－	－	－	－	内：ナデ・ミガキ疎、外：押圧、口：横ナデ	暗灰～黒(胎土)灰白 3～2/　、8/	きめ細かい
14	瓦器　椀	－	－	－	－	内：ナデ・ミガキ疎、外：押圧、高台：横ナデ	暗灰～黒(胎土)灰白 3～2/　、10YR8/1	きめ細かい
15	白磁　碗	－	6	－	高台1/1	回転ナデ、削り出し高台、全体に施釉	灰白　5Y7/2	1㎜砂、緻密

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T11	土玉	2.2	2.2	2.2	11.2	一部欠	ナデ、面を残す	鈍黄橙　10YR7/2	きめ細かい
T12	土錘	6.2	1.1	1.1	7.5	完存	磨滅顕著、被熱変色	鈍橙　2.5YR6/4	きめ細かい
T13	土錘	(3.4)	0.8～1.2	0.9～1	5	下半欠損	ナデ	鈍橙　5YR7/3	きめ細かい

番号	器種	長：cm(残存値)	幅：cm(残存値)	厚さ：cm	重量：g	残存	特徴
M2	鉄釘	(5.9)	0.3	0.3	2.6	一部	断面：矩形、両端欠損
M3	鉄釘	(4.9)	0.5	0.5	3.5	一部	断面：矩形、両端欠損

埋土は15層に分けた。９～15層は灰色粘土を主体とし、ブロックを多く混入する埋め戻し土、５～８層も灰褐色土を主体とし炭化物・ブロックを混入する埋め戻し土と考えられる。４層は炭を主体とする。４層下面にあたるレベルで土師器椀・皿等の遺物がまとまって出土した。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１箱が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋のほか、瓦器椀、白磁碗、須恵質鍋片を含む。前述したように、完形の土師器椀・皿が４層（炭層）下面付近で認められ、標高0.9m近くまで埋めた段階で火を使用する祭祀に伴い土器類が置かれたものと考えられる。

本遺構の土壌を持ち帰り種子の抽出・同定を行った（第４章第２節参照）。54個体を抽出し、22科36種の植物種子を同定した。アワ・イネ・コムギ（いずれもイネ科）・ササゲ（マメ科）等の栽培植物のほか、ホタルイ（カヤツリグサ科）、スイバ（タデ科）等の田畑雑草が確認される。

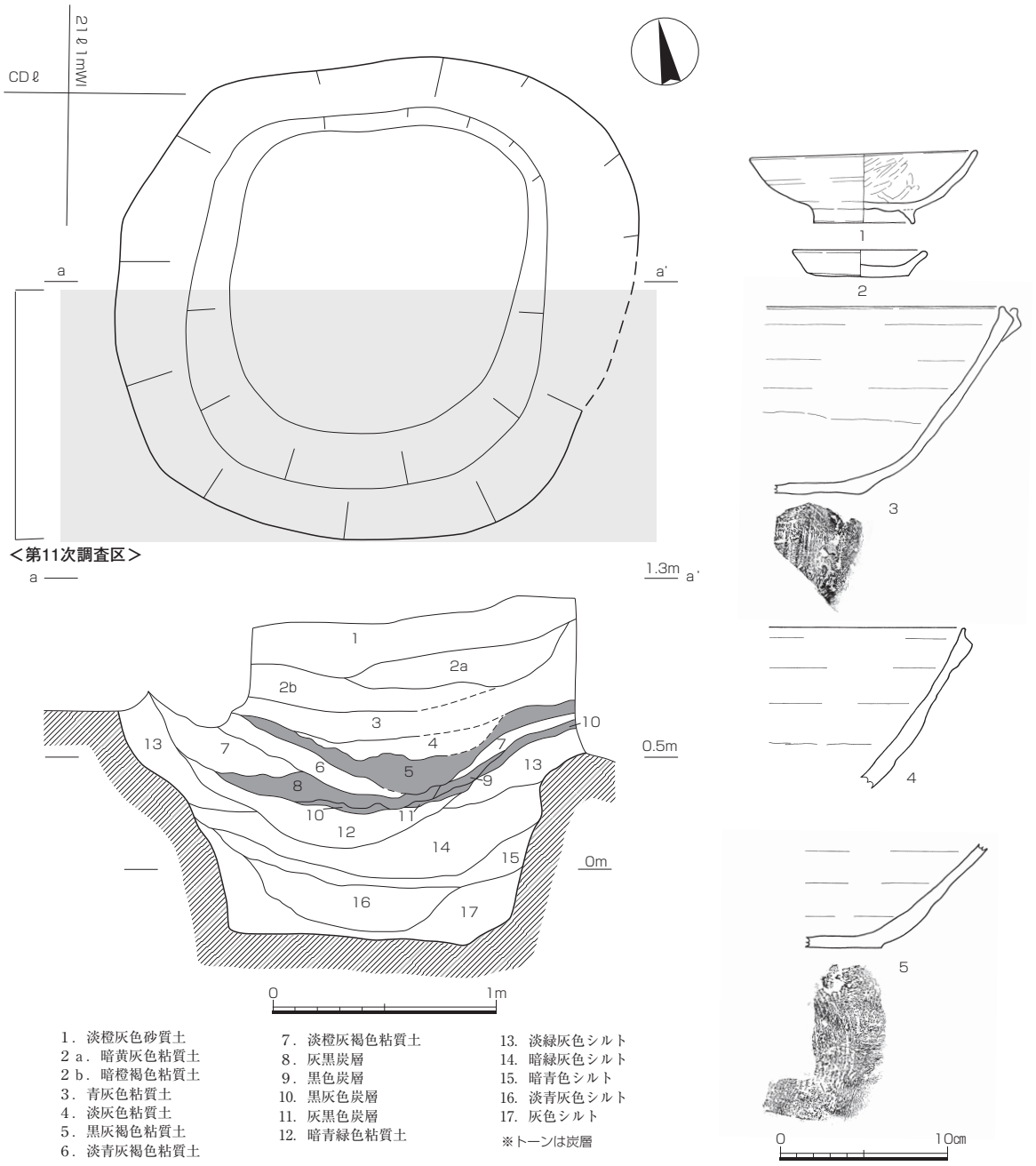
本遺構の時期は13世紀初頭～前葉と比定される。

井戸11（図35、図版13）

西区南端、CD20・21区に位置する。本遺構の南半は調査区外にあり、南に隣接する第11次調査地点で井戸４として既に報告している。検出面の標高1.2m、底面の標高－0.3mを測る。本遺構は上面で径2.1～2.2mの隅丸方形、底面では径1.3mの隅丸方形を呈しており、本調査区内では北側の半分を確認した。断面形は底面から標高0.3mまで筒状をなし、それより上位がＹ字状に広がる。標高0.25m付近の断面形状に抉れが認められる。使用時の水位が示される。埋土は17層に分けた。埋土の詳細については既往報告を参照されたい。標高0.3～0.7m付近に堆積する５・８・９層は炭層であり、遺物も炭層付近に多く確認された。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１／３箱である。土師器椀・皿・鍋、竈片、須恵質こね鉢が認められる。

本遺構の時期は13世紀前半に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器 椀	13.6	6×6.4	3.9～4.4	完存	内：ミガキ状ナデ、外：軽い押圧、口縁内面に植物種子の圧痕	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
2	土師器 Ⅲ	8	6	1.6	完存	回転ナデ、底外：篦キリ後ナデ、全体磨滅	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/4、10YR7/4	きめ細かい
3	須恵器　こね鉢	－	－	11.25	口1/5弱 底－	回転ナデ、内：下半に使用痕(摩耗)、底外：板目痕？・糸キリ痕未確認、口縁外面に黒色帯(重焼痕)、片口部、口径値は30㎝程度か？	灰白　N7/	1～3㎜砂礫 砂粒多
4	須恵器　こね鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：下半に使用痕顕著、口縁端部引き上げ、口縁外面に黒色帯(灰N4/ 、重焼痕)	灰白　2.5Y7/1	1～3㎜砂礫 砂粒多
5	須恵器　こね鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：使用痕(摩耗)、底外：粗い糸キリ	灰　N6/	1～2㎜砂礫多 15㎜礫含む

図35　井戸11・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

井戸12（図36・37、図版14）

東区南端、CD18区に位置する。検出面の標高1.35m、底面の標高－0.2mを測る。本遺構の南半は調査区外にあ

たり、確認されていない。上面は径1.7ｍの隅丸方形、下面は径0.9ｍ前後の円形を呈するものと考えられ、本調査ではその北半部分を確認した。断面形は底面から標高0.6ｍ付近まで筒状に立ち上がり、そこから上位は緩やかに開く。底面は湧水砂層に達しており、標高－0.1ｍ付近は水の影響を受け抉れている。

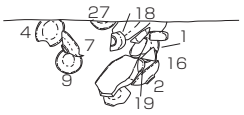
埋土は23層に分けた。１群（１・２層）、２群（３～14層）、３群（15～20層）、４群（21～23層）の４群にまとめられる。いずれも埋め戻し土であり、３群にはブロックを多く混入する。２群は炭・焼土・灰が互層となって堆積する１群である。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１箱が出土した。多数の土師器椀が完形で出土した。土師器皿は椀に比べ少なく、その他に少数の竈・鍋の小片、須恵器甕、丸瓦が見られた。また２～３㎝大の焼土塊36点が出土しており、例えば建物の土壁の破片とも考えられる。遺物は底面付近で出土したものを「最下層」、３群の下面にあたる21層上面付近で出土したものを「下層」として図36に示した。このほかに標高１ｍ前後の炭層にともなって出土したものを「上層」遺物とした（最下層：図36－１、２、４、７、９、16、18、27、29、30　下層：５、６、10、12、13、19、21、23、24、26、28　上層：８、15、17、20）。最下層・下層の土器群にも同図２・６・９・10・16・19・27・28には煤の付着や被熱が顕著に認められる。

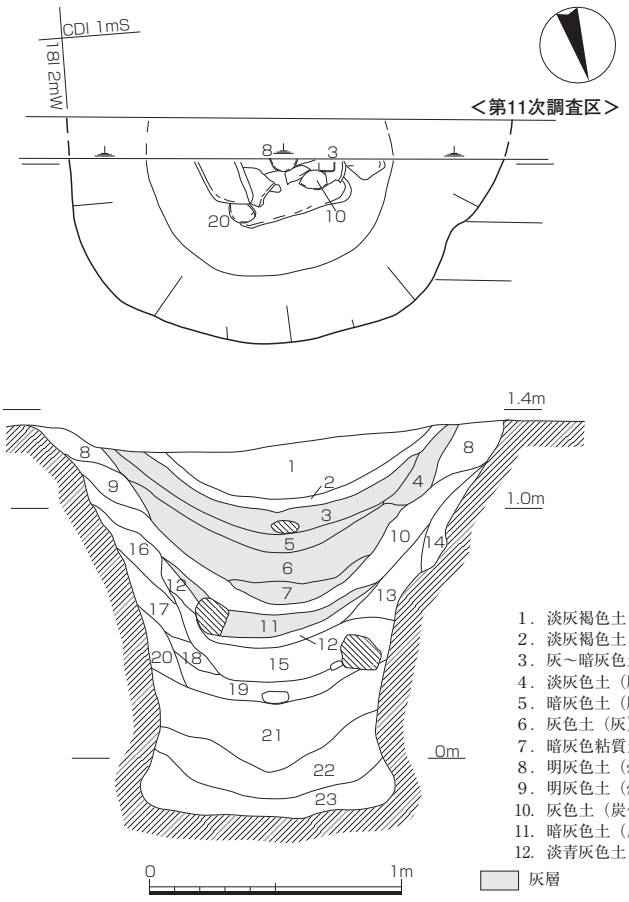
本遺構の時期は13世紀後半に比定される。

下層遺物出土状況（南から）

最下層遺物出土状況（南西から）



最下層遺物出土状況



1．淡灰褐色土（焼土）
2．淡灰褐色土（炭化物）
3．灰～暗灰色土（灰・焼土塊）
4．淡灰色土（灰）
5．暗灰色土（灰）
6．灰色土（灰）
7．暗灰色粘質土（炭化物）
8．明灰色土（焼土塊）
9．明灰色土（焼土）
10．灰色土（炭化物・焼土）
11．暗灰色土（炭化物）
12．淡青灰色土
13．灰褐色土（炭化物・焼土）
14．淡褐色土（炭化物・焼土）
15．灰色粘質土
16．淡灰褐色土
17．褐色混灰色粘質土
18．青灰色粘質土（暗灰色粘土ブロック）
19．紫灰色粘質土（植物遺体）
20．淡紫灰色粘質土（青灰色粘土ブロック）
21．暗灰色粘質土（植物遺体）
22．暗紫灰色粘質土（植物遺体）
23．紫灰色粘質土（植物遺体）

灰層

図36　井戸12（縮尺1/30）

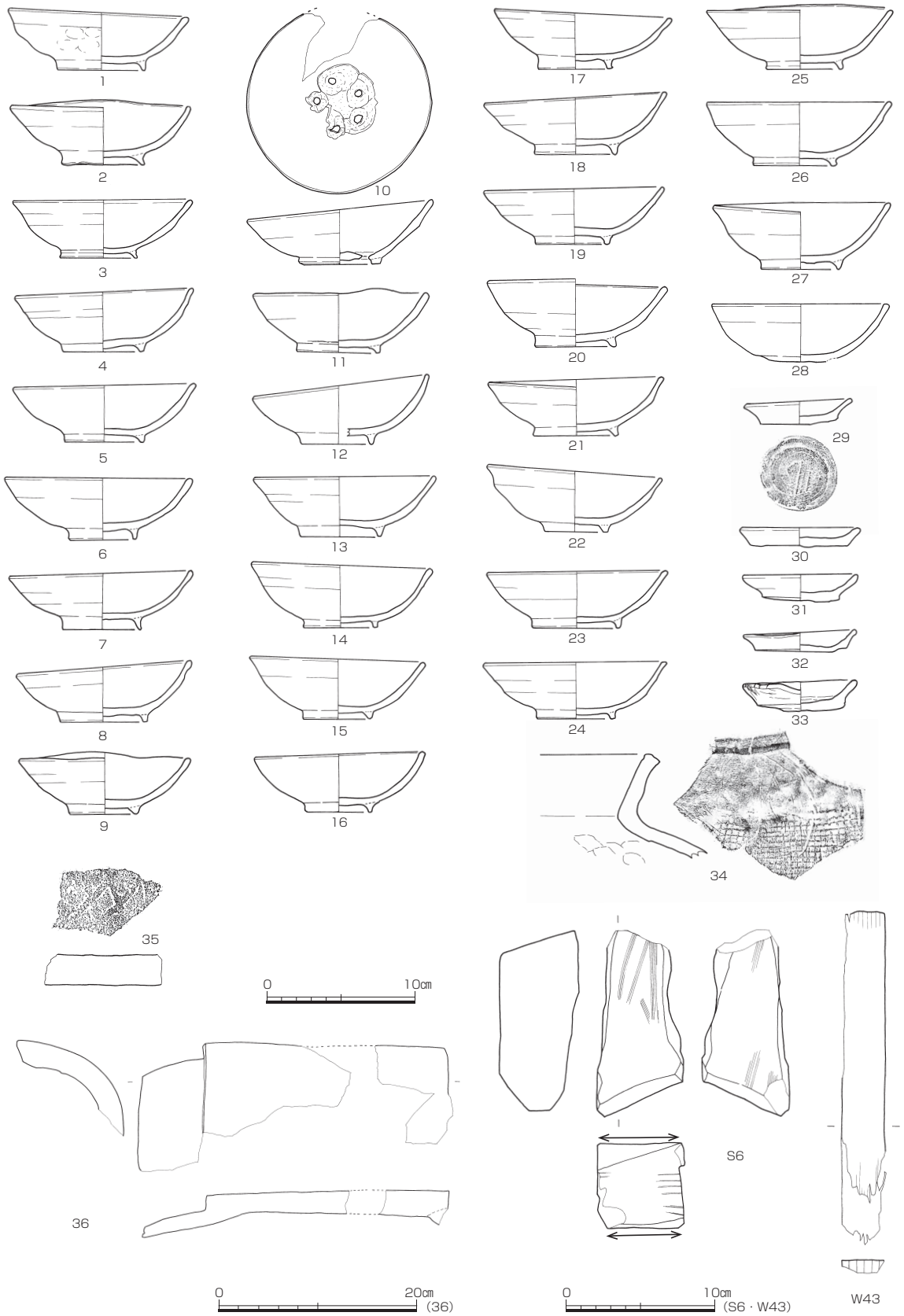


図37　井戸12出土遺物（縮尺1/4・1/6）

図37観察表

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	12.3	6	3.6～4.2	完存	内：丁寧なナデ、外：軽い押圧・ナデ、底外：ナデ、厚手	灰白～浅黄橙 10YR8/1～3	1㎜以下砂
2	土師器　椀	12.2	5.4×5.7	3.9～4.4	完存	ナデ・押圧、煤・剥離(破裂痕)、高台：歪み、重焼痕	灰白～浅黄橙 10YR8/2～3	1～3㎜砂礫多
3	土師器　椀	12.2	5.25	3.8～4.3	完存	ナデ、磨滅、口縁に補修痕1カ所、外：煤	(内)灰白(外)灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	2㎜以下砂礫
4	土師器　椀	12.05	5.45	3.8～4.3	完存	ナデ・押圧、外：細かな亀裂多、底外：板目痕、高台：畳付部に篦が深く鋭く入り凹凸を形成	浅黄橙～灰白 7.5YR8/2、10YR8/1～2	1㎜以下砂
5	土師器　椀	12.3	5.45	3.7～4.1	完存	ナデ・押圧、外：表面磨滅・劣化・剥離	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
6	土師器　椀	12.7	4.6	4～4.3	口5/6 高台1/1	ナデ・押圧、外：被熱(表面剥離・磨滅)、煤付着：口縁端部から外面に帯状に垂れ下がる・内面はタール状をなす。外面は煤で暗色化	灰白　10YR8/1～2	1～3㎜砂礫多
7	土師器　椀	12.3×12.6	5.3	3.6～4	口5/6 高台1/1	ナデ・押圧、底外：板目痕、重焼痕、口径値は12.5cmが中心	灰白　2.5Y8/2	1～4㎜砂礫
8	土師器　椀	11.95	5.6×6	3.3～4.2	完存	ナデ・押圧、重焼痕、口縁部歪み	浅黄橙　10YR8/3～4	1～6㎜の粘土粒多
9	土師器　椀	11.3×11.9	4.7	3.6～4.2	完存	ナデ・押圧、底外に煤(墨書の可能性残す)、重焼痕、口径値は11.5～11.6cmが中心、全体に歪み大	灰白　2.5Y8/1～2	1～2㎜砂礫
10	土師器　椀	12×12.5	5.4	3.1～4.4	口7/8 高台1/1	ナデ・押圧、被熱痕顕著(内～口縁外面に煤、外表面は劣化・磨滅・赤変)、高台畳付部に植物圧痕、底部には焼成後外面からの穿孔5箇所(直径約5㎜)	灰白　2.5Y8/1	1～4㎜砂礫
11	土師器　椀	11.6×12.1	5.6	3.8～4.5	口1/1 高台3/4	ナデ、磨滅、口縁の補修箇所の器高値が4.5cm(器高値中心は約4cm)	灰白　10YR8/1～2	2～5㎜礫多
12	土師器　椀	12.05	4.9	3.2～4.7	口1/1 高台1/2	ナデ、歪み大	灰白　2.5Y8/1～2	1～5㎜砂礫多
13	土師器　椀	12.3	5.5	4～4.2	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、内外：磨滅・剥離	灰白～淡黄　2.5Y8/1～3	1～3㎜砂礫
14	土師器　椀	12.1×12.4	4.95	4～4.5	口3/4 高台1/1	磨滅顕著	灰黄　2.5Y7/2	1㎜以下砂 赤色砂
15	土師器　椀	11.9	4.65	3.8～4.3	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、高台歪み、重焼痕	灰白　5Y8/1	1～4㎜砂礫
16	土師器　椀	11.5	4.6	3.7～4.1	口3/4 高台1/1	ナデ、重焼痕、埋没土(植物炭化層)の影響で炭が斑点状に付着	浅黄橙～灰白 10YR8/3、2.5Y8/2	2～5㎜礫
17	土師器　椀	12×12.6	5	3.4～4.1	口2/3 高台5/6	ナデ・押圧、重焼痕	灰白～淡黄、一部鈍橙 2.5Y8/2～3、5YR7/3	2～3㎜礫
18	土師器　椀	12.4	5.5	3.5～4.2	口1/2 高台1/1	ナデ・押圧、重焼痕	(内)浅黄橙～灰白(外)灰白 10YR8/3～2、2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
19	土師器　椀	12.1	5.1	3.7～3.9	口1/2強 高台1/1	ナデ・押圧、口縁外面～内面に煤付着(暗色化)、磨滅	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫 1㎜以下多
20	土師器　椀	12.2	5.5	4～4.6	口1/2 高台1/1	ナデ・押圧、重焼痕	灰白～淡黄　2.5Y8/2～3	1㎜以下砂
21	土師器　椀	11.8	5.65	3.3～(4)	口1/2 高台1/1	ナデ・押圧、器高値は+αを予想	(淡)灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
22	土師器　椀	11.65	4.35	3.7～4.5	口1/2 高台1/1	ナデ・押圧、重焼痕、内：被熱・煤	灰白　2.5Y8/1	0.5㎜以下砂
23	土師器　椀	12.2	5.95	3.7～4	口1/2 高台3/4	ナデ・押圧	灰白　2.5Y8/1、N8/	1～2㎜砂礫
24	土師器　椀	12.4	5.4	4.85	口1/2 高台3/4	ナデ・押圧	灰白　2.5Y8/1	2～5㎜礫多
25	土師器　椀	12.6	5.2	4～4.4	1/2	ナデ・押圧、磨滅、内外：被熱で煤付着(暗色化)	灰白～鈍黄橙 10YR7/1～2	1㎜以下砂
26	土師器　椀	12.4	5.6	(3.8)～4.3	1/2	ナデ・押圧、重焼痕	灰白　2.5Y8/1	2～5㎜礫
27	土師器　椀	11.9×12.2	5.4	3.9～4.6	1/2	ナデ、外：押圧・磨滅、埋土(炭化層)の影響で炭斑点状付着	灰白，2.5Y8/1	0.5㎜砂多
28	土師器　椀	11.95	－	－	口2/3	ナデ・押圧、底外：亀裂、内：重焼痕・煤、外：被熱(表面剥離・煤・一部赤変や暗色化)、高台剥離	灰白　2.5Y8/1	1～5㎜砂礫
29	土師器　Ⅲ	7.3	5.2	1.4～1.8	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕	鈍黄橙　10YR7/3～4	1㎜以下砂
30	土師器　Ⅲ	8.05	6.6	1.25	完存	磨滅、底外：板目痕	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/3～4、10YR7/3	0.5㎜以下砂 赤色粒多
31	土師器　Ⅲ	7.8	5.2	1.7～1.9	完存	回転ナデ、底内：中央押圧、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、磨滅	鈍黄橙　10YR7/3	3㎜以下砂礫 赤色粒多
32	土師器　Ⅲ	7.2×7.6	6.1×6.5	1.1～1.5	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ(円弧)、底外：篦キリ+板目痕、底部楕円形、磨滅	灰白～淡黄　2.5Y8/2～3	1～2㎜砂礫多
33	土師器　Ⅲ	7.7	5.9	1.8～2.1	1/2	回転ナデ、底内：中央押圧、底外：板目痕・粗い仕上げ、磨滅、口縁：一部受け口状+複数の刻み目、歪み大	鈍黄橙　10YR7/2～3	3㎜以下砂礫 赤色粒多
34	須恵器　甕	－	－		－	回転ナデ、体部外：格子目タタキ、体部内：押圧	灰　N5～4/	1～2㎜砂礫

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	特　徴	色　調	胎　土
35	須恵器　平瓦	(9)	(5)	2	上面：布目痕・煤・表面劣化、下面：格子タタキ・表面劣化	灰　5Y6/1	1～2㎜砂礫多
36	須恵質　軒丸瓦	21.5	9.5	3.2	凹面：縄目痕・ナデ、凸面：ナデ、被熱、厚手	灰白10YR8/2	2㎜以下砂礫

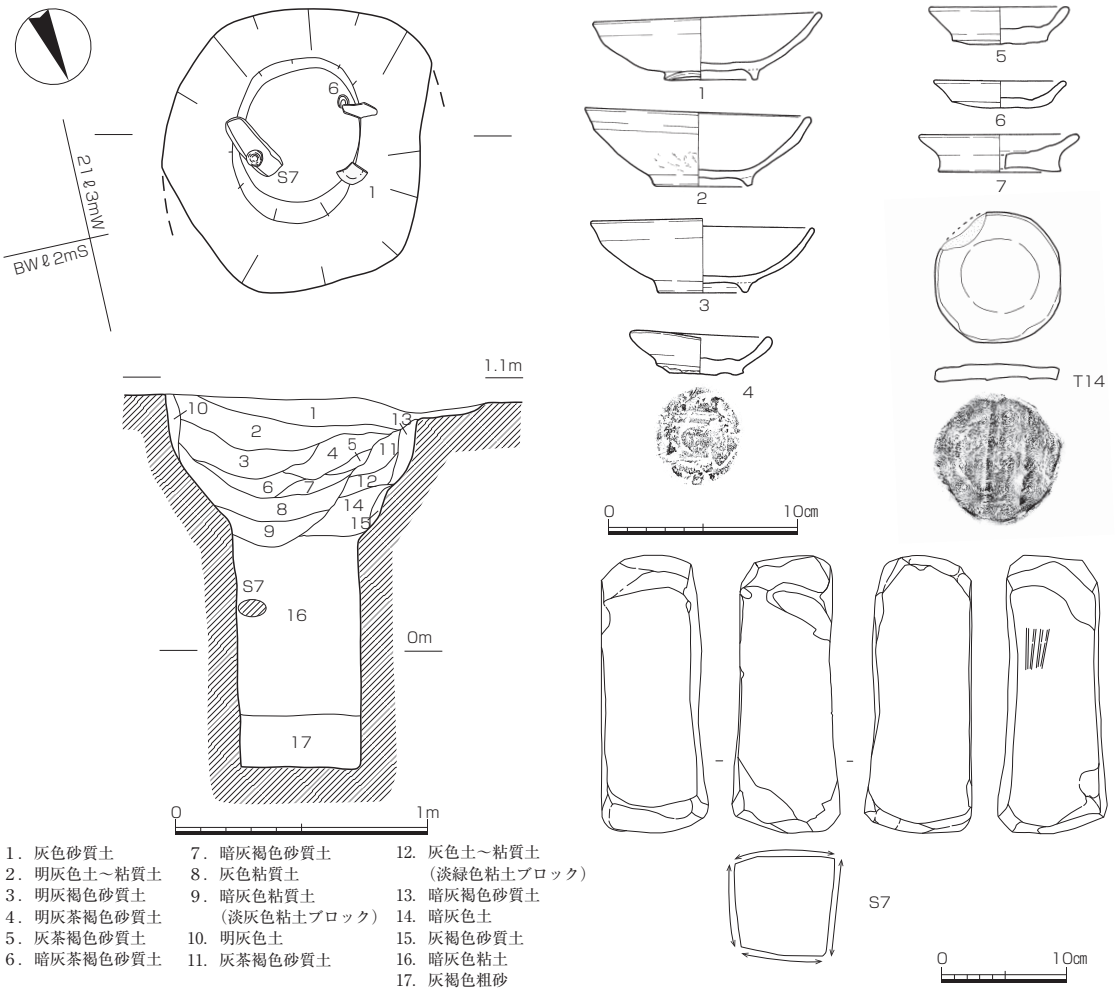
番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S6	砥石	10.5	5.9	5.3	608.9	一部	砂岩ホルンフェルス	砥面3面、擦痕

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W43	板材	22	2.6	1.0	スギ	－	表面平滑

井戸13（図38、図版15）

北区南部、BW21区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高－0.5mを測る。上面では径1.2mの円形、底面では径0.6mの円形を呈し、検出面からの深さは1.5mを測る。断面形は底面から標高0.5mまで筒状をなし、そこから上位は椀状に広がる。

埋土は17枚に分けた。17層は使用時の堆積層、１～16層は廃絶時の埋め土層である。遺物はコンテナ（28㍑/



1．灰色砂質土
2．明灰色土～粘質土
3．明灰褐色砂質土
4．明灰茶褐色砂質土
5．灰茶褐色砂質土
6．暗灰茶褐色砂質土
7．暗灰褐色砂質土
8．灰色粘質土
9．暗灰色粘質土（淡灰色粘土ブロック）
10．明灰色土
11．灰茶褐色砂質土
12．灰色土～粘質土（淡緑色粘土ブロック）
13．暗灰褐色砂質土
14．暗灰色土
15．灰褐色砂質土
16．暗灰色粘土
17．灰褐色粗砂

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	12.1	4.9	3.2～3.6	口3/4 高台1/1	内：ナデ、外：押圧・ナデ、高台：端部に乾燥時の凹凸痕、高台の1/2は潰れ状態	灰白、一部浅黄橙 2.5Y8/1～2、10YR8/3	1～2㎜砂礫 赤色粒少
2	土師器　椀	12	5.25	3.7～4.2	口3/4 高台1/1	内：ナデ・重焼痕、外：押圧・ナデ・亀裂多、内外：斑点状に油煙痕跡多、厚手	灰白、一部鈍黄橙 2.5Y8/1、10YR7/3	1㎜前後砂多
3	土師器　椀	11.8	4.8	3.4～3.9	1/2	内：ナデ・重焼痕、外：押圧・ナデ、内外：斑点状に油煙痕跡多	灰白　10YR8/1～2	1㎜砂
4	土師器　皿	7.5	4.4×4.7	1.9～2.2	口5/6 高台1/1	回転ナデ、底外：粗い篦キリ+板目痕・未調整状態の凹凸残存、厚手	鈍黄橙　10YR7/2～3	きめ細かい 赤色粒多
5	土師器　皿	7.5	5	2	1/3	回転ナデ、底内：中央押圧、底外：粗い篦キリ後ナデ+板目痕？厚手、全体磨滅	鈍黄橙　10YR7/2～3	きめ細かい 赤色粒多(3㎜以下)
6	土師器　皿	7.1	5.3	1.45	口3/4 高台1/1	回転ナデ、底内：中央押圧、底外：篦キリ後ナデ・板目痕？、薄手	鈍黄橙　10YR7/3～4	1㎜砂多
7	土師器　脚台	8.5	6.5	2	口1/5 底1/4	回転ナデ、底外：篦キリ・中央部に穿孔(径6㎜)	鈍黄橙　10YR7/3	きめ細かい 赤色粒

番号	器　種	長：cm	幅：cm	厚：cm	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T14	土製円盤	7.9	6.6	0.6～0.8	34.6	一部欠	杯の転用：底部周縁を打ち欠き加工、上面：ナデ、下面：篦キリ＋板目痕	鈍橙～橙　7.5YR7/3・6	1㎜礫少、赤色粒少

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S7	砥石	23.0	6.0	9.0	2634.5	ほぼ完形	流紋岩？	砥面4面

図38　井戸13・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

箱）１／３箱が出土した。土師器椀・杯・皿のほか、大形の砥石（図38－Ｓ７）が見られる。

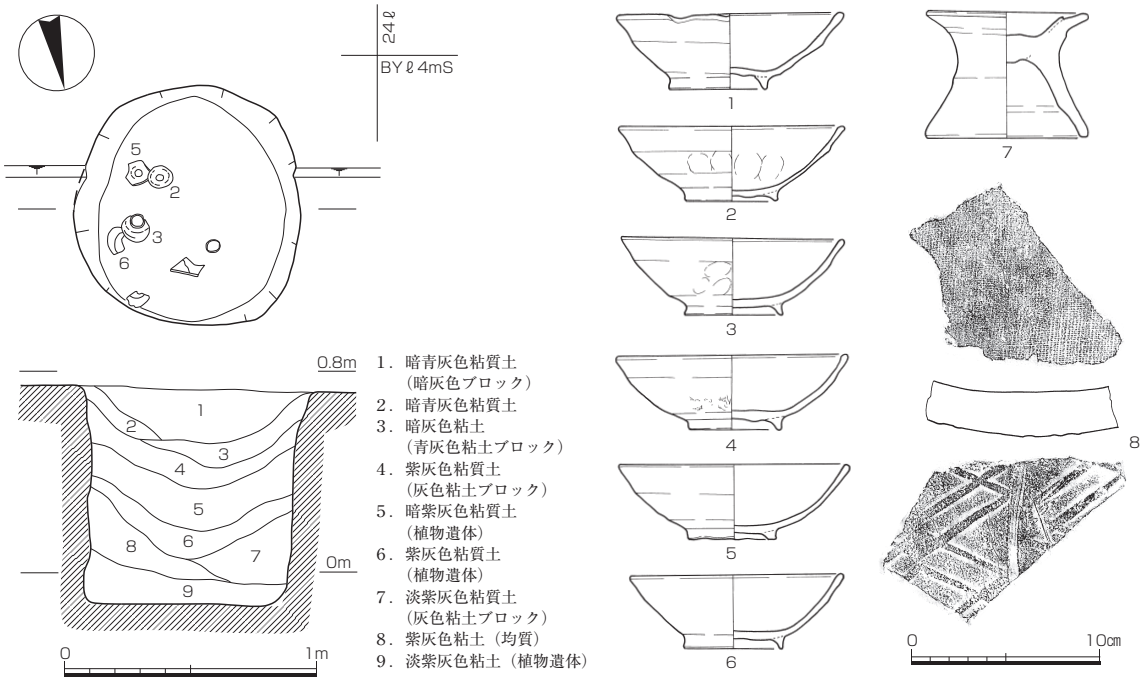
本遺構の時期は13世紀後半～後葉に比定される。

井戸14（図39、図版16）

西区西側、BY23区に位置する。基盤層まで破壊されており、検出面の標高0.75m、底面の標高－0.1mを測る。上面は径1.0mの円形、底面は径0.9mの円形を呈する。検出面からの深さは0.9mで、筒状にまっすぐ掘られている。

埋土は９枚に分けた。青灰色～紫灰色を呈する粘質土が主体で、１～７層にはブロックを多く混入する。８・９層は均質であり、９層に植物遺体が確認された。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）に１／２箱が出土した。土師器椀のほか、皿・鍋・竈の小片、瓦等が認められる。図39に示した土器は最下層で確認したものである。本遺構の時期は13世紀後葉に位置付けられる。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	11.9×12.4	5.15	3.5～4.1	ほぼ完存	内：ナデ、外：押圧･ナデ、口縁：補修痕？+受け口状の押圧が2箇所近接してあり	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫多
2	土師器　椀	11.9	4.7×5	3.8～4.2	完存	内外：押圧･ナデ、口縁補修か？薄手	灰白　2.5Y8/1	1㎜砂
3	土師器　椀	11.7×12.1	5.15	4～4.3	口3/4 高台1/1	内：ナデ、外：押圧、底外：亀裂	灰白　2.5Y8/1～2	1㎜砂
4	土師器　椀	12.2	5	3.6～4	口1/2 高台1/1	内外：押圧･ナデ、外：亀裂顕著、高台部に圧痕(種類不明)	灰白 2.5Y8/1～2	1～2㎜砂礫
5	土師器　椀	12.2	4.6	3.8～4.2	口1/2 高台1/1	内：ナデ、外：押圧、高台：畳付部に乾燥時の凹凸、口縁内外：対角線上に煤･油煙痕顕著	灰白 2.5Y8/1～2	1～3㎜砂礫
6	土師器　椀	11.4	5.3	3.95	口1/2 高台1/1	回転ナデ、体部内：ナデ、体部外：押圧、底内：重焼痕(変色)	灰白　2.5Y8/1～2	1～3㎜砂礫
7	土師器 脚台付皿	8.5	8.8	6.6～6.8	口1/2 底3/4	回転ナデ、皿部内面剥離	鈍橙～灰白 7.5YR7/4、10YR8/1	赤色粒多

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	特　徴	色　調	胎　土
8	須恵質　平瓦	(9.2)	(11)	2.4	上面：布目痕＋軽いナデ、下面：格子目タタキ・中央に１条の工具痕？	灰白　5Y8/1	2㎜礫多

図39　井戸14・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

３．土坑

土坑２（図40、図版17）

北区東端、BV20区に位置する。上面に後述する溝21が重複しており、調査時には溝21の下部にくぼみ構造があるものと考えた。調査中に土師器皿３点が重なって確認されたこと、また調査後遺物の時期の検討により、中世

後半以降の溝とは別遺構であると判断し、土坑として報告する。

検出面の標高0.35m、底面の最深部は標高－0.15mを測る。溝21に削平され本来の規模はわからない。また、本遺構の北東角は調査区外にあたり確認できていない。

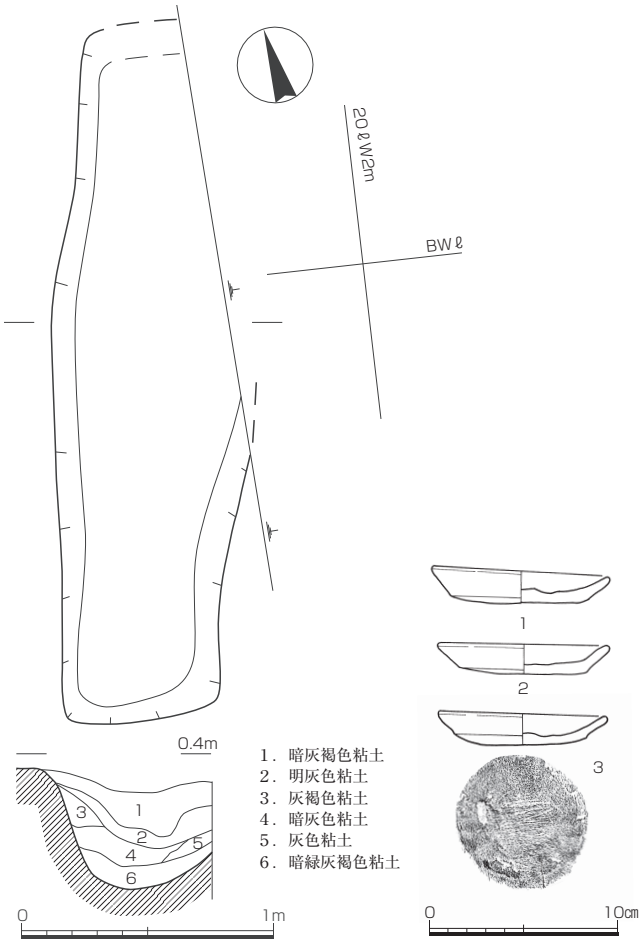
平面形は南北2.7m、東西0.9mの長方形を呈する。長軸方向はN－20°－Eを示す。

検出面からの深さは0.4mを測る。底面は中央より北側に若干傾斜する。埋土は５層に分けた。暗灰褐色～灰色を呈する粘質土が主体である。

出土遺物は前述したように、本遺構に確実に伴うものは図40－１～３の３点のみである。

いずれも口径９㎝を超える大ぶりの皿である。

本遺構の時期は、皿のみの出土であり詳細な時期は決め難いが、直径の大きさから11世紀後葉～12世紀前半の幅の中で考えておきたい。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	9.5	7.4	1.4～2	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）、厚手	鈍黄橙　10YR7/4	0.5㎜前後砂
2	土師器　皿	8.1×9.1	6.6	1.5～1.7	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）	鈍黄橙　10YR7/4	0.5㎜前後砂
3	土師器　皿	8.7×9	6.7×7.1	1.5～1.85	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）＋板目痕	灰白～浅黄橙、一部鈍橙 10YR8/2～3、7.5YR7/4	0.5～1㎜砂

図40　土坑２・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

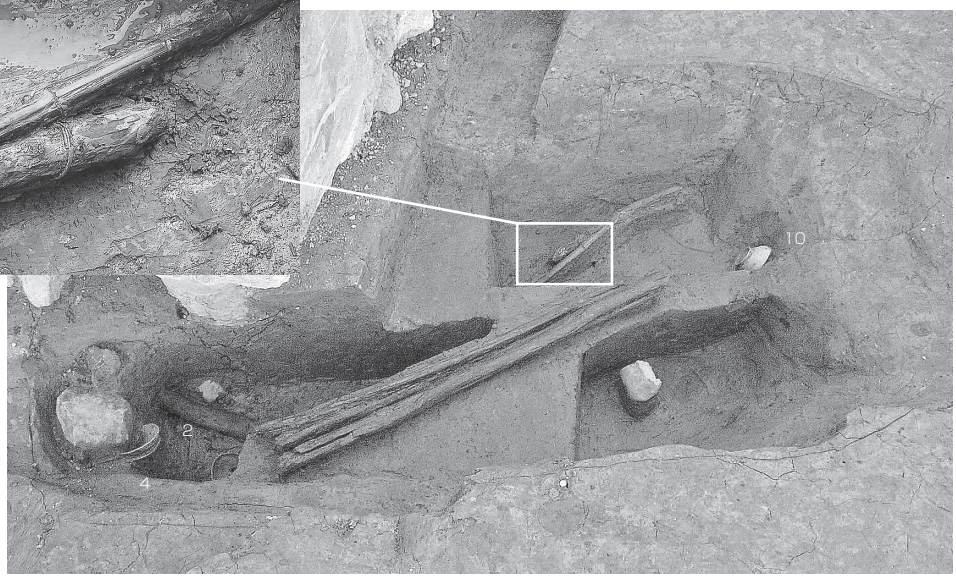
土坑３（図41・42、図版17）

西区中央、BX23・24区に位置する。検出面の標高0.6～0.8m、底面の標高は0.05mを測る。本遺構の南西角は基礎により破壊されている。上面は南北2.2m、東西1.05mの長方形を呈する。底面では南半で南北0.8m、東西0.45mの規模の平坦面をなしている。検出面からの深さ0.6mが残る。主軸はN－13°－Eを示す。埋土は５層に分けた。灰褐色～暗灰色を呈する粘質土を主体とする。

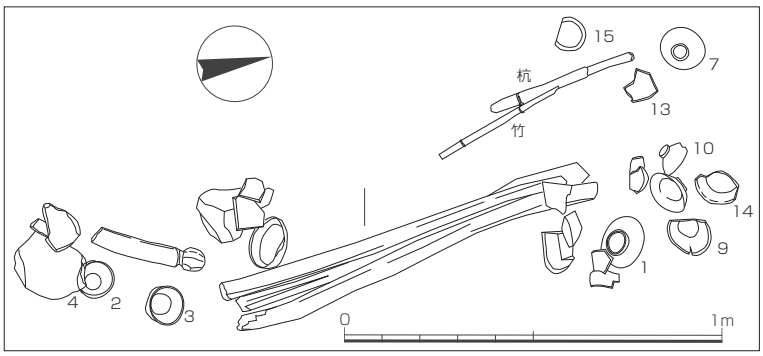
遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で土器類２箱、砥石１点を含む礫１箱が出土した。完形の多数の土師器椀・杯・皿が認められた（図41出土状況参照）。また図示しているように木製品が出土している。これらは記録はできたが保存状態は悪く、実測することは難しかった。本遺構の中央に径10㎝、長さ1.0mの丸木３本がまとめて置かれ、北西部には径５㎝、長さ0.4mの杭１本、竹１本が置かれている。杭には先端近くに巻きつけられた紐状のものが確認された（図41左上）。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀中葉～後葉に位置付けられる。井戸12・13にごく近く、若干古い可能性が残る。完形あるいは完形に近い状態の多数の椀のほかに杯・皿が出土する。底面の平坦面は狭小で、墓の可能性は低い。上部の破壊が大きく本来の形状を想定するのは難しいが、鹿田条里の方向を指した祭祀土坑として報告

杭と竹（西から）



遺物出土状況（東から）



遺物出土状況（縮尺1/20）

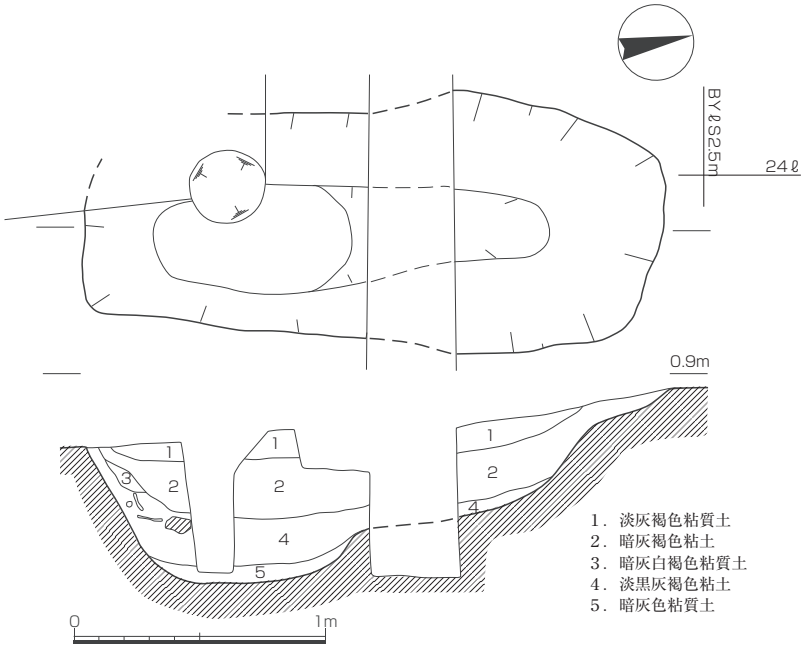
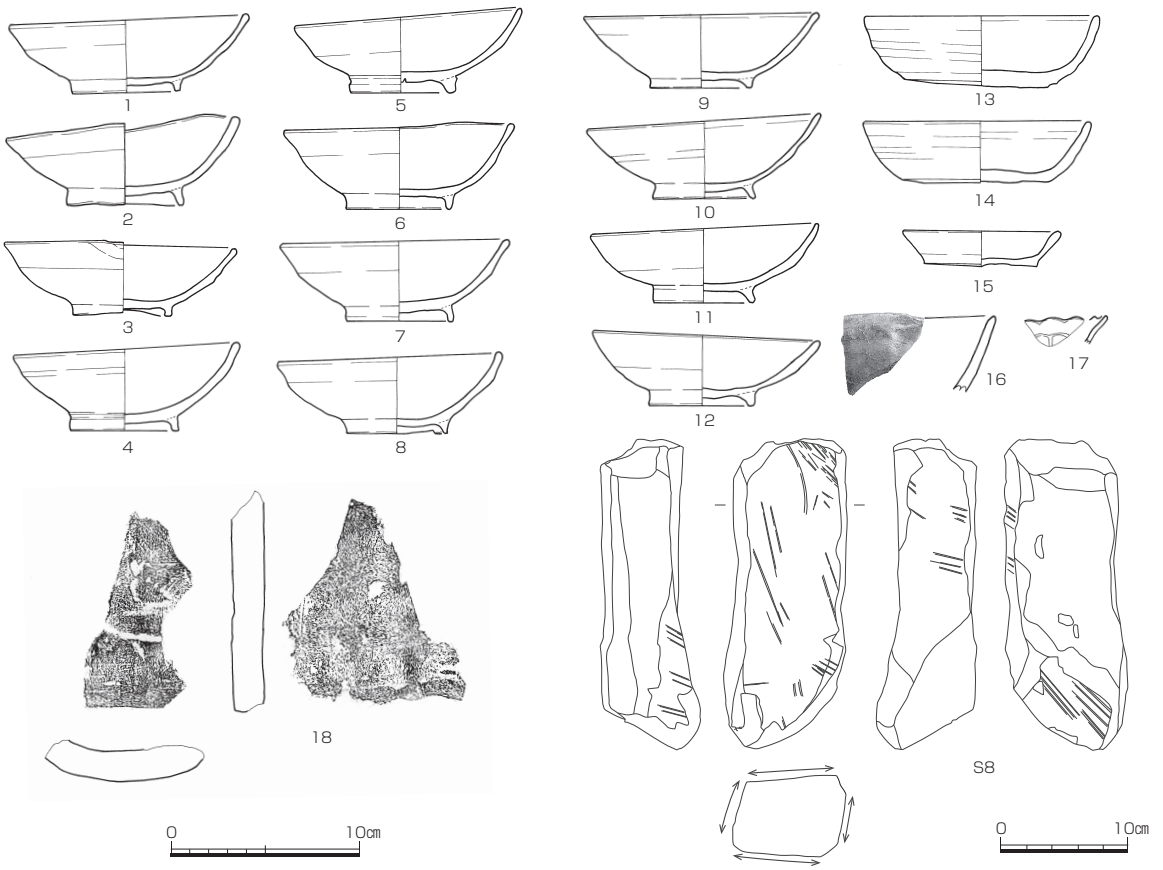


図41　土坑３（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	12.4×12.7	5.7	3.7～4.2	完存	ナデ・押圧、底外：ナデ+板目痕、口縁部歪み	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1㎜以下砂
2	土師器　椀	12.3×12.6	6.15	3.6～4.7	完存	ナデ・押圧、口縁部歪み(口径値の中心は12.3cm)、重焼痕(一部橙色)	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	4㎜以下砂礫多
3	土師器　椀	12.2	5.3×5.7	3.6～4	完存	ナデ・押圧、外：種子圧痕、口：1箇所が受け口状(端部を篦でカット)、高台の一部潰れ(置台痕跡)、高台径値の主体は5.3～5.4cm	灰白　2.5Y8/1～2	2㎜以下砂礫
4	土師器　椀	12.05	5.7×6	4～4.7	完存	ナデ・押圧、丸みの強い底部形態	灰白　2.5Y8/1	3㎜以下砂礫
5	土師器　椀	12.1	5.6	3.5～4.5	完存	ナデ・押圧、底外：中央に小円孔(直径2㎜・深さ約2㎜・断面台形)、内面煤、外面被熱(黒色・橙色化)	(内)灰白～黄灰(外)灰白 2.5Y7・6/1、2.5Y8/1～2	3㎜以下砂礫
6	土師器　椀	11.7×12.2	5.6	4.2～4.6	完存	ナデ・押圧、高台径値：潰れ部で5.9cm	灰白　10YR8/1～2	4㎜以下砂礫
7	土師器　椀	12.2×12.5	5.8	4.1～4.4	口1/1 高台1/2	ナデ・押圧、底内：重焼(変色)	灰白　2.5Y8/1～2	5㎜以下砂礫多
8	土師器　椀	12.15	5.2×5.5	3.8～4.3	口7/8 高台1/1	ナデ・押圧、底外：大きな亀裂、高台：畳付部に段(対角線上に平坦面残存)＝乾燥台痕跡か	灰白　2.5Y8/1	3㎜以下砂礫
9	土師器　椀	12.5	5.4	3.95	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、高台の一部潰れ、底内：種子圧痕？	(淡)灰白　2.5Y8/1～2	5㎜以下砂礫
10	土師器　椀	12.3×12.7	5.55	3.7～4.5	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、薄手・軽量・シャープなつくり、高台内：灰色	(灰)白　5Y8/1	1㎜以下砂
11	土師器　椀	12×12.4	5.5	3.6～4.2	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧、高台接合部に篦痕跡、重焼痕(高台部と底内の変色)	灰白　2.5Y8/1～2	5㎜以下砂礫
12	土師器　椀	12.1	5.6	3.5～3.8	1/2	ナデ・押圧、高台：厚手、全体に粗雑なつくり、重焼痕(高台と底内の橙色化)	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
13	土師器　杯	12.5	8.1	3.3～4	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)・ナデ、14と類似	浅黄橙　10YR8/3～4	5㎜以下赤色粒多
14	土師器　杯	12.2	8	3.3	1/2	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、磨滅、被熱(内外煤・外面一部赤変)、13と類似	浅黄橙～灰褐 7.5YR8/4、7.5YR6/2	5㎜以下赤色粒多
15	土師器　皿	8.35	6	1.8～2	完存	回転ナデ、底外：篦キリ、外：被熱(橙色化)、磨滅、口縁端部肥厚、シャープな仕上がり	灰白～鈍橙 7.5YR8/2、7.5YR7/4	1㎜以下砂
16	青磁　碗	－	－	－	－	内外：施釉、外：蓮弁文(甘い仕上がり、鎬未確認)	灰(釉)灰　N6/、10Y6/1	精緻
17	青白磁　皿	－	－	－	－	内外：施釉・文様、口縁：輪花、器厚は非常に薄い。	灰白(釉)明青灰(白) N8/　、5BG7/1	精緻

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
18	須恵器　平瓦	(11.7)	(8.4)	1.7	－	上面：縄目・ケズリ、下面：ナデ、被熱痕：上～下面の軒先側に煤＋上面側断面の変色	灰　N6/	2㎜以下砂礫

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S8	砥石	24.6	8.0	6.4	2266.3	ほぼ完存	流紋岩脈	砥面4面、擦痕

図42　土坑３・出土遺物（縮尺1/4・1/6）

する。

土坑４（図43、図版18）

北区北部、BS22区に位置する。検出面の標高1.0m、底面の標高0.5mを測る。上面では径1.15～1.2mの円形を呈する。検出面からの深さは0.5mである。断面形は緩やかに広がるU字形を呈している。

埋土は７層に分けた。１・２・４層には炭を含む。灰褐色～暗灰色の粘質土～粘土が主体である。湧水は見られず、井戸ではないと考えられる。

遺物はポリ袋（12号）１／３袋が出土した。土師器椀、瓦器などの小片がわずかに見られたが、図示できるものはなかった。

本遺構の時期は中世前半と考えられる。機能については判断する材料がない。

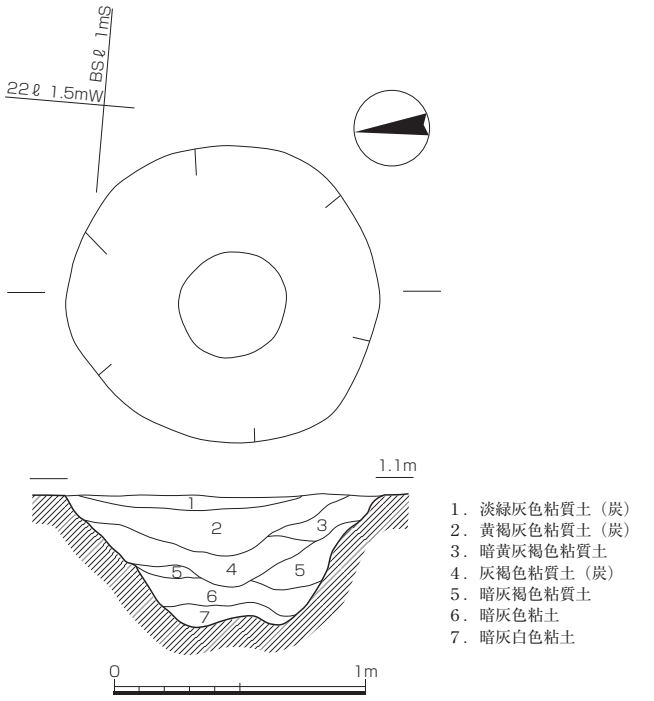


図43　土坑４（縮尺1/30）

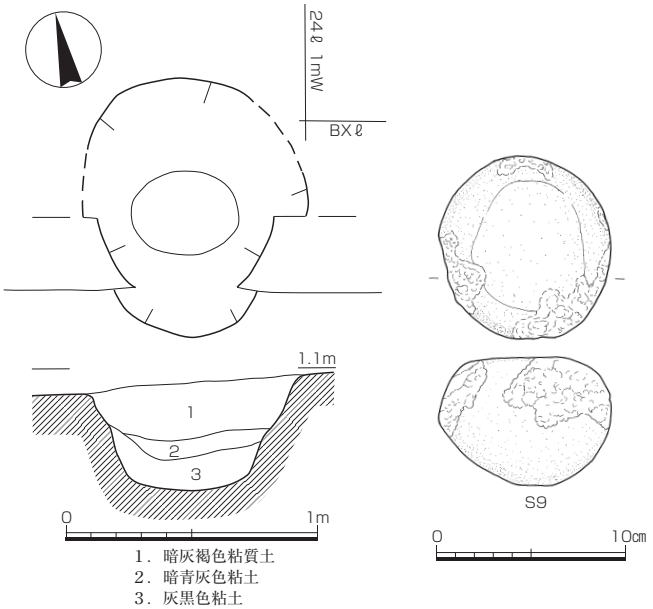
土坑５（図44、図版18）

北区南端、BW/BX24区に位置する。検出面の標高1.0～1.05m、底面の標高0.6mを測る。上面は径1.0mの円形、底面では径0.35×0.45mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.4mが残る。

埋土は３層に分けた。灰色～灰黒色粘質土である。断面形はU字状を呈している。

遺物はポリ袋（12号）１／２袋が出土した。土師器椀・鍋・竈等の中世前半の土器小片を10点程度と石器１点が認められた。図44－S９は花崗岩の円礫を敲石・磨石として使用したものである。被熱痕跡が認められる。

本遺構の時期は、出土遺物から中世前半に位置付けられる。湧水はなく井戸ではないが、機能を特定できる材料はなく、判断できない。



番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S9	敲石・磨石	9.7	9.0	7.0	829.6	ほぼ完存	花崗岩	擦4痕か所、被熱

図44　土坑５・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

４．溝

溝10・11（図45～47、図版19）

北区北東角付近～西区北端BYライン付近にかけて、正方位の南北方向に主軸を取る２条の溝である。北端は溝24、井戸15・16等の後世の遺構に切られているうえ、BUライン以南は基盤層上面まで破壊された状況で検出した

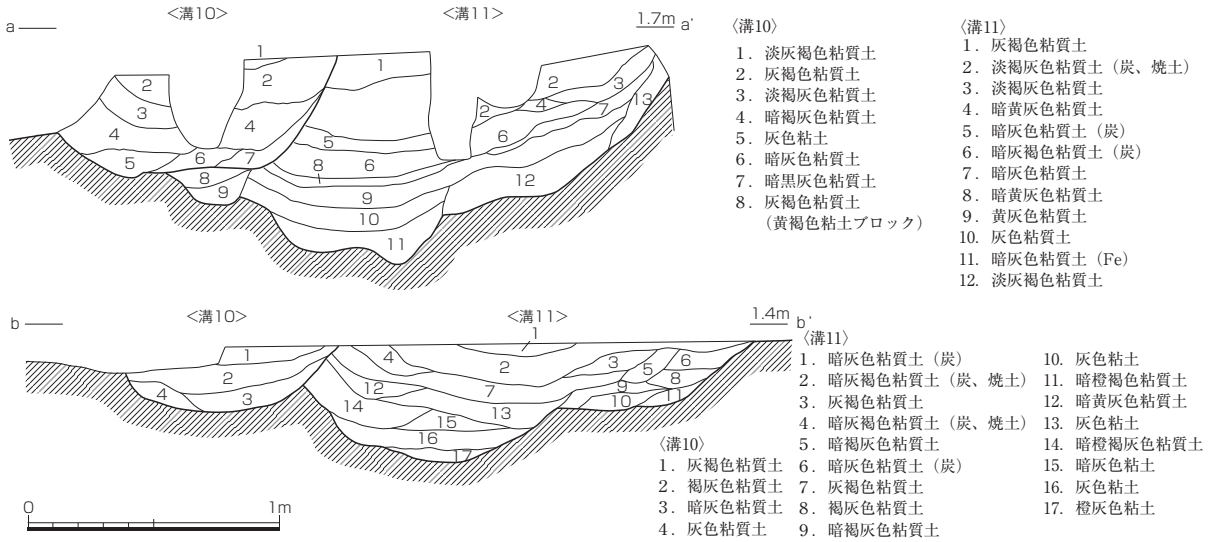
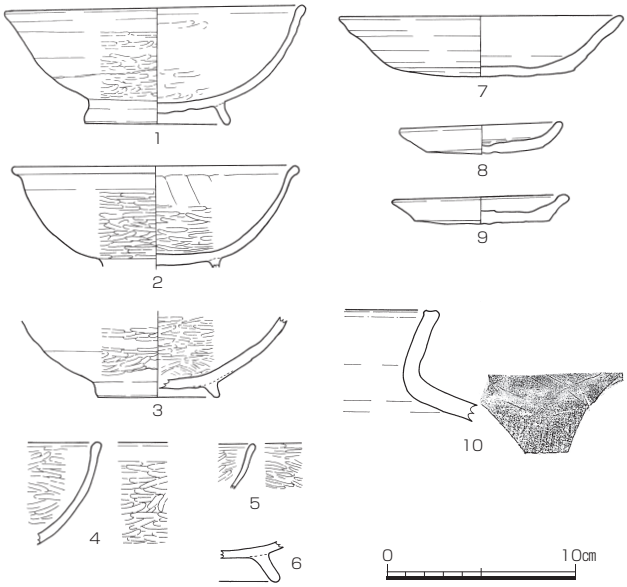


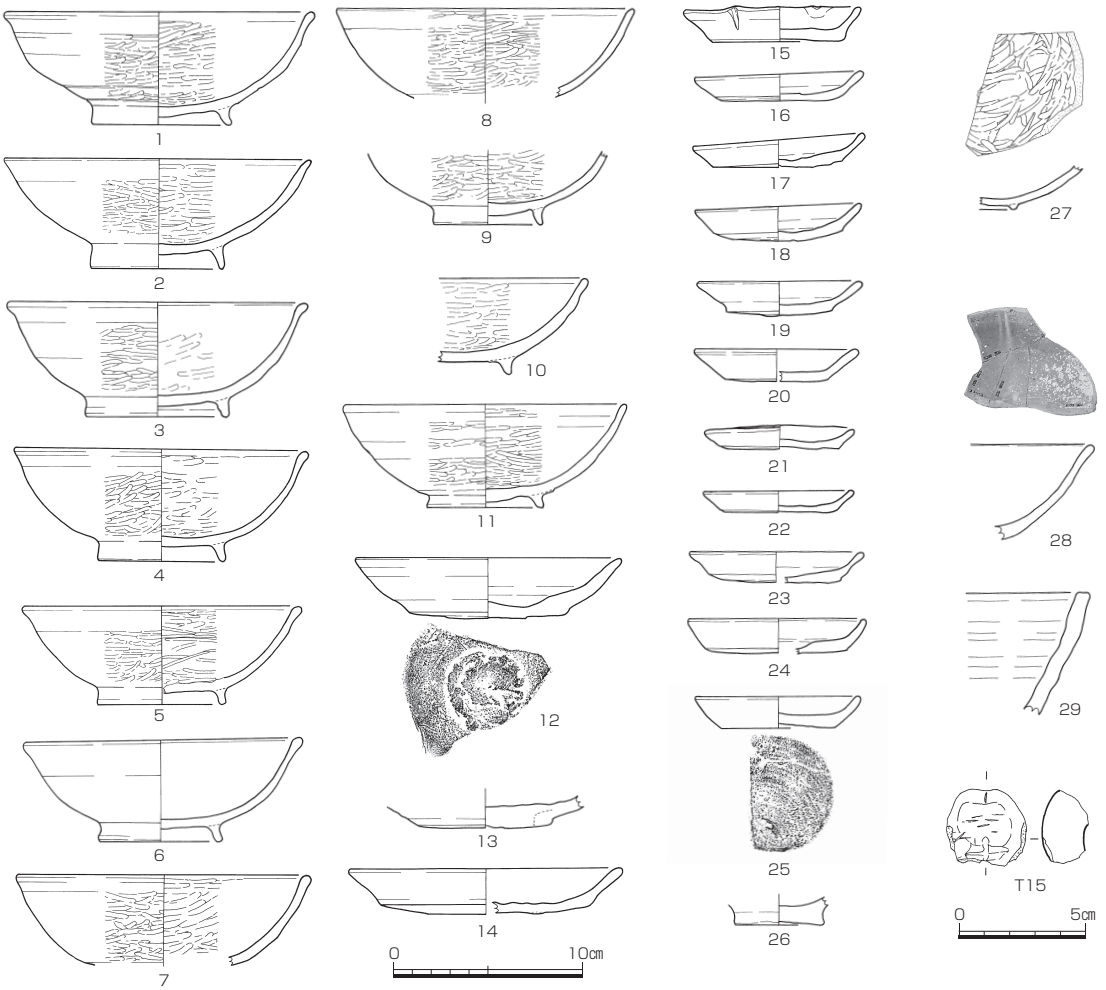
図45　溝10・11断面（縮尺1/30）

 もので、長さ26.5m程度を確認できた。溝10・11は相前後して構築されている。最も残りのよいBUライン付近での検出面の標高は1.6mを測る。底面のレベルは溝10で標高1.05m～0.85m、溝11で標高0.75～0.85m、深さは溝10が0.5m、溝11が0.8mを測る。いずれの溝もBYライン付近で浅くなり、以南では確認されない。特に西区は後世の破壊の度合いが著しいため、BYライン以南に存在しないかどうかは確認できない。断面形はいずれも基本的にU字形を呈する。溝11は西側が深い段のある形状を示し、掘り返しの可能性がある。埋土は溝10で８層、溝11で12層に分層した。溝11の上半に炭・焼土を多く含む層（２・５・６層等）が特徴的に



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	16	7.65	6～6.3	口1/2 高台1/1	内外：篦ミガキ密・内面磨滅、口：肥厚・横ナデ2段(体部上半)、体部下半：篦痕跡、底部丸み、高台：強い引き出・幅広の横ナデ仕上げ、器厚均一、丁寧な仕上がり	灰白～白 2.5Y8/1、N9/	2㎜以下砂礫
2	土師器　椀	15.3	－	－	口1/2 高台－	口：強い横ナデ・玉縁状、内：篦ミガキ・上半部には工具ナデ痕、外：篦ミガキ密、底外：ナデ、高台一部残存、高台径値は6.3cm程度か？	(灰)白　2.5Y8/1	1㎜以下砂
3	土師器　椀	－	6.6	－	高台1/1	内外：篦ミガキ密、口：横ナデ2段で幅広、体部外面下半に薄く粘土が被る。高台：厚手で低い・一部潰れ、重焼痕(底部変色)、厚手	灰白　2.5Y8/1～2	3～5㎜礫多
4	土師器　椀	－	－	－	－	内外：篦ミガキ密、口縁部肥厚、器厚均一、大振りな深椀、シャープな仕上がり	灰白　2.5Y8/1～2	1～4㎜砂礫
5	土師器　椀	－	－	－	－	内外：篦ミガキ密、口縁部肥厚、非常に薄く均一な器厚、シャープな仕上がり	(灰)白　10YR8/1～2	きめ細かい
6	土師器　椀	－	－	－	－	ナデ、足高高台	鈍黄橙　10YR7/3～4	きめ細かい
7	土師器　杯	15.05	9.5	3.2	3/4	回転ナデ、底内：中央仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転右)、内外：剥離痕顕著・うろこ状剥片の接合箇所あり(焼成時剥離の可能性)	(灰)白　2.5Y8/1～2	4㎜以下砂礫多
8	土師器　皿	8.7	6.15	1.3～1.7	完存	回転ナデ、底外：篦キリ・ナデ	鈍黄橙～鈍橙 10YR7/4、7.5YR7/4	きめ細かい 赤色粒多
9	土師器　皿	9.4	7.4	1.3～1.5	1/2	回転ナデ、底内：中央仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転右)	灰黄　2.5Y7/2	0.5～1㎜砂多
10	須恵器　甕	－	－	－	－	回転ナデ、体部内：ナデ、体部外：平行タタキ後横ナデ	灰　N5～4/	1～2㎜砂礫多

図46　溝10出土遺物（縮尺1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	16.2×16.6	7.4	6	口3/4 高台－	内外：篦ミガキ密(硬質感)、内：磨滅、口：肥厚・横ナデ2段(体部上半)、体部下半に篦痕跡、大振りで均一な器厚、強く引き出した高台、高台と体部の色調異なる。	灰白(高台)灰白～淡黄 2.5Y8/1、2.5Y8/2～3	2～4㎜礫多
2	土師器　椀	16.3	7.1	5.8	口－ 高台1/1	内外：篦ミガキ密、磨滅、口：横ナデ１段、強く引き出した高台、口径値は残存率が低いため不安定	灰白　2.5Y8/1～2	1㎜以下砂
3	土師器　椀	16	7.7	6.1	口－ 高台1/1	内外：篦ミガキ密(内面磨滅で残存一部)・被熱(暗～橙色化)、口：肥厚・横ナデ2段(体部上半)、高台：丸み、丁寧な仕上がり	灰白 7.5YR8/1～2、10YR7/1	1㎜以下砂多
4	土師器　椀	15.6	6.85	5.8～6	口3/8 高台1/1	内外：篦ミガキ密、底外：ナデ+板目痕、口：肥厚・横ナデ１段、体部は丸く深く膨らむ。器厚均一、丁寧な仕上がり	灰白　2.5Y8/1	0.5㎜以下砂
5	土師器　椀	14.8	7	5.2	口1/4 高台1/3	内外：篦ミガキ密、底外：ナデ、口：肥厚・横ナデ1段、重焼痕(底内外：灰～黒色化)、内面変色部でうろこ状剥離顕著(焼成時剥離の可能性)、小形椀	浅黄橙～灰白 10YR8/3、2.5Y8/2	0.5㎜以下砂少
6	土師器　椀	14.8	6.55	5.3～5.5	口1/3 高台3/4	内外：篦ミガキ未確認・磨滅、重焼痕、内面暗色化、口：肥厚・横ナデ１段、小形椀、均一な器厚、しっかりした高台	灰白　2.5Y8/1	1㎜以下砂多
7	土師器　椀	15.8	－	－	口1/2	内外：ミガキ密、口：横ナデ１段、丁寧な仕上がり	灰白　2.5Y8/1	3㎜以下砂礫
8	土師器　椀	15.6	－	－	口3/4	内外：篦ミガキ密、口：肥厚・横ナデ2段(体部上半)	灰白　2.5Y8/1～2	2～4㎜礫多
9	土師器　椀	－	5.9	－	高台1/1	内外：篦ミガキ密、底外：押圧・ナデ、高台径小形	灰白　2.5Y8/2	2～5㎜礫多
10	土師器　椀	－	－	5.1	－	内：篦ミガキ密、外：押圧・ナデ・ミガキの有無不明、口：肥厚・横ナデ2段(体部上半)、厚手、低い器高と高台＝小形椀？、平滑な仕上がり	灰白～白　2.5Y8/1、N9/	1㎜以下砂
11	黒色土器　椀	15	6.2	5.5	口1/2 高台1/5	内外：篦ミガキ密、底外：ナデ・丸み、口：横ナデ2段(体部上半)、厚手、黒色土器A類	(内)黒(外)灰白 2.5Y2/1、10YR8/1～2	2㎜以下砂礫
12	土師器　杯	14	8.4	3.2	口－ 底1/4	回転ナデ、底外：篦キリ+板目痕＋周縁部のみナデ、残存率が低く法量値は不安定	鈍褐　7.5YR7/4	1㎜以下砂 赤色粒多
13	土師器　杯	－	7	－	底1/2	回転ナデ、底内：仕上げの押圧、底外：ナデ＋板目痕、底部厚手	(内)灰白(外)浅黄橙 10YR8/2、7.5YR8/3	0.5㎜以下砂
14	土師器　皿	14.5	11.1	2.45	1/4	回転ナデ、底外：篦キリ・ナデ、高台状の低平な小粘土帯が底部に巡る、全体磨滅で灰色が強い、器厚均一	灰白～灰黄 2.5Y8/1、2.5Y7/2	1～2㎜砂礫 黒色粒多

図47　溝11出土遺物（縮尺1/4）

図47観察表続き

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
15	土師器　皿	9.4	6.9	1.7～1.9	口1/3 底1/1	回転ナデ、底内：中央仕上げナデ、底外：ナデ+板目痕、口：輪花状をなす刻み2か所残存(本来4か所か)、丁寧な仕上がり	灰白(底外)一部鈍橙 2.5Y8/1～2、7.5YR8/4	1㎜以下砂
16	土師器　皿	9	6.8	1.3～1.6	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、端正な仕上がり、17・23に類似	灰白、一部鈍橙 10YR8/2、7.5YR7/4	0.5㎜以下砂 赤色粒少
17	土師器　皿	9.1	6.65	1.1～1.8	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、16・23に類似	(内)灰白(外)灰白～浅黄橙 10YR8/1～2、10YR8/2～3	0.5㎜以下砂
18	土師器　皿	8.8	6.9	1.7～2	完存	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、底部の一部橙色化	浅黄橙　10YR8/3	1㎜以下砂 2～3㎜赤色粒
19	土師器　皿	8.8	5.8	2	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：中央押圧、底外：篦キリ(ロクロ回転左)＋板目痕、内：磨滅、20に類似	鈍黄橙～鈍橙 10YR7/2～3、7.5YR7/3	0.5㎜以下砂 赤色粒
20	土師器　皿	8.8	5.4	1.7	1/4	回転ナデ、底外：篦キリ、19に類似	浅黄橙(底)鈍橙 7.5YR8/3～4、5YR7/4	0.5㎜以下砂 赤色粒
21	土師器　皿	7.9	6.4	1～1.3	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)・ナデ+板目痕、磨滅、口縁歪み、22に類似	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫多
22	土師器　皿	8.1	6	1.15	1/2	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、底内：中央押圧・礫の移動で穿孔有り(径3㎜程度)、内：煤付着、被熱変色(淡橙色化5YR8/2)、21に類似	灰白　10YR8/1	2～5㎜礫多め
23	土師器　皿	9.2	7.2	1.55	口1/2 底3/4	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、磨滅、16・17に類似	灰白　10YR8/1～2	0.5㎜以下砂
24	土師器　皿	9.4	7.6	1.8	1/3	回転ナデ、底外：篦キリ、底内：中央仕上げナデの窪みが顕著	鈍黄橙　10YR7/3	0.5㎜以下砂多 赤色粒
25	土師器？皿	8.8	6	1.7	1/2	回転ナデ、底外：回転糸キリ、全体磨滅、外：被熱で橙色化、須恵器の可能性あり	(内)灰白(外)橙～灰白 2.5Y8/1、5YR7/6	1㎜以下砂 赤色粒多
26	土師器　脚台	－	4.7	－	底1/1	回転ナデ、底外：篦キリ	灰白　2.5Y8/1	3～5㎜礫
27	瓦器　椀	－	－	－	－	内：篦ミガキ密、外：押圧・ナデ・篦ミガキ未確認、和泉型	(内)灰(外)灰白 N6～5/ 、7.5Y7/1	0.5㎜以下砂
28	須恵器　椀	－	－	－	－	回転ナデ､内：1か所に火襷・色調は外面と異なりオリーブ色を帯びてツヤ有り、高台部の詳細不明、丁寧な仕上がり	(内)オリーブ灰(外)灰白 2.5GY6/1、N7/	1㎜以下砂少 緻密
29	須恵器 こね鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：下半に使用痕(摩耗)、東播系か	(内)灰(外)暗灰～灰 N6/ 、N5～4/	4㎜以下砂礫多

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T15	不明土製品	－	－	－	13.6	一部	ナデ、残存面は1面のみ、同面表面に刻み確認、裏面には小さな窪み部の一部が残存、円筒状の先端部の可能性が考えられる。	橙(断面)鈍橙 5YR7/6、7.5YR7/4	0.5㎜以下砂 赤色粒多

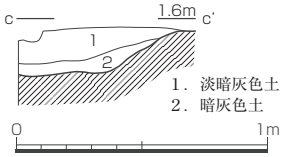
見られる。遺物は溝10・11併せてコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）４箱が出土した。特に溝の上半部においては調査時に分けられずに取り上げたものがあり、両溝の遺物が接合したものもある（図46－１・３）。遺物量は溝11が圧倒的に多く特に、土師器椀・皿が多量に出土し、完形資料も認められた。溝の廃絶に伴う祭祀行為が窺われる。また、本遺構から多数の動物遺存体が出土している（第４章第４節参照）。ニホンジカ・ウシが同定されており、ニホンジカの下顎骨のほか、ウシ大腿骨には食用のための解体痕が指摘される。こうした動物遺存体も祭祀に関連する可能性が考えられる。

溝10・11は、出土遺物から12世紀前半に埋没時期が求められる。掘削時期は不明だが、11世紀代に遡る可能性も残す。ひんぱんな掘り返し状況から、日常的に管理されていたことが予想される。この時期は、本調査地点における中世集落の開始期にあたり、正方位の南北方向を示していることに注目したい。

溝12（図48、図版20）

西区北東角、BY18区に位置する。西区北壁19ライン付近から南２ｍの地点で東に向きを変える溝として報告する。検出したのは溝の西側の肩のみで、東肩部は撹乱により失われている。北側は調査区外、東側は大規模な撹乱部にあたり未確認である。検出面の標高1.55m、幅0.6m、深さ0.2mを測る。遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１／２箱が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小片である。青磁碗１点を図示した。

本遺構の時期は、出土遺物から中世前半に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	青磁　碗	－	－	－	－	輪花口縁、内：花弁紋、龍泉窯小碗Ⅰ－2類か	灰白(釉)灰オリーブ N8/ 、7.5Y6/2	緻密

図48　溝12断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

溝13（図49、図版20）

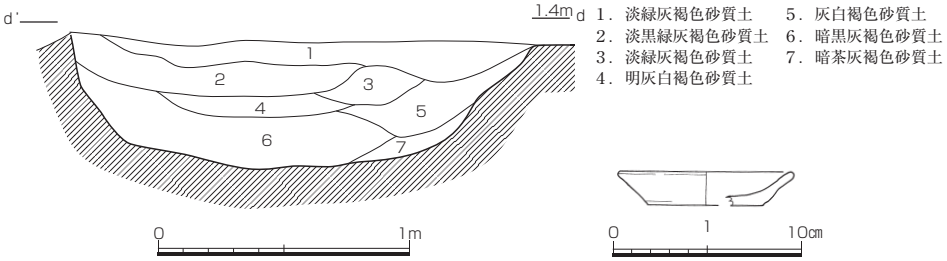
西区南端、CD21区に位置する。検出面の標高1.3m、底面の標高0.8mを測る。長さ1.0mの溝を検出した。北は撹乱に切られ、南は調査区外へ伸びる。南に隣接する第９次調査地点で溝24とした溝に接続する可能性がある。第９次調査溝24（註）に続くことから12世紀前半に埋没したと考えられる。本溝の位置は前述の溝10・11の延長線上にあたり、溝10・11の時期に対応する。断面形はU字形、埋土は７層に分けた。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１／３箱が出土し、中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小細片が見られた。

本遺構の時期は12世紀前半である(1)。

註

(1) 報告時には12世紀中頃としたが、遺物を再検討し、12世紀前半と考えたい。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	9.3	6.2	1.8	口－ 底1/3	回転ナデ、底外：篦キリ後丁寧なナデ、残存度低いため口径値は不安定	鈍黄橙　10YR7/3～4	0.5㎜以下 赤色粒

図49　溝13断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

溝14・14ａ（図50、図版20）

東区BZライン～調査区南壁までの間で15ライン付近を南北方向に走行する溝で、CDライン以南では２条を検出した。溝14は、撹乱や溝22により分断されるが、BZライン～CBライン間ではＮ－11.5°－Ｅに主軸を、またCBラインから調査区南壁ではＮ－15°－Ｅに主軸を取るように走行する。CDライン以北は標高0.8m付近まで削平され、幅0.6mが残るのみで、CDライン以南では検出面の標高1.25m、幅2.35m、長さ1.0mを確認した。底面のレベルは0.6m前後を測る。

またCDライン以南のみ溝14の東側に幅1.0m、深さ0.3mの溝を検出し、これを溝14ａとする。これらの溝は、南に隣接する第14次調査地点で報告している溝10と同一であり、レベルも合致する。埋土は溝14で20層、溝14ａで３層に分けた。溝14の堆積状況から流路が少しずつ変化し、溝14ａ→14の掘り返しが窺われる。遺物は中世前半の土器小片がポリ袋（12号）３袋出土した。本溝の時期は、第14次調査地点の成果を勘案すると溝14ａは12世紀中葉～後半、溝14は12世紀末に比定される。

溝15（図51・52、図版）

北区に位置する、正方位の南北方向の溝である。２条の溝があり、溝15は調査区東壁、BUライン南２m付近からBXライン南２mまでの長さ12mを検出した。残りの良い北側で検出面のレベルは標高1.45m、底面のレベルは0.95mを測り、幅1.2

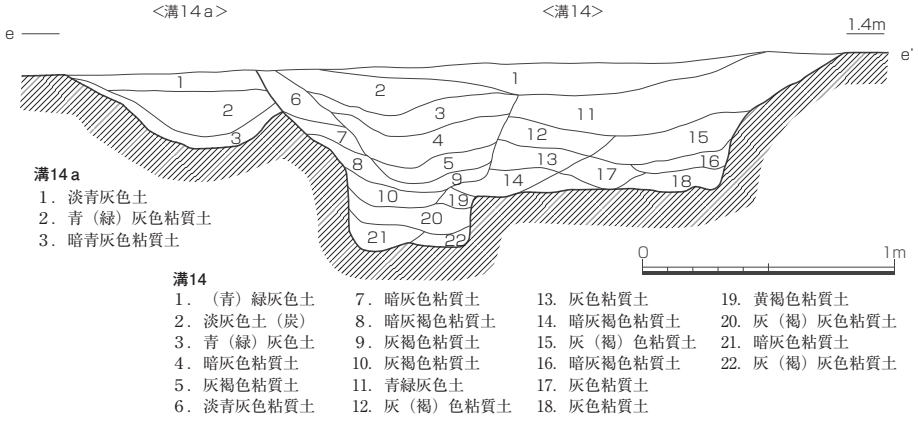
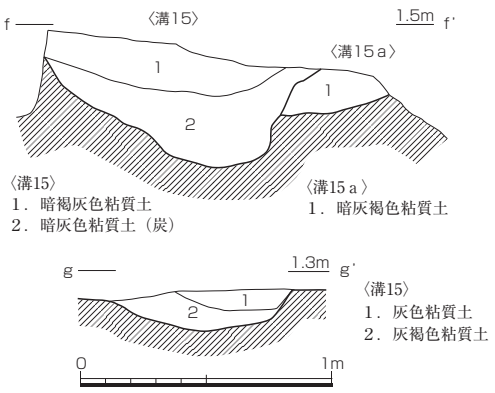


図50　溝14断面（縮尺1/30）

m、深さ0.5mが残る。BVライン南２mより南では標高1.2mまで削平され幅0.7m、深さ0.15mが残る。溝15ａは溝15の東側を走行し、BVライン南２mの地点より北側で検出した。西半は溝15により切られる。底面の標高は1.15mを測る。本溝の北側は調査区外にあたり、西側に隣接する第25次調査地点溝18と同一遺構である。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１箱が出土した。土師器椀・杯・皿・鍋のほか、白磁・青磁、瓦質の四耳壺等が見られる。

本遺構の時期は13世紀前半に比定される。溝の方向は、前述の溝10・11と並行するもので、正方位の南北方向であるこ



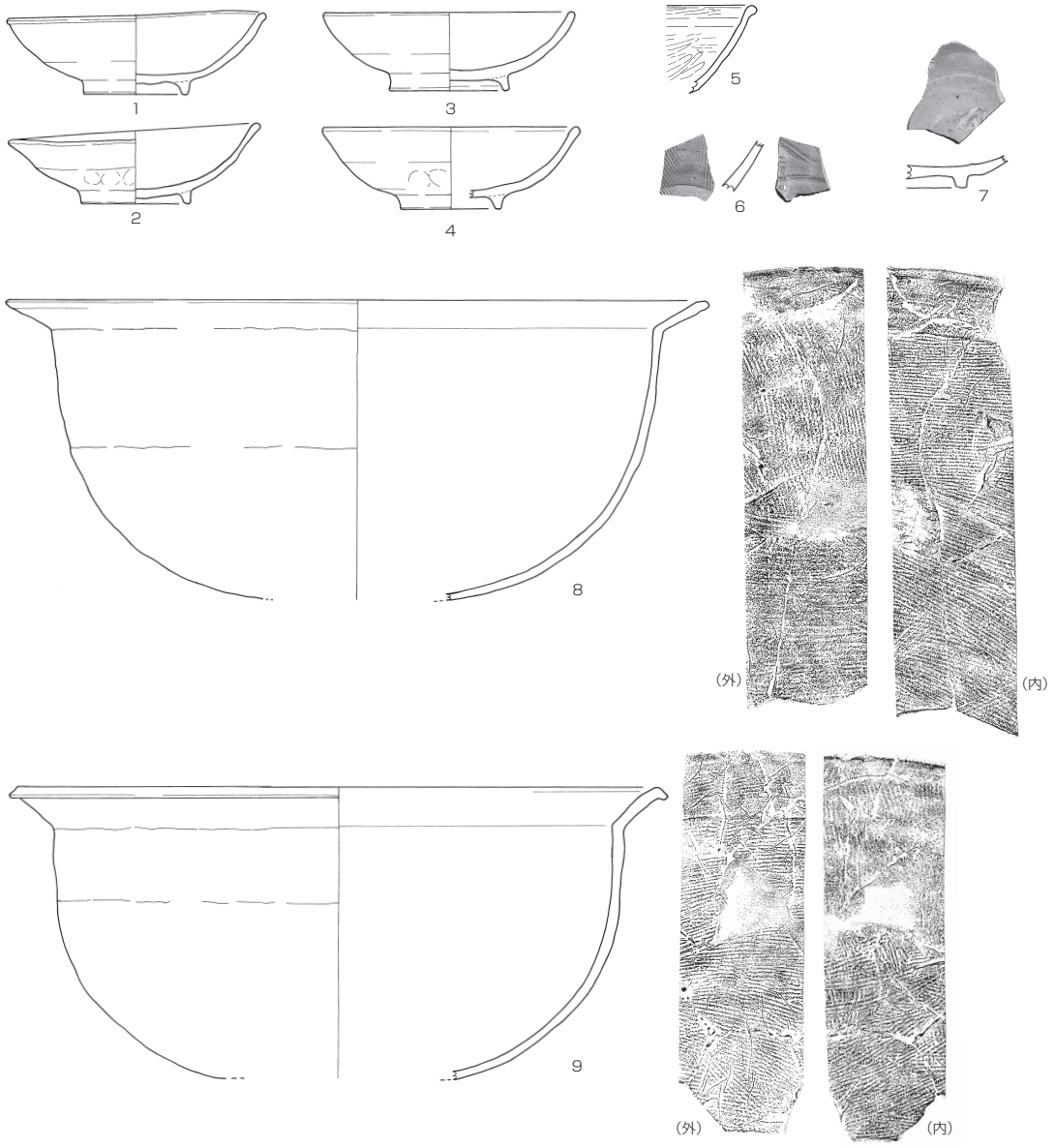
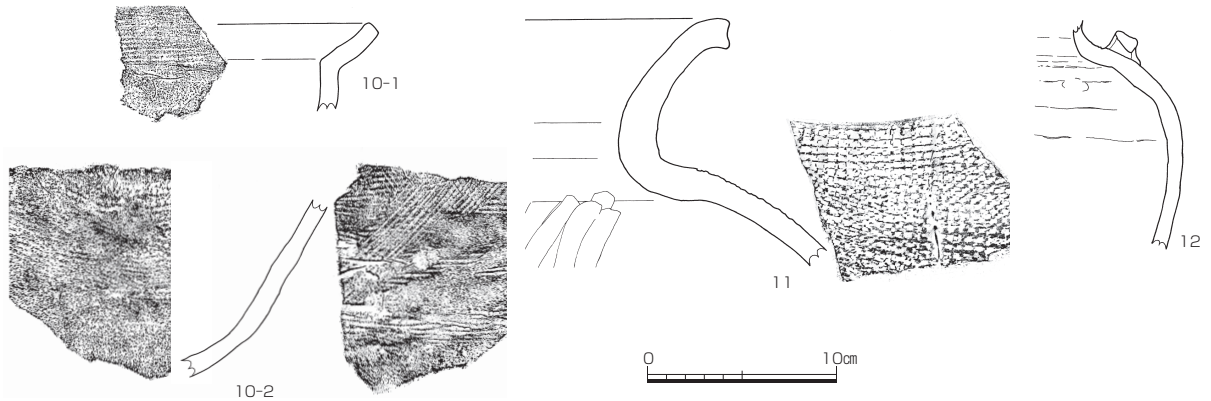


図51　溝15断面・出土遺物(1)（縮尺1/30・1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	14.1	5.8	4.1～4.6	口1/3 高台1/1	ナデ、口：小さな玉縁状･煤付着、重焼痕	灰白　2.5Y8/1～2	2～5㎜礫多
2	土師器　椀	13.8×14.2	5.95	3.4～4.4	完存	内：ナデ、外：押圧、底内：ナデ･軽い押圧、底外：亀裂、重焼痕、口：横ナデ2段の痕跡	灰白～淡黄　2.5Y8/2～3	1～3㎜砂礫少
3	土師器　椀	13.8	6.6	4.3	口－ 高台3/4	ナデ、外：浅い押圧、底外：亀裂多、重焼痕、残存率低く口径･器高値は不安定	灰白～淡黄　2.5Y8/2～3	1～3㎜砂礫
4	土師器　椀	14.1	5.6	4.5	口1/3 高台－	ナデ、底内･体部外：押圧、残存率低いため高台径･器高値は不安定	灰白　2.5Y8/1～2	1㎜以下砂
5	土師器　椀	－	－	－	－	内外：篦ミガキ密、外：押圧、口：玉縁状、器厚均一、平滑で丁寧な仕上がり	(灰)白　2.5Y8/1	1㎜以下砂少
6	青磁　碗	－	－	－	－	施釉：外面下端以外、内外：櫛目文･画花文、同安窯	灰白(釉)オリーブ黄 7.5Y7/1、7.5Y6/3	緻密
7	白磁　皿	－	－	－	－	削り出し高台、施釉：体部内外～一部高台外面に及ぶ、内：見込みに段	灰白　5Y7/1	緻密 黒色粒僅少
8	土師器　鍋	38.5	－	－	口1/5	内：ハケメ(横位)、外：ハケメ(横位の底部以外は縦位)+押圧、口：ハケメ後横ナデ、外面煤付着多、口縁歪みで口径値不安定(38～39㎝の範囲)	鈍橙～鈍褐 7.5YR6/4・5/3	1㎜前後砂多
9	土師器　鍋	36	－	－	口1/4	内：ハケメ(斜めの底部以外は横位)、外：ハケメ(上半は縦位･下半は横位)+押圧、口：横ナデ、外：煤付着顕著(口縁部まで)･一部橙色化	鈍褐 7.5YR5/3	1㎜前後砂
10	土師器　鍋	－	－	－	－	口：横ナデ(内面は下に横ハケ)、体部内外：磨滅･煤で調整不明、底内：横ハケ･押圧･磨滅、底外：粗いハケメ(横位+斜位)･煤付着顕著、厚手	(内)鈍黄橙(外)黒褐～黒 10YR6/3、10YR3～2/1	1～2㎜砂礫過多 雲母多
11	須恵器　甕	－	－	－	－	回転ナデ、体部外：格子目タタキ、体部内：縦位のナデ	灰白～灰　2.5Y7/1、N6/	1～3㎜砂礫多
12	瓦質土器 四耳壺	－	－	－	－	内：ナデ･押圧･明瞭な粘土接合痕、頸部：横ナデ、外：肩部にタタキ上面･下半に横ケズリ痕、把手部は破片中2箇所確認、頸部下端に沈線1条	灰(断面)灰白 N5/　、2.5Y8～7/1	2㎜以下砂礫

図52　溝15出土遺物(2)（縮尺1/4）

とは注意したい。並行関係を積極的に評価すると道の側溝と考えられる。溝11と溝15とは芯間で５ｍを測る。また、西に隣接する第25次調査地点では、本溝の西に並行する溝19が確認されている。溝19との芯間距離は５ｍを測り、道の幅を示す可能性を考えたい。溝の方向や存続期間、屋敷地との関係を整理する必要があろう。

溝16（図53・54、図版20）

北区、BSライン南３ｍを東西方向に走行する溝である。撹乱により分断されており、長さは調査区西壁から東へ１ｍと東壁から西３ｍ分を検出した。主軸方向はＥ－10°－Ｓを示す。残りの良い東側で、検出面の標高1.5m、底面の標高0.95ｍを測り、溝の幅0.7m、深さ0.6ｍが残る。埋土は７層に分けた。東端は、隣接する第20次調査Ｃ地点（未報告）において接続する溝が確認されている。西は隣接の第25次調査地点内には認められておらず、調査地点境界付近で収束していると判断される。西側の検出部分は標高1.0ｍまで削平を受けており、溝の幅0.5m、深さ0.2ｍが残る。埋土は８層に分けた。堆積状況から掘り返しの可能性がある。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１／３箱が出土した。土師器椀・杯・皿・鍋が主体で、須恵器、白磁を少量含む。

本遺構の時期は出土遺物から13世紀前半に位置付けられる。

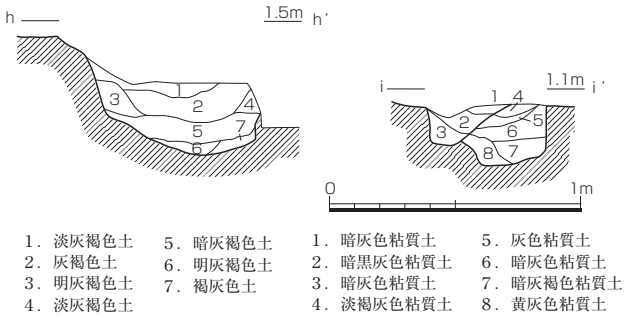
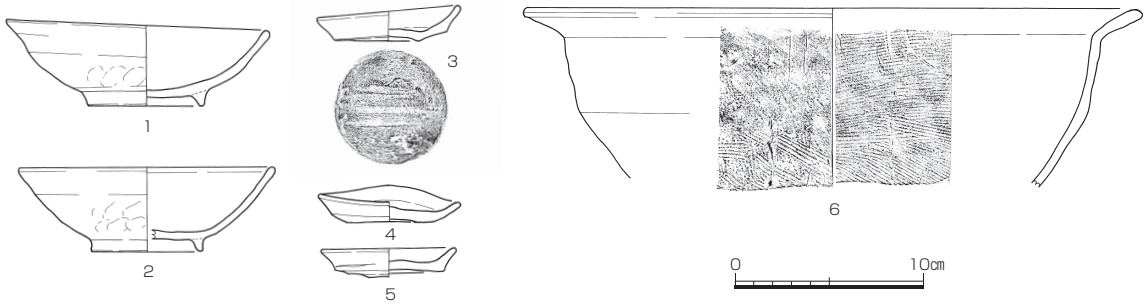


図53　溝16断面（縮尺1/30）



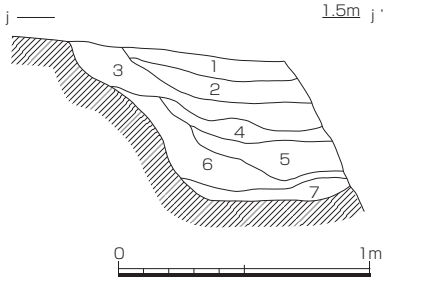
番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	14	6.2	4～4.6	口1/4 高台1/2	内：ナデ？、外：押圧、内外：剥離箇所有り(2次的被熱痕は未確認→焼成時剥離の可能性有)、全体磨滅	(灰)白　2.5Y8/1	2～3㎜礫
2	土師器　椀	13.8	6	4.5	口1/4 高台1/3	内：ナデ･底部押圧･重焼痕、外：押圧･ナデ	(灰)白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫多
3	土師器　皿	7.7	6	1.7～1.9	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ+板目痕、歪み、吉備系土師器椀と共通する胎土	灰白　2.5Y8/2	1～3㎜砂礫
4	土師器　皿	7.2×7.5	4.6	1.1～2	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ後ナデ、歪み大	(灰)白 2.5Y8/1～2	1～2㎜砂礫多
5	土師器　皿	7.2	5.9	1.2～1.5	1/2	回転ナデ、底内：仕上げナデで一部深く窪む、底外：篦キリ(ロクロ回転左)+板目痕、体部に篦キリ工具痕、歪み	(灰)白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
6	土師器　鍋	－	－	－	－	内：口縁ナデ･体部ハケメ(上半横･下半斜め)、外：口縁縦ハケ後押圧＋ナデ･体部ハケメ(上半縦･下半斜め)後押圧顕著･煤付着多､口径は33cm前後～34cmの可能性	(内)浅黄橙(外)鈍黄橙 10YR8/3～4、10YR7/4	1㎜以下砂多

図54　溝16出土遺物（縮尺1/4）

溝15と埋没時期が近いことを考えると、接続していた可能性が高い。

溝17（図55）

西区南西端、CD24区に位置する。24ライン西２ｍに主軸を取る南北方向の溝である。CDライン以南の長さ１ｍほどを検出した。検出面は＜５層＞上面である。同ライン以北は大きな撹乱により確認できない。延長線上にあたる北区でも同方向の溝はないため、調査区北端には伸びない可能性が高く、西区のどこまで存在したかは確認できない。一方、南側については、南に隣接する第11次調査地点で溝41として報告した溝に接続する。



1．茶褐色砂質土
2．灰褐色砂質土（灰色粘土ブロック）
3．灰茶褐色砂質土（Mg）
4．褐灰色粘質土（灰色粘土ブロック）
5．褐灰色土（灰色粘土ブロック）
6．暗茶灰色粘質土（灰色粘土ブロック）
7．暗灰色シルト（黄白色粘土ブロック）

図55　溝17断面（縮尺1/30）

検出面の標高1.4m、底面の標高0.8mを測る。幅1.1m、深さ0.6mが残る。第11次調査地点－溝41も同規模であり、同一遺構として判断した。断面形は上部が開くU字形を呈する。埋土は７層に分けた。ブロックを多く含む灰褐色～暗灰色粘質土を主体とする。

遺物はポリ袋（12号）２袋、土師器椀・皿・杯・鍋等の小片40点が出土した。図示できるものはなかったが、既報告のものも併せ、本遺構の時期は13世紀末～14世紀初頭に位置づけられる。

溝18（図56～61、図版21）

東区、14ライン～15ライン間を南北方向に走行する。撹乱により分断されるが、東区の北端～南端までで確認できた。北は第18次調査地点に同一遺構が確認されており（未報告）、南は第14次調査地点の溝15とした溝に繋がる。構内座標BSライン～CKラインまで90mの長さで確認される南北方向の溝であり、中世前半期の屋敷地の区画として重要な位置にある溝である。

検出面は＜５層＞で、その標高は残りのよい南端で1.15m、ｋ・ｌ断面では0.9mを測る。底面の標高は0.05m～－0.1mを測る。溝の幅は2.7～3.7m、深さは0.75～0.9mが残る。溝の主軸方向は南北でやや異なっており、調査

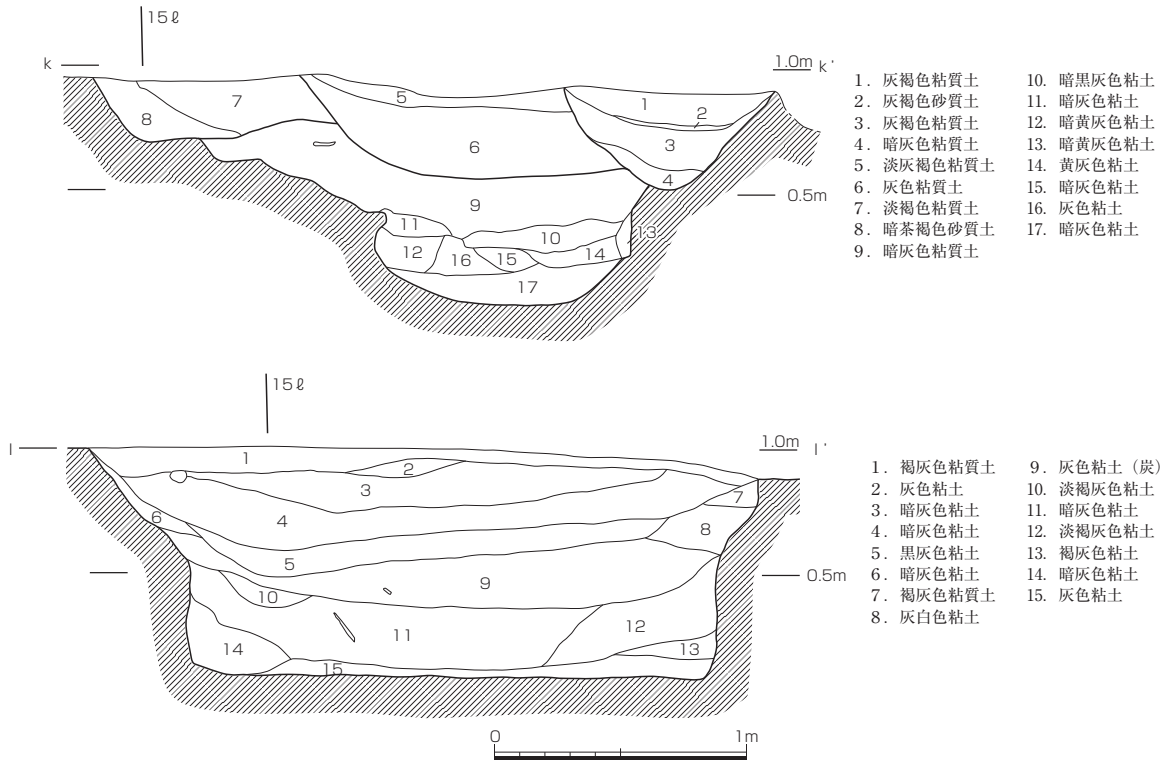


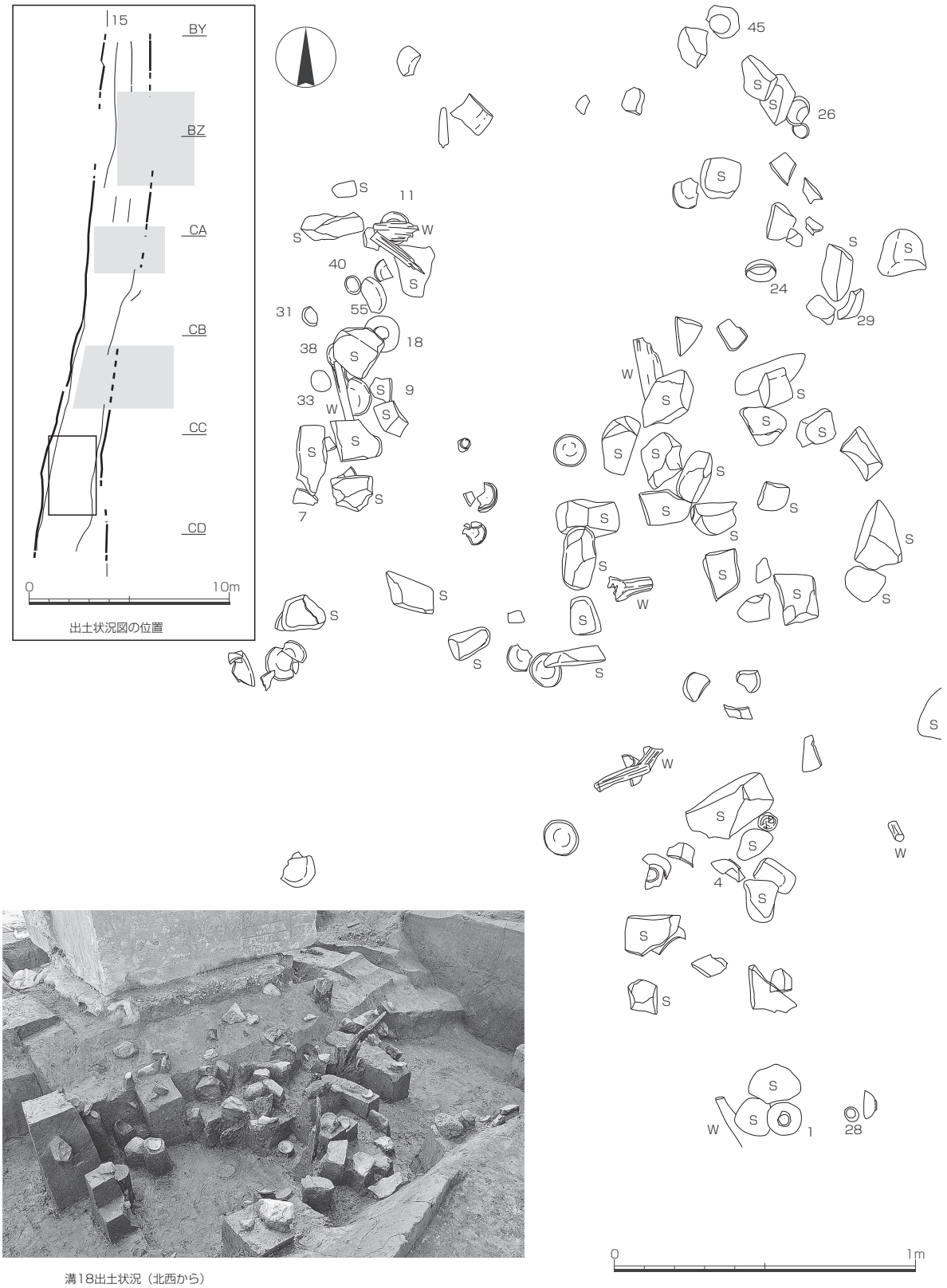
図56　溝18断面（縮尺1/30）

区北端、BYライン～CBライン付近まではN－11.5°－Eを示し、CBライン以南ではN－24°－Eを示す。前述した溝14の方向もCBラインの南付近で方向を変えている。

埋土は15～17層に分けた。北端k断面では、1群：1～4層、2群：5～9層、3群：10～17層に分けた。これに対してi断面では1群は該当なし、2群：1～9層、3群：10～15層に大別される。1群は小規模の溝等の別遺構である可能性があるが、調査時に平面的に捉えることはできなかった。断面の形状は、北端付近では下端の幅0.5mでやや丸みのあるU字状をなすのに対し、i断面以南では底面の幅2.0mを測る箱型の形状を呈しており、形状が異なる。南の箱型の断面形は本調査地点南の第14次調査地点溝15でも認められる。こうした形状の違いは、管理者の違いを示す可能性が考えられる。

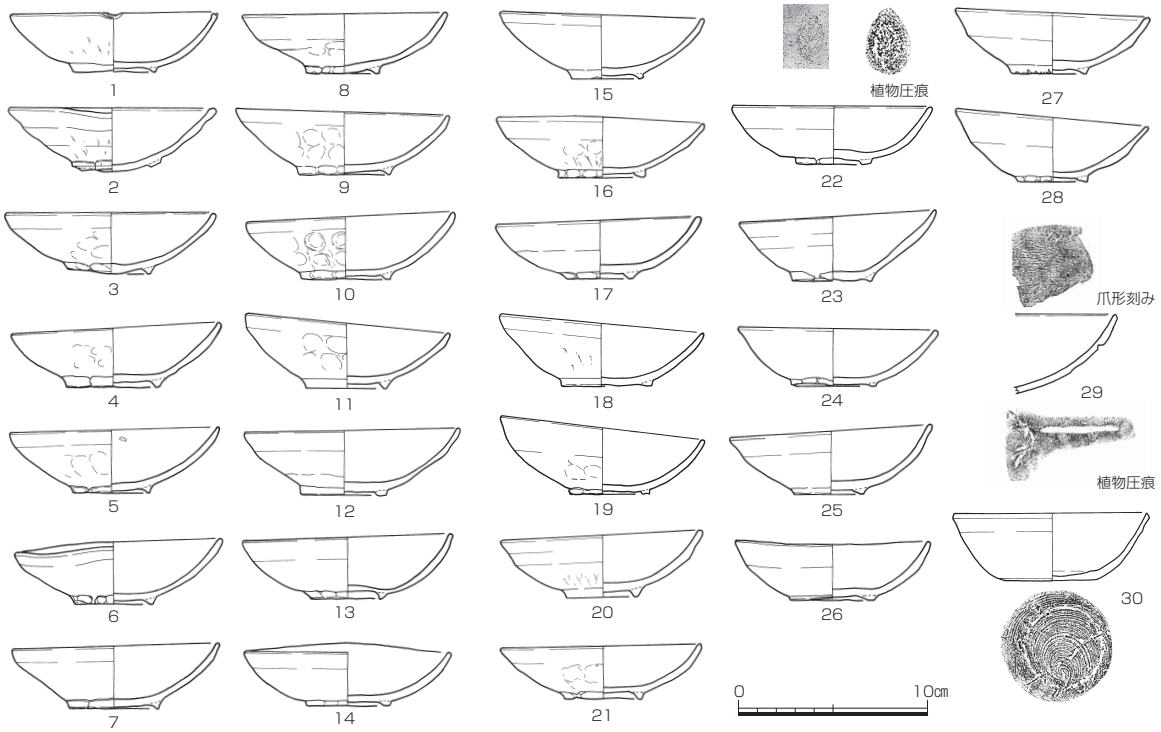
遺物はコンテナ（28ℓ/箱）7箱が出土した。吉備系土師器椀が3.7箱、皿が0.3箱、竈等が1箱、瓦質・土師質鍋が1箱、須恵器・備前焼1箱である。大量の土師器椀は70個体以上が出土し、完形資料が極めて高い比率で認められた。皿についても約20個体が数えられた。そのうち、図58には椀29個体、図59に土師器皿13個体を掲載している。椀・皿は口径で3／4以上、高台で完存～3／4以上残るものの一部を抽出しているが、そういった個体が極端に多いことが注意される。そのほかに土師器鍋、瓦質鍋・羽釜、須恵器こね鉢が認められる。また瓦も破片数で30点以上出土しており、うち1点を掲載した。CC・CD15区での出土状況を図57に示した。椀・皿類がまとまって廃棄された状況である。

上述した土器類のほか、多量の礫も出土している。礫は36個を数える。加工や被熱痕跡は見られず、石材は花崗岩・安山岩・流紋岩等が認められた。拳大のものから、20㎝角大の大振りのものが含まれる。溝の廃絶時に周辺にあるものを廃棄したのであろう。木製品は6点を掲載した（図61）。曲物（W44・45・48・49）のほか、角材・板材が出土している。こうした遺物量の多さは、出土量の多い本時期の溝の中でも際立っている。さらに同一溝にあたる南側の第14次調査地点の溝15と比較しても遺物量は多く、その背景が注目される。



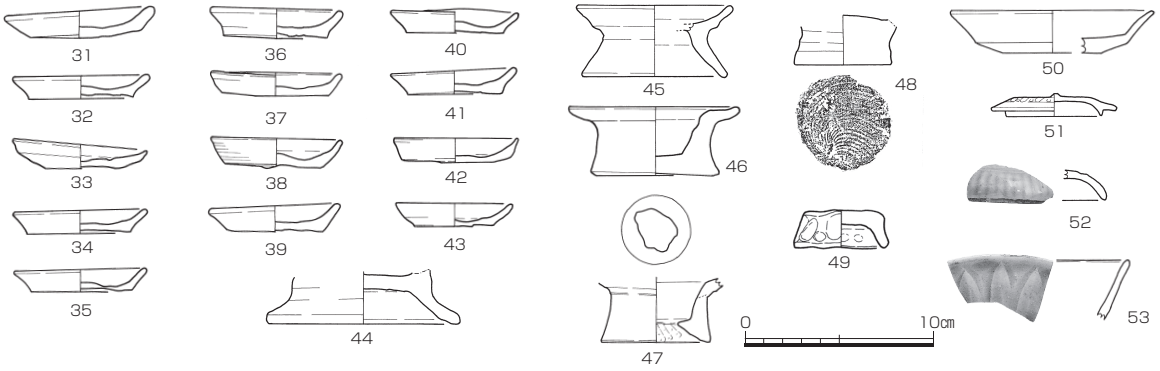
溝18出土状況（北西から）

図57　溝18遺物出土状況（縮尺1/20）



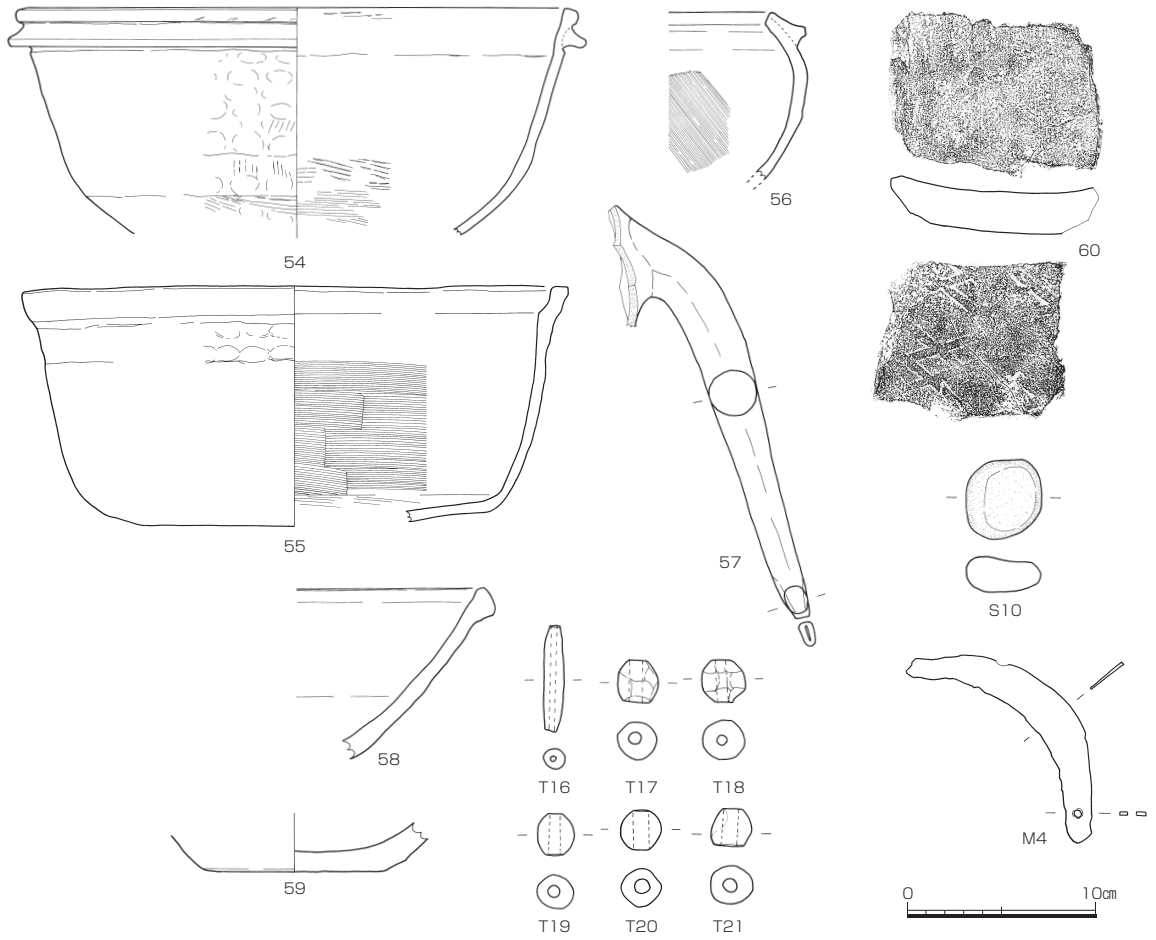
番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	11	4.5	3.15	完存	内：丁寧なナデ・底に重焼痕、外：ナデ・押圧少、高台：粗雑・断面形不安定、口縁4箇所に刻み(幅1cm前後、対角線上に3箇所は内側に打欠きで1か所は外向きの押圧)	灰白　2.5Y8/1～2	1㎜以下砂
2	土師器　椀	11	4.5×4.8	3.4	完存	内：丁寧なナデ、外：ナデ・亀裂多、底：丸底・高台底面よりも突き出る。口縁の一部受け口状？、高台：粘土紐つなぎ明瞭・押圧・端部未調整(植物繊維痕)・粗雑、内外煤	灰白　2.5Y8/1	1㎜以下砂
3	土師器　椀	11.15	4.3	3.1～3.3	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ、底内：押圧・重焼痕(暗色化)、外：押圧・ナデ、押出しで丸みを有す底部、高台：粘土紐のつなぎ目明瞭・押圧	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
4	土師器　椀	11.1	5	2.9～3.6	口1/1 高台3/4	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、高台：粘土紐つなぎ目明瞭	灰白　2.5Y8/1～2	2㎜以下砂礫
5	土師器　椀	11.05	4	3.2～3.5	完存	内：丁寧なナデ、外：押圧・ナデ、高台：粘土紐つなぎ目明瞭、底部丸み、重焼痕、内面にモミ圧痕	灰白　5Y8/1～2	2㎜以下砂礫
6	土師器　椀	11	4.25	2.7～3.5	完存	内：丁寧なナデ、外：ナデ・軽い押圧、高台：粘土紐つなぎ目明瞭・押圧・断面潰れ有、口縁橙色化(重焼痕？)	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
7	土師器　椀	11	4.85	3.2～3.5	口2/3 高台1/1	内：丁寧なナデ・重焼痕(灰色変)、外：ナデ・押圧、高台：粘土紐のつなぎ目明瞭・断面潰れ有	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
8	土師器　椀	10.8×11.1	4	3.1～3.3	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ・底部押圧、外：押圧・ナデ・体部中央付近に篦キリ痕、底部は丸みを有す形状、高台：粘土紐のつなぎ目明瞭・押圧	灰白　2.5Y8/2	5㎜以下砂礫
9	土師器　椀	11.3	4.7	3.2～3.6	口1/1 高台3/4	内：丁寧なナデ・工具痕、外：押圧痕が2段に並ぶ(指紋明瞭)、高台：一部潰れ	灰白　5Y8/1	1～2㎜砂礫
10	土師器　椀	10.8×11.1	4.7	3.1～3.6	ほぼ完存	内：丁寧なナデ・工具痕、外：押圧痕が指の間隔に合わせて2段に並ぶ(指紋明瞭)・亀裂多、底内：粘土貼り付け(幅1cm長2.5cm)、重焼痕(底部灰色化)	灰白　5Y8/1	1～3㎜砂礫
11	土師器　椀	10.8	4.1	3～4	完存	内：丁寧なナデ・工具痕、外：押圧痕が並ぶ、高台：一部潰れ、重焼痕(口縁橙色化)	灰白 10YR・2.5Y8/1	1～3㎜砂礫
12	土師器　椀	11.4	4.6	3.4～3.6	口5/6 高台1/1	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、高台：潰れ有り	灰白　5Y8/1	2㎜以下砂礫
13	土師器　椀	11.15	3.8	3.1～3.5	口1/1 高台3/4	内：丁寧なナデ・工具痕(放射状)・底部は押圧、外：ナデ、高台：粗雑な作り・一部剥落・押圧、重焼痕(底部灰色化・口縁部橙色化)	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
14	土師器　椀	10.2×11	4.4	2.9～3.4	完存	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、高台：潰れ有り・端部未調整(細かい繊維痕)、口縁歪みで楕円形、底部内外橙色化	浅黄橙～灰白 10YR8/3～2	1～3㎜砂礫
15	土師器　椀	10.95	3.9×4.3	3.2～3.6	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、体部外：篦キリ痕残存、重焼痕(底部黒色化・口縁橙色化)	灰白　2.5Y8/1	1㎜以下砂
16	土師器　椀	10.95	4.3×4.6	2.8～3.3	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ、外：押圧・ナデ・下半に亀裂、高台：押圧、重焼痕(底部・口縁部変色)	灰白 10YR8/2、2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
17	土師器　椀	10.9	3.45	2.9～3.3	口8/9 高台5/6	内：丁寧なナデ・工具痕、外：押圧・ナデ、底外：板目痕、高台：粗雑な作り・角張る形状、重焼痕(底内外暗色化)	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
18	土師器　椀	10.8	4.7×5	3～3.8	完存	内：丁寧なナデ・工具痕、外：ナデ・押圧、高台：一部潰れ、重焼痕(底・口縁一部変色)	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
19	土師器　椀	10.8	4.2×4.6	2.9～4.1	口3/4 底1/1	内：丁寧なナデ・工具痕・底に重焼痕、外：押圧、高台：粗雑な作り・端面は未調整で凹凸残	(内)灰黄(外)灰白 2.5Y8/3、2.5Y8/2	2㎜以下砂礫
20	土師器　椀	10.7	3.9	3.1～3.6	口3/4 高台1/1	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧・下半～底に亀裂多、口：橙色化	灰白　10YR8/1～2	1～5㎜灰白色粘土粒多、1㎜前後砂多
21	土師器　椀	10.7	4	2.7～2.9	完存	内：丁寧なナデ、外：押圧・ナデ、高台：粘土紐つなぎ目明瞭	灰白　2.5Y8/1	4㎜以下砂礫
22	土師器　椀	10.55	4	3.1	完存	内：丁寧なナデ、底内：押圧・植物葉の圧痕(1×2cm大)、外：押圧・ナデ、高台：押圧で花弁状の平面形に・粘土紐つなぎ目明瞭・椀の中心からズレた位置・粗雑な作り	(内)浅黄橙(外)灰白 10YR8/3、10YR8/1	1㎜以下砂 赤色粒

図58　溝18出土遺物(1)（縮尺1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
23	土師器　椀	10.2×10.5	4.2×4.8	3～3.8	ほぼ完存	内：丁寧なナデ・工具痕(放射状)、外：ナデ・押圧、高台：粘土紐つなぎ目明瞭・断面潰れ有・椀の中心を外れた位置、口縁歪み	灰白　5Y8/1～2	2㎜以下砂礫
24	土師器　椀	10.6	3.8×4.6	3～3.2	完存	内：丁寧なナデ・工具痕(放射状)・底部は押圧、外：ナデ、高台：押圧・粗雑な作り・楕円形・一部潰れ、重焼痕(底部灰色化・口縁部橙色化)	灰白　5Y8/1	1㎜以下砂
25	土師器　椀	10.1×10.8	3.7	3～3.7	3/4	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、高台：粗雑な作り	灰白　10YR8/2	1㎜以下砂 7㎜礫含む
26	土師器　椀	10.4	4.4	3～3.2	ほぼ完存	内：丁寧なナデ、外：ナデ・押圧、高台：粗雑な作り・一部潰れ、重焼痕(口縁部橙色化)	(内)灰白～淡黄(外)灰白 2.5Y8/2～3、2.5Y8/1	1～3㎜砂礫 赤色粒多
27	土師器　椀	10.4	4.05	3～3.5	口3/4 高台1/1	ナデ・押圧､高台：端部に刻み目が全体の1/2に巡る、口縁内外に煤付着(重ねた状態での被熱)	(内)鈍黄橙(外)灰白 10YR7/3、10YR8/2	0.5㎜以下砂
28	土師器　椀	10.35	3.7～4	3～3.9	口2/3 高台1/1	内：丁寧なナデ・工具痕、外：ナデ、高台：押圧、口外：煤・橙色帯びる	灰白　2.5Y8/1	1～2㎜砂礫
29	土師器　椀	－	－	－	－	内：丁寧なナデ・爪形刻み(幅7㎜の爪形刻みが3列並ぶ)､外：押圧・ナデ・植物圧痕(1cm程度の花部と茎部か？)	灰白　2.5Y8/1～2	3㎜以下砂礫 0.5㎜以下中心
30	須恵器　椀	10.4	4.85	3.6	口1/4 底1/1	回転ナデ、底外：糸キリ、口縁外面付近は黒色化(重焼痕)	白(口縁外面)暗灰 9/ 、3/	0.5㎜以下砂 きめ細かい
31	土師器　Ⅲ	8×8.4	6×6.5	1.1～1.7	口4/5 底1/1	回転ナデ、底外：篦キリ、口縁楕円形、厚手、粗雑な作り、磨滅	灰白　2.5Y8/2	0.5㎜以下砂 赤色粒
32	土師器　Ⅲ	7.3	5.6	1.25	口2/3 底3/4	回転ナデ、底内：押圧・ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	(内)灰黄(外)灰黄 2.5Y7/2、2.5Y6/2	1㎜以下砂
33	土師器　Ⅲ	7.1	5.7×6.4	1～1.6	口3/4 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)後周縁部はナデ、歪み大	鈍黄橙　10YR7/3	0.5㎜以下砂
34	土師器　Ⅲ	7.1	5.55	1.2～1.4	口4/5 底1/1	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	灰黄～暗灰黄 2.5Y6～5/2	1㎜前後砂 3㎜前後礫少
35	土師器　Ⅲ	7.05	5.4	1.1～1.3	口3/4 底5/6	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、内外：一部に二次被熱痕(煤・変色)、内：燈心痕残存か	橙～灰黄褐 2.5YR6/6、10YR6/2	4㎜以下砂礫
36	土師器　Ⅲ	7	5.2×5.5	1.3～1.7	口2/3 底1/1	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	黄灰 2.5Y6～4/1	1～4㎜砂礫
37	土師器　Ⅲ	6.9	5.7	1.1～1.3	口1/2強 底1/1	回転ナデ、底外：ナデ、磨滅	鈍黄橙　10YR7/2	3㎜以下砂礫 0.5～1㎜中心
38	土師器　Ⅲ	6.95	5.2	1.5～1.7	口2/3 底1/1	強い回転ナデ、外底：篦キリ・板目痕、赤色顔料塗布か、磨滅	橙 5YR6/6、7.5YR7/6	きめ細かい 赤色粒少
39	土師器　Ⅲ	6.9	5×5.3	1.2～1.5	完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)・篦キリ痕明瞭	灰黄　2.5Y7/2	2㎜以下砂礫
40	土師器　Ⅲ	6.8	5.05	1.1～1.3	口2/3 底1/1	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	鈍黄橙　10YR7/3	きめ細かい 赤色粒
41	土師器　Ⅲ	6.7	5.05	1.1～1.4	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、篦キリ痕明瞭	灰黄～浅黄 2.5Y7/2～3	1㎜以下砂 白色粘土粒
42	土師器　Ⅲ	6.6	5.8×6.1	1.2～1.4	口1/2 底1/1	回転ナデ、底内：押圧、底外：板目痕、磨滅	鈍黄橙　10YR7/3	3㎜以下砂礫
43	土師器　Ⅲ	6.25	4.3	1.25	ほぼ完存	回転ナデ、底内：仕上げナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)・板目痕、仕上がり良好	灰白　5Y8/1・2	1㎜以下砂
44	土師器 脚台付き杯	－	10.15	－	3/4	回転ナデ、脚台部内面中央には仕上げナデ	灰白～鈍黄橙 10YR8/2、10YR7/3	0.5㎜以下 赤色粒多
45	土師器 脚台付きⅢ	8.2	7.6	3.8	口－ 脚台部1/2	回転ナデ、器台の可能性も残る	灰黄～鈍黄 2.5Y6/2～3	1～4㎜砂礫
46	土師器 器台	8.6～9	6.8	3.7	口1/5 底1/1	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、口径値は残存率が低いためやや不安定	灰白　2.5Y8/1～2	1～2㎜砂礫
47	土師器 器台	－	5.7	－	脚台3/4	回転ナデ、脚台部内：断続的な篦削り、底部中央部には約2×2.5cmの不整形の開口部を形成	鈍黄橙　10YR7/2～3	1㎜以下砂
48	土師器　脚台	－	4.8×5.1	－	底1/1	回転ナデ、底外：糸キリ	灰黄　2.5Y6/2	1㎜前後砂
49	土師器　蓋	5	－	2	3/4	内外面：オサエ、外面：煤、焼塩壺の蓋？	(内)明褐灰7.5YR7/1 (外)浅黄橙7.5YR3/8	細かい
50	青磁　Ⅲ	10.8	5	2.3	1/6	底部下面以外に施釉、内：櫛歯文	(胎)灰白(釉)灰オリーブ 7/ 、7.5Y6/2	精緻
51	青白磁　合子蓋	5.1	－	1.2	口1/4	蓋外面に二重の花弁文を彫り明緑灰色の釉をかける、つまみは小さい方形、内面は灰白色釉を薄く施す、かえり先端のみ露胎	(胎)白9/　(釉・外)明緑灰10G7/1～10GY8/1 (釉・内)灰白2.5GY8/1	精緻
52	青白磁　合子蓋	－	－	－	－	蓋外面に刻花文(詳細不明)、側面には線彫りで菊弁、全体に明緑灰色釉をかける内面は施釉後、口縁部を掻きとり、掻きとりは外面にわずかに及ぶ	(胎)白9/　(釉)明緑灰 10GY8/1	精緻
53	青磁　碗	－	－	－	－	外面に鎬連弁文を彫り、内外両面に明緑灰色釉を厚くかける	(胎)灰白8/　(釉)明緑灰 10GY7/1	精緻

図59　溝18出土遺物(2)（縮尺1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存 －：1/6以下	特　徴	色　調	胎　土
54	土師器　釜	29.8	－	－	口1/3	口：横ナデ、体部内：ハケメ(横位・細かい)＋ナデ、体部下端～底部内：ハケメ(粗い横位)、外：ハケメ(体部は縦位・底部付近は横位)＋押圧多、外面煤付着顕著	鈍黄橙 (内)10YR7/3(外)10YR7/4	4㎜以下砂礫
55	瓦質　鍋	28.9	20	12.8	口7/8 底3/4	口縁：横ナデ、体部～底部内面：ハケメ(横位・細かい)、頸部外面：押圧、外面：厚い煤付着で調整不明	暗灰～黒 3/ 、2/	1㎜前後砂
56	瓦質　羽釜	－	－	－	－	口：横ナデ、内・外面下半：ハケメ(横位・細かい)、外面上半：押圧、外面煤付着顕著	(内)灰白(外)黒褐 8/ 、10YR3/1	3㎜以下砂礫 0.5～1㎜砂多
57	瓦質　羽釜脚	－	－	－	－	脚部、ナデ、鍋内：ハケメ(横位)、脚上半：煤付着多、脚下端面には窪み有り	(脚下半)灰白(上半)暗灰 7/ 、3/	0.5㎜以下砂
58	須恵器　こね鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：下半に利用痕顕著、片口部が僅かに残る。口縁に重焼痕(黒色化)、東播系	灰　(内)N6/　(外)N5/	5㎜以下砂礫 1㎜前後砂多
59	須恵器　こね鉢	－	9.8	－	底1/1	外：下端にケズリ痕、底外：糸キリ痕若干残存、内：使用痕顕著、黒色粒含む、東播系	褐灰　7.5YR5/1・4/1	2㎜以下砂礫 1㎜前後砂多

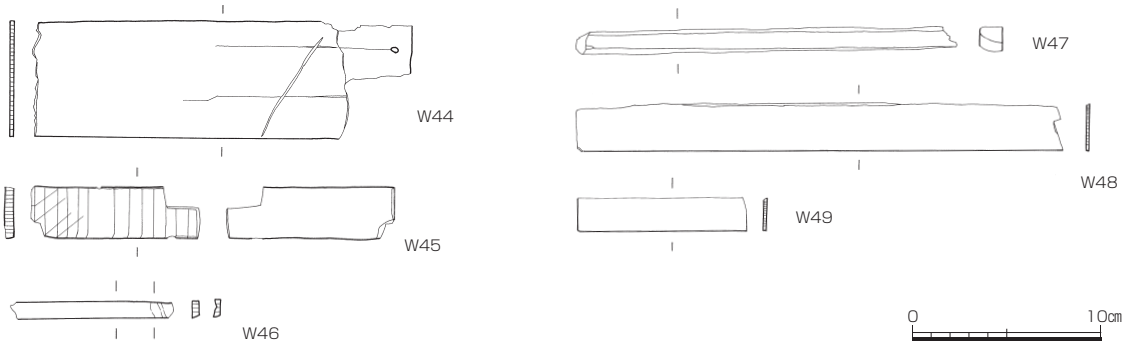
番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
60	須恵質　平瓦	(9.5)	(11.4)	2.1	－	上面：布目痕・ナデ、下面：格子目タタキ、被熱痕：煤付着・一部変色	灰白～灰　8～6/1	1㎜前後砂多

番号	器　種	長：cm	幅：cm	厚：cm	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T16	土錘	10.8	1.1	1	6.5	ほぼ完存	ナデ、穿孔：直径0.3cm、磨滅	淡赤橙、鈍黄橙　2.5YR7/4、10YR7/2	0.5㎜以下砂、赤色粒
T17	土玉	2.3	2.1	2	8.7	完存	ナデ、穿孔：直径0.7cm、面を残す。	鈍黄橙　10YR7/2	0.5㎜以下砂、赤色粒
T18	土玉	1.3	2.4	2.2	9.1	完存	ナデ、穿孔：直径0.6cm、面を残す。	橙～鈍黄橙　7.5YR6/6、10YR7/3	0.5㎜以下砂、赤色粒
T19	土玉	1.2	1.9	1.8	6.2	完存	ナデ、穿孔：直径0.6cm、磨滅	灰白　10YR8/1～2	0.5㎜以下砂
T20	土玉	2.1	2.2	2	7.4	完存	ナデ、穿孔：直径0.7cm、面を残す。	鈍黄橙、一部橙　10YR7/3、7.5YR6/6	0.5㎜以下砂、赤色粒
T21	土玉	2	2.3	2	7.4	完存	ナデ、穿孔：直径0.7 cm、面を残す。	鈍黄橙、～鈍橙　10YR7/2、7.5YR7/4	0.5㎜以下砂

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S10	滑石	4.0	4.1	1.9	51.5	完存	流紋岩	平滑

番号	器種	長：cm(残存値)	幅：cm(残存値)	厚さ：cm	重量：g	残存	特徴
M4	鉄鎌	12.9	2.2	0.2	18.2	ほぼ完存	端部に円孔1カ所、全体に錆付着

図60　溝18出土遺物(3)（縮尺1/4）



番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W44	曲物　側板	5.2	20	0.2	－	柾目	目釘穴1か所、表裏面平滑
W45	曲物　側板	2.7	8.9	0.5	ヒノキ	柾目	表裏面平滑、縦・斜め方向のケビキ
W46	棒状加工材	9.6	0.9	0.4	－	－	表裏面平滑
W47	棒状加工材	20.2	1.3	1.2	－	－	表裏面平滑、両端欠損
W48	曲物　側板	3.6	25.8	0.2	－	柾目	表裏面平滑、上面欠損
W49	曲物　側板	1.8	8.9	0.2	－	柾目	表裏面平滑、上面欠損

図61　溝18出土遺物(4)（縮尺1/4）

本遺構は、大形の区画溝として機能し、出土遺物から13世紀末～14世紀初頭に埋没したものと位置付けられる。これまでの鹿田遺跡の既調査地点においても同時期に溝が埋められ、集落の再編成が行われたことが指摘される(1)。

註

(1)　山本悦世・岩崎志保2017「鹿田遺跡における中世集落の土地区画とその構造」『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊

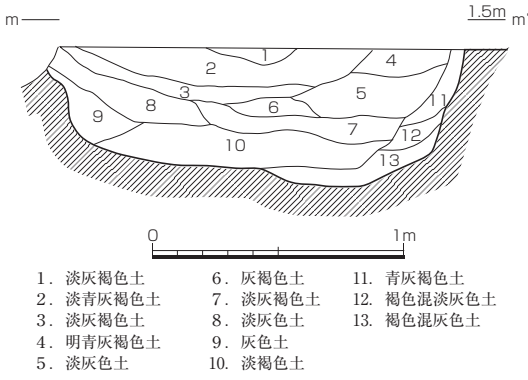


図62　溝19断面（縮尺1/30）

溝19（図62、図版21）

東区南端、CD17区で検出した。南北方向の溝として長さ1.0mを確認した。検出面は＜５層＞上面で、標高は1.35m、底面の標高は0.9mを測る。幅1.6m、深さ0.5mが残る。

埋土は10層に分けた。灰褐色～灰色の粘質土を主体とする。遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。中世前半の土師器椀・皿・鍋小片のほか、竈、須恵器、瓦器の小片も含まれる。

本遺構はCD17区のみの確認で、北側は撹乱により不明、南側の隣接調査地点にも該当する溝が認められない。溝として報告するが土坑の可能性も残す。

本遺構の時期は中世前半の範疇と考えられる。

溝20（図63）

西区北東部、BZ19区で検出した。検出面の標高は0.45m、底面の標高0.32mを測る。検出面からの深さ0.12m、幅0.3mが残る東西方向の溝を長さ２m確認した。主軸方向はＥ－23°－Ｓを示す。埋土は灰色粘質土１層である。

遺物はポリ袋（12号）１／２袋が出土した。土師器椀・杯・皿・鍋・竈の小片が認められる。掲載できるものはないが、椀の特徴から、14世紀初頭頃に位置付けられる。

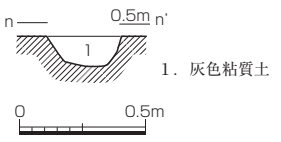


図63　溝20断面（縮尺1/30）

第４節　中世後半～近世の遺構・遺物

本時期に属する遺構は井戸11基、土坑15基、溝５条である（図64）。本報告では室町時代・戦国時代を中世後半、1600年以降、江戸時代を近世とする。中世後半に井戸７基、土坑１基が属する。近世では井戸４基、土坑14基を検出した。溝は、中世後半１条、中世後半～近世に継続する溝４条が確認される。これらの遺構の検出面は＜５＞・＜４＞・＜３＞層にあたる。＜５＞・＜４＞層は中世後半以降の集落の基盤となる造成工層と考えられる。

中世後半の遺構の配置は、北区に井戸３基（井戸15～17）・土坑１基（土坑６）が確認され、井戸の時期と配置から少なくとも２つの屋敷地の存在が窺われる。西区で井戸３基（井戸18～20）、東区で井戸１基（井戸21）が検出され、詳細な時期は不明であるが、これらの井戸を有する屋敷地が想定される。南北方向の溝21・23、東西方向の溝22・24が屋敷地を区画する溝にあたる。

こうした屋敷地の存在は近世にも継続し、北区で４基の井戸（井戸22～25）が確認される。周辺で土坑多数が検出され近世の居住域の様相が示される。この時期には北区に遺構が集中することも注意される。４条の溝にある区画溝は近世にも機能していることが確認される。居住域としての利用は19世紀に入るまで継続する。本調査地点で最も新しい遺構は土坑20（野壺）であり、19世紀前半には本地点が耕作地に変化したことが窺われる。

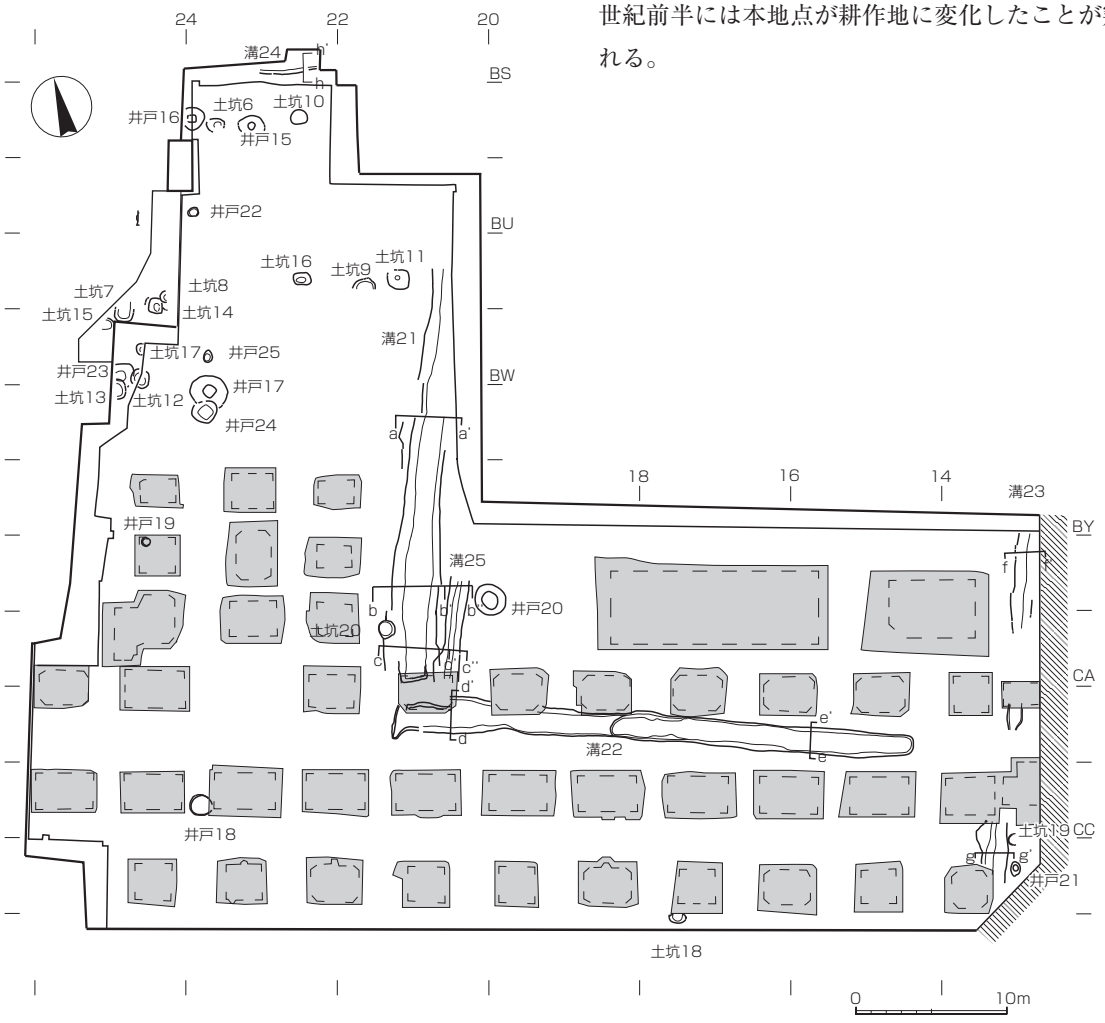


図64　中世後半～近世出土遺構全体図（縮尺1/500）

1．井戸

井戸15（図65～67、図版22）

北区、BS23区に位置する。検出面の標高1.4m、底面の標高－0.75mを測る。上面では東西1.8m×南北1.4mの楕円形、底面では径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さ2.0mに達する。断面形は底面から標高0.4m付近まで筒状をなし、そこから標高1.1mまでは緩やかに開き、より上位は大きく開くＹ字状を呈する。

埋土は12層に分けた。10層以上には粘土ブロックや、混入物の多い土層が確認される。特に９層中には図に示したように大量の礫が含まれる。礫については後述するが、井戸の西側から中央に向かって流れ込んだように出土した。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１／２箱の土器・瓦類と礫143点が出土した。瓦質すり鉢（図66－１）は16世紀後半、備前焼すり鉢（同５・６）・丸瓦（同９）は15世紀後半～16世紀初頭のものである。Ｓ11は豊島石を加工した石臼の破片で全体の１／４が残る。Ｓ13は敲石の可能性がある。出土した礫の大半は図66－Ｓ12・14のように加工や使用痕が見られないものである。うち11点には被熱が認められた。重量で140ｇ～8.4kgと大きさは様々で、

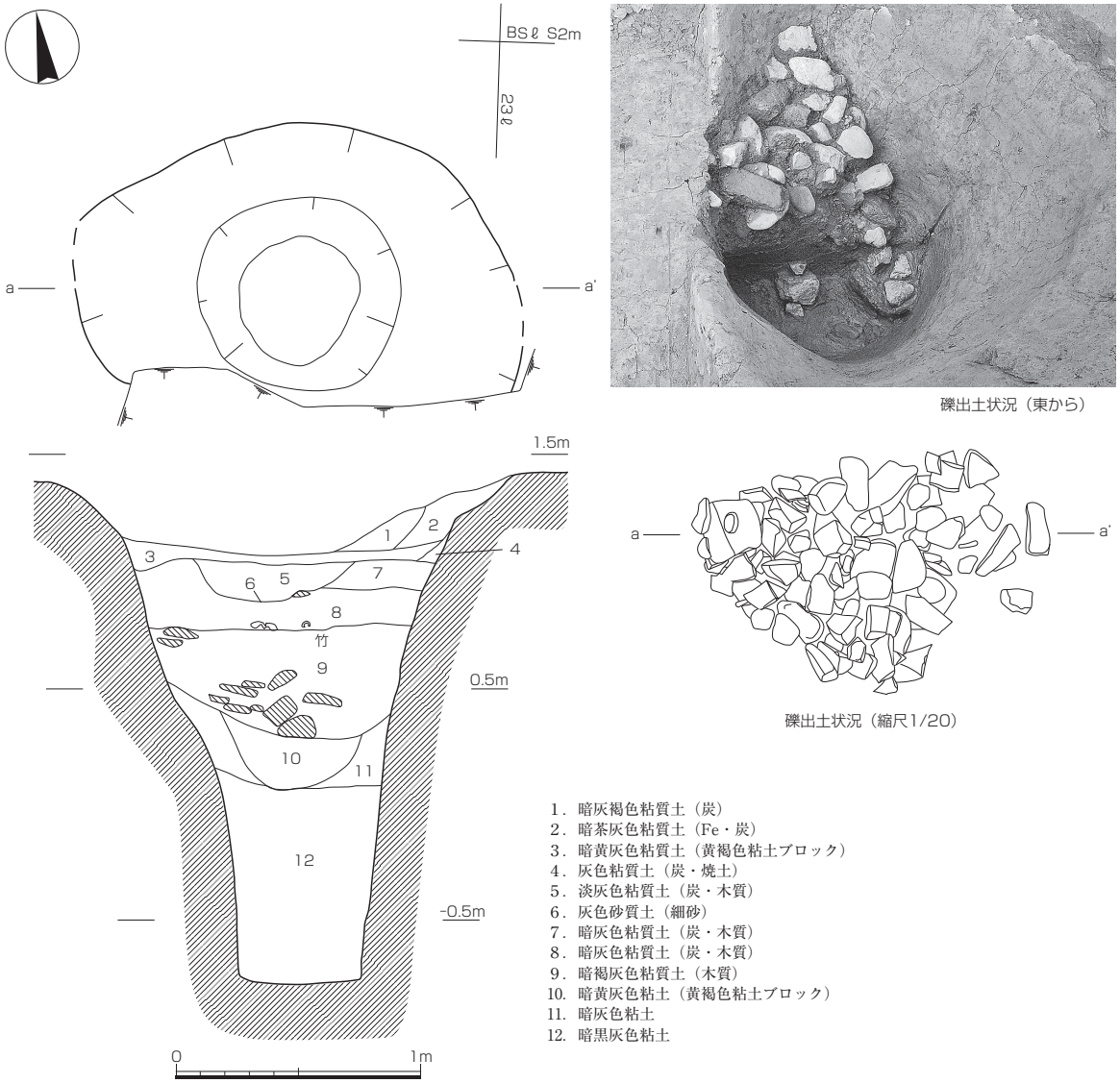
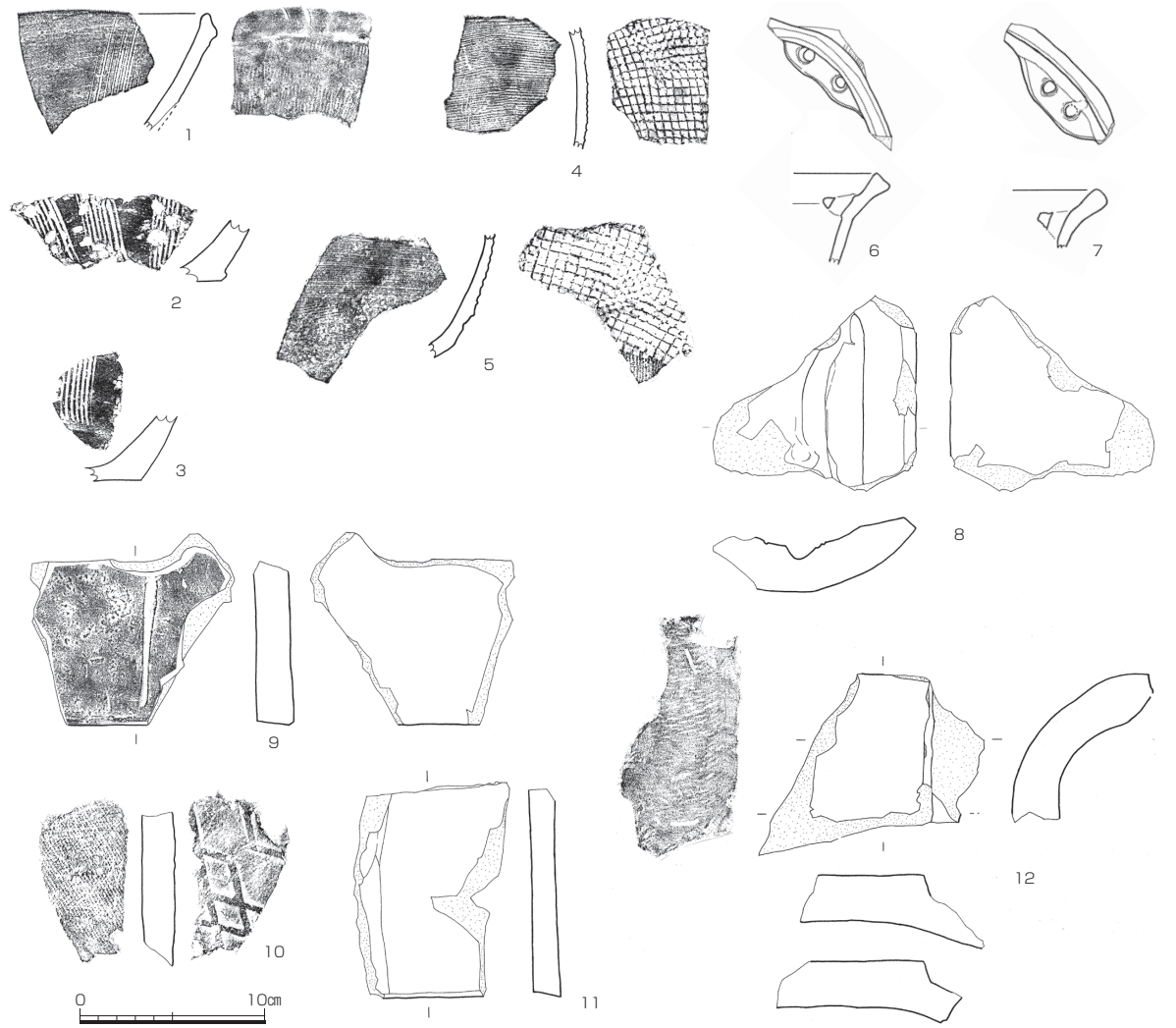


図65　井戸15（縮尺1/30）

石材も多様で規則性は見られない。井戸の上部施設に石組み構造が在った可能性も考えられるが、確定的な材料は得られていない。９層上面では、井戸の中央に竹が立った状態で出土した。標高0.7m付近から長さ15㎝が確認された。これは息抜きの竹として現在にも言い伝えが残る井戸を埋め戻す際の風習であろう。

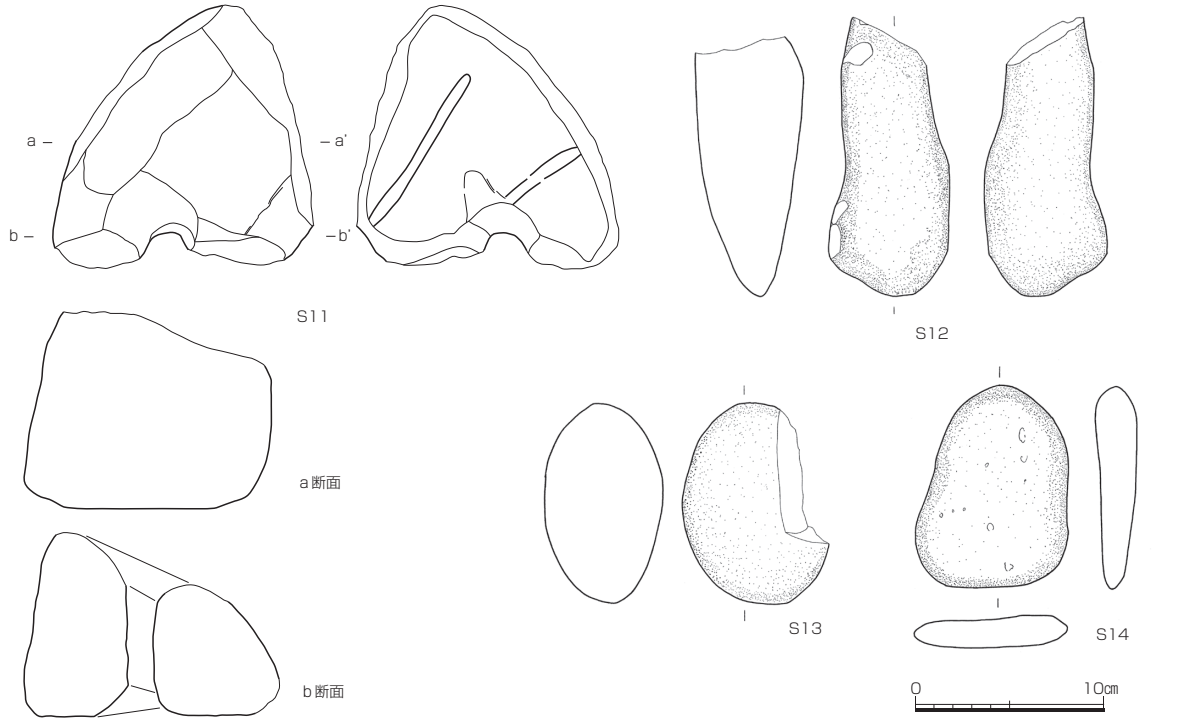
本遺構の時期は16世紀代に比定される。



番号	器　種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	瓦質　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：8本以上1組のスリ目、外：縦ハケ後ナデ	(内)黒　(外)橙、浅黄橙2/、2.5YR6/8、10YR8/4	1㎜以下砂
2	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：8本1組のスリ目・使用痕	暗赤褐　7.5YR3/3	2㎜以下砂礫
3	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：7本1組のスリ目・使用痕	鈍赤　7.5R5/3	4㎜以下砂礫
4	瓦質　甕	－	－	－	－	内：細かい横ナデ、外：格子目タタキ	灰　5/	1㎜以下砂
5	瓦質　甕	－	－	－	－	内：細かい横ナデ、底外：斜めハケ、外：格子目タタキ	(内)暗赤褐　(外)褐灰　5YR3/3 5YR4/1	1㎜以下砂
6	瓦質　鍋	－	－	－	－	内耳(穿孔径0.6㎝)、内：体部細かい横ハケ、外：横ハケ・煤	浅黄橙　7.5YR8/4	1㎜以下砂
7	瓦質　鍋	－	－	－	－	内耳(穿孔径0.8㎝)、外：厚い煤、釣り手部残存	暗灰　3/	1㎜以下砂

番号	器　種	長：cm（残存値）	幅：cm（残存値）	厚：cm（残存値）	残存	特　徴	色　調	胎　土
9	瓦質　丸瓦	(11.1)	(11.7)	2.7	－	凹面：布目痕・コビキB、凸面：ナデ	灰　4/	きめ細かい
10	瓦質　平瓦	(10.6)	(12.2)	2.1	－	凹面：工具痕・煤、被熱	淡橙　5YR8/3	きめ細かい
11	須恵質　平瓦	(8.0)	(4.8)	1.8	－	凹面：布目痕、凸面：格子目タタキ	灰黄　2.5YR7/2	2㎜以下砂
12	瓦質　丸瓦	(13.0)	(6.0)	3	－	凹面：布目痕、凸面：縄目痕	凹面：灰　4/　凸面：灰　6/	1㎜以下砂

図66　井戸15出土遺物(1)（縮尺1/4）



番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S11	石臼	–	13.1	10.5	798	欠損	流紋岩質凝灰角礫岩	豊島石、軸受け・ものいれ部の円孔欠損、臼面に2条の凹線あり
S12	礫	15.3	6.6	6.0	2029.2	欠損	泥岩ホルンフェルス	円滑
S13	敲石？	10.9	8.1	7.4	693.6	一部欠損	流紋岩質凝灰岩	円滑、敲石の可能性
S14	礫	11.0	8.3	2.3	298.7	完存	安山岩	円滑

図67　井戸15出土遺物(2)（縮尺1/4）

井戸16（図68～70、図版23）

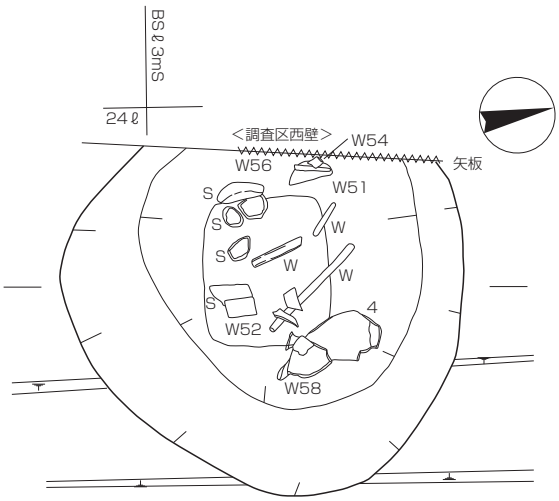
北区西端、BS23・24区に位置する。本遺構の西端は調査区外にあたる。検出面の標高は1.0m、底面の標高は－1.0mを測る。上面形は径1.6m程の円形、底面では一辺0.5mの方形を呈する。検出面からの深さは2.2mを測る。断面の形状は底面から標高0.2mまで1.1mほどの高さで筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くＹ字状を呈する。

埋土は13層に分けた。下半の４層（10～13層）は均質性の高い暗灰～青灰色の粘土層である。１～９層には粘土ブロック・炭化物等の混入物が多い。遺物は13層上面～10層上面の間で多くが確認された。

遺物はコンテナ（28㍑/箱）で２箱が出土した。備前焼、須恵器、瓦のほか、土師器椀・皿・鍋等の中世前半の土器小片多数と、曲物・板材等の木製品や礫６点が含まれる。備前焼甕（図69－４）は口縁～体部上半の大形破片が、壺底部片（同図－２）と折り重なって出土した。甕は15世紀末～16世紀初頭に位置付けられる。瓦片は８点出土し、うち１点を記載した。同図－７は厚みを有する須恵質の平瓦である。木製品は７点を掲載した（図70）。W50は榛椀の高台である。W52～54は桶の側板材の可能性がある。W51は蓋と考えられ、目釘穴の存在から把手がつくものと考えられる。W55は糸巻であろう。

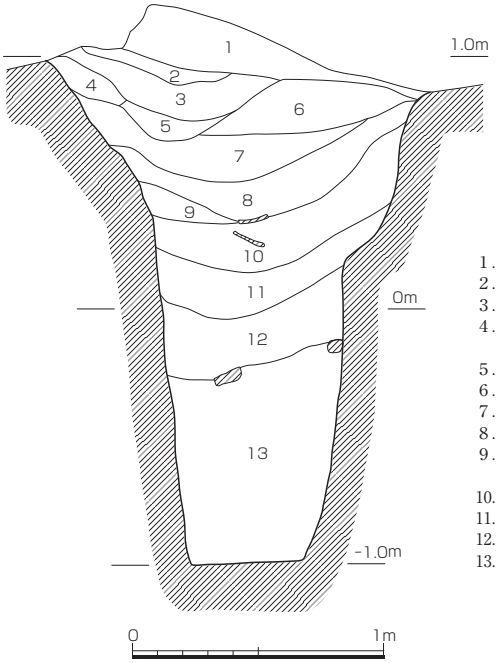
出土状況の記録ができた遺物では、漆椀（図70－W50）が13層上面にあたる標高－0.2m地点で出土した。備前焼甕（図69－4）は12層上面、標高0.2m付近で確認された。また図70－W51・54・56の木製品は、調査区西端の矢板際で確認された。これらも標高0.2m付近の、11層中にあたる。備前焼甕の破片１点は前述の井戸15出土の破片が接合していることから、これらの２基の井戸が近接した時期に廃絶されたことを示す。

礫は５点が出土している。井戸15でみられたような極端な廃棄状況ではない。出土した礫は重量で300ｇ～3.4



遺物出土状況（東から）

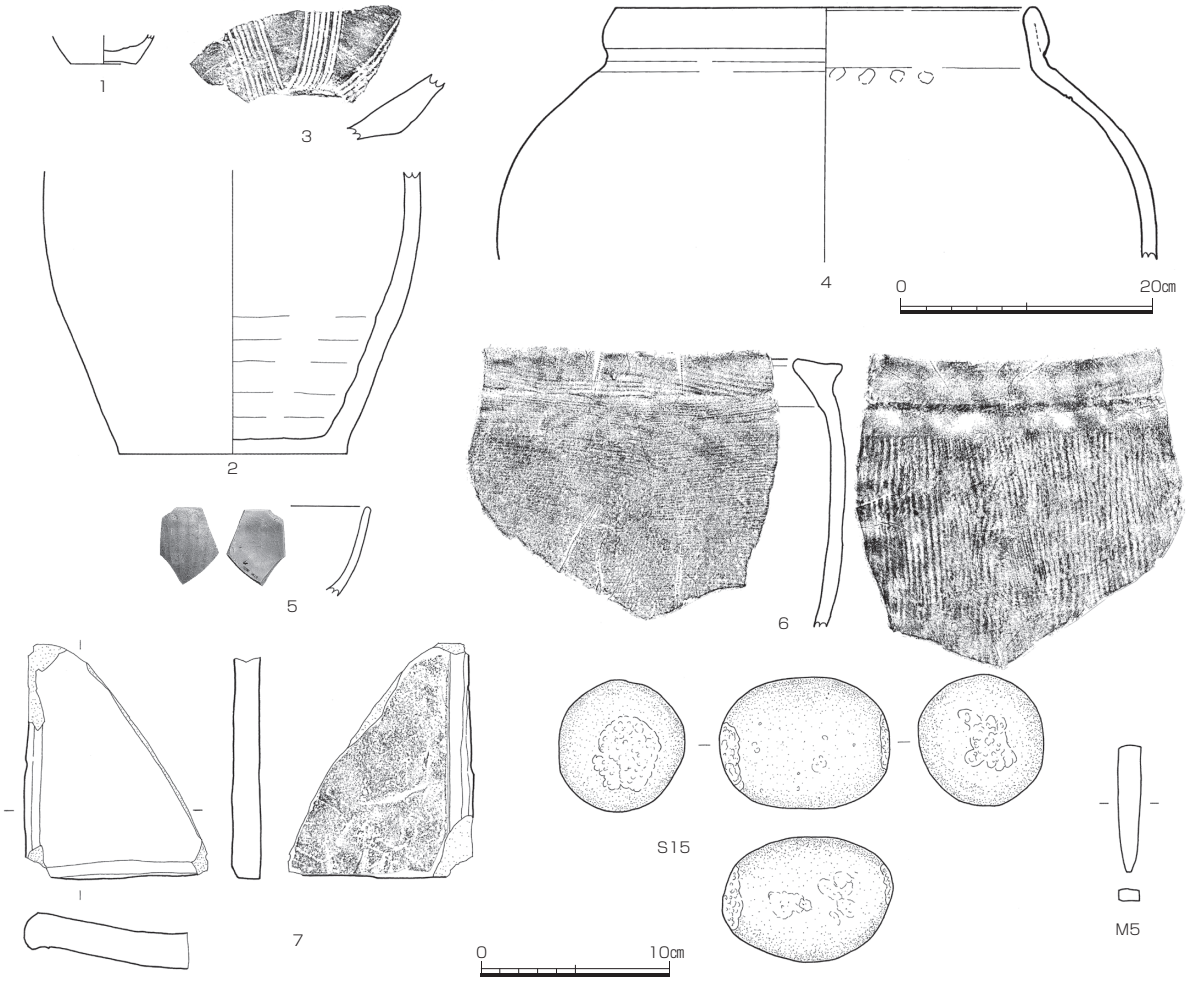
西壁際出土状況（東から）



1．淡緑灰色粘質土（細砂）
2．淡灰色粘質土（炭）
3．灰褐色粘質土（炭・焼土）
4．暗褐灰色粘質土
（黄褐色粘土ブロック）
5．暗灰色粘質土
6．暗灰褐色粘質土
7．暗灰色粘土
8．黒灰色粘土
9．暗灰色粘土
（灰色粘土ブロック）
10．暗灰色粘土
11．暗黒灰色粘土
12．暗灰色粘土
13．暗青灰色粘土

図68　井戸16（縮尺1/30）

kgで、拳大かやや小さめの、様々な大きさの礫が出土している。いずれにも被熱はみられない。このようにみてくると、本井戸では主に13層上面から11層が堆積する間に、甕や曲物等とともに井戸を埋め戻している。中世前半に認められる完形の食器（椀・杯・皿）を置いて埋め戻すような行為は、中世後半には認められないと言えよう。埋め土層中にはブロックや炭が混入するが、炭層をなすような状況ではなく、火を使用した痕跡はみられな



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	備前焼　小壺	－	3.8	－	－	内外面：ナデ、外底面：糸キリ	暗赤褐　7.5YR3/3	1㎜以下の砂
2	備前焼　壺	－	12.8	－	1/6	内外面：ナデ、被熱	(内)暗褐　(外)暗灰 7.5YR3/3、　3/	2㎜以下の砂礫
3	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	内外面：ナデ、スリ目7本1組、磨滅	暗褐　7.5YR3/3	2㎜以下の砂礫
4	備前焼　甕	33.0	－	－	1/2	内面：工具ナデ・ナデ、外面：ナデ、自然釉	極暗褐　　暗褐 7.5YR2/3、7.5YR3/3	3㎜以下の砂礫
5	青磁　碗	－	－	－	－	内面：貫入、外面：連弁文	(胎)灰　(釉)緑灰 6/、7.5GY6/1	緻密
6	土師器　鍋	－	－	－	1/6	内面：口縁部粗い横ハケメ・体部細かい横ハケメ外面：横ナデ・体部縦ハケメ	(内)灰白　(外)褐灰 7/、5YR5/1	3㎜以下の砂礫

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
7	須恵質　平瓦	(12.4)	(9.7)	1.8	－	凹面：布目痕・ナデ、凸面：格子目タタキ	灰白　10Y8/～5GY8/1	2㎜以下砂礫

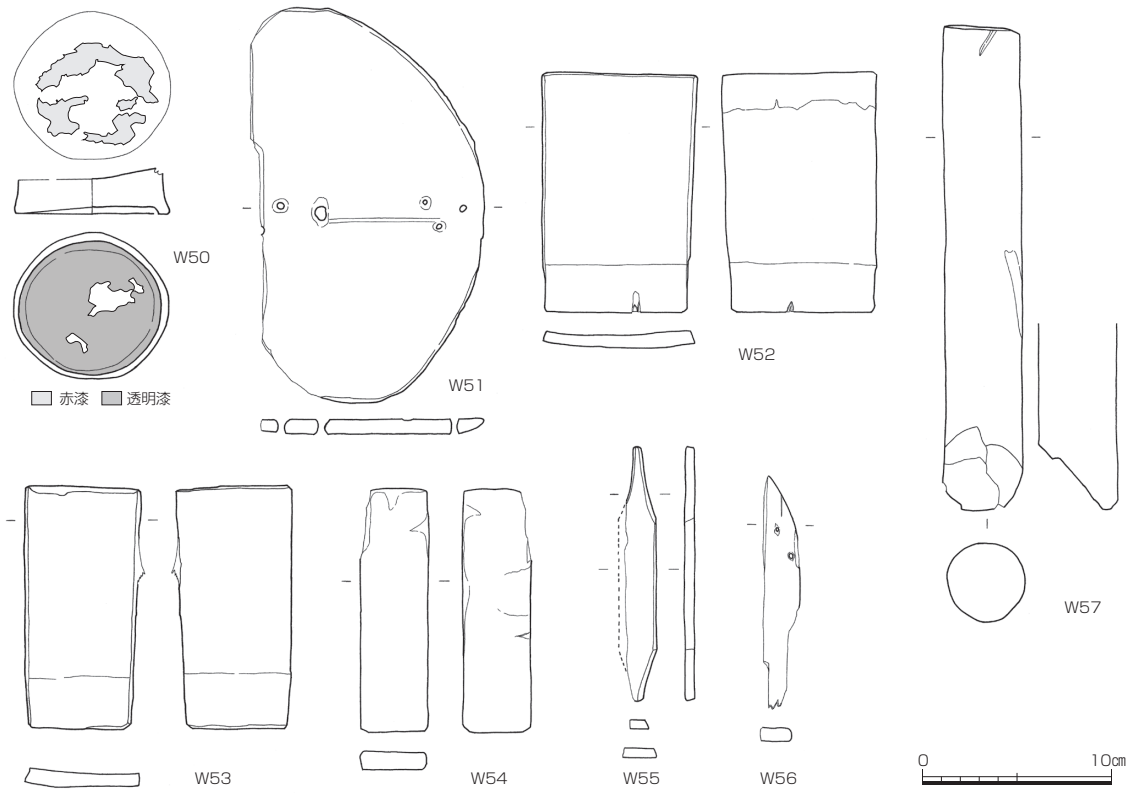
番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特　徴
S15	敲石	9.0	7.0	6.6	610.8	完存	流紋岩質凝灰岩	両端に擦痕

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特　徴
M5	鉄釘	7	1.2	0.7	29.7	上端欠損

図69　井戸16出土遺物(1)（縮尺1/4・1/6）

い。また、瓦や礫が多く出土する特徴も指摘できる。周辺に瓦葺き建物や石積みの横造物が予想される。

本遺構の時期は、出土遺物から16世紀前半に位置付けられよう。



番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚 (cm)	樹種	木取り	特徴
W50	漆塗椀	−	−	−	クリ	−	底径8.4cm、炭粉渋下地の上に透明漆と赤漆を施す、見込み部のみ赤漆残存
W51	蓋	20.8	12.3	0.8	−	−	目釘穴6か所(把手部分)
W52	板材	7.9	8.3	0.7	−	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W53	板材	7.8	0.6	0.8	−	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W54	板材	12.9	3.5	0.9	−	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性
W55	糸巻	13.5	1.6	0.5	−	柾目	両端を尖らすように加工、表裏面平滑
W56	円盤	7.6	1.8	0.7	−	−	表裏面平滑、目釘穴2か所
W57	杭	26.4	4.2	4.2	アカマツ	丸木	先端部片側の手斧痕

図70　井戸16出土遺物(2)（縮尺1/4）

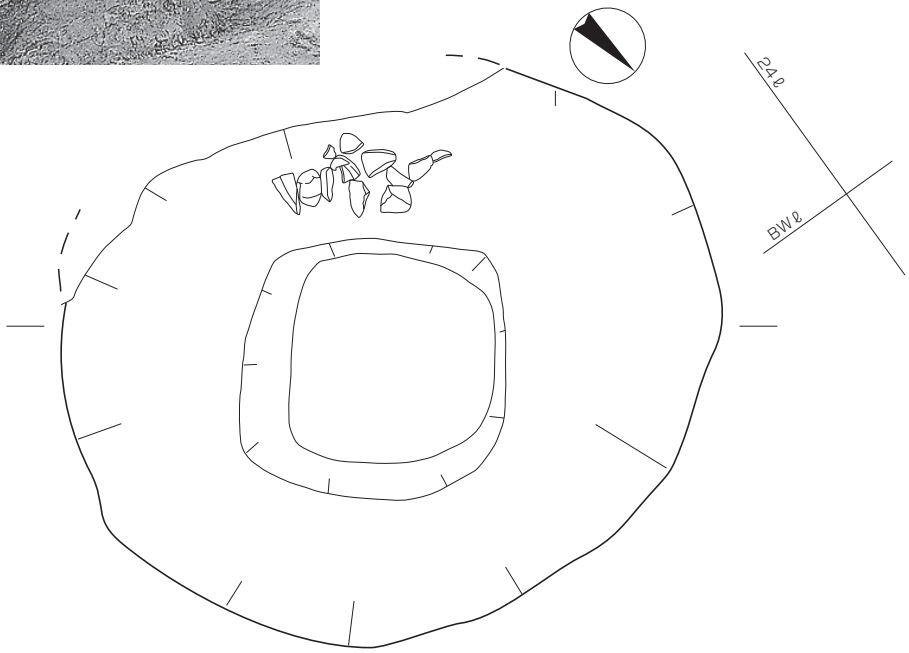
井戸17（図71・72、図版24）

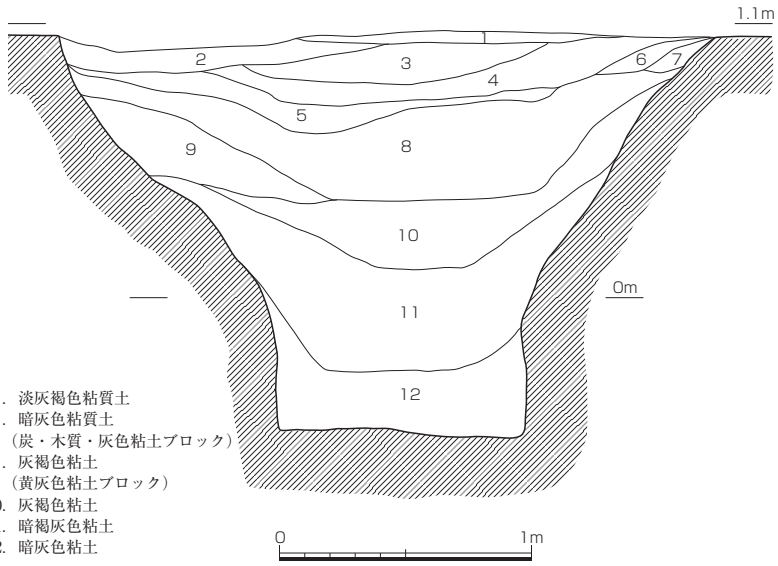
北区南部、BV・BW23区に位置する。南端を近世の井戸24に切られ、北側に位置する中世前半の井戸９を切って構築されている。検出面の標高は1.05m、底面の標高は－0.5mを測る。上面は東西2.4m、南北2.5mの歪な方形、底面は一辺1.0mの方形を呈する。上面形は方形の角を面取りし八角形を意識したようにも捉えられる。検出面からの深さは1.6mを測る。断面形は底面から標高０mまで筒状をなし、それより上位は緩やかに開くＹ字形を呈する。底面が方形を呈することから、使用時には枠が設置されていた可能性も考えられる。

埋土は12層に分けた。１～９層には炭や粘土ブロックなどの混入物が目立つ。10～12層は均質な粘土層である。炭の混入は見られるが、それほど顕著でない。11層中に当たるレベルで、多数の礫が確認された。井戸の南側からなだれ込むように検出された。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１／２箱の土器類と礫17点が出土した。青磁碗、備前焼壺、瓦のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋・竈等の小片多数が出土した。中世前半の遺構を切っていることにも起因する。図72－２の備前焼壺は15世紀代に比定される。同図－３の軒平瓦・同図－４の丸瓦にはいずれも被熱が認められる。礫は南縁から中央に向かって流れ込むように出土した。これら17点の礫には被熱や加工は認められない。大きさ・石材ともばらばらであり規則性は認められない。

石出土状況（西から）





1．褐灰色粘質土
2．暗黄灰色粘質土
（黄褐色粘土ブロック・炭）
3．灰褐色粘質土（炭）
4．暗灰色粘質土（炭）
5．暗灰色粘質土
（炭・木質・灰色粘土ブロック）
6．暗黄褐灰色粘質土（炭・Fe）
7．淡灰褐色粘質土
8．暗灰色粘質土
（炭・木質・灰色粘土ブロック）
9．灰褐色粘土
（黄灰色粘土ブロック）
10．灰褐色粘土
11．暗褐灰色粘土
12．暗灰色粘土

図71　井戸17（縮尺1/30）

本遺構の時期は、出土遺物から、15世紀末～16世紀前半に位置づけられよう。

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	青磁・碗	−	5.8	−	1/4	内：貫入、外：連弁文、全釉畳付高台端部のみ釉剥ぎ	(胎)灰白　(釉)鈍黄2.5Y7/1　2.5YR4/6	緻密
2	備前焼　壺	−	−	−	−	回転ナデ、内：自然釉	(内)赤黒　(外)赤黒7.5YR2/1　7.5YR1.7/1	1㎜以下砂

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W58	板材	9.6	6.2	0.9	−	板目	表裏面平滑、桶の側板の可能性

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	残存	特　徴	色　調	胎　土
3	須恵質　軒平瓦	(8.2)	(15.2)	4.9	−	凹面：布目痕・ナデ、凸面ナデ、唐草文、被熱、厚手	灰白　7.5YR8/2	2㎜以下砂礫
4	瓦質　丸瓦	(10.4)	(10.8)	3.7	−	凹面：布目痕、凸面ナデ、被熱、厚手	凹面：灰褐　凸面：鈍黄橙 7.5YR6/2、　10YR7/2	2㎜以下砂礫
5	瓦質　平瓦	(10.9)	(8.9)	1.6	−	ナデ	灰　6/	1㎜以下砂

図72　井戸17出土遺物（縮尺1/4）

井戸18（図73・74、図版25）

西区南部、CB23区に位置する。上部は攪乱により破壊されており、検出面の標高は0.65～0.7m、底面の標高は0.08mを測る。上面では径1.3mの円形、底面で径1.2mの円形を呈する。検出面からの深さ0.5mが残る。東縁はコンクリート基礎の下で確認した。

埋土は５層に分けた。暗褐色粘土を主体とし、いずれにも粘土ブロックを含む。

遺物はポリ袋（12号）２袋が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小片を多数含み、須恵器、備前焼の小片が認められる。土器類はいずれも

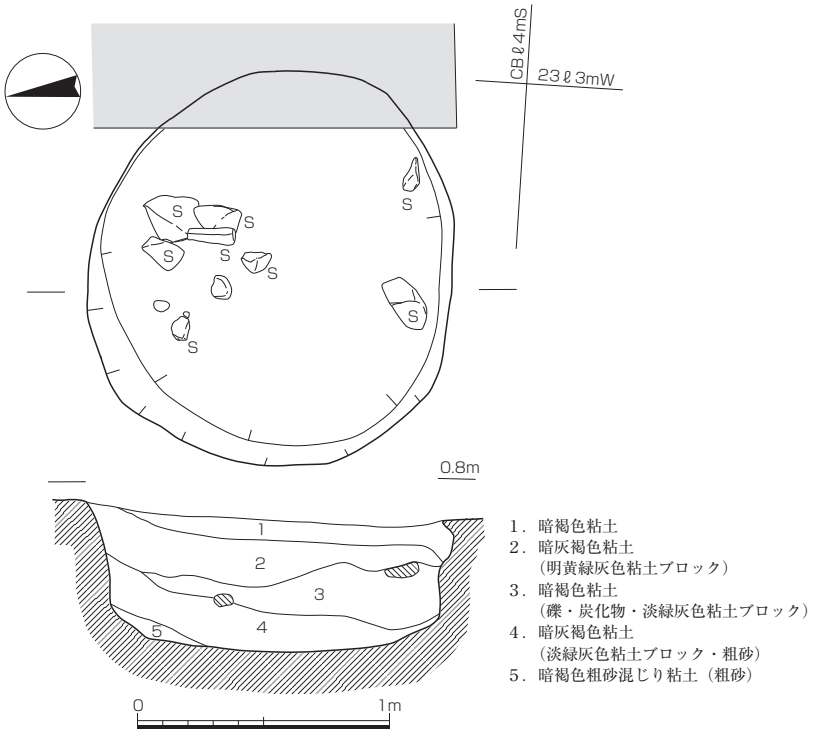
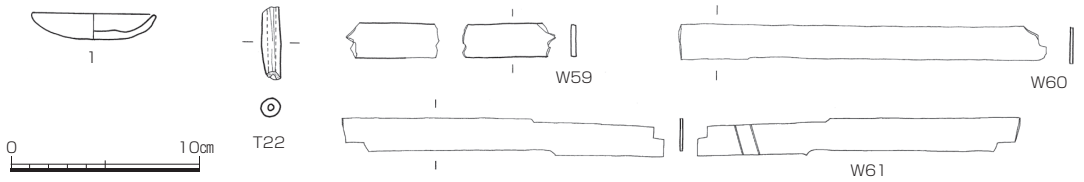


図73　井戸18（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	－	2.8	1.3	1	磨滅、回転ナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）	鈍黄橙　10YR7/4	0.5㎜以下砂赤色粒

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T22	土師器　土錘	（3.9）	1	1	4.4	一部欠損	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4cm	きめ細かい	赤黒 7.5YR2/1

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W59	曲物　側板	2.1	5.6	0.3	スギ	柾目	表裏面平滑
W60	曲物　側板	1.9	19.7	0.15	スギ	柾目	表裏面平滑
W61	曲物　側板	2	17.1	0.1	スギ	柾目	表裏面平滑、斜め方向のケビキ

図74　井戸18出土遺物（縮尺1/4）

小片で時期の決め手にかけることから、出土したマツボックリについて年代測定を実施した（第４章第５節参照）。そのほかに、土錘１点・曲物の側板の一部と考えられる木製品等が出土している（図74－W59～61）。

本遺構の時期は、年代測定結果から、15世紀後半に位置付けられる。

井戸19（図75）

西区北端、BY24区に位置する。西区の北西端の基礎の下で確認した。本遺構の東側は基礎下に打ち込まれているパイル杭の下にあたる。

検出面の標高は0.5m、底面の標高は－0.3mを測る。上面では径0.6mの円形、底面では径0.5mの円形を呈する。検出面からの深さ0.8mが残る。筒状をなす井戸の下部構造のみが確認された状況である。

埋土は６層に分けた。３層は暗灰色を呈する粘質土で植物質を含む。そのほかは灰色を基調とする粘質土が堆積する。湧水砂層に達しており、湧水が確認された。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期については遺物や検出面からは判断できる材料がないため弥生時代～近世に位置付けておくこととする。

井戸20（図76、図版26）

西区北西部、BY・BZ19・20区に位置する。＜４層＞で検出した。検出面の標高は1.6m、底面の標高は－0.3mを測る。上面は径2.2mの円形、底面では東西1.1m、南北1.2mの楕円形を呈する。検出面からの深さは1.8mを測る。断面形は底面から標高0.25m付近まで内側にやや傾斜して立ち上がり、その地点から上位は緩やかに広がるＹ字状をなしている。

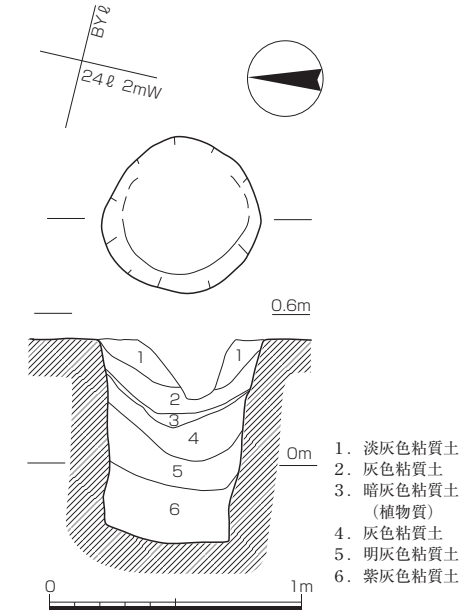


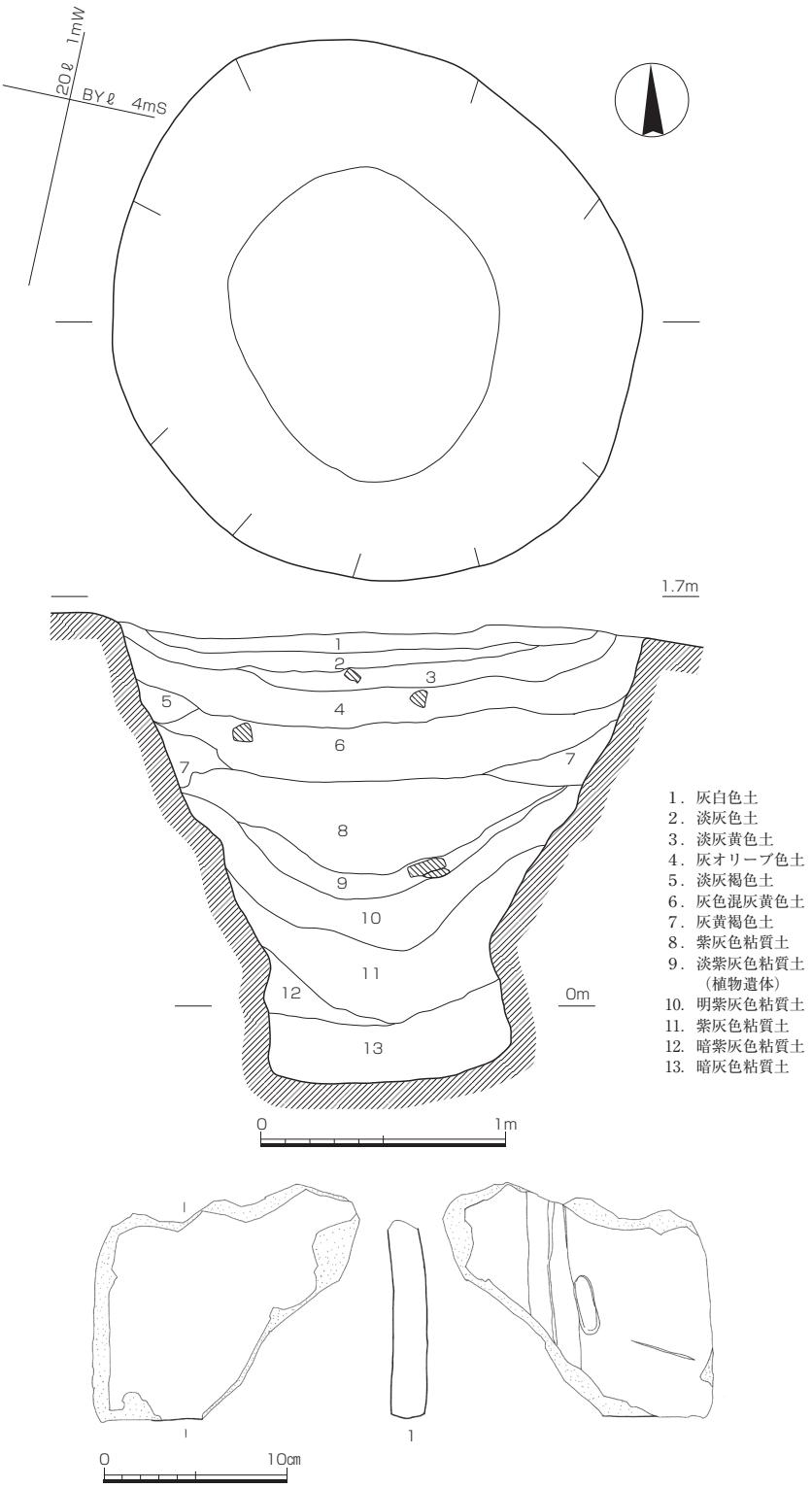
図75　井戸19（縮尺1/30）

埋土は13層に分けた。１群：１～３層、２群：４～９層、３群：10～13層の３群に大別できる。３群は紫灰色～暗灰色を呈する粘質土が主体である。10層には青灰色粘土ブロックを混入し、９層には植物遺体が認められた。２群はいずれも粘土ブロックを多く含む土層である。灰色土が主体となる１群は流入土と考えられる。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１／２箱が出土した。わずかな備前焼甕・すり鉢の小片のほか、中世前半の土師質土器椀・杯・皿・鍋等の小・細片多数が認められる。図76－１は須恵質の平瓦で、被熱している。

このほかに礫50点が出土した。礫は２群中から出土しており、井戸を埋め戻す際に多数の礫が廃棄されていることがわかる。重量100ｇ～2.8kgのものまで大小あり、規則性はない。加工、被熱は認められない。

本遺構の時期は検土面から中世後半と考えられる。



番号	器　種	長：cm（残存値）	幅：cm（残存値）	厚：cm（残存値）	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	須恵質　平瓦	（12.6）	（14.5）	1.7	－	ナデ、被熱	凹面：橙 2.5YR6/8、凸面：橙 2.5YR6/6	1㎜以下砂

図76　井戸20・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

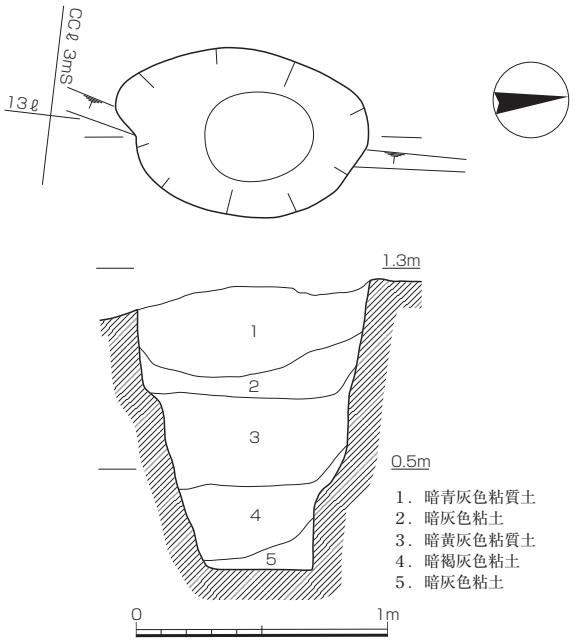


図77　井戸21（縮尺1/30）

井戸21（図77、図版27）

東区南東端、CC13区に位置する。検出面の標高は1.25m、底面の標高は0.1mを測る。上面では1.0m×0.7mの南北に主軸を持つ楕円形を、底面では径0.4mの円形を呈する。検出面からの深さは1.1mが残る。

埋土は５層に分けた。暗灰色粘質土を主体とする。特徴的な混入物は見られない。

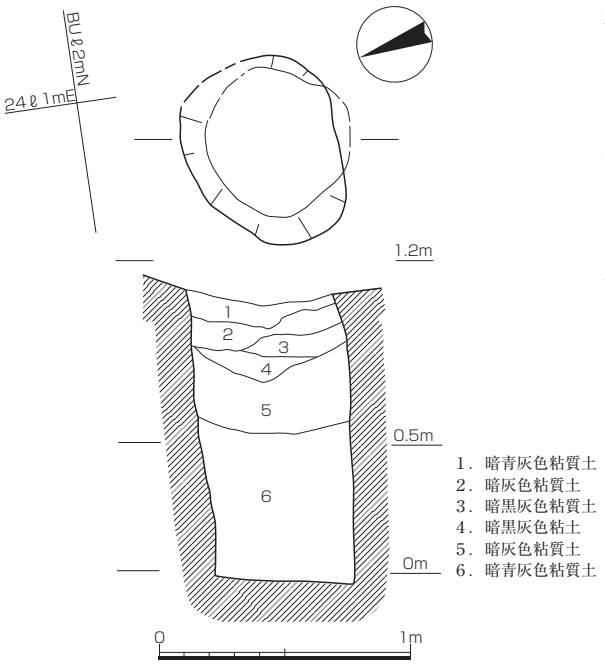
遺物はわずかに中世前半の土師器の小片２点が出土したのみである。

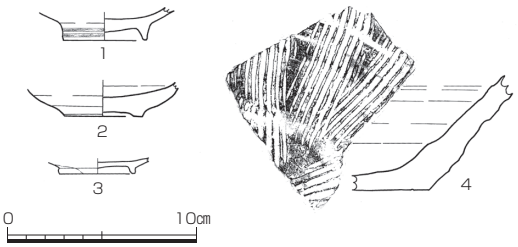
本遺構については湧水は確認されず、底面レベルもそれほど低くない。後述する井戸22・24など中世後半～近世にかけて、小規模な井戸の例を参考に、井戸として報告することとする。時期については、遺物が希薄であり不明であるが、中世の範疇でとらえておく。

井戸22（図78・79、図版28、カラー図版１・２）

北区北西部、BT23区に位置する。検出レベルは標高1.05mを測る。平面形は概ね円形を呈する。上面では0.7×0.75m、下面では径0.55～0.6mの規模である。底面レベルは標高－0.1m、深さは1.1mを測る。埋土は６枚に分けた。１～４層は、暗青灰色～暗黒灰色の粘質土で、埋め戻しの単位を示すものと理解される。５・６層は粘性が強く、底面付近は湧水砂層由来の砂を混入する。

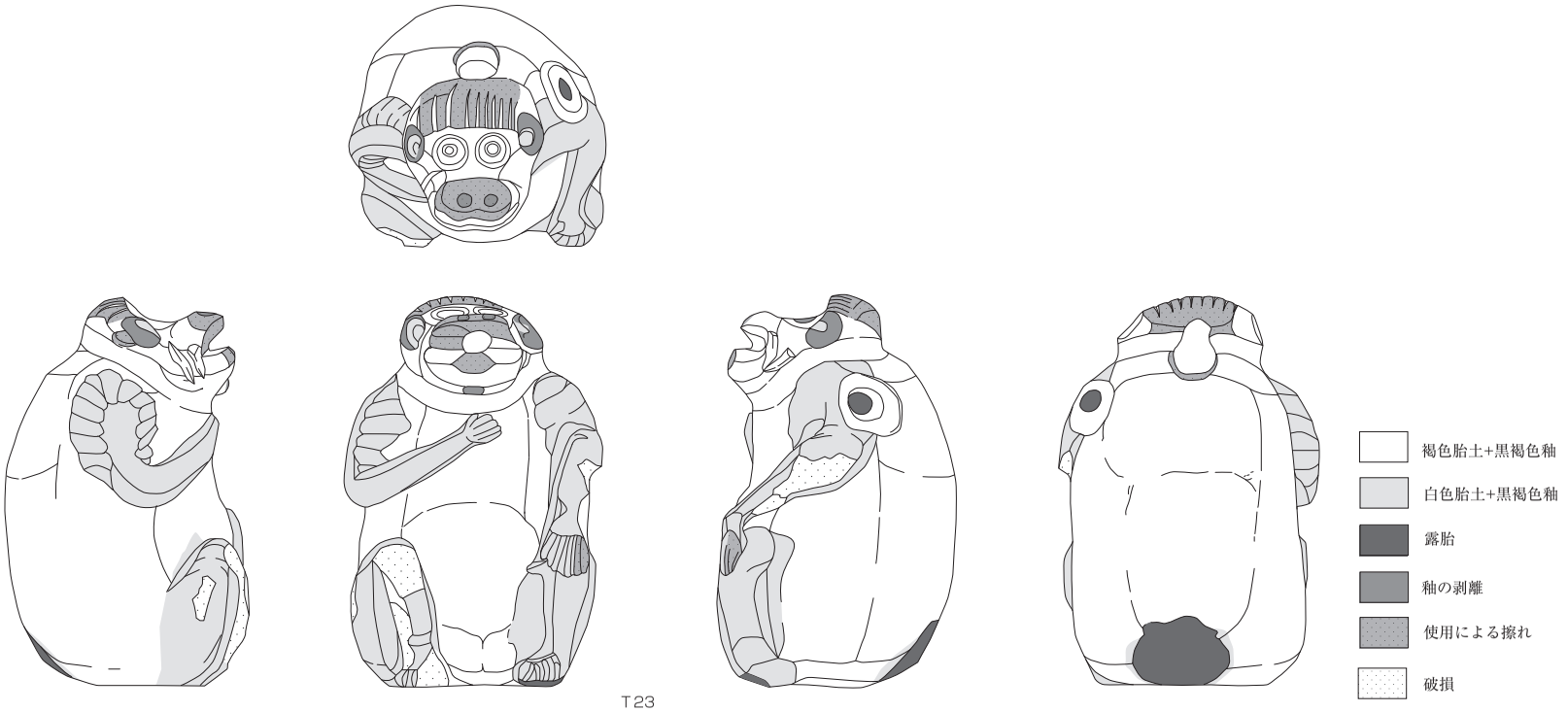
出土遺物は備前焼や陶磁器片10点（ポリ袋１／２）とわずかであった。陶磁器（図78－１～４）のほか、備前焼すり鉢底部小片、土師器小片が含まれる。図79－T23は京焼の猿形水滴である。完形で、うずくまるニホンザルを象る。つくりの詳細は観察表にまとめた。





番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	中国産磁器　碗	－	4.9	－	完存	漳州窯、内外面全釉、畳付のみ釉ケズリ、畳付砂付着、17世紀初頭	(胎)白9/　(釉)灰白8/	緻密
2	肥前陶器　Ⅲ	－	4.4	－	完存	内：胎土目痕3か所、施釉、外：露胎、17世紀前半	(胎)明赤褐５YR/5/6(釉)灰白　５YR８	緻密
3	京焼系陶器　碗	－	5.3	－	1/2	内：施釉、高台・高台内露胎	(胎)灰白　10YR8/2(釉)灰白　10YR8/1	1㎜砂
4	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：スリ目8本1組	鈍い赤7.5R4/4	1㎜以下砂

図78　井戸22・出土遺物(1)（縮尺1/30・1/4）



番号	器　種	高さ：cm	幅：cm	奥行：cm	残存	特　徴	色　調	胎土
1	陶器 水滴	5.3	3.5	3.2	ほぼ完存	猿形、細く丁寧に仕上げられる。完形のため器壁厚さは不明、上方を見上げ、膝をおってしゃがんだ猿の形状を呈す。左手は左膝上に、右手は左胸上にあてる。注水口：背中側の頸部に直径6㎜の円孔、注ぎ口：開口中央部に直径約4㎜の円孔、顔～頭部：目と鼻は竹管状と刺突によって描かれる。頭髪状の線刻が10条(1～2㎜間隔)、口元の両側に各２条の小さな刻み目が顔の表情を際立たせる。小さな両耳と手足部分はボディとは異なる胎土で形成し貼付けられる。耳部では耳の穴も表現される。手のボディへの貼り付けに際しては、肩部～二の腕部分に細かな篦調整痕が巡る。手足の指は沈線で細かく描かれる。釉薬の剥がれ落ちから剥落の可能性が高いのが顎下の小さな部分(髭？)と尻尾であり手足などと同様の胎土で貼付けられていた可能性が高い。胴部は腹部がやや膨れ気味となる。底面は中央部が円形に若干窪む(直径約1cm)。側面は肘の下部がやや直線的で面を有しており使用時の指が当てやすい。注水口･注ぎ口周囲(頭髪部･鼻･唇周辺)には使用痕が明瞭に残る(明らかな釉薬の剥落)。 注水口等の内部～底面を含む全面施釉で色調はボディと貼付け部位で異なる。全体に厚みをもつ釉薬によってボディは濃い飴色にそれ以外は薄い飴色～黄白色を帯びたオリーブ色の艶やかな仕上がりを呈す。左肩部の腕との境目に直径3㎜の円形部が露胎となり周囲直径8㎜に釉薬の厚さが増す。	(胎土)ボディ：鈍接褐　5YR5/3 その他：白　9/ (釉薬)ボディ：黒褐　10YR2/2 その他：淡黄～鈍黄～褐 2.5Y8/3,2.5Y6/4,　10YR4/6	きめ細かい

図79　井戸22出土遺物(2)（縮尺1/1）

本資料は軟質施釉陶器と称される初期の京焼にあたるもので、体部と腕の胎土を作り分ける技法は16世紀末、鉛釉を施す例も同時期から新たに発展するものである。本資料はそうした技法で製作されており、その年代は1610年頃である(1)。いわば当時の最新技術による優品といえよう。

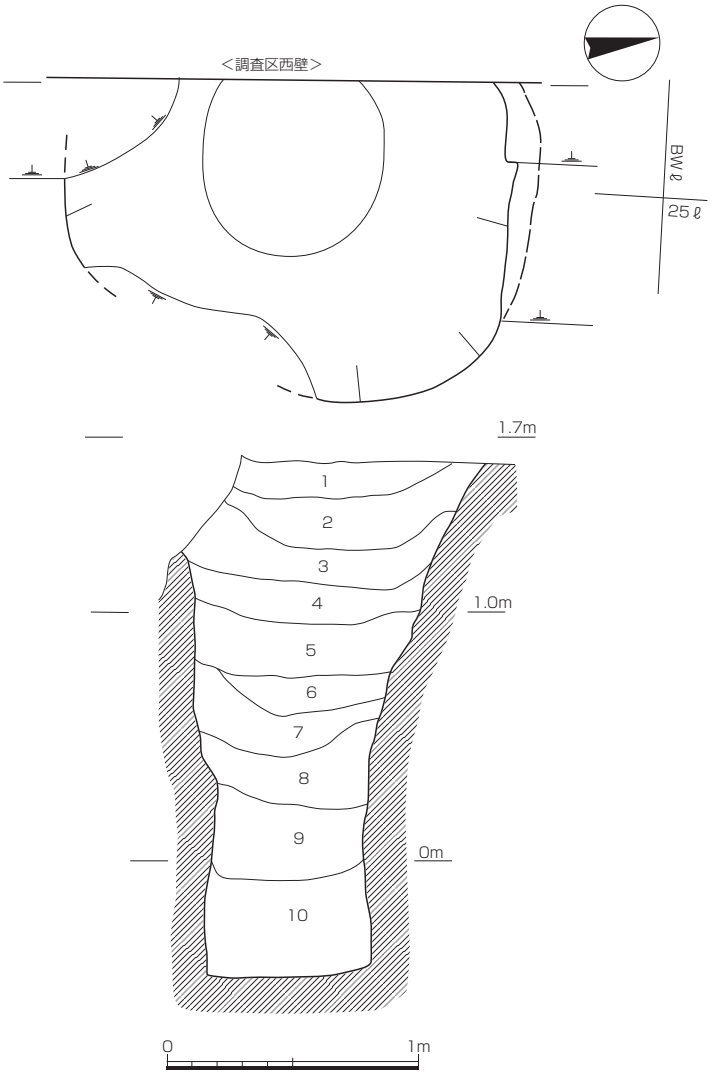
また猿形水滴の出土例は灰釉猿形水滴（愛知県小牧山城(2)出土：戦国時代）、鉄釉猿形水滴（岐阜県元屋敷陶器窯跡(3)出土：16世紀後半）等数例が認められる。水滴の存在から文字を操る人物、また類例の出土傾向から武士に好まれる意匠であることが窺える。

図78－１は中国漳州窯の碗、同２は唐津焼の胎土目の皿であり、ともに17世紀前葉に比定される。本遺構は17世紀前半に埋没したものと考えられる。

註
(1) 尾野善裕氏のご教示を得た
(2) 小牧市教育委員会　2015『史跡小牧山　主郭地区第６次発掘調査概要報告書』
(3) 土岐市教育委員会　2014『元屋敷陶器窯跡出土遺物整理報告書［2014］』

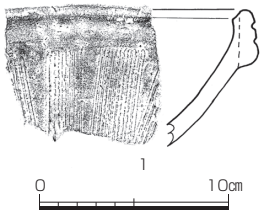
井戸23（図80、図版29）

北区西端、BV24区に位置する。検出面の標高は1.6m、底面の標高は－0.45mを測る。本遺構の西端は調査区外にあたり確認できていない。南側に土坑13が重複する。上面では径1.9m程の隅丸方形になるものと考えられる。底面では径0.7mの円形を呈する。検出面からの深さは2.05mを測る。断面形は底面から標高0.6mまで筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くＹ字状をなす。標高0.4m付近に抉れがあり、水面の影響が考えられる。



埋土は10層に分けた。いずれの層にも粘土ブロックを多く混入する。また５・７層では植物遺体が確認された。

遺物はポリ袋（12号）４袋が出土した。備前焼、須恵器、瓦のほか、中世前半の土師器碗・杯・皿・鍋等の小片、礫４点が認められた。備前焼すり鉢（図80－１）は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられる。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：11条1組のスリ目、外：重焼痕	赤 10R4/8	2㎜以下砂礫

図80　井戸23・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を実施した（第４章第２節参照）。抽出できたのは36個体であり、32種の植物種子を同定した。シソ（シソ科）・セリ（セリ科）・ササゲ類（マメ科）等の食利用できるもののほか、エノコログサ科やカヤツリグサ科など田畑雑草の種子が認められた。

本遺構は西壁断面観察から＜４層＞上面の検出であり、出土遺物から18世紀前半に位置付けられよう。

井戸24（図81・82、図版30）

北区南端、BW23区に位置する。井戸17の南端に一部重複する。検出面の標高は1.0m、底面の標高－0.55mを測る。上面は1.6×1.65mの隅丸方形を呈し、底面では一辺0.7mの方形を呈する。断面形は底面から標高0.5m付近までは筒状に立ち上がり、それより上位は緩やかに開くＹ字状をなす。方形を呈している点から枠が設置されていた可能性も考えられる。

埋土は10層に分けた。１～７層は灰褐色粘質土を主体とする埋め土層で粘土ブロックや炭化物を混入する。８～10層は均質性の高い粘質土～シルト層である。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）で１／３箱が出土した。瓦質火鉢、瓦、備前焼等のほか、土師器碗・皿・鍋等中世

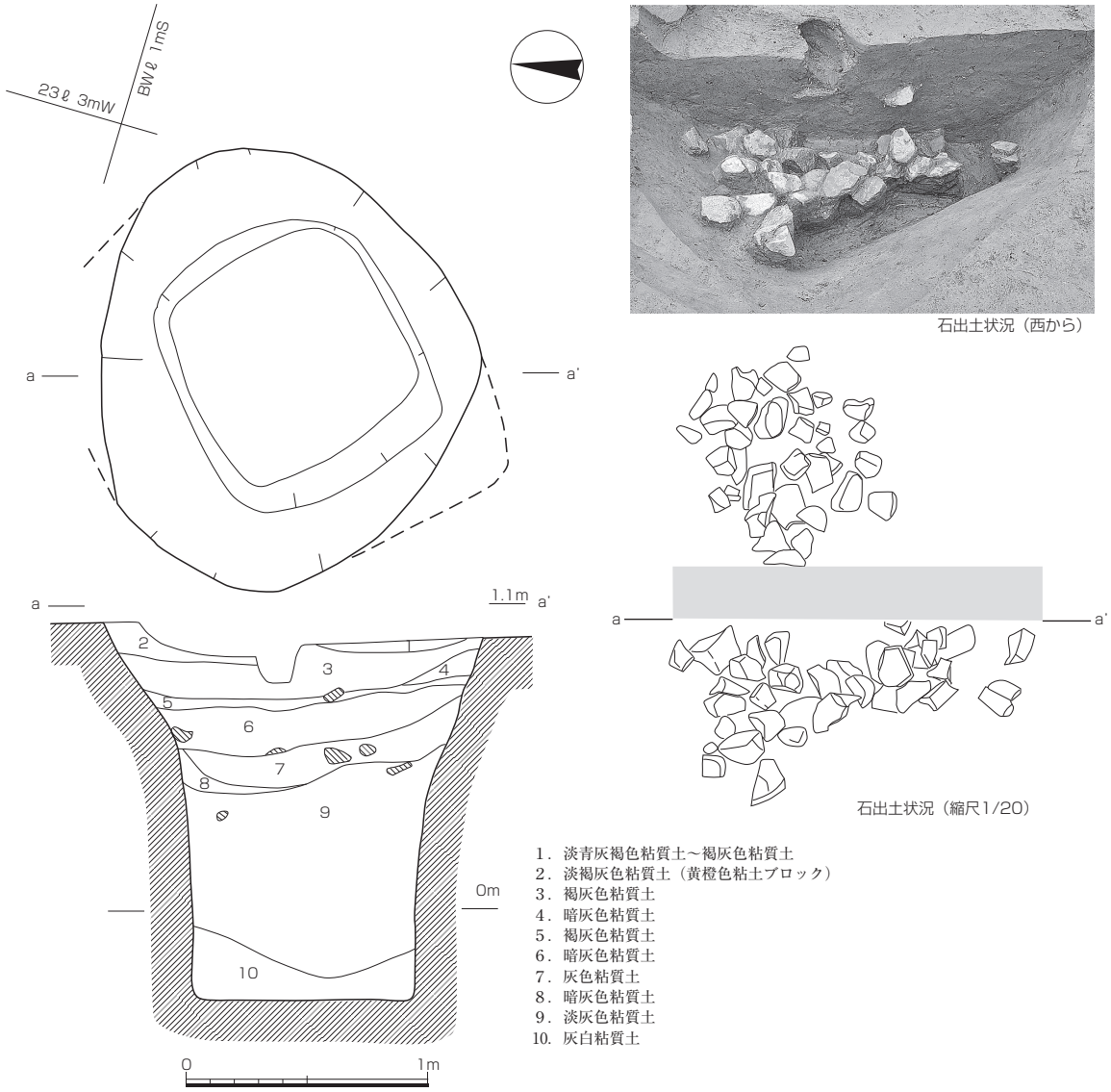
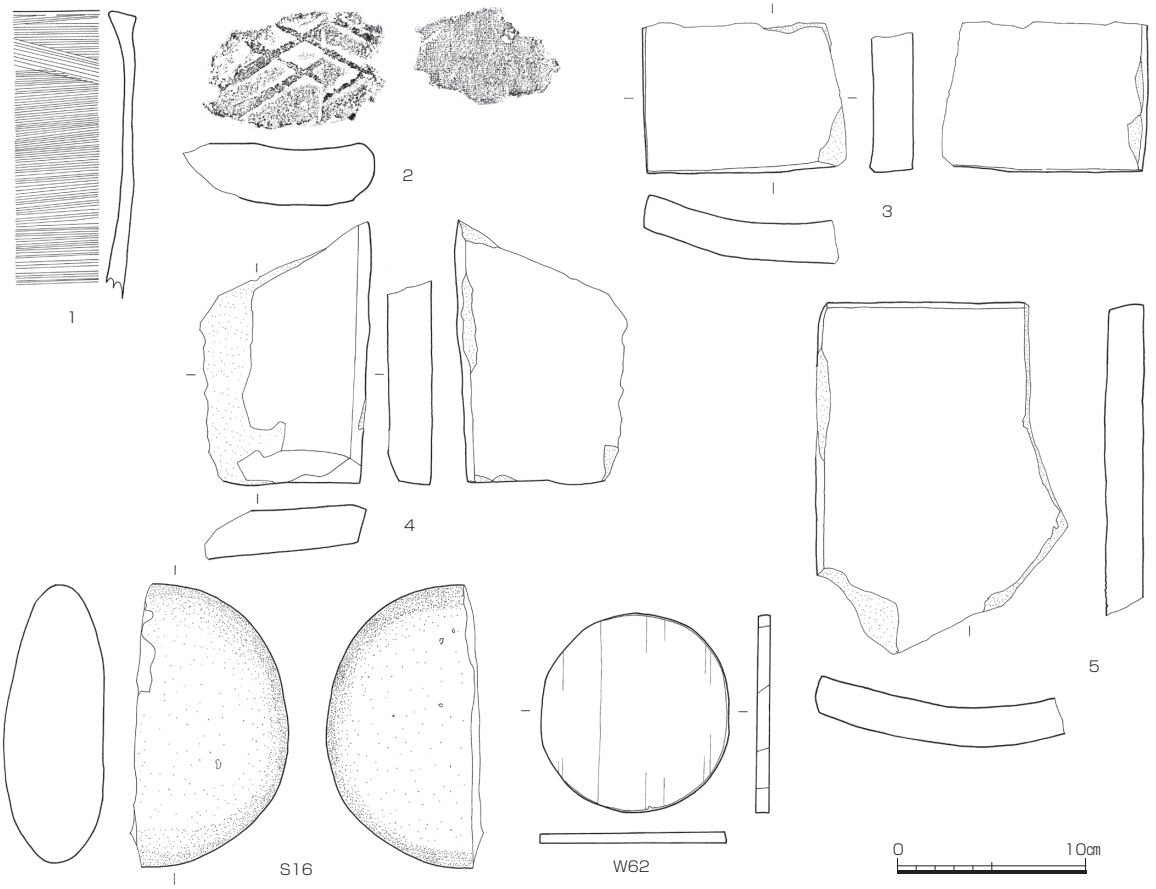


図81　井戸24（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	瓦質　火鉢	－	－	－	口1/6	内：横ハケ、外：縦ハケ後ナデ・煤、口縁端部ハケ状痕	灰 5/	1mm以下砂

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	残存	特　徴	色　調	胎　土
2	須恵質　平瓦	－	－	－	－	凹面：布目・ナデ、凸面：格子目タタキ、被熱	凹面：灰白５Y8/1 凸面：灰白8/1	5mm以下砂礫
3	瓦質　平瓦	8.0	10.7	2.1	－	凹面：ナデ、被熱	灰 5/	2mm以下砂礫
4	瓦質　平瓦	14.2	9.1	2.3	－	ナデ	灰 5/	2mm以下砂礫
5	瓦質　軒平瓦	18.3	13.1	2.2	－	ナデ、被熱	暗灰 3/	2mm以下砂礫

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石　材	特　徴
S16	すり石	14.9	8.3	5.2	787	欠損	細粒花崗岩	上下面平滑

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W62	円盤	10.8	10.2	0.7	－	柾目	表裏面平滑

図82　井戸24出土遺物（縮尺1/4）

前半の土器小片多数が認められた。図82－W62は曲物の底板で、９層中、標高０ｍの地点で出土した。また本遺構からは141点もの大量の礫が出土した。石器は１点のみ（図82－Ｓ16）で、残りは加工の見られない円礫・角礫である。19点に被熱が認められる。大きさは、重量で100ｇ弱～3.5kgをはかり、大小様々で規則性は認められない。図81に示したように、９層上面付近、標高0.4～0.75ｍの辺りに集中して廃棄されている。被熱礫がまとまることはなかった。井戸周辺に礫を利用した構造物があることが想定されるが、それ以上の判断材料はない。井戸の廃絶時には周辺構造物も解体し、廃棄したような状況が窺える。

本遺構の時期は、瓦質の火鉢（図82－１）の時期が18世紀に属することから、同時期に位置付けられる。

井戸25（図83、図版31）

北区南部、BV23区に位置する。中世前半の井戸９を切っている。前述の井戸22の南10m、井戸23の東６ｍにあたる。

検出面は標高0.9ｍを測る。平面形は、長径0.86m、短径0.6ｍの楕円形を、底面は径0.5ｍの円形を呈する。底面

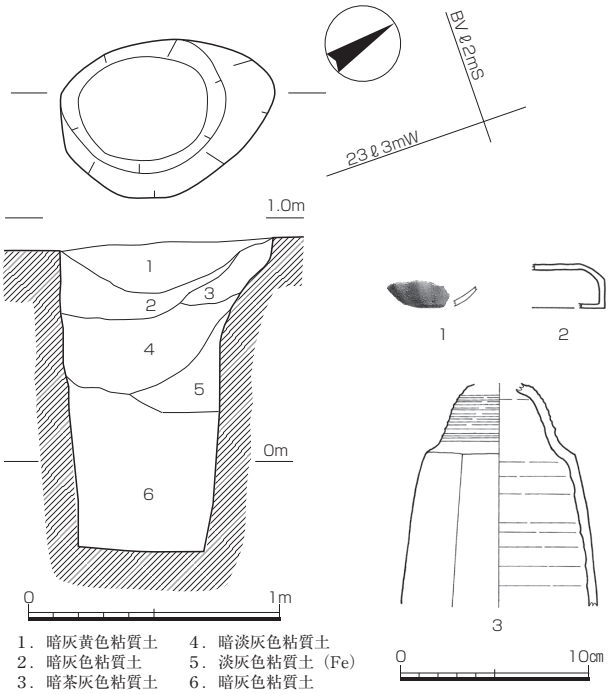
の標高は－0.36mを測り、検出面からの深さ1.2mが残る。掘り方の断面形では標高0.6m以下は筒状を呈すが、北側上部が開いている。上面はかなりの削平を受けているため本来の形状は窺いしれないが、同時期の井戸の形状から上部が開く形をなすことも予想される。

埋土は６層に分層した。１～５層は暗灰色粘質土を主体とし、粘土ブロックや微砂を混入する埋め土であろう。

遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。遺物は少ないが、型押しの施文がある肥前磁器青磁皿（図83－１）と、同じく肥前磁器水滴（同－２）は17世紀半ば～18世紀のものである。また同－３の角徳利は備前焼天保窯の産で19世紀前半に位置付けられる。これらの所有者には一般庶民ではなく、裕福な層が想定される。

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を実施した（第４章第２節参照）。本遺構では23個体を抽出し、19種類の植物種子を同定できた。ナズナ（アブラナ科）・ホオズキ（ホオズキ科）等馴染みある植物のほかタカザブロウ・コゴメガヤツリ等の田畑雑草が見られる。

本遺構は、出土遺物から19世紀前半に埋まったといえる。本調査地点で確認される最も新しい時期の屋敷地がこの時期まで存在したことが窺われる。



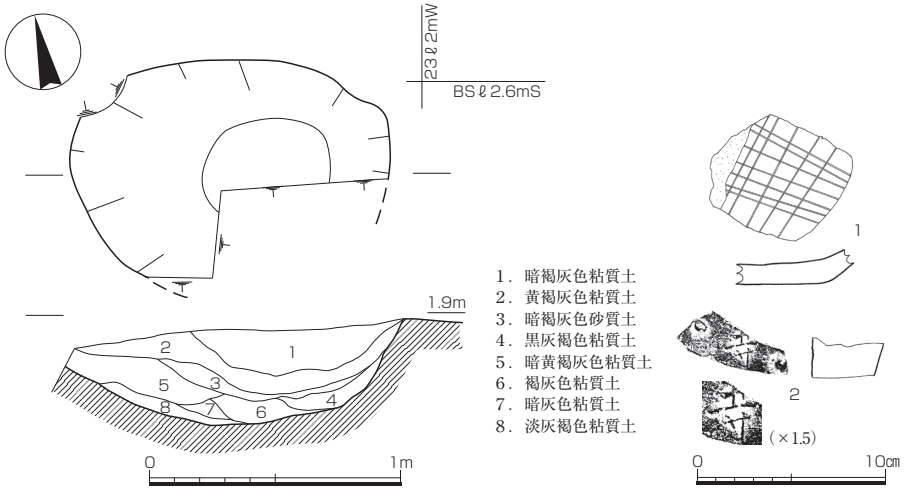
番号	器　種	口径：cm	底径：cm	器高：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	肥前磁器　青磁皿	－	－	－	－	内外：貫入、内外面施釉	(胎)白 9/（釉)明緑灰 10YR7/1	緻密
2	肥前磁器　水滴染付	－	－	－	－	外：施釉、外底：露胎	(胎)灰白 N8/（釉)透明	緻密
3	備前焼　六角徳利	－	－	－	－	回転ナデ、外：カキメ・化粧土・一部自然釉、19世紀	(内)赤褐 10R5/4（外)赤黒 10R5/4	きめ細かい

図83　井戸25・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

２．土坑

土坑６（図84、図版32）

北区北部、BS23区に位置する。西側に近接して井戸16が位置する。南東側１／４は攪乱によって失われる。検出面の標高1.85m、底面の標高1.45mを測る。上面では1.2×1.0mの東西に長い楕円形を



番号	器　種	口径：cm	底径高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	須恵器　卸し皿	－	－	－	－	底部内面に格子状のおろし目	灰 6/	1mm以下砂

番号	器　種	長：cm	幅：cm	厚：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
2	瓦質　軒丸瓦	－	－	－	－	瓦当に「寺」遺存・珠文・16世紀代	灰 4/	細かい

図84　土坑６・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

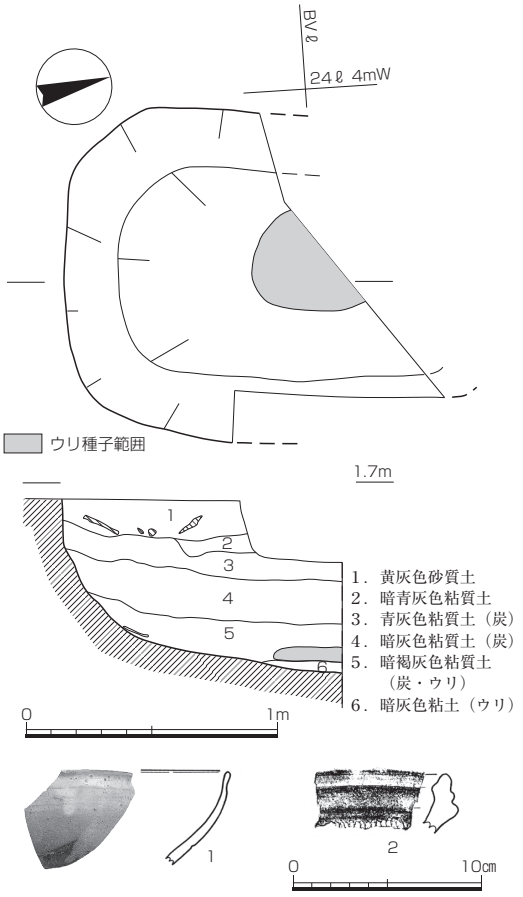
呈する。断面形は浅いU字状をなす。埋土は８層に分けた。３層には砂を含む。遺物はポリ袋（12号）で２袋が出土した。図84－１は須恵質土器卸皿、同２は軒丸瓦で２の瓦当には径0.7㎝の珠文２つの間に「寺」の文字が陽刻される。近くに寺の存在を示す重要な遺物と言えよう。
16世紀末葉と比定される。

土坑７（図85、図版32）

北区東端、BU24区に位置する。D地点調査範囲の北端にあたり、本遺構の北半は調査区外にあたり未確認である。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高は1.6m、底面の標高は0.95mを測る。上面では東西1.3m、南北1.5mが残り、本来は隅丸長方形をなすものである。断面形はU字状で、埋土は６層を確認した。５層下面と６層中から多量のウリ種子が出土している。ウリ種子については形態分析・DNA分析とともに年代測定を実施しており、補正14C年代（cal y.B.P.）で、200±30の値が得られている(1)。

遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。備前焼すり鉢・肥前陶器のほか、中世前半の土師器椀・杯・皿・鍋等の小片が含まれる。図85－１は肥前陶器（天目）碗で、17世紀半ばに位置付けられる。ほかに17世紀後半の内野山系も認められる。同２は備前焼すり鉢で、17世紀代であろう。

本遺構は17世紀後半～18世紀前半に位置付けられよう。機能としては野壺ではなく、貯蔵庫等の可能性がある。



註

(1) 田中克典・加藤鎌司　2013「メロン仲間の種子遺存体における形態分析とDNA分析」『紀要2012』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	肥前陶器 天目形茶碗	－	－	－	－	内面全釉、外面ほぼ全釉、17世紀半ば	(胎)灰　6/　(釉)灰　7/	緻密
2	備前　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、スリ目の上端が残存、17世紀代	(内)鈍赤褐、2.5YR4/4、(外)明赤褐　2.5YR5/6	1mm砂

図85　土坑７・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

土坑８（図86、図版32）

北区西部、BV24区に位置する。検出面の標高1.6m、底面の標高1.0mを測る。東半は調査区東側溝で切られ、南端は土坑14に切られる。上面は東西0.5m、南北1.4mの半円形が残り、底面は本来径0.4mの円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは0.6mを測る。底面の平坦面は狭く、野壺とは考えられない。

埋土は３層に分けた。灰色粘質土を主体とする。遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。瓦、肥前陶磁器、備前焼灯明皿のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片が認められる。陶磁器には17世紀後半～18世紀初頭に位置付けられるものが含まれ、本遺構の時期を示す。

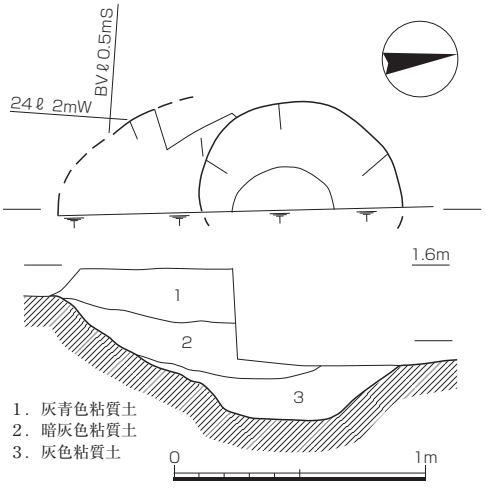


図86　土坑８（縮尺1/30）

土坑９（図87、図版32）

北区中央、BU21区に位置する。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高は1.75m、底面の標高は1.4mを測る。南半は攪乱に拠って破壊され、上面では径1.5mの半円、底面では径1.2mで半円が残る。検出面からの深さは0.35mを測る。平底で、断面形は逆台形をなす。埋土は３枚に分けた。

遺物はポリ袋（12号）２袋が出土した。肥前陶磁器、備前焼灯明皿、瓦の小片のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋や瓦器の小細片が含まれる。17世紀後半の肥前陶器（内野山系）・天目碗、18世紀前半に入る備前焼水屋甕・肥前陶器等が見られる。

本遺構の時期は18世紀前半に位置付けられる。

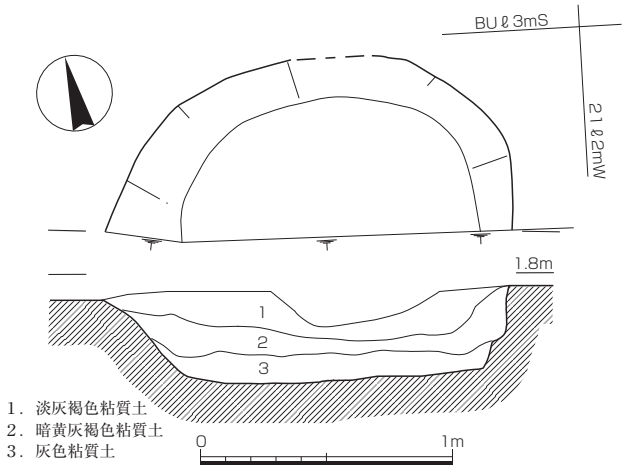


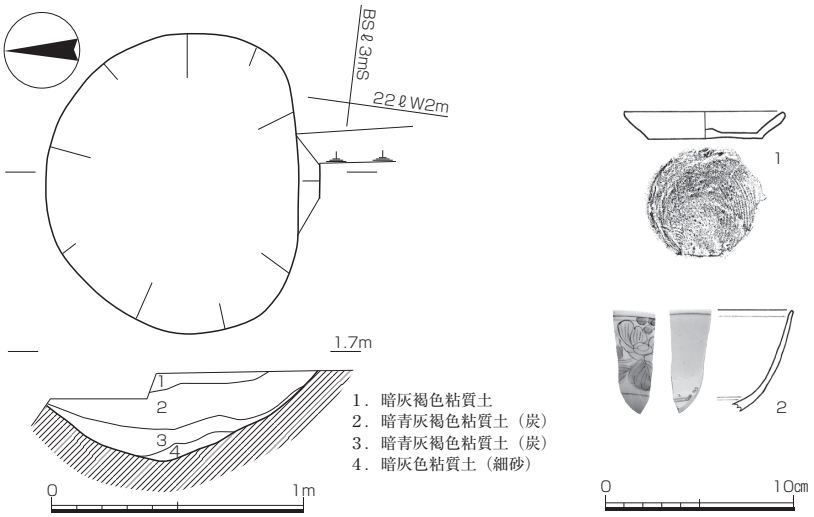
図87　土坑９（縮尺1/30）

土坑10（図88、図版33）

北区北部、BS22区に位置する。検出レベルは1.55mを測る。平面形は概ね円形を呈し、上面で1.16×1.18mが残る。底面のレベルは1.2mで、深さは0.35mである。埋土は４層に分けた。１～３層は暗灰褐色～暗青灰褐色の粘質土で、炭化物を含む。４層は暗灰色粘質土で、細砂を混入する。

遺物はポリ袋２袋が出土した。土師器椀・竈・鍋、須恵器皿、瓦の小片と肥前磁器染付、備前焼灯明皿の小片が含まれる。図88－２は肥前磁器小型鉢で、外面に呉須で紋様が施される。18世紀前半に属する。

本土坑は出土遺物から18世紀前半と考えられる。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	9.2	6.2	1.55	口1/2 底1/1	回転ナデ、底内：中央仕上げナデ、底外：糸キリ、口縁・体部：煤	浅黄橙　7.5YR8/4	きめ細かい 赤色粒
2	肥前磁器 小型鉢	－	－	－	－	染付、呉須、外花・葉の意匠	(胎)白　9/　(釉)透明	緻密

図88　土坑10・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

土坑11（図89、図版33）

北区東部、BU21区に位置する。検出面の標高は1.7m、底面の標高は1.25mを測る。上面では1.5m×1.4mの隅丸方形を呈し、底面は一辺0.7mの方形をなす。検出面からの深さは0.45mが残る。断面形は緩やかに開くU字形で丸底に近い。埋土は２層に分けた。灰色粘質土が主体で、両層とも砂を混入する。

遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。桟瓦、肥前陶磁器の小片のほか、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小

片が認められる。掲載できる大きさが残るものはなかった。陶磁器はいずれも18世紀代のものである。

本遺構は、出土遺物から18世紀後半に位置付けられる。

土坑12（図90、図版33）

北区西端、BV・BW24区に位置する。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高1.7m、底面の標高1.15mを測る。本遺構は調査時の側溝により中央部を分断されている。概ね円形をなし、上面では径1.5mを測る。断面形はU字状をなし、底面は平坦ではない。検出面からの深さ0.85mが残る。埋土は７層に分けた。下層の６・７層には粘質土に砂を含み、水が溜まっていた状況が窺われる。２～５層には炭が含まれる。

遺物はポリ袋（12号）で４袋が出土した。瓦、肥前陶磁器、備前焼、瓦質土器のほかに、中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片が認められる。図90－１は肥前磁器碗で、18世紀代に比定される。同－２は瓦質の軒平瓦で、中心に３つの巴文を配し唐草文を施す。岡山城１式にあたり、18世紀後半に属するもので本遺構の時期を示す。

本遺構の土壌を持ち帰り、種子の抽出・同定を行った（第４章第２節参照）。本遺構では31個体を抽出､22種類の植物種子を同定した。イネ・ヒョウタン等の栽培植物のほか、田畑雑草の種子が含まれる。

本遺構は出土遺物から 18 世紀後半に位置付けられる。遺構の機能として水貯め等の可能性が挙げられる。

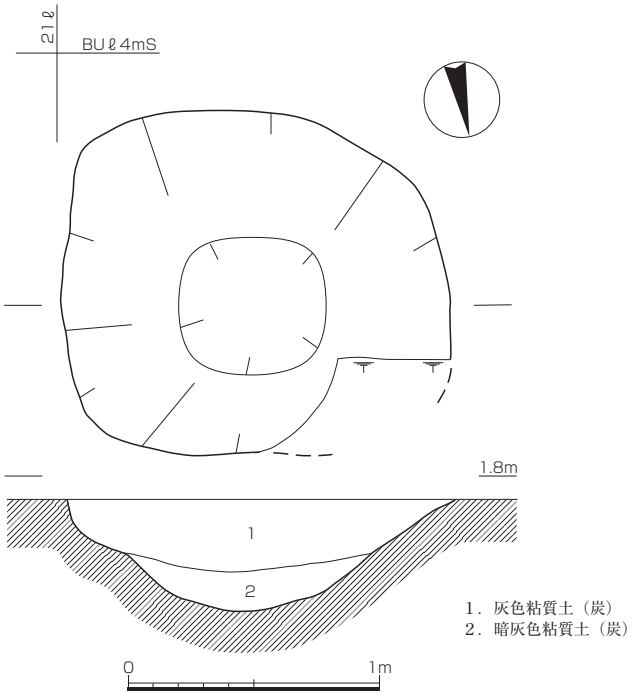
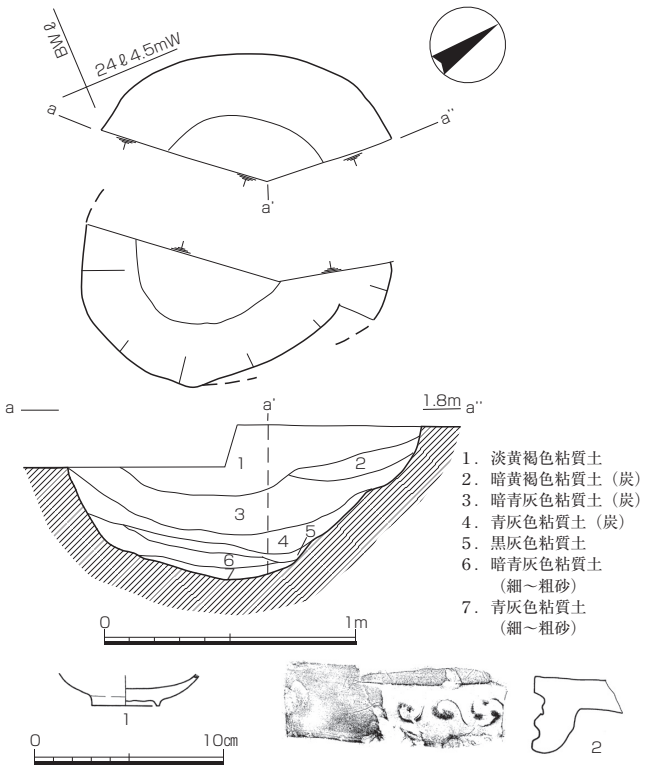


図89　土坑11（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残存	特　徴	色　調	胎　土
1	肥前磁器　碗	－	－	－	－	蛇の目高台、外面：全釉畳付けのみ釉剥ぎ	(胎)灰白8/　(釉)白 9/	緻密

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
2	瓦質　軒平瓦	－	－	3.5	－	ナデ、唐草文、18世紀後半	暗灰　/3/	1mm以下砂

図90　土坑12・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

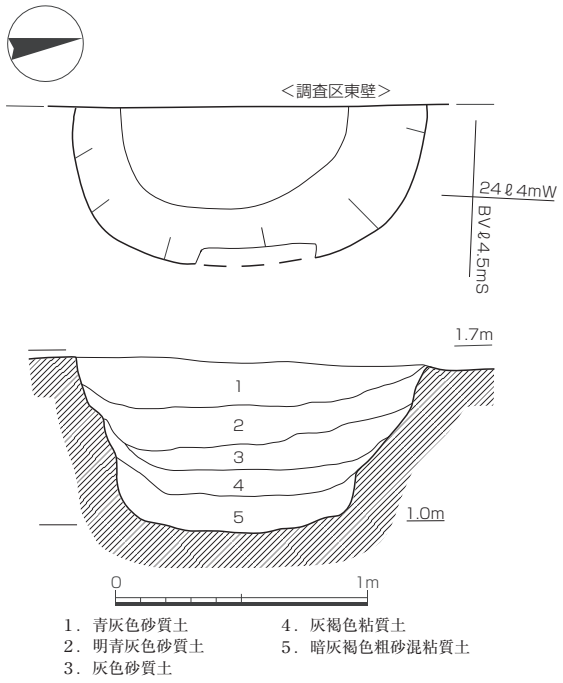


図91　土坑13（縮尺1/30）

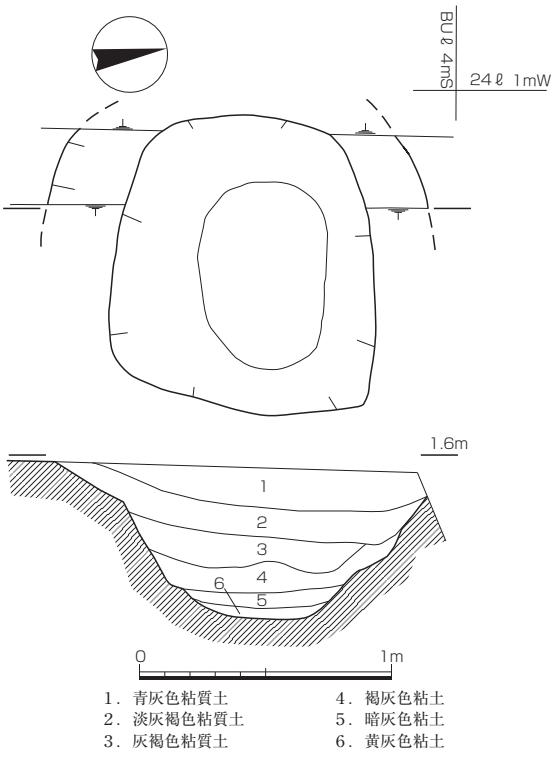


図92　土坑14（縮尺1/30）

土坑13（図91、図版33）

北区西部、BV24区に位置する。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高は1.65m、底面の標高0.95mを測る。本遺構はＤ地点東端に位置し、西半は調査区外にあたり確認できない。また前述の井戸23の南端を切って構築されている。

平面形は上面で南北1.4m、東西0.6mの半円状を確認した。検出面からの深さは0.7mで、断面形は逆台形を呈する。埋土は５層に分けた。最下層には粗砂が混じる。

遺物はポリ袋（12号）１袋が出土した。肥前陶磁器、瓦質土器片のほか、土師器椀・皿・鍋等の小片が見られる。掲載できるものはなかったが、肥前陶磁器類の特徴は18世紀代に位置付けられるものである。

本遺構の時期は、18世紀前半に埋まる井戸23との切りあい関係と出土遺物から、18世紀後半以降に比定される。

土坑14（図92、図版34）

北区西部、BU・BV24区に位置する。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高は1.58m、底面の標高は0.95mを測る。平面形は隅丸方形を呈し、径1.5m以上の規模が想定される。断面形はＵ字状をなし、標高1.4m以上では大きく開く形状が予想される。

埋土は６層に分けた。下半の４～６層には粗砂が混じる。１～３層は粘質土ブロックを混入する。

遺物はポリ袋（12号）１／２袋が出土した。備前焼、瓦、青磁碗小片のほか、中世前半の土師質土器椀・皿・鍋等の小片が認められる。

本遺構の時期は、遺物では決めがたいが、遺構の切り合い等から、18世紀後半代に位置付けておく。

土坑15（図93、図版34）

北区西端、BV24・25区に位置する。Ｄ地点の北西壁際にあたり、本遺構の北西および西端は調査区外となり確認できていない。＜３層＞上面で検出した。

検出面の標高は1.5m、底面の標高は1.0mを測る。検出できた部分から、平面形としては１辺1.5

m程度の隅丸方形が想定される。断面形はU字状になるものと考えられ、検出面からの深さは0.45mが残る。

埋土は５層に分けた。最下層の５層には鉄分が沈着する。３・４層には砂が混じる。遺物はポリ袋（12号）１／２袋が出土した。時期を示すものとして備前焼灯明皿、陶磁器の小片があるが、掲載できるものはなかった。そのほかに中世前半の土師器椀・皿・鍋等の小片多数が認められる。

本遺構の時期は18世紀代に位置付けられる。

土坑16（図94、図版34）

北区中央、BU22区に位置する。南北両端を攪乱により失う。検出面の標高は1.7m、底面の標高は1.4mを測る。東西1.2m、南北0.8mの規模で検出し、平面形はおそらく楕円形を呈するものと考えられる。断面形はU字状をなし、検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は３層に分けた。遺物はポリ袋（12号）１／３袋がわずかに出土した。肥前磁器の可能性がある小片と土師器椀・皿・鍋等の小片40点が認められる。

本遺構の時期は他の土坑の状況も併せ検討し、18世紀代と位置付けておくこととする。

土坑17（図95、図版34）

北区西部、BV24区に位置する。本遺構の東半は攪乱により失われている。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高1.7m、底面の標高1.5mを測る。平面形は上面で南北0.8m、東西0.3mの半円状を確認した。断面形は浅いU字状をなす。埋土は３層に分けた。最下層の３層の底面には白色砂が認められ、水の影響が窺える。遺物は見られなかった。

本遺構の時期については、遺構・遺物の特徴からは決め難く、検出面から近世の範疇に位置付けておくこととする。

土坑18（図96、図版35）

東区南端、CC・CD17区に位置する。本遺構の北半は攪乱により失われている。検出面の標高は1.5m、底面の標高は0.9mを測る。平面形は上面で1.2m×0.6mの半円形状が残る。断面形はU字状を呈し、検出面からの深さは0.6mが残る。

埋土は４層に分けた。１・３層には炭化物の混入

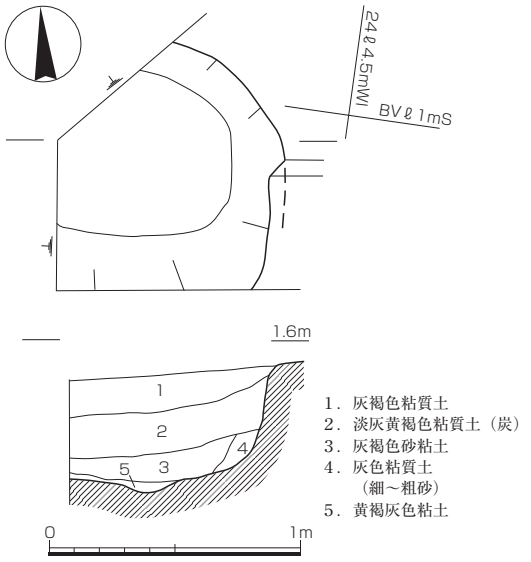


図93　土坑15（縮尺1/30）

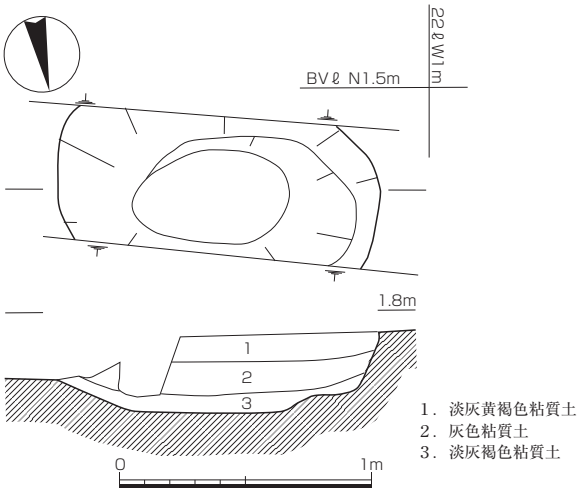


図94　土坑16（縮尺1/30）

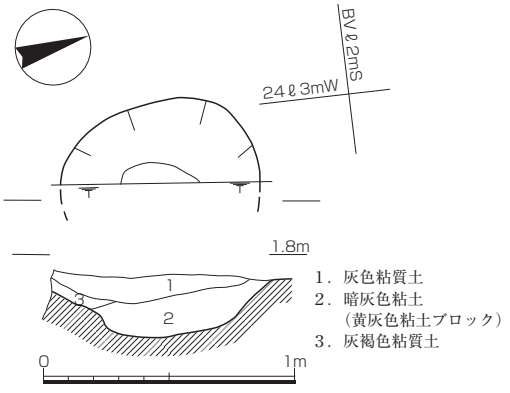


図95　土坑17（縮尺1/30）

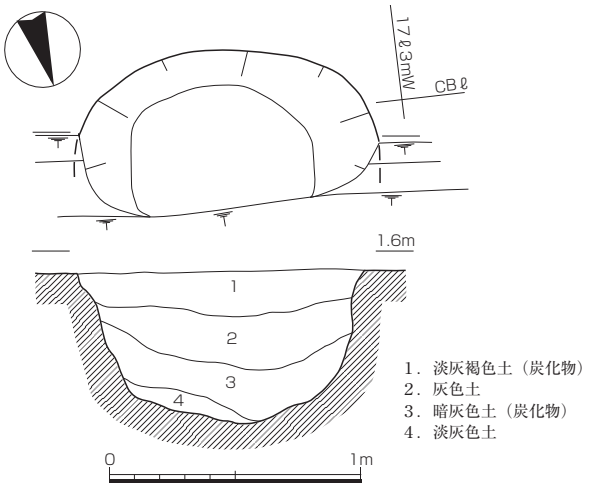


図96　土坑18（縮尺1/30）

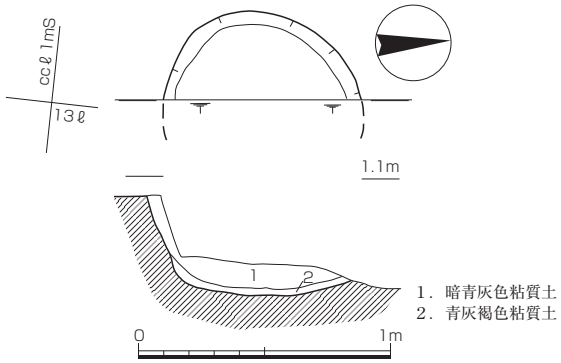
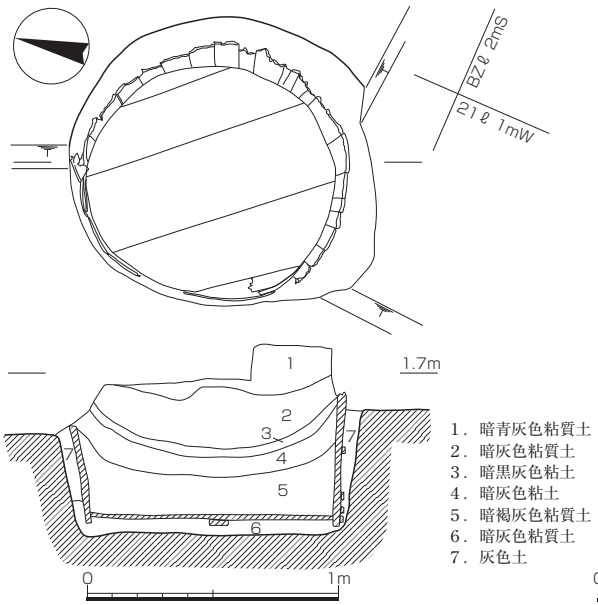
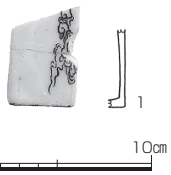


図97　土坑19（縮尺1/30）





が見られる。出土遺物は認められなかった。

本遺構の時期は断定し難く、近世の可能性を考えておく。

土坑19（図97、図版35）

東区南東端、CB・CC13区に位置する。本遺構の東半は調査区東端の側溝により失われている。検出面の標高1.0m、底面の標高は0.65mを測る。平面形は上面で0.8m×0.3mの規模の半円形状を検出した。断面形はU字状を呈する。検出面からの深さは0.3mを測る。埋土は2層に分けた。遺物はわずかに土師器の小片1点のみが出土した。

本遺構は前述の井戸21の北2m程に位置する。この位置は南北方向の区画溝となる溝24の東肩に接する。これまで記述してきた本時期の井戸・土坑とは離れた地点の屋敷地の存在を示すものと評価した。本遺構の時期は、18世紀代と位置付けておくこととする。

土坑20（図98、図版35）

西区北部、BZ21区に位置する。後述する溝21に重複して構築されており、同溝が埋まった後に機能した野壺である。上面は攪乱で失われているが中に設置された桶を原位置で検出した。検出面の標高は1.75m、底面の標高は1.1mを測る。平面形は上面で径1.2mの円形、下面で径1.0mの円形を呈する。検出面からの深さは0.8mが残る。桶内の埋土は5層に分けた。遺物はポリ袋（12号）1袋が出土した。備前焼灯明皿・甕、肥前磁器が認められる。図99－1は肥前磁器の水滴である。17世紀末～18世紀半ばに位置付けられる。

桶はアカマツ材を4枚連ねて円形の底板とし、側板にはスギ板を連ね、上下2段をタケ亜科の材を用いたタガで締めたものである。底板の下面には板材に直交する角材を渡し、補強としている。底板と角材および底板同士は竹釘で繋ぐ構造である。

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	肥前磁器 染付水滴	－	－	－	－	外：葉・雲の意匠・施釉	(胎)灰白　8/ (釉)透明	緻密

図98　土坑20・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

本遺構は、形状と桶の設置から野壺としての機能が想定される。19世紀前半に溝21が廃絶した後、本調査地点も耕作地へと変化したことを示すものであろう。

3．溝

溝５条を検出した。このうち溝21～24は中世後半～近世まで継続した屋敷地の区画溝である。

溝21（図99～102、図版36）

北区東端、20～21ライン間を南北方向に走行する。最大幅3.8m、深さ1.0m以上の規模の大形溝である。本溝の北および北半の東は調査区外にあたり、第20次調査Ｃ地点および第18次調査地点で確認される（未報告）。本調査地点ではBTライン南２m～CAライン南２mの間で長さ35mを検出した。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示し、いわゆる鹿田条里に沿う。検出面の標高は1.55mを測り、＜４層＞上面に対応する。底面の標高はａ断面で0.5m、ｂ断面で0.3m、ｃ断面で0.45mを測る。本遺構はCAライン南0.5mの地点で収束傾向をもって検出され、基礎解体下の調査でその端部を確認した。同位置のすぐ南を起点に東に向かう溝22が走行する。両溝端部の距離は0.5mである。BXライン以南では標高0.7m付近まで撹乱により失われて下部構造しか残っていないため、両溝は接続していないが、上部構造での関係はわからない。また本溝は、12世紀代の土坑２の上に重複している。

断面形は逆台形～Ｕ字状をなす。検出面からの深さは1.0mが残る。埋土はａ断面11層、ｂ断面10層、ｃ断面14層に分けたが、上下２群に大別できる。上層群と下層群との境はいずれの断面でも概ね標高1.0m付近である。ａ断面１～８層、ｂ断面１～３層、ｃ断面１～４層が上層群で、灰色粘土～粘質土を主体とし、灰色粘土ブロックの混入が見られる。下層群はａ断面９～11層、ｂ断面４～10層、ｃ断面５～14層で、灰色～暗灰色粘質土が主体である。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）６箱と多量に出土した。土師器、陶磁器、瓦、土製品が含まれる。このほか杭・角材等の木製品と礫が出土しており、礫はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）９箱、100点が出土した。遺物は12世紀代～19世紀初頭の時期幅をもって認められる。備前焼は15世紀末～16世紀初頭のすり鉢（図100－４）のほか、16世紀前半のものが目立つ。中国明代の景徳鎮の碗（図101－25）は16世紀後半～末、須恵質の平瓦（図102－36・37）は中世の特徴が認められる。同－39の切隅瓦は16世紀後半以前のものである。一方、土師器椀（図100－17）・土師器皿（同－18）は13世紀後半～14世紀前半に比定される。この２点が完形資料であることは注目される。ほかに12世紀代に位置付けられる土師器、瓦器等が認められるが、いずれも小細片である。また本溝は近世にも継続して利用されており、陶磁器類は肥前磁器碗（図101－24）・瀬戸美濃焼の筒形碗（同－26）等は18世紀後半～19世紀、軒丸瓦（図102－38）は17世紀～18世紀、瓦質平瓦（同－40・41）は18世紀後半というように、近世の全般にわたって遺物が確認される。本遺構で最も新しい時期のまとまりとして、図101－28～34に掲載した一群の遺物がある。調査時には本溝を切る土坑として取り上げたものだが、断面の精査や遺物の特徴を検討し、本遺構が埋まる過程の最後にたわみとなったところへ一括廃棄された一群の遺物と判断した。備前焼灯明皿（同－28）・肥前磁器碗（同－29）・瀬戸美濃焼碗（同－30）・灯明皿（同－32）・関西系焙烙（同－34）等の食器・調理器はいずれも19世紀初頭のものである。キセル（同－Ｍ６）も同時期のものであろう。

石器として豊島石を加工した石臼（図102－Ｓ18）や砥石（同－Ｓ19～20）が出土している。砥石は流紋岩や粘板岩を用いたどれもよく使い込まれたものである。

こうした遺物に混じって、多数の礫が出土している。石器として抽出したもの以外には加工・被熱は認められなかった。大きさ・石材に規則性も特に見られない。出土レベルを記録した礫の多くは上層底にあたる標高1.0～1.1mの値を示す。本遺構廃絶時の埋め土とともに、周辺にあった礫も廃棄したことが考えられ、礫を用いる構造物の存在が窺える。このほか鉄滓の出土が見られる。ポリ袋（12号）１／４袋の出土だが、注目しておきたい。

こうした遺物の状況から、本溝は14世紀中頃～19世紀初頭まで機能していたと考えられる。14世紀以前の古い

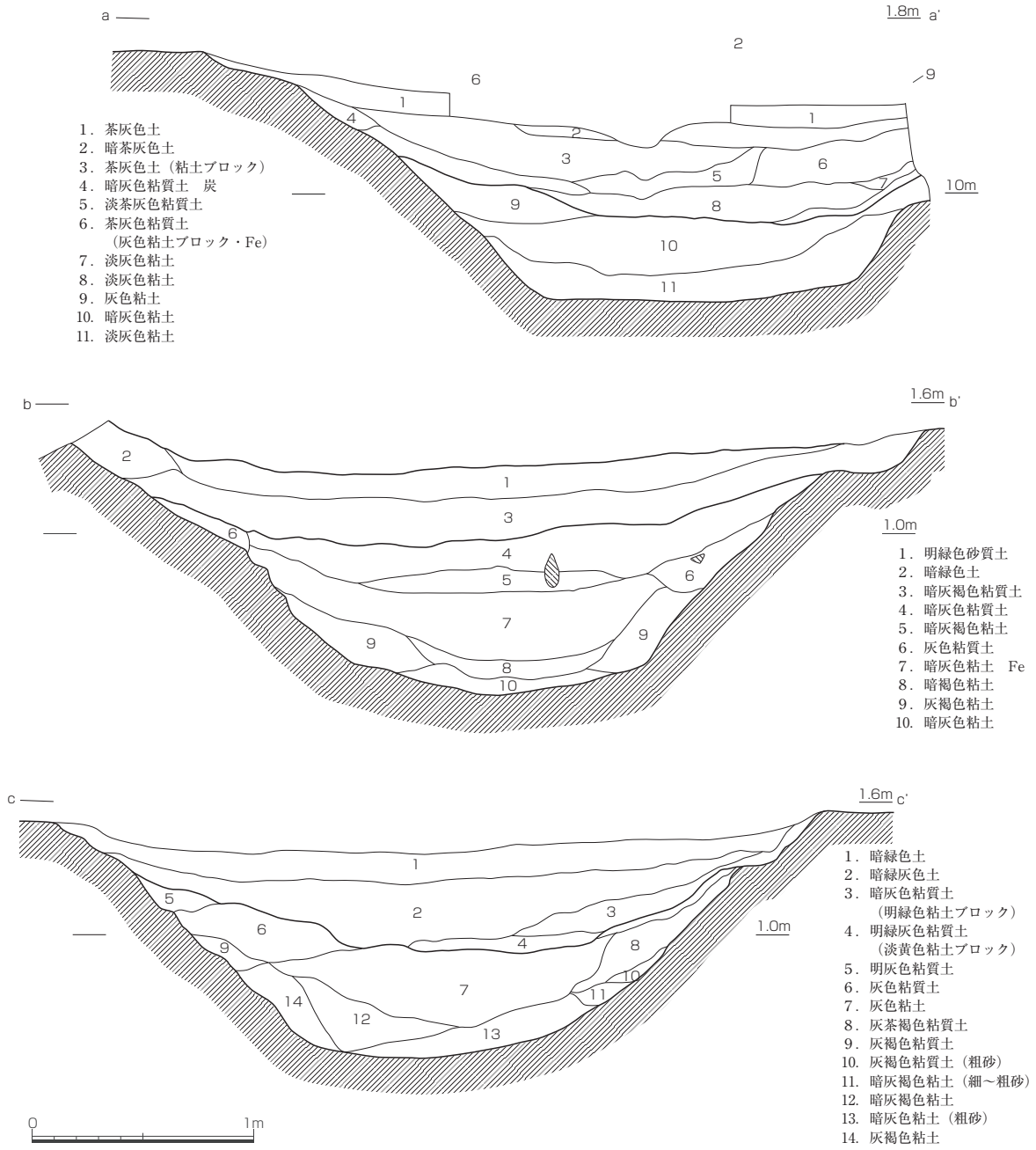
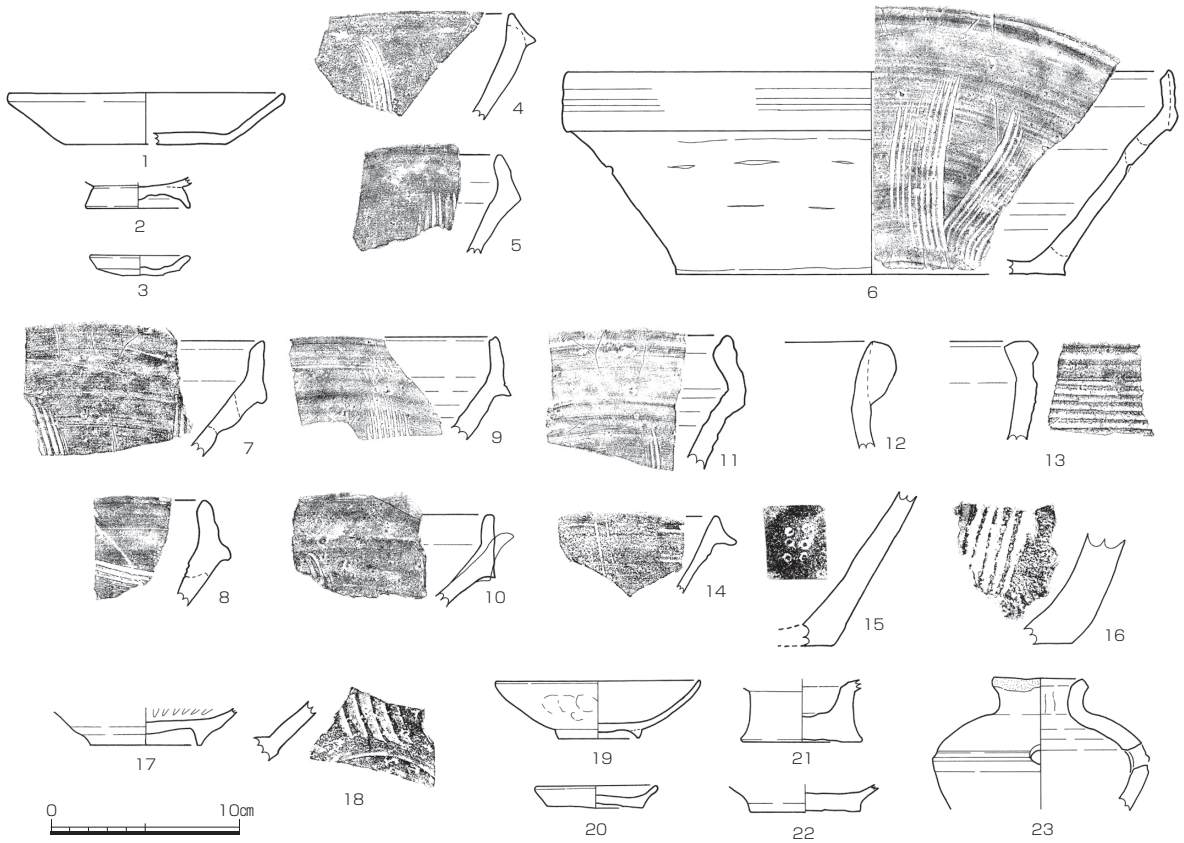


図99　溝21断面（縮尺1/30）

時期のものは混入と判断した。掘削時期は確定的ではないが、13世紀後半～14世紀前半の土師器椀・皿（図100－17・18）の存在を積極的に捉えたい。一方終焉の時期は、19世紀初頭の一括資料を証左とする。

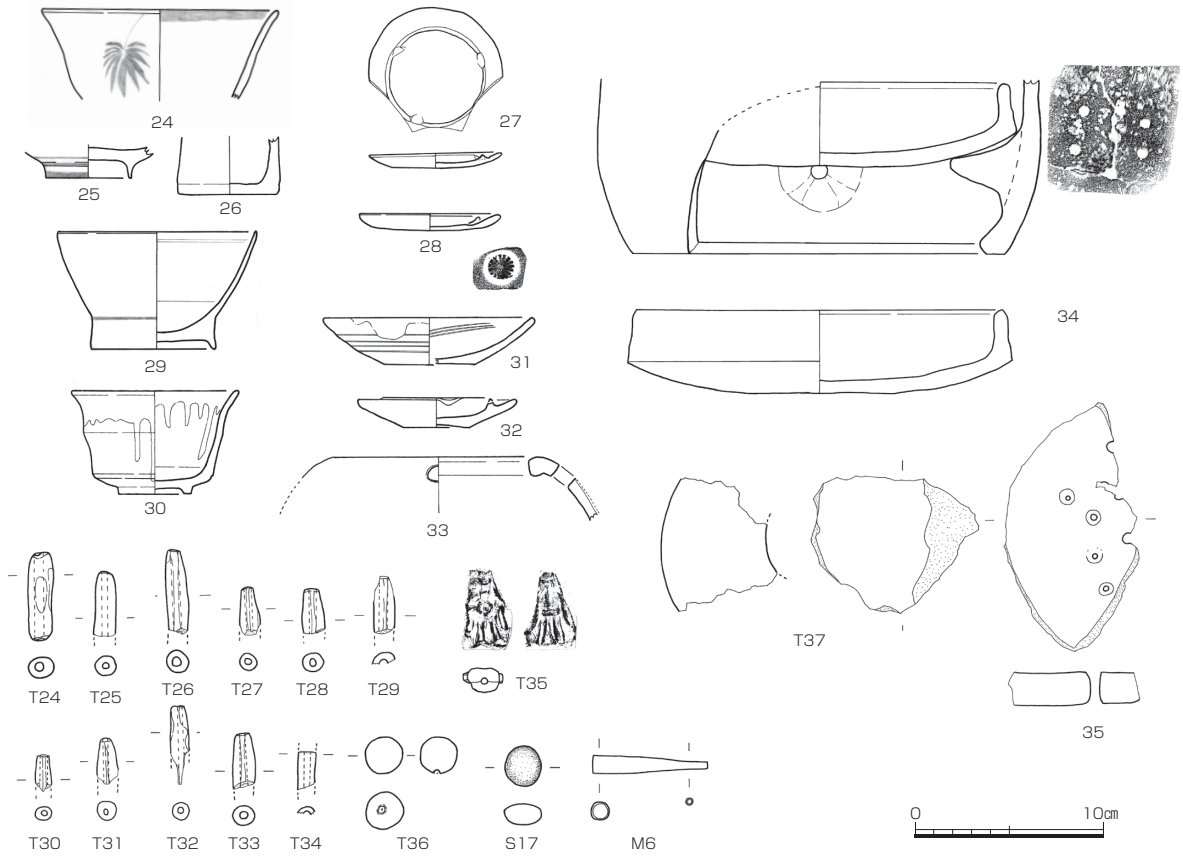
このほかにヒトの頭蓋骨片の出土が認められる（第４章第４節参照）。４点の資料に焼けた痕跡が見られ、火葬骨の可能性が指摘されている。

本遺構は14世紀中頃～19世紀初頭の長期に機能した、屋敷地を区画する大形の溝である。その方向は南北方向で、鹿田条里に近似する方向を示す。これより前代の大形区画溝としては13世紀末～14世紀初頭に埋まった溝18があり、同溝の廃絶後、溝21が構築され、19世紀初頭まで機能したことになる。出土遺物の構成と量はこれに合



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	13.8	8	2.5	1/4	回転ナデ、底内：押圧、底外：ナデ･工具痕、外：布目痕	鈍黄橙　10YR7/4	きめ細かい 赤色粒少
2	土師器　椀	－	5.6	－	高台1/1	ナデ、煤付着、高台部は小皿を逆転して貼り付けた状態で3と類似、溝22の3と同形態	鈍赤褐　2.5YR5/3	0.5㎜以下砂
3	土師器　皿	5.8	4.8	1.15	1/3	回転ナデ、底外：篦キリ後中央部押圧、内外の一部に煤、2の高台部形態と同一形態	鈍橙　7.5YR7/3～4	約0.5㎜砂 赤色粒少
4	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：7本1組のスリ目	暗赤褐 2.5YR3/3	5㎜以下砂礫
5	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：6本以上1組のスリ目	(内)灰赤 7.5R4/2 (外)暗赤褐 7.5R3/2	1 ㎜以下砂
6	備前焼　すり鉢	31.0	－	－	口1/6	回転ナデ、内：9本1組のスリ目、粘土積み上げ痕顕著	暗赤褐 10R3/3	4㎜以下砂礫
7	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：５本以上1組のスリ目	赤橙 10R6/8	4㎜以下砂礫
8	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：6本1組の斜めスリ目	(内)暗赤褐 2.5YR3/2 (外)赤褐 2.5YR4/6	1㎜以下砂
9	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：8本1組のスリ目	(内)暗赤 10R3/4 (外)極暗赤 10R2/3	3㎜以下砂礫
10	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：3本1組のスリ目、口縁部自然釉	鈍い赤褐 7.5YR4/3	1~3㎜の砂礫
11	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：3本以上1組のスリ目	鈍い黄橙 10YR7/3	1㎜以下砂
12	備前焼　甕	－	－	－	－	回転ナデ、口縁端部自然釉	(内)暗赤褐 2.5YR3/3 (外)黒褐 10YR3/2	2㎜以下砂礫
13	備前焼　水屋甕	－	－	－	－	回転ナデ、外：6条以上の条線	(内)暗赤褐 10R3/2 (外)鈍い赤褐 2.5YR3/4	1㎜以下砂
14	瓦質　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、内：３条以上のスリ目、工具ナデ	灰5/	1㎜以下砂
15	備前焼　壺	－	－	－	－	ナデ、内：自然釉、窯印あり	暗赤褐 5YR3/3~3/6	2㎜以下の砂礫
16	土師質　すり鉢	－	－	－	－	内：６本以上1組のスリ目、磨滅	(内)鈍い橙 5YR7/3 (外)灰白 5 YR8/2	3㎜以下の砂礫多
17	青磁　皿	－	6.0	－	1/4	全釉、畳付けのみ釉かきとり、連弁文	(胎)白 10/ (釉)濃いオリーブ	緻密
18	青磁　碗	－	－	－	－	外：5条の工具痕	(胎)灰白7/ (釉)オリーブ灰 5GY5/1	緻密
19	土師器　椀	11.4	4.7	3～3.2	口1/3 底3/4	ナデ･押圧、底外：亀裂	灰白　10YR8/2	2㎜以下砂礫
20	土師器　皿	7	5.45	1.2～1.4	完存	磨滅、回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	鈍黄橙　10YR7/4	0.5㎜以下砂 赤色粒
21	土師器　器台	－	6.8	－	底1/4	回転ナデ、底内：ナデ･押圧、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	灰白～浅黄橙 10YR8/2～3	5㎜以下砂礫 1㎜前後中心
22	土師器　杯or椀	－	6.3	―	底1/1	磨滅、回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)	鈍橙　7.5YR7/4	0.5㎜以砂 赤色粒多
23	須恵器　はそう	－	―	―	体部1/4	口縁部二次加工の可能性、円孔直径1×1.2㎝、寒風窯産か、口～肩部に自然釉	灰白　7/	1～2㎜砂礫

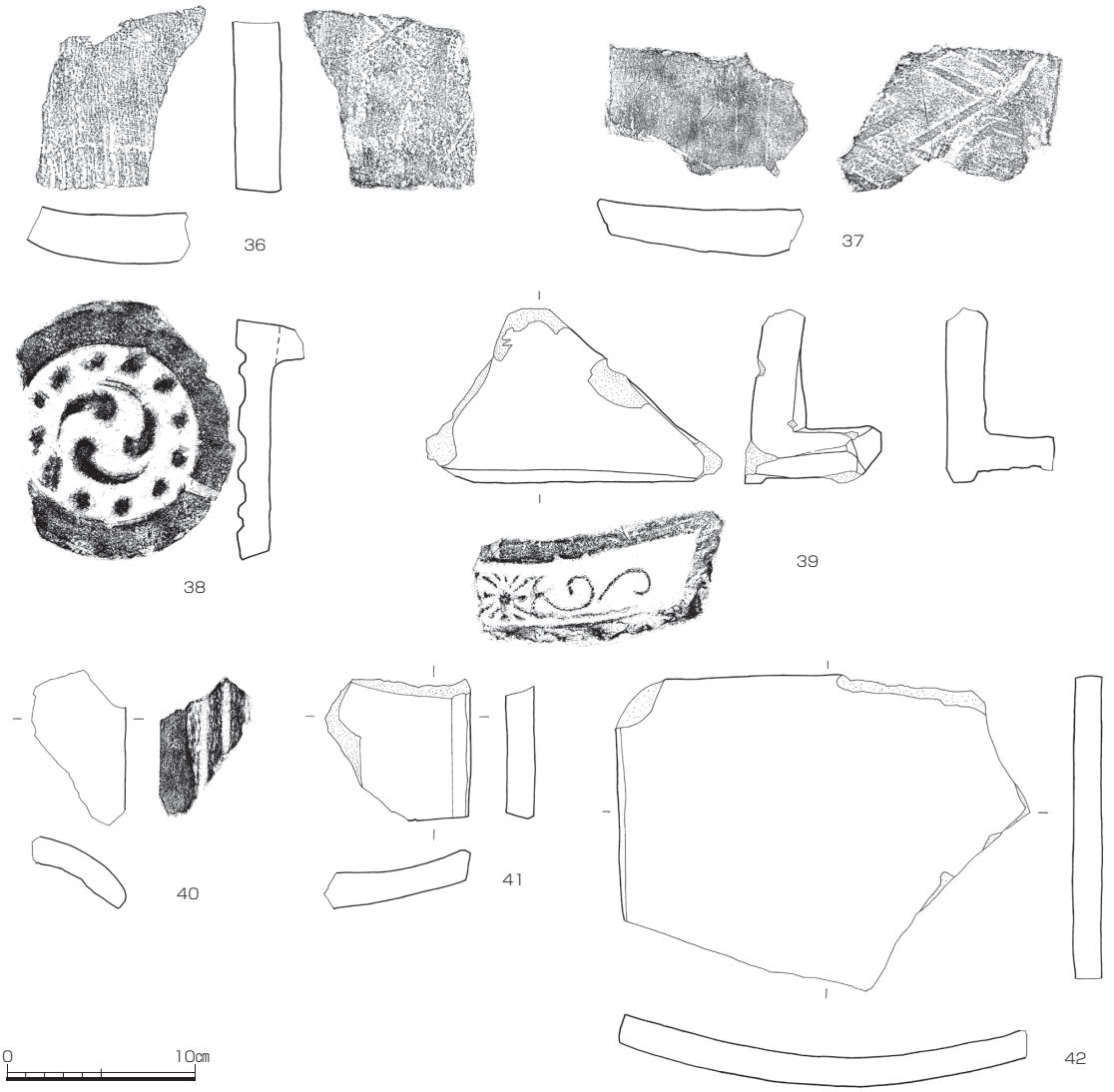
図100　溝21出土遺物(1)（縮尺1/4）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
24	肥前磁器　碗	12.5	−	−	1/6	全釉、外：葉の意匠、18世紀末～19世紀	(胎)白 9/ (釉)透明	緻密
25	中国産磁器 碗	−	4.4	−	1/1	明景徳鎮、染付、全釉畳付のみ釉剥ぎ、見込み：草花の意匠、高台内：「天下太平」、16世紀末	(胎)白 9/ (釉)透明	緻密
26	瀬戸美濃陶器 筒形碗	−	5.1	−	1/2	底部以外全釉、外底：糸キリ、江戸末期	(胎)灰白 7.5YR8/2 (釉)濃い緑	細かい
27	備前焼 灯明皿	7.5	4.4	0.8	口1/2 底1/1	外底：回転ヘラケズリ、かえり有り、抉り3か所	鈍い赤褐 7.5R4/3	細かい
28	備前焼 灯明皿	7.8	3.8	0.9	完存	外底：回転ヘラケズリ、かえり有り、抉り3か所、一部煤	暗赤 7.5YR3/6	細かい
29	肥前磁器 碗	10.6	6.6	6.2	口1/2 高台完存	外鳥・草木の意匠全釉畳付けのみ釉剥ぎ、高高台、19世紀	(胎)白 9/ (釉)透明	緻密
30	瀬戸美濃磁器 碗	9.0	4.0	5.6	ほぼ完存	内貫入・施釉、外底部下部・高台露胎ほか全釉	(胎)灰白 5Y8/1 (釉)オリーブ灰 10Y/5/2	緻密
31	瀬戸美濃陶器 灯明皿	5.6	4.7	1.4	口3/4 底1/3	内施釉・貫入・菊花文貼り付け・胎土目3か所・外回転ヘラケズリ・口縁部のみ施釉・18世紀後半	(胎)浅黄橙 7.5YR8/3 (釉)灰白 5 Y8/1	緻密
32	瀬戸美濃陶器 灯明皿	8.75	3.5×3.6	1.7	ほぼ完存	内：施釉・受部に抉り1カ所外口縁端部の施釉灰釉、19世紀	(胎)灰白 2.5Y8/2 (釉)灰白 5 Y8/1	緻密
33	瓦質　壺	−	−	−	−	回転ナデ、円孔4カ所以上、被熱・煤	橙 7.5YR6/6	細かい
34	土師器 関西系焙烙	Ⅲ19.8	台20.0 Ⅲ20.8	Ⅲ4.5	台1/2弱 Ⅲ1/3	Ⅲ　回転ナデ、底部型押、煤 台　外：回転ナデ、内：ナデ、突起状の受け部3か所、内煤、円孔7カ所径6㎜　18世紀後半～19世紀	Ⅲ　鈍い橙 7.5YR3/7 台　(内)鈍い橙 7.5YR2/7 (外)橙 7.5YR6/7	2㎜以下 砂礫・雲母少
35	土師器・不明	15.6	−	1.8	−	8カ所の円孔径7㎜前後、周縁は欠損、一部煤	灰白 10YR7/1	細かい

番号	器　種	長：cm(残存値)	幅：cm(残存値)	厚：cm(残存値)	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T24	土師器　土錘	4.8	1.3	1.2	10.3	完存	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.5cm	灰黄　2.5YR7/2	きめ細かい
T25	土師器　土錘	(3.5)	1.7	1.1	5.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	灰白　2.5Y8/2	1㎜以下砂
T26	土師器　土錘	(4.4)	1.2	1.1	6.4	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.5cm	橙　2.5YR5/8	1㎜以下砂
T27	土師器　土錘	(2.75)	1.6	1	2.0	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	灰白　2.5Y8/2	1㎜以下砂
T28	土師器　土錘	(2.5)	1.2	1.1	3.3	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4×0.3cm	橙　2.5YR5/8	1㎜以下砂
T29	土師器　土錘	(3.1)	1.2	−	2.6	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4cm	淡赤橙　2.5YR7/3	きめ細かい
T30	土師器　土錘	−	0.9	0.8	1.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4×0.2cm	明赤褐　2.5YR5/6	きめ細かい
T31	土師器　土錘	(2.7)	1.1	1.2	3.6	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4×0.3cm	橙　2.5YR5/8	1㎜以下砂
T32	土師器　土錘	(4.5)	1.1	1	3.5	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.4cm	鈍赤褐　2.5YR4/4	きめ細かい
T33	土師器　土錘	(3.3)	1.3	1.1	4.7	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	灰白　2.5YR8/1	1㎜以下砂
T34	土師器　土錘	−	−	−	0.7	一部	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	赤褐　2.5YR4/8	1㎜以下砂
T35	土師器　人形	4.2	2.1	1.2	6.2	ほぼ完存	型物、ミニチュア製品、底部に穿孔	橙　5YR6/6	きめ細かい
T36	土師器　土錘	2	2	2	8.5	完形	円孔1カ所(貫通しない)	鈍橙　5YR6/4	きめ細かい
T37	土師器　ふいご	(9.2)	(7.6)	6.2	373.4	一部	被熱、胎土内にスサ痕	鈍橙　5YR6/4	1㎜以下砂

図101　溝21出土遺物(2)（縮尺1/4）

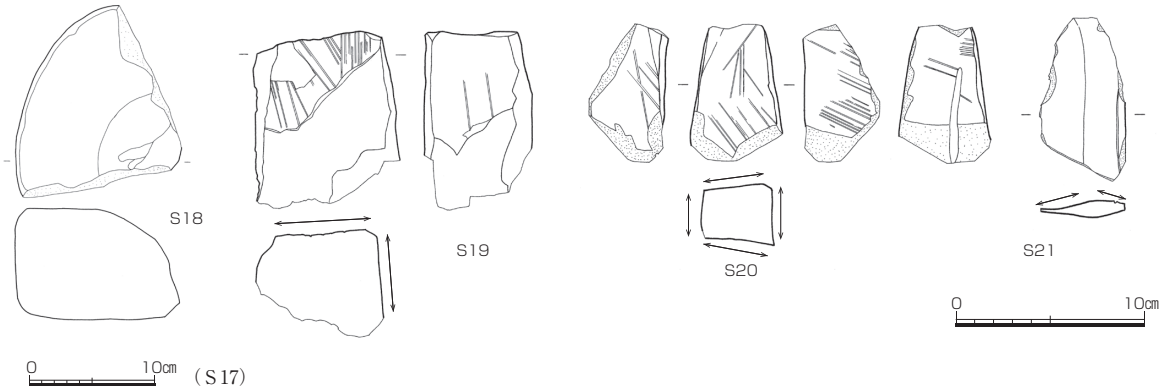


番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	残存	特　徴	色　調	胎　土
36	須恵器　平瓦	(9.5)	(8.5)	2.6	－	凹面：布目痕、凸面：格子目タタキ・ナデ	灰　5/	1mm以下砂
37	須恵質　平瓦	(11.0)	(6.8)	2.5	－	凹面：布目痕・ナデ、凸面：格子目タタキ、被熱	灰白　10YR8/1~8/2	1mm以下砂
38	須恵質　軒丸瓦	(12.7)	7.2	1.5	－	左巻三巴文	灰白　7/~8/	1mm以下砂
39	須恵質　切隅瓦	(9.4)	(16.0)	5.8	－	瓦当：、凹面：縄目、凸面：工具ナデ、中心飾：花の意匠：中二転の唐草天正期より古い	灰白　7/~8/	2mm以下砂
40	瓦質　平瓦	(8.4)	(5.1)	1.4	－	凹面：内板タタキ、凸面：ナデ、18世紀後半	暗灰　3/	1mm以下砂
41	瓦質　平瓦	(7.2)	(7.9)	0.9	－	キラコ、被熱	鈍い橙　5YR7/3	1mm以下砂
42	瓦質　平瓦	(18.6)	(21.5)	1.5	－	ナデ	凹面：灰白　8/、 凸面：灰白　2.5YR8/1	2mm以下砂礫

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M6	キセル	6.4	1.0	1.0	4.0	吸い口、青銅、ほぼ完形

図102　溝21出土遺物(3)（縮尺1/4）

致する内容である。溝の主軸方向は、前代の溝18でもやや東に傾いており、おそらく本地点の自然地形の影響があるものと考えられる。本遺構の北側は第20次調査C地点・第18次調査で確認されているが、南については、CAライン以南の本調査地点内では確認されない。南に隣接する第９次調査地点では溝64の存在が報告されており、直接は繋がらないもののこのラインが土地区画のうえで重要な位置であることに留意したい。



0 10cm （S17）

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S17	碁石（白）	2.2	2	1.1	7.3	完形	石英脈	平滑
S18	石臼	15.8	13.6	9.1	2101.9	一部	流紋岩質凝灰角礫岩	豊島石、中央の軸受け円孔欠損
S19	砥石	9.7	7.9	5.8	493.3	一部	流紋岩	砥面2面
S20	砥石	7.3	4.9	4	149.6	一部	流紋岩	砥面4面
S21	砥石	13.5	4.4	0.9	38.7	一部	粘板岩	砥面2面

（S17のみ図101）

図103　溝21出土遺物(4)（縮尺1/4・1/6）

溝22（図104・105、図版37）

西区～東区のCAライン南３m付近を東西に走行する。本調査地点南半は大規模な撹乱が及んでおり、検出面の標高は0.65～0.85mを測る。前述の南北方向の大形溝である溝21とセットとなる東西方向の大形溝である。主軸方向はＥ－20°－Ｓを示す。本溝の東西両端とも収束した形で検出した。東端は14ライン、西端は21ラインにあたり、その間で長さ33mを確認した。幅は1.3～1.65m、検出面からの深さ0.4mが残る。底面のレベルは標高0.2mである。埋土は９層～12層に分けた。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）２箱が出土した。遺物の構成は前述の溝21に近似する。中世前半～19世紀代の時期幅が見られる主な遺物としては14世紀前葉～中葉の土師器椀（図105－１）・皿（同図－11）、16世紀初頭の備前焼すり鉢（図104－８）・壷（同－６）が認められる。次いで、16世紀末～17世紀初頭の中国明代の磁器碗（同－５）や備前焼杯（同－２）、19世紀に入る肥前磁器皿（同－４）が出土している。一方、瓦器碗（同－12）や土師器碗（同－９～11）は中世前半の所産である。

溝の形状は上半部が失われており明らかでないところが多いが、下部構造としては、西端部は溝21の南端と接する位置である。また18、17ラインの２地点で、平面的に掘り返した状況が見られることが注意される。本溝が収束する東端から５mの位置に、後述する溝23が同時期に南北方向に走行して

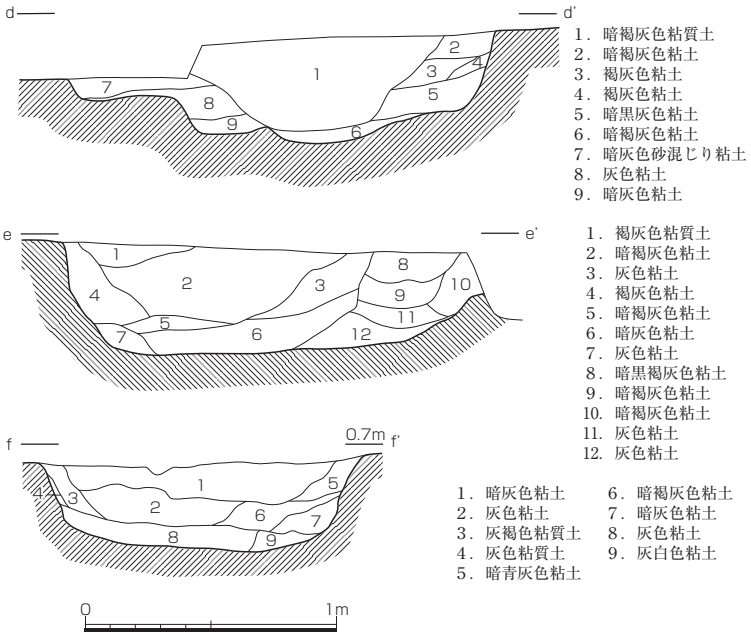
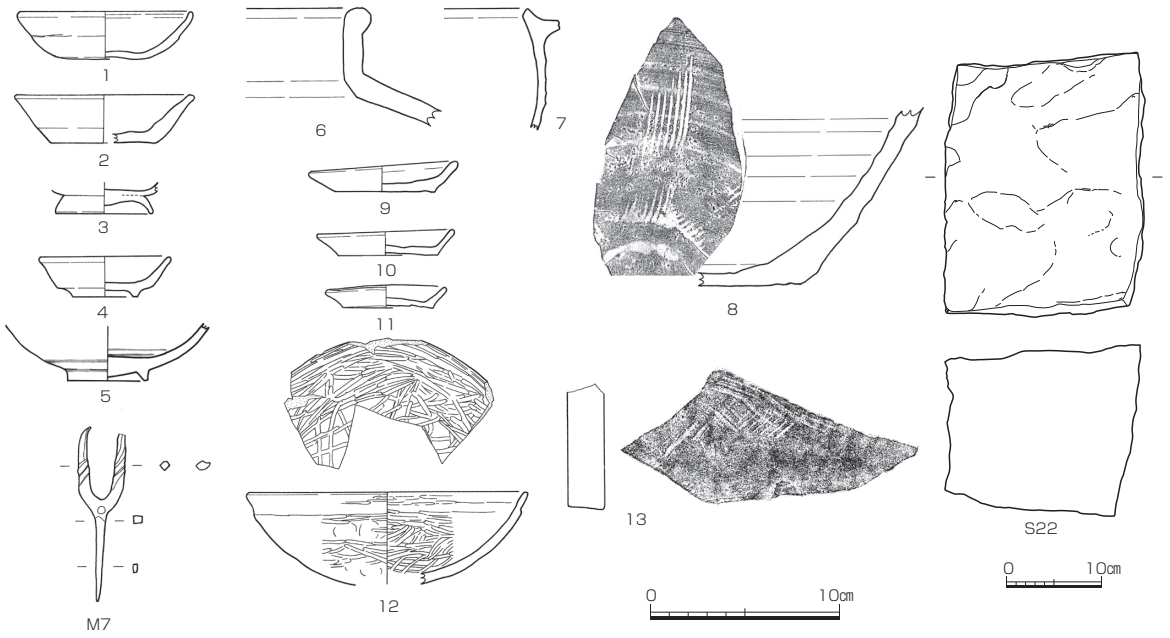


図104　溝22断面（縮尺1/30）



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　椀	9.6	約5	2.6	口1/4 底3/4	内：丁寧なナデ･口縁部付近に工具痕、外：ナデ･押圧(指紋と布目痕)･表面の一部に薄い剥離(焼成時？)、底部形態は丸みを有して小窪み(ヘソ)を形成	鈍橙～鈍黄橙 7.5YR7/3～10YR7/2	0.5㎜以下砂
2	備前焼　杯	10.2	6.1	1.8	1/4	回転ナデ、底外：糸キリ、16世紀末～17世紀	赤　10R4/6	1㎜以下砂
3	土師器　椀	－	5.4	－	高台3/4	椀内：丁寧なナデ、外～高台内：強い回転ナデ、小皿を逆転した状態の高台形、溝21に類似椀あり(2)	鈍黄橙（高台内)鈍橙 10YR6/3、7.5YR6/4	0.5㎜以下砂
4	肥前磁器　皿	7.3	3.8	2.3	口1/8 底1/1	全釉畳付けのみ釉剥ぎ、花の意匠、19世紀	(胎)白 9/(釉)透明	緻密
5	中国産磁器　碗	－	4.2	－	底1/1	染付、明漳州窯、全釉畳付けのみ釉剥ぎ	(胎)白 9/(釉)透明	緻密
6	備前焼　壺	－	－	－	－	回転ナデ、外：肩部波状文、口縁端部・体部自然釉	暗赤褐 2.5YR3/3	1㎜以下砂
7	瓦質　鍋	－	－	－	－	回転ナデ、外：篦ケズリ	灰白 5Y7/1	1㎜以下砂
8	備前焼　すり鉢	－	－	－	－	回転ナデ、7本1組のスリ目、使用痕顕著	(内)灰褐 7.5YR6/2 (外)浅黄橙 7.5YR8/4	1㎜以下砂
9	土師器　皿	8.35	5.45	1.1～1.7	口3/4 底1/1	磨滅顕著、回転ナデ、底内：仕上げの押圧、底外：篦キリ(ロクロ回転左)＋板目痕	灰白 2.5Y8/1～2	1㎜以下砂少
10	土師器　皿	7.6	5.5	1.2～1.45	口1/1 底3/4	回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)＋板目痕若干残存	鈍橙　(底内)褐灰 7.5YR7/4、10YR6/1	4㎜以下砂礫 1㎜前後中心
11	土師器　皿	7.1	5.35	1～1.4	完存	磨滅、回転ナデ、底外：篦キリ(ロクロ回転左)、底内：押圧、一部内外に被熱痕、外：小さな表面剥離痕(焼成時？)、薄手	白～灰白 9/～2.5Y8/1	1㎜以下砂
12	瓦器　椀	14.8	－	－	口1/4	内：篦ミガキ密、外：押圧･篦ミガキ粗	暗灰(胎)灰白 3/　、8/	0.5㎜以下砂少

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
13	瓦質　平瓦	(7.7)	(15.9)	2.0	－	ナデ、凸面：カキヤブリ、キラ粉、被熱	浅黄橙7.5YR8/4	1㎜以下砂

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S22	礎石	28.1	18.1	18.2	1904	完存	花崗岩	4面平滑に加工

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M7	ヤス	9.6	2.6	0.5	12.0	鉄、基部木質一部残存・矩形、先端をねじってあり鋭利

図105　溝22出土遺物（縮尺1/4・1/6）

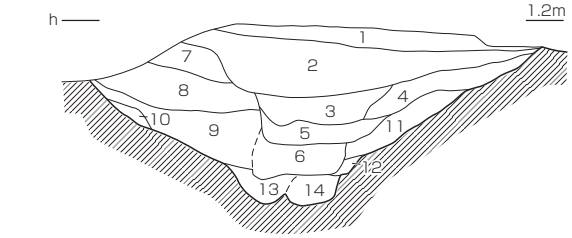
いる。上部でどのような関係にあったのかは明らかでないが、接続はしていないと考えられる。

本溝の時期は、14世紀中葉～19世紀初頭であり、溝21と同じく区画溝として機能していたものである。

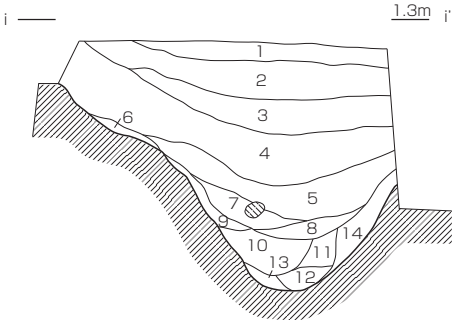
溝23（図106、図版38）

東区東端、13ライン東側を南北方向に走行する。調査区北壁～CBラインまでの13ｍと、CC～CDライン間の５ｍを検出した。本遺構の北側は第18次調査地点（未報告）、南は第14次調査地点溝17として検出されているものである。検出面の標高は1.2m、底面の標高はｈ断面で0.45m、ｉ断面で0.2mを測る。検出面からの深さは0.7～1.0mが残る。断面形は底面が狭小なＶ字状を呈する。撹乱やコンクリート基礎により分断されるが、幅は最大1.8mが残る。主軸方向はＮ－20°－Ｅを示す。埋土は14層に分けた。

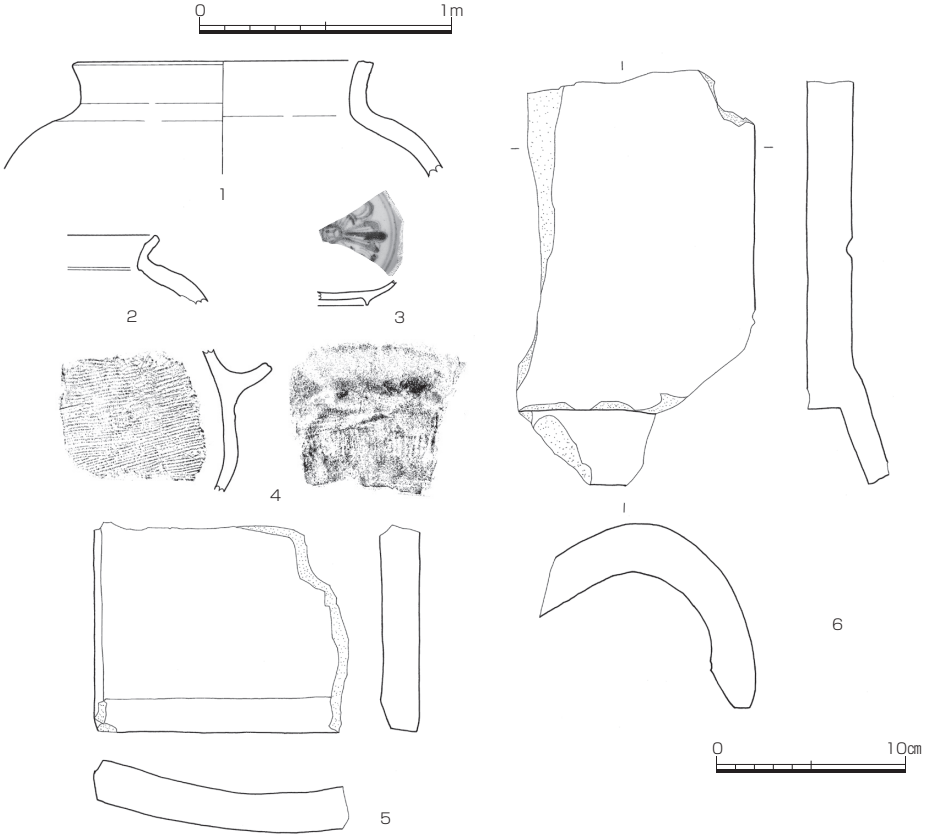
遺物はコンテナ（28㍑/箱）１箱が出土した。中世前半の土師器椀・杯・皿類の小片のほか備前焼、瓦、陶磁器類が認められる。備前焼壷（図106－１）・小壺（同－２）は16世



1．淡青褐色粘質土
2．暗青褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．暗青灰褐色粘質土
5．灰色粘質土
6．暗灰色粘質土
7．淡青褐色粘質土
8．暗青褐色粘質土
9．暗灰色粘質土
10．暗黄灰色粘質土
11．淡灰色粘質土
12．灰白色粘土
13．灰色粘土
14．暗灰色粘土



1．暗青灰色粘質土
2．暗青灰褐色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．暗褐灰色粘質土
5．暗灰色粘質土
6．暗黄灰色粘質土
7．灰色粘質土
8．暗灰色粘質土
9．灰黄色粘質土
10．暗灰色粘土
11．暗灰色粘土
12．暗灰褐色粘土
13．暗灰褐色粘土
14．淡灰色粘土



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	備前焼　壺	16.4	－	－	－	回転ナデ、外：肩部波状文、口縁端部・体部自然釉	暗赤褐 3/3	3mm以下砂
2	備前焼　小壺	－	－	－	－	回転ナデ、口縁部自然釉	黒褐 7.5YR2/2	細かい
3	中国産磁器　皿	－	－	－	－	景徳鎮、見込み：花の意匠	(胎)灰 8/(釉)透明	緻密
4	土師器　鍋	－	－	－	－	回転ナデ、内：横ハケ、外：縦ハケ・煤付着	灰 5/	細かい

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
5	須恵質　平瓦	(10.4)	(13.7)	2.1	－	ナデ	灰　N5/	1mm以下砂
6	須恵質　丸瓦	(17.1)	(12.0)	2.6	－	凹面：布目痕、凸面：縄目・ナデ、厚手、16世紀	灰白～灰 8/　、　4/	1mm以下砂

図106　溝23断面・出土遺物（縮尺1/30）

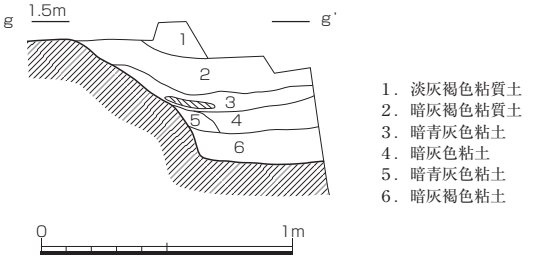
紀初頭に、また軒丸瓦（同－６）は16世紀代に位置付けられる。肥前磁器皿（同－３）は19世紀初頭に比定される。こうした遺物の構成・内容は溝21・22と近似する。

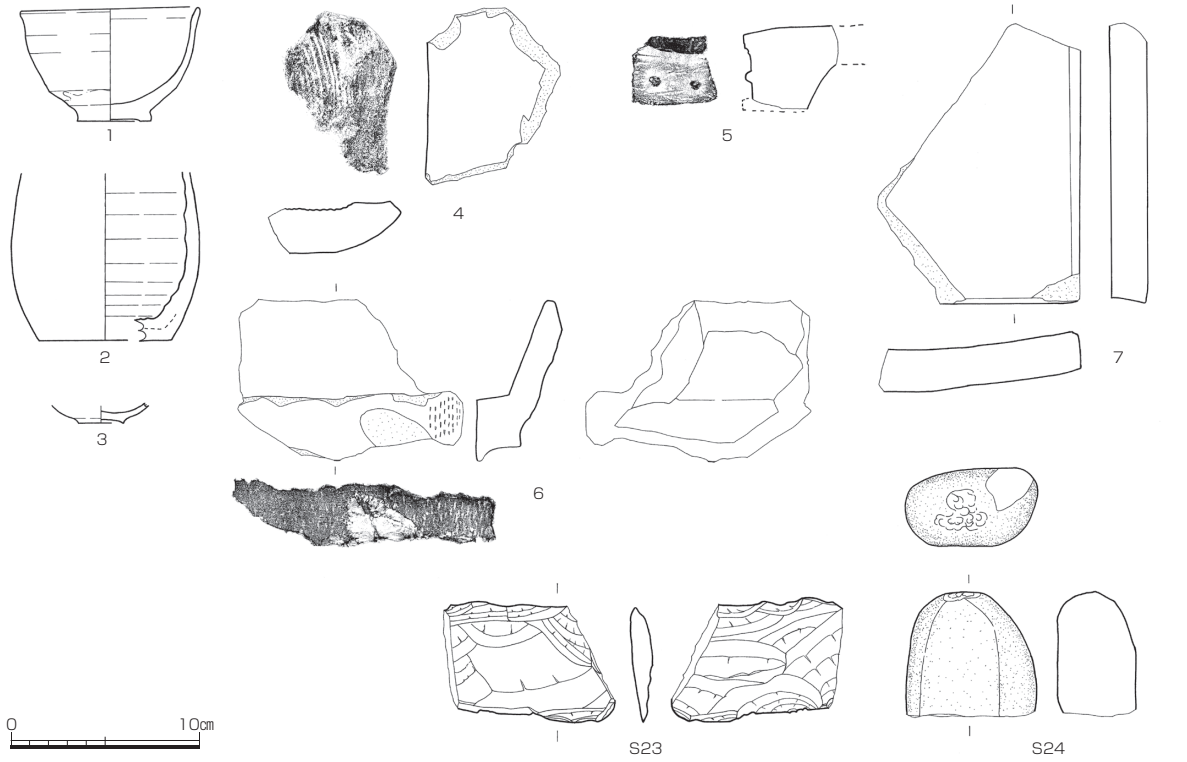
本溝は遺物内容から14世紀中頃に掘削され、その後近世を通じて機能したものと考えられる。時期および方向を同じくすることからも、溝21・22とセットになる区画溝と評価できる。これらの溝で区画された敷地は１辺40ｍの方形となる。

溝24（図107、図版38）

北区北端を東西方向に走行する。溝の北側の方は調査区外にあたる。主軸はＥ－11.5°－Ｓを示す、鹿田条里に沿うものである。検出面の標高1.4m、底面の標高は0.9mを測る。幅0.9m、検出面からの深さ0.5mが残る。断面形は逆台形を呈し、埋土は６層に分けた。

遺物はコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）１箱が出土した。備前焼、





番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	肥前陶器　碗	9.7	4.1	6.3	口1/2 高台1/1	唐津焼、内：施釉、外：回転篦ケズリ、施釉体部下半～底部露胎	(胎)灰　(釉)灰黄 6/　2.5Y7/2	1mm以下
2	備前焼　芋徳利	－	7.0	－	1/3	回転ナデ、17世紀	(内)明赤褐(外)極暗赤褐 5YR5/6　5YR2/4	2mm以下砂礫
3	肥前磁器　碗	－	2.6	－	1	内外：施釉、外底：露胎	(胎)白　9/　(釉)内：透明・外：明青灰5BG7/1	緻密

番号	器　種	長：cm (残存値)	幅：cm (残存値)	厚：cm (残存値)	残存	特　徴	色　調	胎　土
4	須恵質　丸瓦	(9.8)	(7.4)	2.5	－	凹面：コビキA、凸面：ナデ	黒　5/	2mm以下砂礫
5	瓦質　軒平瓦	(5.0)	(4.3)	(4.3)	－	連珠文、内：ナデ	灰　4/	1mm以下砂
6	瓦質　丸瓦	(8.9)	(12.4)	3.3	－	凹面：布目痕、凸面：縄目、被熱、中世	橙　6/6	1mm以下砂
7	須恵質　平瓦	(14.8)	(10.7)	2.2	－	凹面：ナデ、凸面：ナデ、18世紀	灰　6/	2mm以下砂礫

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S23	剥片	6.4	9.0	1.1	96.4	一部	粘板岩	全体的に剥離
S24	石錘	6.8	7.1	4.2	287.5	一部	花崗岩	端部に擦痕

図107　溝24断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

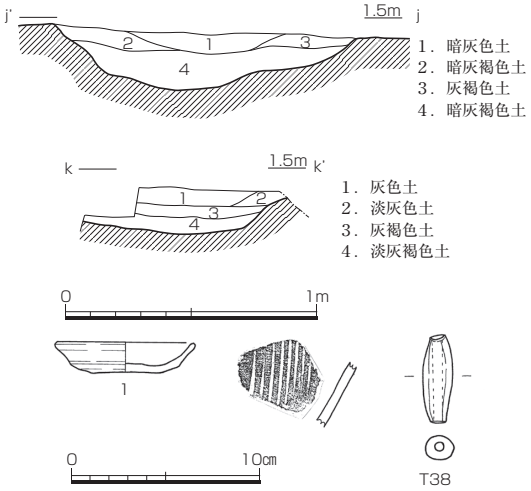
陶磁器、瓦のほか、中世前半の土師器類の小片や弥生土器の小片・石器が含まれる。肥前陶器碗（図107－１）、備前焼芋徳利（同－２）は17世紀初頭、肥前磁器碗（同－３）は17世紀後半～18世紀のものである。瓦には16世紀中頃（同－４）と18世紀代に入るもの（同－７）が見られる。石錘・剥片石器は本遺構の下位に重複する弥生時代の落ちに由来するものであろう。本溝は出土遺物からは16世紀中頃～18世紀のものが認められるが、溝の方向と、溝22から北に約40mという位置から考えて、溝21～23とセットで主要な区画溝として機能したものと考えられる。溝の時期は14世紀中頃～19世紀初頭と比定される。

溝25（図108、図版39）

西区北東部、BY・BZ20区に位置する。北壁20ラインに沿うように南北方向に走行する溝である。検出面の標高1.4m、底面の標高は1.2mを測る。調査区北壁から６mの長さを検出した。幅1.2m、検出面からの深さは0.2mが残る。埋土は４層に分けた。断面形は浅いU字状を呈する。

遺物はポリ袋（12号）２袋が出土した。土師器碗・杯・皿・鍋・竈の小細片多数のほか、白磁小片が見られた。図107－１は土師器皿であり、13世紀後半～14世紀前半のものである。

本遺構は前述の溝21の東側に並行して走行する小規模な溝であり、区画の中を仕切る機能が想定される、本遺構の北・南とも接続するものが確認されていない。本溝南端は溝21が重複していることから中世前半に遡る可能性も残す。



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器　皿	7.4	5.8	1.6	口1/3 底1/2	回転ナデ、底外：篦キリ（ロクロ回転左）+板目痕、磨滅	鈍黄橙　10YR7/3	きめ細かい 赤色粒
2	瓦質　すり鉢	－	－	－	－	内：横ハケ後スリ目、外：煤付着多	黒 N2/	0.5～1mm砂

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T38	土師器　土錘	4.6	1.5	1.3	7.5	ほぼ完存	ナデ、穿孔直径0.6cm×0.5cm、全面被熱変色	鈍橙　2.5YR6/3～4	0.5mm以下砂

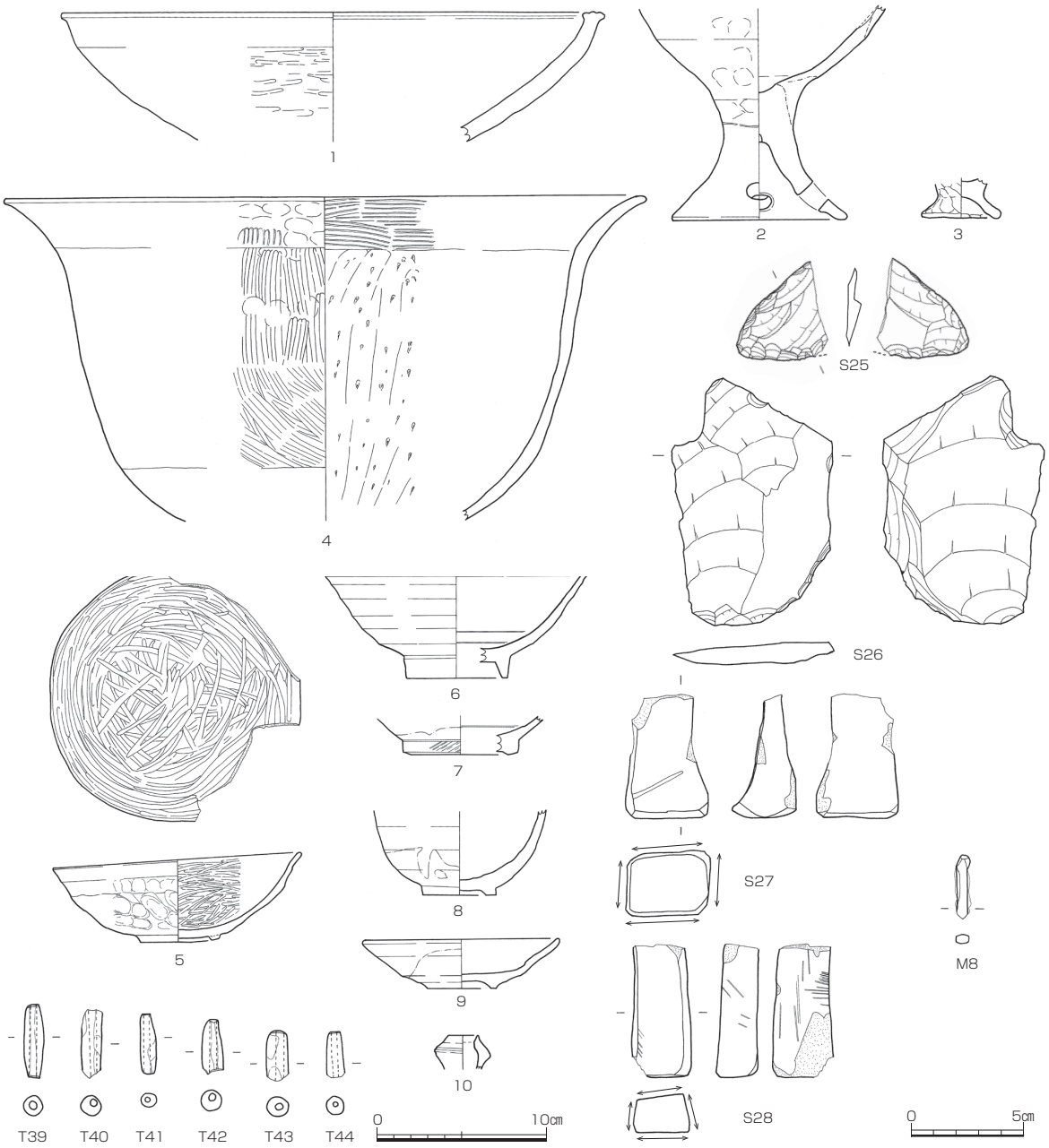
図108　溝25断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

第５節　包含層ほかの出土遺物

遺構に伴わない遺物あるいは包含層から出土した遺物は全体でコンテナ（28ﾘｯﾄﾙ/箱）16箱を数える。その中で注目される遺物を図109に掲載した。土器・陶磁器類10点、土製品６点、石器４点、金属製品１点である。

図109－１は溝18、同－２の高杯は＜８層＞中、同－３の製塩土器は＜８＞～＜10層＞中の出土である。同－４は西区北東部、＜８層＞出土の土師器鍋で、その形状から古代に属する可能性がある。同－５は和泉型瓦器椀で完形に近い。北部北西角付近で出土したもので、遺構としては確認できなかったが、柱穴に入れられていた可能性が考えられる。同－６・７はいずれも＜５層＞中から出土した白磁碗である。６は白磁碗Ⅴ類の特徴を示す。７は白磁碗Ⅳ類の高台である。同－８は肥前陶器碗、同－９は肥前陶器皿で、唐津焼である。同－10は備前焼の算盤玉である。直径1.9cmを測り、特徴的な形状に仕上げられる。土錘は６点を掲載した（同－T39～T44）。T39・42は＜４層＞、T41は＜５層＞の出土である。T40・43・44は＜１層＞および攪乱出土である。

石器・剥片を４点掲載した（同－S25～S28）。S25は打製石包丁の破片である。粘板岩製である。図の上端は刃を付けた後に潰したことが看守され、例えば石戈の再利用が想定される。S26は粘板岩の剥片で、溝18から出



番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
1	弥生土器　高杯	−	32	−	口1/6強	磨滅顕著、外：篦ミガキ痕残存、口縁端面に3条の凹線痕	鈍黄橙 10YR7/2，0YR7/4	1㎜前後砂
2	土師器　高坏	−	20.2	−	底1/2	坏部：押圧、脚裾部：径1.4cmの透かし孔4カ所、全体磨滅	鈍黄橙　10YR7/4	0.5～1㎜砂
3	製塩土器	−	4.6	−	底3/4	磨滅、脚台内：ナデ、脚台外：押圧、全体被熱顕著	鈍赤褐 2.5YR5/3～5/6	1～3㎜砂礫多
4	土師器 鍋	38	−	−	1/2弱	口：内面ハケメ･外面押圧とナデ､体部：内面篦ケズリ･外面ハケメと押圧､底外：被熱による表面劣化で調整不明、外面全体に煤付着	明赤褐　2.5YR5/6	1～3㎜砂礫多
5	瓦器　椀	15.5	4.6×4.9	4.6～5.6	ほぼ完存	内：篦ミガキ密、外：押圧（全体を6分割した状態で2～3本の指オサエの列が残る）､高台部径は一部の潰れで径は4.9cmに拡大、和泉型	灰～暗灰 4～3/	0.5㎜以下砂
6	白磁　碗	15.2	6.2	6.5	高台1/3	内：施釉、外：回転ヘラケズリ・施釉・底部から高台内露胎	(胎)灰白 2.5Y7/ (釉)灰黄 2.5Y6/2	緻密

図109　包含層出土遺物

図109観察表

番号	器　種	口径：cm	底径 高台径：cm	器高：cm	残　存	特　徴	色　調	胎　土
7	白磁　碗	−	7.1	−	高台1/4	内：施釉、外：回転ヘラケズリ・施釉・底部から高台内露胎	(胎)灰白　(釉)浅黄 8/　　5Y7/2	緻密
8	肥前陶器　碗	−	4.6	−	高台1/1	唐津焼、内：施釉・トメ痕、外：回転篦ケズリ・施釉・体部下半から高台露胎	(胎)灰　(釉)灰白 7/　　5Y7/2	緻密
9	肥前陶器　皿	11.9	4.3	3	口3/4 底1/1	唐津焼、回転ナデ、内：トメ痕3か所、外：回転篦ケズリ、体部下半から高台露胎	(胎)淡橙　(釉)灰白 5YR8/3	緻密
10	備前焼　算盤玉	1.9	−	−	口1/1	ナデ、一部欠損	暗赤褐　3/3	3㎜以下砂

番号	器　種	長：cm （残存値）	幅：cm （残存値）	厚：cm （残存値）	重量：g	残存	特　徴	色　調	胎　土
T39	土師器　土錘	4.5	1.1	1.2	7.3	ほぼ完存	ナデ、磨滅、穿孔：直径0.3cm	橙　2.5YR6/8	細かい
T40	土師器　土錘	−	1.2	1.2	6.4	一部欠	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙　2.5YR6/8	細かい
T41	土師器　土錘	3.8	1	0.9	3.9	ほぼ完存	ナデ、オサエ、穿孔：直径0.4×0.3cm	赤黒　2.5YR1.7/1	細かい
T42	土師器　土錘	(3.4)	1.4	1.2	5.1	一部欠	ナデ、穿孔：直径0.5cm	赤橙　2.5YR4/6	細かい
T43	土師器　土錘	(3.1)	1.3	1.2	4.5	一部	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙　7.5T6/8	細かい
T44	土師器　土錘	(1.8)	1	1.1	3.5	一部	ナデ、穿孔：直径0.4cm	橙　2.5YR7/8	細かい

番号	器種	残存長：cm	残存幅：cm	残存厚：cm	重量：g	残存	石材	特徴
S25	石包丁	5.5	5.5	0.8	22.6	一部	粘板岩	尖頭部、両側縁を連続剥離による調整
S26	剥片	14.7	9.4	1.2	244.9	−	粘板岩	連続した剥離
S27	砥石	7.3	4.8	3.8	121.0	一部欠損	流紋岩	砥面4面
S28	砥石	8.2	3.7	2.6	138.9	一部欠損	泥岩ホルンフェルス	砥面4面

番号	器種	長さ：cm	幅：cm	厚さ：cm	重量：g	特徴
M8	鉄釘	4.2	0.7	0.5	4.5	両端欠損

土している。このように比較的大型の剥片の出土は鹿田遺跡では稀であり、同－１の高杯とともに弥生時代後期前半頃に集落に持ち込まれていたことが窺える。同－Ｓ27・28は砥石である。Ｓ27は流紋岩、Ｓ28は泥岩ホルンフェルスを用いる。いずれも４面に顕著に使用痕が認められ、よく使い込んだ様子が見られる。同－Ｍ８は鉄釘で、＜６層＞～＜７層＞の出土である。